井原西鶴

文學士片岡良一著

序

彼の創作の一部でもろく〳〵讀んでゐない人はともかく、各方面の彼の創作によく眼を通してゐる人達には、西鶴の偉大さはもう問題ではあるまい。併し人としての彼の稟質、俳諧師として、浮世草子作者としての彼の天分、及び彼の浮世草子の有つてゐる眞の意義・價値に關しては、十分に研究し盡くされ論斷し盡くされてゐるとは言ひ難い、否まだ大いに餘地の遺されてゐるといはねばなるまい。

明治二十二三年頃のことゝおぼゆるが、幸田露伴氏の「井原西鶴」が「國民之友」に掲げられたのを新しい評論のはじめとして、中頃島村抱月の「西鶴論」が「早稻田文學」に發表せられ、それより現代諸家の評論に至りて、彼の創作の意義は次第に深く考察せられ、彼の藝術の價値は漸く確實に

目次

井原西鶴

序節

國文學史を繙く時、最も強く吾々の驚異を誘ふものは、時代の古さ其他色々な點から云つて、或は萬葉を生み源語を生んだ上代平安の兩時代であるかも知れない。けれども最も强い親しみと鍾愛の氣持とを感じさせるものは何と云つても元祿時代の文學であらう。そこには放たれた人間の相が、端的に、赤裸々に描き出されてゐる。古傳統の破壞をその第一義とした戸田茂睡の歌論を、國文學史上に於ける近代主義の第一聲とするならば、元祿時代の文藝に現れた千紫萬紅は、とりもなほさずその近代主義に目醒めた人間の狂歡亂舞の相である。一代の政治的天才德川家康によつ

て樹立せられた固定政策は、代々の繼承者によつて嚴密に墨守された。一切の流動と飛躍とは武力と權威とによつて暗く脅された。然も伸び行く生の力――元和偃武以來氤氳に氤氳を重ねて來た國民の生の力は、夫等の桎梏と束縛との陰に空しく萎縮してゐるには餘りに强かつた。或者は峻嚴な國禁の制約を潛つて萬里の波濤を一葉の扁舟に蹴つた。或者は任俠の氣を高く翳して世の屑々者流を嘲哂つた。或者は又一代の豪華に氣負つて金色の生を享樂した。そこに堰かれて激した情熱の變則的な現れと、解放された生への熾烈な意慾とがあつた。その意慾と情熱とによつて、兎にも角にも實現された全自我の解放と、それに伴ふ歡醉とも感じられた。それが所謂元祿時代の內容であり外貌であつた。自ら當代の文藝には、かうして初めて全自我の解放を味うた人々がその歡醉の底からあげた本然の叫びと、覆はれざる人間意慾の奔放さとの、多角的な表現が感じられる。多くの作家文人もかうした時代的蕩揚に哺まれて複雜さと豐さと鋭さとを與へられた。彼等が夫々自らの歌を歌ひつゝ、おのがじゝ自由の路を馳驅濶步してゐる此の時代の文藝界の有樣にこ

そ、あの紅紫繚亂といふやうな讚歎も、何等の誇張なしに當てはめることが出來る。華々しいエポックであつたと思ふ。

井原西鶴が華かな創作活動を續けたのはかういふ時代のことであつた。然も彼の生涯はかういふ時代の華々しさに對して決して相應しくないものではなかつた。寧ろ彼は元祿時代が生んだ多くの文人の中の、最も元祿的な、然も同時に最も偉大な文人の一人であつたのである。彼を評する後世の批評家が、淨瑠璃の近松、俳諧の芭蕉と並べて、元祿文壇三偉人の一人を以て稱するのは、素より正しい評價であつた。

が然し、松尾芭蕉が俳諧文學の始祖として、或は俳諧道の聖として、偶像的に欣慕せられてゐるのに對して、或は近松門左衛門が戯曲作者の先覺として、又は人間愛の詩人として、只管後世人の敬愛を擅にしてゐるのに對して、彼西鶴に加へられた過去の評價は、何といふ混沌と紛糾とを極めてゐるのであらう。「芭蕉樣のすねを嚙りて夕涼み」といふ一茶の句は、直ちに一般俳人の芭蕉に對する心情であつたと云つても敢て過言ではあるまい。「近松門左衛門は作者の氏神也……今作者といへる人々、みな

近松のいきかたを手本として書繼るものなり。此道を學ぶ輩近松の像を繪書、晝夜これを拜すべし」といふ西澤一風の言葉は、近松に對する一般の評價として、最近は知らず、大體動かすことの出來ない定說であつたらう。ひとり西鶴に對する批評のみは然く一面的決定的なものではなかつた。彼に對する評價には何時の時代にも極端に相乖離せる明暗の二面があつた。寧ろ一般讀者よりの喝釆と賞讃とに反比例して、彼に與へられた評語の多くは非難のそれであつた。島村抱月が彼を評じて「紛々たるかな西鶴の是非」と長嘆したのも、亦無理ならぬことであつたと思ふ。

素よりさうした褒貶の夫々に幾分の眞實が捉へられてゐることは云ふを要しない。「張三李四が面門にも無位の眞人出入す。張李と孔子と共に是れ人間なれば、張李が一念時に或は聖人が一念と相通じ、相違はざることあるに極まれり。左次郎茶日吉時に或は西鶴の一指一髮を見得る事あるに極まれり」といふ幸田露伴氏の言葉は、云ふ迄もなく眞實である。たゞ同じ露伴氏が、「張三李四野に佇んで孔子を議するも、議せらるゝもの恐らくは是孔子にあらずして彼の張三李四が肚裏の一塊物、假

に孔子と呼ばるゝものならむのみ。左次郎と茱日吉と或は濃に西鶴を崇び、或は放に西鶴を罵るも、共に恐らくは左次郎茱日吉が眼底の幻影の西鶴と名付けらるゝものにして、眞の西鶴にはあらざらむ」といふ言葉の、より多く眞實なるには如かない。西鶴の俳諧に傾倒した榎本其角も、之を罵つて止まなかつた松月庵隨流も、好色本作者としての西鶴を手酷しく攻撃した四方郎朱拙も、之に無限の敬愛を感じた柳亭種彦も、奔放破格なる西鶴の文章を淺間しく下れる姿ありと觀じた芭蕉も、之に隨喜して模倣改竄到らざるなき其磧一派も、詮ずる所は張三李四の徒、左次郎茱日吉の輩であるに過ぎない。彼の無學と文盲とを輕蔑した都の錦や瀧澤馬琴、乃至は此人國學に秀いでと彼の學殖を稱揚した「俳家奇人談」の著者の如きは、西鶴にとつて寧ろ緣なき衆生であつたらう。

けれども飜つて之を西鶴の側より觀るに、その生前の幾十年と歿後の幾百年とを通じて、あらゆる毀譽と襃貶との波間に漂ひつゝあるといふことは、一面誇るべきことでなければならなかつた。芥川龍之介氏も云つてゐられるやうに、藝術の鑑賞は

藝術家自身と夫を鑑賞する者との協力である。鑑賞家は云はゞ一つの作品を課題として彼自身の創作を試るのであるに過ぎない。從つて如何なる時代にも色々な意味を以て批判され檢討される作品なり作家なりには、縱令その批判評價が毀譽褒貶の何れであるにもせよ、必ず種々の鑑賞を可能にする特色が具はつてゐるのでなければならない。西鶴に對する同時代者乃至後世よりの批判が以上の如く紛雜を極めてゐるといふことは、かくて自ら西鶴自身の偉大さと複雜さとを云ふべき間接の證左となるのでなければならない。近頃になつてさへ、例へば「西鶴の新研究」に於ける鈴木敏也氏、「國文學に現れたる國民思想の研究」に於ける津田左右吉氏等の如きは、彼の藝術家としての根本的態度を批判して、元祿の昔四方郎朱拙が「一生を夢裏に迎れる淺間しきもの」と斷じたのと、或る程度迄似通つた觀察を下してゐるのに對して、「西鶴是非」の論に於ける渡邊乙羽氏は、寧ろ彼を補敎的文學神聖論に立脚した眞摯なる勸懲者流と目して居り、露伴抱月田山花袋氏等が彼を目して寫實派乃至自然派的の作家と仰げば、より新しき時代は藝術派的の技巧家を彼のうちに見出さう

としてゐる。

佐藤春夫　……一體日本の小說は淡い。

加藤武雄　隨筆の延長といつたやうなところがありますね。一體日本の短篇小說は隨筆から發達したんぢやないかな。

菊池　寬　そんなことはない。西鶴なんかちやんとしたプロツトを立てゝ書いてあるよ。ちやんと事件を書いてある。

佐藤春夫　然しディテイルでは見聞記を集めて、云ひ得べくんばその排列に小說的構想がある。さういふところは偉いんだが、

久米正雄　計畫的なところはあるよ、

菊池　寬　西鶴はちやんと小說的な事件を取扱つてゐる。見聞記ぢやない。

久米正雄　小說を書くアレンジメントはしてゐるね（大正十二年七月號新潮）

かういふ所に、吾々は西鶴の複雜さが自づと反映されてゐるのであることを知らなければならない。已が死灰の裡より永久に蘇るといふ不死鳥にも似て、各時代每に

新しき面貌を以て蘇らされる西鶴の偉大さと複雜さ——その偉大さと複雜さとに、出來るだけ細かく觸れて行くことが、取も直さず此の小研究の主要な題目なのである。私は彼に對する先人の評價の跡と、私自身の覺束ない鑑賞力とに依つて、兎にも角にも彼西鶴の爲人と、その作品とに打つかつて行つて見ようと思ふ。所謂眼底に於ける西鶴の幻影以外に、彼の眞實に味到することが出來れば幸である。出來なければ——私は彼の生涯と作品とを材料として、自分自身の創作をものすることに全力を出しきるだけで滿足しようと思ふ。

第一章　人としての西鶴

第一節　出生より青年時代まで

西鶴は寛永十九年浪華に生れた、といふのが今日の通說である。が寛永十九年生れといふのも、出生地の浪華といふのも、必ずしも確定的のものではない。彼と親かつた榎本其角の「句兄弟」に西鶴は難波江に生れ云々の言葉があり、彼の祖父西鬢道方が大阪で死んでゐるのみならず、「俳諧團袋」には西鶴自ら故鄕難波といふ言葉を漏らしてゐるのであつてみれば、出生地の浪華といふのは動かぬ所と思ふけれども、例へば木崎愛吉氏の如くなほ此點に疑ひを懷いてゐられる人もある。が、その疑ひは影が薄い。彼の性格に絡んでゐた濃厚な大阪人臭味から考へても、矢張り彼は父祖の代から大阪に往んでゐた生粹の大阪人であつたらうと思はれる。元祿六年に五十二歲を以て歿したといふ所から逆算しての寬永十九年生れといふのも、亦大體

は首肯出來る所であるけれども、彼が菩提寺誓願寺の過去帳には、その歿年を五十三歳とあるといふから、恐らく夫を記錄の誤りであらうと思ふにした所でなほ幾分の疑ひは殘る。同時代者近松に辭世として傳へられてゐる歌が二首あることなどによつて正しく知られる通り、當時の人々の辭世が必ずしも死に最も近い時の作といふのではなく、かなり前から用意されてゐたものらしいことなどが、「浮世の月見過しにけり末二年」の句をも、そのまゝ彼の歿年を語るものと信ずるには、幾分の躊躇を感じさせないこともないのである。まして彼の著「男色大鑑」に、見聞覺知の四の二の年まで諸國に尋ねて得た材料を書綴るといふ意味の言葉があつたのを、單に「大鑑」のみならず、彼の浮世草子全般に通ずる言葉ではなかつたかと思へば、彼の處女作「一代男」の世に出た天和二年が、四十二歳の時になり、從つて益々誓願寺の過去帳を無視し得ないことになつて來る。

一體元祿時代の學者とか文人とかいふものゝ傳記はまだ十分に知られてゐないものが多いが、其中でも西鶴のなどは殊に曖昧と混沌とのうちに置かれてゐる。彼

の生涯の傳記的事實として確實に傳へられてゐるものは、僅かに彼が大阪の鎗屋町に住んでゐたといふことだけである。然もそれさへ父祖傳來の家であるのか、俳諧師としての彼が後年自ら選んだ寂住居であつたのかは分らない。その生涯が判然しないだけ、餘計に彼の一生が夢の浮世に優遊自適した一種の踏晦者流らしい浪曼的な雰圍氣に包まれてゐるやうな氣もされて、多少の興味を覺えないではないけれども、然も彼の傳記が確實に傳へられてゐたら、在來の臆說とは隨分異つた形のものが、彼の人格なり生活なりに見出されはしまいかと思ふと、矢張り少々物足りない。

彼の家系も父母の名もまだ知られてゐない。祖父の西擧道方といふ人は彼が二十四歳の五月十二日に大阪で死んでゐる。寶永五年に「俳諧染系」を刊行した俳諧師炭翁は彼の遺弟であつた。明和七年版「舞臺扇麥絢ふみのつほ」の編者は自ら「攝陽西鶴孫東鶴」と名乘つてゐる。宮武外骨氏の「浪花名家墓所記」によれば、彼の妻は法名を光含心照信女と云つて彼より一年早く元祿五年に死んだといふ。「俳諧新附合物種集」「大矢數」等に顏を見せてゐる井原松雪軒大鶴も、井原松壽軒西鶴と、恐らくかなり色濃い因があつ

たであらう。これらの人々との關係から辿つたら、彼の家系も分りさうでゐながら矢張り分らない。一時彼の俗稱を平太夫といふとの說も行はれたが、それも印鑑の誤讀か何かに由來した謬說であつたらしく、彼の本名も今尙ほ分つてゐない。從つて俗稱平太夫說から出發して、彼を武家出と想像した人々の意見も今日では全然顧られなくなつてゐる。彼は無論町人であつた。家系が分らなくても、俗名が不明でも、それだけは動かせない推定である。水谷不倒氏の如きは彼に武家出の面影あるを說き、「思ふに彼が任俠の性は、武士の牛後に列せんよりはむしろ町人の鷄口に身を置きて一世を諷弄せしものか」と迄云はれたけれども、それは恐らく妥當な想像でない。西鶴に男性的な、任俠者流らしい面影が縱令何れ程濃厚にあつたにもせよ、それは元祿といふ時代の精神が彼に於て端的な表現を得てゐるだけのことであつて、決して彼が武家出であつたことの證據にはならない。伸び行く國民の生の力と爲政者の固陋な壓迫とが不思議に絡み合つて、一種變則な豪俠の氣風が國民の間に釀成されたのが元祿時代であることは前に云つた。夫は云はゞ安土桃山時代の直

抜の延長であつた。紀文や奈良茂や茨木屋幸齋の遊びに於ける豪快さ、乃至は男伊達町奴と稱する暴れ者の意氣と力を標語とした生活は、あの豊臣秀吉一代の事業に現れた豪宕さと同じものゝ變則的な現れであつた。さうして夫が元祿時代を少くとも其の一面を象徴する時代精神であつた。さういふ時代である。男性的な强さと任俠者流らしい氣持とは無論武家乃至武家出の人々にのみ屬してゐたのではなかつた。從つて西鶴にさうした性質が濃厚であつたからと云つて、それが直ちに彼を武家出と想像させるよすがとはならない。第一西鶴時代の武家階級は表面的には世の支配階級であつたものゝ、實際は既に崩壞と頽癈とへの路を辿りつゝあつたのである。さういふ階級の中から、新興の時代精神をあれ程までに體現した西鶴のやうな作家が現れ得ると考へるのが、却つて可笑しい。彼の作品に漲り溢れた華かさと活達さとは所詮亡び行く階級に屬すべきものではなかつたことを思ふ時、私は今更ながら彼が生え抜きの町人であつたといふ古來の定說を信じたいと思ふ。幕府が努力した啓蒙の時代を五十年の昔として、平民階級のうちにも彼程度の敎養と

詞藻とを有する作家が出現する可能性も亦十分にあつたのである。

所でさうした教養を問題にすれば、自ら全然不明な彼の幼少年時代の生活環境への或る暗示が與へられる。何れは後に考察すべき問題であるけれども、西鶴は兎に角かなり讀んでゐた。德川家康の文治主義以來書物の刊行が多くなり、從つて廣く樣々な書物を手に入れ易くなつた元祿時代であつたにしても、彼が目を通してゐただけの分量を、貧しい家の子弟が讀み通すだけの餘裕と時間とがあり得たらうとは思はれない。殊に町人の文化が進んだとは云つても、一部の所謂有閑階級を別にすれば、それはたゞ形而下的物質的の方面だけのことで、知的精神的の方面に於ては、彼等の大部分はなほ舊時代町人の無智と無學とを承繼いでゐた。だから彼等の間からは、兎にも角にも文字と學問とを賣る所謂文人作家が殆ど現れなかつた。元祿時代の草子類の作者は相當名門の人が多く、從つて彼等の社會的地位は決して卑しめらるべきものではなかつたといふ。が、それは云ふまでもなく平民の教養の當時なほ一般的には極めて低いものであつたことを有力に物語るものでなければなるまい。

さういふ階級に人となつた西鶴が、兎に角あれだけの教養を有つてゐたことを思ふ時、私は何時も相當な町家に生れた西鶴が、のらくらしながら、好きと暇とに任せて、秩序なく色々な書物に讀み耽つてゐたのではなかつたかと思ふ。さういふ境遇に人となつたが故に、彼は師匠をとつて文字を習つた。少年にして俳諧の學習に志すことも出來た。たゞ之は私の想像に過ぎないが、彼の祖父の西樂といふ法名の譽、知られたる彼の血族に俳人が多いことなどから考へて、彼の家系が單なる町人といふのでなく、一種の文人系――俳人系とでも云ふべきものではなかつたのかとも思ふ。とすれば彼の教養は必ずしも直ちに彼の少年時代の生活環境の裕さを反映するものとはならない。俳人の家に生れた子供が書を讀み文字を習ひ俳諧を學ぶのは寧ろ當然のことだから。が、若しさうとすれば、彼が茶の湯をはじめとして鞠揚弓其他百般の所謂趣味娛樂遊藝に對して、夫々相當の理解と經驗とを有つてゐたらしいことを擧げることが出來る。如何に見聞の博い、理解力の旺盛な彼であつたとしても、それらの全部が單なる聞き嚙りであつたらうとは恐らく云ひきれまい。少くとも

其中の幾分かは學んで知り得たものであらうと思はれる。彼の少年時代の生活環境への暗示が其處にも得られると思ふ。

比較的裕だつたらしい彼の少年時代の生活環境は、更に屢々云はれてゐるやうに、彼の處女作小說「好色一代男」に明瞭に反映されてゐる。落月庵西吟の跋によれば、同書は西鶴の「轉合書」であつたといふ。無論此種の文章を其儘信ずることはかなり危險なことであるに相違ないけれども、此書の成立した時期と、「二代男」以下の諸作の如く讀者を豫想したらしい筆遣ひの全然ない所から推して、それがまづ大體は作者自身の經驗から出發して、それに幾分の空想と脚色とを加へて所謂問はず語りに物した筆の吟みであつたことは肯かれる。自ら此書の記述には作者自身の實際の相が示されてゐる。主人公世之介の壯年時代以後の生活環境が、聽て後年の西鶴の生活環境の一面であつたやうに、世之介幼少年時代の記述の中には、その時代の西鶴の生活環境乃至はそれに近いものゝ、少くとも暗示が與へられてゐると思はれるのである。大家の若旦那として只のんびりとばかり育つたにしては餘りに鋭い西鶴で

あつてみれば、彼に世之介と全然同じい御乳母日傘の幼少年時代を想像することは或は無理かも知れないが、少くともそれに近い雰圍氣のうちに呼吸した人間であることだけは云へさうだと思ふのである。

とすればさういふ環境の中に生ひ立つた西鶴は、果して何んな少年であつたらうか。記憶力の旺盛な、才氣煥發の後年の西鶴から割出しても首肯出來るやうに、彼も亦「黠しきこと十歳の翁」といふに相應しい少年であつたに相違ない。或は一歩を進めて世之介同様の早熟兒であつたかも知れない。少くとも彼が一度は底の知れない耽溺生活に沈湎した男であることは、彼の生涯の述作に依つて明かに觀取される。輕い遊びに一度は浸つたことのある男――田山花袋氏も彼を評してそんなことを云つてゐた。さういふ道樂息子らしい生活の結果、世之介同様舊離切られの身の上となつたいふやうな事實も、或はあつたかも知れない。彼の家系が遂に知られず、幾人かの近親者は同じ俳道に志してゐたらしいのに殆ど特別の交渉は無かつたらしいこと、彼が父母に離れて祖父に幾分の接近をもつてゐたらしいこと等から推せば、

そんな想像も可能にならぬことはない。それは或は取とめもない空想に過ぎないかも知れないけれども、彼西鶴をさういふ境遇に置いて見る時、華であつた辯に何處か淋しい影の纒つてゐた彼の一生と、彼の激しい、寧ろ多感な性格とは不思議な結びつきとしか思はれない餘りにも客觀的な態度と、冷靜にして理知的な觀照と、時に意地惡くさへ見える程の剛情なリズム等といふものに對して、初めて妥當な解釋を有ち得るのではないかとも思はれる。醉うて踊つて苦い杯を嘗めたが故の性格の硬化――そんなことも考へられるのである。

さうした結果を齎らしたのかも知れない勘當の事實と、必然的な繫りがあつたか何うか――私は無論あつたと信じたいのだが、兎に角西鶴に一種の放浪時代があつたことだけは否定出來ないことらしい。恐らくはその耽溺の結果、彼も亦世の多くの人々と同樣に、その靑年期の幾年かを放浪的な生活に送つたに相違ないのである。世之介放浪時代の記述がかうした推定に寧ろ決定的な裏打を與へる。彼は此の放浪によつて、後年の述作の材料の多くをも集め得たのであらう。各地方に於ける世

態風俗さては廓の模樣なども、實際に味ひ知ることも出來たのであらう。彼が各地方の風俗人情をよく知つてゐたのは、あながち此の放浪時代の賜のみでなく、俳諧師としての見聞による知識も多かつたのであらうけれども、然も彼のそれら各地方の氣風や、殊には色里の空氣への正しい理解は、決して行きずりに眺めて通つた旅人としての理解だけでは無かつた。少くともかなりな程度迄の沈湎と沒入とがなければ、味ひ分け切れない微妙さが其處に認められた。彼は恐らく放浪者の氣安さを以て、かなり放縱に各地の色里に沒入しものであらうと思ふ。「萬懸帳持明ず屋の世之介」といふ言葉等によつて想像されるやうな姿を、實際の西鶴もさういふ放浪時代の或時にはしてゐたかも知れない。窮迫のどん底も無論其時に味つたであらう。後年の貧の記述や、人生の不如意をしみ〴〵と吐息する氣持なども、矢張り此時體感したものゝ現れであつたのかも知れない。

かういふ放浪時代が何歳頃まで續いたものであるのか分らない。前にも引いた「男色大鑑」の「見聞覺知の四つの二の年まで諸國を廻りて」といふ言葉が其の投落を示

すものかとも思ふが、それでは彼の藝術家としての生涯の歩みと一致しないのみか、延寶七年既に鎗屋町に住んでゐたといふ「難波雀」の記述とも撞著する。と同時に彼が鎗屋町の家を放浪時代の後に自ら選んだとしても、夫が全く新しく自ら選んだものか、それとも生家を離れて昔祖父と一緒に住んだ家であつたのかも分らない。鎗屋町といふ場所が今も昔も場末町らしい裏町通りの、世を捨てた俳諧師などの住むには相應しい場所であつたといふから、私は恐らく全然新しい落着場所を彼が見出したものであらうと思ふけれども――。たゞ彼が此處に住居をトした時には既に世の辛酸を嘗め盡し、人生の表裏隅々を眺め盡して、相當の心境の落着きを得た時であつたことだけは想像しても差支へなからうと思ふ。其の落着きと一種の得脱とから彼の壯年期以後の生活振りが展開されて行つたのであつた。

第二節　生活の二側面

梅薗堂主人が構へた「元祿太平記」の證言に聞く迄もなく、西鶴が幇間的な生活の一

面をもつてゐたことは、今日ではもう周知の事實である。と云つて彼は決して職業的な所謂幇間ではなかつた。紀文に對する英一蝶や榎本其角などの如く、彼も亦特定の大盡一人につき添うて遊里にも入浸れば、遠く遊山に伴することもあつたのであるらしい。世の轉變と果敢なさとを知り盡して、一度其處から逸脫して高く優遊しながら、再び著なき心を以て世相に歸つて來た彼は、さうした自分の生活態度にも一向無頓著であつたらしい。彼はさうした生活のうちに、より若かつた時代の耽溺生活からと同樣に、遊里生活の諸樣相と、其處に織出される人間運命の變轉とに關する豐富な知識と複雜な感懷とを獲得して來た。

けれども都の錦がさういふ生活態度を妥當以上に誇張して罵つてから、西鶴は時々その生活の爲に人々からの非難と指彈とを受けなければならなかつた。が、此點に關しての非難は少々酷である。無論さういふ生活が賞讚せらるべき生活でないことは分りきつてゐるけれども、さればとて元祿といふ時代に於ける文筆生活者等の生活に就て考へてみる時、それを一概に非難する氣も起らないのである。好色一

代男」は實價が一部僅かに五匁であつたといふ。西鶴の著書として最も高かつた「男色大鑑」さへ僅かに八匁であつたといふ。さういふ時代であつた。今日のやうな時代になつてこそ、藝術に衣食することも可能であるものゝ、それさへ僅かに二三十年以前の硯友社時代には、例の箸は二本なり筆は一本なり云々といふ有名な齊藤綠雨の嘆聲を聞かなければならなかつた。泉鏡花氏は師匠の尾崎紅葉から散々叱咤激勵された後で、僅か三圓の金を惠まれてゐる。一代の人氣作者と傍流的雜文家乃至はまだ盛名を馳せるに至らぬ新進作家との間に、報酬上の相違は無論あるにした所で、元祿時代の人々にとつて、彼等の藝術に衣食するなどゝいふことは殆ど思ひもよらない不可能事であつたらうと思ふ。されば〔こ〕そ俊穎英一蝶や豪快榎本其角も、半ば幇間的な態度を以て遊里に入浸るやうな生活をもしなければならなかつたのである。然も彼等はさうした生活に於て必ずしも自ら卑しく屈してゐたのではなかつた。寧ろ一種の矜りと氣位とを有つてゐたらしい。西鶴が幇間的な生活を送つたからと云つて、之を一概に貶し去るべき理由はない。

尤も當時にあつても、芭蕉の如きは文筆に生きながら、彼が如き枯淡靜寂の生活に終始した。それとこれとを對比すれば、西鶴は如何にも藝術家らしからぬ一個の俗物のやうに見える。又芭蕉に比べれば彼は實際俗物に過ぎなかつた。が考へようによつては、芭蕉の生活は文筆生活といふより寧ろ他人の喜捨に生きる生活であつた。一歩を進めてその喜捨は彼の文筆の力が自ら招いたものであつたとしても、彼があゝいふ清澄さをその日常生活の上に維持し得たのは、一面彼の性格の弱さの故であつた。彼の弱さは俗を厭うて之を逃避させた。其處に彼の清澄と風雅の世界が開けた。之に反して西鶴の強さは、同じく俗を離れながらも、其儘逆に俗其物を眺めさせた。所謂無着意の心を懷いて然も現實を肯定する者の世界が其處に生れた、眼をそむけて心耳を澄ますものと、心を据ゑて諦視するものとの相違——この相違から出發して反對の方向に徹した行つたが故に、芭蕉は山野に吟懷をよせる主情的な詩人となり、西鶴は浮世の巷に沒頭する主知的な小説家となつたのである。單なる藝術家といふ以上に一個の道人であつた芭蕉の生活は、素より西鶴には望めない

崇高なものであるけれども、西鶴のやうな傾向の人が、さうした生活に入つて行かれなかつたのも、亦一面止むを得ぬ性格的必然であつたと思ふ。

兎まれ半ば幇間的な態度を以て遊里に入浸つてゐたといふ西鶴は、不思議にもさういふ生活とは切つても切れない關係にある酒とは殆ど親しまなかつたらしい。都の錦の「元祿太平記」は彼を立派な上戸に仕立て上げてゐるけれども、それは惡意か乃至は理解不足から來た誣妄であつた。「名殘の友」の卷四「何とも知れぬ京の杉重」を見ても、彼の十三回忌追善の句集「こゝろ葉」に於ける潮梅の言葉に聞いても、彼が友人仲間には飲まぬと知られてゐた男であつたことが正しく理解される。夫は何うでもいゝことのやうでゐて、實は既に藤村先生も云はれてゐる通り、決して輕視することを許さないものであつたのである。彼が酒席に於ても醉ふことを知らなかつたといふことは、一見極めて華かに見える彼の日常生活に特殊な色調を帶びさせずにはゐなかつた。狂歡と亂醉との巷にあつて、如何にも手慣れた取卷きらしく、豐富な知識と喚發する機智とによつて一座の興を深からしめながら、然も彼の心は醉はぬ

眼と共に深く澄んで冴え返つてゐたとすれば、其處に彼が俗を離れて俗に遊ぶ人としての一種白々とした哀感を、常に心の底深く湛へてゐたのであらうことが感じられなくてはなるまい。此の哀感こそ、徹底的の人生觀照家としての彼が人生其物に對して懷いてゐた感懷と其儘相通ずる。云はゞ彼の作品を包む雰圍氣となり色調となつた所のものである。それは素より人としての西鶴をそんなに愉快に、幸福にし得る性質のものでは無かつたかも知れない。少くとも彼は醉うて狂ふ人々の間に交つてゐても、浮々した顏をしてはゐなかつたらう。「置土産」の卷頭に添へられた肖像のやうに、何處か淋しい影を漂はしてゐたであらう。「古今役者大全」や風來の「根南志草」に傳へられてゐる彼の逸話――澤村小傳次といふ當時の女形が竹輿に搖られて血暈が起つたと云つたのを、同座の役者達は如何に女形なればとて男に血暈はと笑ひ出したが、彼一人大いに感心して、稚い時から女形としての嗜みに氣を盡してゐたから、假初の頭痛をも血暈と云つたのであらう、さて〳〵しほらしいことであると云つたといふやうな生眞面さも、存外常住に持合はしてゐたかも知れない。田山

花袋氏が西鶴は近松に比してづつと野暮な男、女にももてなかつた男」といふやうなことを云つてゐたのも、確に一應は肯くことが出來る。

考察が少々岐路に入つたが、彼が生下戸であることを語つてゐる書物には、それぞれ酒色の巷に入浸つて幇間的な生活を送つてゐたといふ西鶴の相とは殆ど相容れない彼の生活の他の一面が傳へられてゐる。まづ「こゝろ葉」に於ける淵梅の言葉にきいてみる。

「井原入道西鶴は風流の翁にて机の菊爵を這し、釣舟に四季のものを咲せ、哥行引曲をさとりて俳諧の通達ある事、浦山の賤の子も乳房を離してこれを問ふ」

「こゝろ葉」といふ書物が師翁を追憶する門人知友の眞情より發して成つたものである以上、其處に誌された事實を頭から否定することは素より許されない。西鶴にも亦かうした俳諧の宗匠らしい生活の一面は確にあつたに相違ない。

がたゞ「こゝろ葉」に於ける樣々な記述には、同書の成立の必然的結果として、多少敵本主義的な不純な濁りが感じられる。多くの筆者等は本書に於て、恐らく歿後の毀

譽と褒貶との大きな渦卷きに弄れてゐる西鶴——寧ろ罵言と非難との的に譴責されさうになつてゐる西鶴を、知己としてさういふ非難と譏謗との中から救ひ出して、綺麗に洗ひ上げようとした爲に、却つて多少行き過ぎて了つたのではないであらうか。萬海が特に「近代艶隱者」を推奬してゐる所にも、湖梅がかうして西鶴の宗匠振りを力說してゐる所にも、夫が感じられる。が、夫は不可い。殊に湖梅の記述は困る。これでは何うしても後の所謂月並宗匠の生活態度と心境とを思はせる。恐らく心境などゝいふものさへ問題にならない程の深みと素直さとに入り得たのではないかと思はれる西鶴に、さうした月並俳人臭味は無かつたであらう。寧ろ同じ湖梅の記述でも、そのすぐ後に續けられた「下戶なれば飮酒の苦をのがれて、美食を貯へて人に喰せて樂む」といふ邊りに示されたやうな、暢びやかさと穩かさと自然さとのうちに悠々自適してゐた西鶴では無かつたのかと思ふ。彼の遺著「名殘の友」を讀む時、私は何時でもさういふ西鶴を想像する。前にも云つた「何とも知れぬ京の杉重に下戶と知つて酒樽に餅を詰めてよこした友達の趣向を喜ぶ邊りや、又は卷四「乞食も橋の

渡り初め」の一節、江戸の其角が訪ねて來る前後の記述などには、如何にものんびりと落着いた、無邪氣至極な、强ひて俳諧師ぶらない俳諧師の生活氣分が、生き生きと描き出されてゐるのである。私はそれが宗匠としての彼のほんとの生活態度であつたらうと思ふ。淵梅の記述に現れた西鶴は、要するに淵梅の氣稟を通して見られた西鶴であり、從つて淵梅的ではあつても必ずしも西鶴の眞實ではなかつたのではないか。此の記述の輪廓を通して、も少し素直な、匠氣のない人間の相を想像する時、それが聽て西鶴の實際の生活振りとなるのではないかと思ふ。彼が住んでゐた鎗屋町の住居が、かういふ生活を生活する俳諧師に相應しいものであつたらしいことは前にも云つたが、兎に角彼は其處でさうした穩かな生活を悠々と樂しんでゐたものであつたらう。さういふ彼は又時に昔の放浪とも、大盡の御伴としての遠出とも無論違つた、俳諧師らしい暢やかな旅行に出かけてゐる。遊里に入浸るといふことが必ずしも職業的な意味ばかりのものではなく、彼も亦此道の好き者——さういふ雰圍氣なり氣分なりを好む性質をもつてゐたに相違ないとしても、他面かういふ穩かな

生活の一面も彼にあつたことを忘れては不可い。幇間的生活の裡にあはたゞしく去來する人間の運命と榮枯盛衰とを眺め暮した西鶴は、同時にまたかういふ生活のうちに靜かに世と人とを觀じながら、與へられた自己の生命と自然の運行とを樂しんでゐた男でもあつたのである。

此の如き二面が渾然と融化した所に、西鶴の生活の全相は築き上げられる。幇間として酒席にあつても、彼は上述の如く淋しい顔をして人を眺めてばかりはゐなかつたであらう。野暮で女に好かれない性質にばかり着してはゐなかつたであらう。と同時に俳諧興行の席などにあつても、變に高く止まつて宗匠然と澄まし込んでゐるやうな氣取りは無論持合はしてゐなかつたであらう。常に座の白けない程度の斡旋は心掛けてゐたであらう。と云つて、室賀轍士が匿名を以て出版した「花見車」に口を極めて當時の宗匠連を罵つて、「當時は點者よりひたすら會をすゝめ料理出ればー巡すむまでもなく、盃とりどりに廻し、我句前にあらねば大聲に雜談し、さては大酒になつて、懐紙はいづこにあるやら、點者に藝をさするやら、歸りにはいとまをさへ

せず、さて翌日宗匠の方から馳走の禮を述に行くなどいへり」と云つてゐるやうな、そんな放肆さや輕さにも無論陷つては行かなかつたであらう。自ら輕く扱ふことを許さなかつた彼は、幇間として酒席を斡旋しても、決して所謂幇間的な輕さには墮しなかつたらうと思はれると共に、俳席で亂痴氣騷ぎをして宗匠としての體面を下げる程、我を忘れ準繩を忘れ得る人間ではなかつた。それは俳諧師としての彼が常に道を說く人であつたのでも分るし、彼の心がまたそれ程風雅に遠ざかつてゐたのでもなかつたことからも想像される。所詮は自己を捨てないで、然も自由無端邀に振舞ひ得た一個の得脫者としての生活が、軈て西鶴の生活の全面容であつたのであらうと思ふ。

第三節　性　格

西鶴は知的だと云はれる。彼が理知的な性格の持主であつたらうといふことは、今日ではもう定說に近いものになつてゐるかも知れない。が、夫が、彼の作品に主情

的な詠嘆が少いことなどから簡單に推定されたものであるのなら間違つてゐる。
彼の作品が主知的であるのは、作家としての彼の態度を物語るものではあつても、必ずしも彼の性格と直接の繋りをもつことにはならない。又さうでない迄も、彼の性格を一概に理知的であると斷ずるのは早計である。彼は寧ろ激しい感情を有つてゐた。熱情的な性格を有つてゐた。「一代男」を見給へ。作者にとつて一つの「轉合書」に過ぎなかつた本書には、作者の心の武裝がない。作品と作者の心との間に意識的なポーズといふものゝない、不用意な態度のうちに、作者の性格なり氣稟なりは自ら筆端に現れて了つてゐる。とすれば同書の隨所に閃いてゐる激しい愛慾の感情は、軈て作者西鶴の性格を語るものでなければなるまい。殊に世之介放浪時代の「因果の關守」や「形見の水櫛」などの邊りを見るといゝ。木曾で獄屋に繋がれた世之介は、隣房の女囚と戀に落ちる。二人は夜更けてから天井の煤を揚子に染めて、遣る瀬ない思ひに泣く。軈て大赦にあうて二人は一緒に奔る。途中で女は追手に殺され、世之介は氣絶する。梢の雫が自然と口に入つて蘇つたが、女はゐない。失望して歩き出

すと其處に新塚を掘る男がゐる。その塚の中の死骸が彼女であつた。世之介が取縋つて掻き口説くと、死んだ女が眼を睜いて微笑した。其の一瞥の故に、世之介は急に突き詰めて二十九迄の一期何思ひ殘さじと自害しようとする――かういふ情熱の激しさは、理知的な戀を弄んだ徳川末期の蕩兒などには到底求められないものである。理知一片の生温い人間には寧ろ味解し難い境地である。かういふ所に、如何にも元祿といふ時代の子らしい西鶴の、激しい、情熱的な性格の一面を、判然と觀取し得べきよすがゞあると思ふ。況して可玖の「俳諧物見車」に「此の坊主も一日一夜に二萬三千五百句の早口はたゝきしが、是にてよいといふ程しらず、兎角よき事はならぬ事と今覺えたるも可笑し。近年の版行皆作り物なれば、其俳見る事も世の費也」と罵倒されて勃然と憤つた彼が、激越な言葉に充ちた「石車」三卷を著したことなどを思ひ合せると、一層以上のやうな推定が動かせないものになつて來る。

けれども、かうした場合に於ける彼を見るに、其處に少しも感情の過剩がない。感情が感情を生んでゐるといふやうな形が少しもない。かの平賀源内が滿腔の不平

や不滿を爆發させた時の文章などを讀んで時々感じさせられるやうな、密度の脊外稀薄な、遊離した感情の斷りが、西鶴の文章からは殆ど感じられない。風來の激しさは、激しいながらにこくがない。甲高い聲の響がうつろである。之に反して西鶴には何處までも底力で押して行く趣きがある。云はゞ風來の激しさは多く所謂悲憤慷慨の空疎さに墮してゐるものであり、西鶴のは何處までも性格の燃燒としての根強さを保つてゐるのである。だから風來には西鶴程の重さと凄味とが無い。彼はたゞ頽殘時代の一奇驕兒に過ぎなかつたのである。が西鶴は元祿といふ力の時代の人間であつた。當時の新興階級の一員として、強く激しい時代精神を最も濃厚に體現した男であつた。だから彼には線香火的な所がなかつた。何んなに激しても足下が危ふくならなかつた。彼の感情は如何に常規を逸して奔騰しても、常に或る力強い裏打を失はなかつた。其處に彼れ自身の性格の強さが端的に反映されてゐる。

志賀直哉氏は云ふ。「二三日前、或る友達に日本の小說家では西鶴に一番感心した

と云つた。夫を云ふ時彼は『二十不孝』の最初の二つを考へてゐたのだ。それは餘りにと云ひたい位徹底してゐる。もしくは病的にと云つた方がいゝ。若し自分が書くとすれば、おゝ無反省に慘酷な氣持を押通して行く事は、如何に作り物としても出來ないと彼は思つた。親不孝の條件を並べるだけは出來るとしても、それを或る强いリズムで一貫さす力は迚もないと思つた」(暗夜行路)と。之は恐らく「二十不孝」といふ作品に接した誰しもが、等しく感じさせられる驚嘆であらう。あの作に於て西鶴は人間の惡を描いた。醜を描いた。描いてそのどん底を究めた。近松のやうな抒情詩人なら、直ぐに立ちぐらみでもつきさうな怖ろしい人間性の深潭や、心と心との葛藤や、血煙の立ちさうな修羅場などを、彼は泰然として瞬ぎもせず直視した。直視した儘の形象を眞向からぐん／＼と刻んで行つた。寧ろこれでもかこれでもかと云はぬばかりに强調した。然もその强調が決して單なる誇張に墮することなく「常に作者の內部に働く「强いリズムで一貫」されてゐた。悽といふのか酷といふのか兎に角驚くべき强さであつた。彼はかうした强さの故に、勢ひ込んでは一日二萬三

千五百句の獨吟をも敢行するといふやうな、又は人間の愛慾を描いては閨房の隱微に迄筆を及ばせるといふやうな、徹しなければ、徹する迄は無反省に突き進まなければ何うにも氣の濟まないエクセントリックな人間ともなつたのである。

かういふ性格の强さの故に、彼れは何んなに激しい感情にも決して壓潰されたり、崩折れさせられたりしなかつたのである。何んなに激しい感情をも、彼は常にじつくりと抱きしめた。何んなに熾烈な情熱が渦卷かうとも、彼れは決して其の爲めに足を掬はれなかつた。見給へ、「石車」にあれ程激しい感情を爆發させた西鶴は、その感情を半歳近くも靜かに胸に抱いてゐたではないか。更に見給へ、死んだ愛人の一瞥に感激して自害しようとした世之介は、軈て「分別所なり」と思ひ返してゐるではないか。

が然し此の場合「分別所なり」といふ言葉は如何にも拙い。自害！と迄思ひ詰めた世之介が、その最後の瞬間に於て死ねないのは「分別所」といふ言葉の示すやうなそんな不純な、そんな卑怯な氣持の故ではない。たゞ感情に醉ひきれない性格なのであ

る。此の性格的の事實を「分別所なり」といふ淺薄な言葉で表現したのは、西鶴の解釋の淺さである。反省的でも思索的でもなかつた西鶴は、世之介の、或は自分自身のほんとの氣持を、正しく把握して之を正當に表現することが出來なかつた。如何に突き詰めても性格的に死なれない世之介を云はうとすれば、「分別所なり」と考へる淺薄な理知主義者とする以上のことは彼には出來なかつたのである。が、それは無論誤譯である。自殺しようとする瞬間にふと氣をかへる清心の、あの打算と功利的觀念との混つた氣持など、夫は素より同視さるべき性質のものではなかつた。只感情だけの踊りが踊れないのである。「三人吉三廓初買」に於ける木屋文里が彼の爲に指を切つた一重を苦い顏をしながらたしなめる、あの場合の文里から所謂通り者としての嫌味とひねくれと、變な理屈つぽさと生溫さとを引去つた後に殘る强さだけを、更に原始的な單純さと素朴さとに迄還元してみたら、其處に世之介の、或は西鶴の、强さといふものが髣髴されはしまいかと思ふ。兎に角かうした强さの故に、西鶴は如何なる場合にも感情に醉へなかつた。此の意味で彼を感情家でなかつたと云ふの

は、幾ら酒を飲んでも取亂さない人を酒のみとは云はないといふやうなもの、西鶴のは感情家でないのではなくて、只感情に曳摺られないだけのことであつたと思ふけれども、然し普通に感情家といふ言葉は感情に醉うて感情のみの踊りを踊りたがる人をのみ意味するやうにも見えるから、必ずしも否定はしない。此の意味でなら西鶴は確に感情家ではなかつた。

　感情に曳摺られることの無かつた西鶴は、當然感傷主義とも緣のない男であつた。感傷とは云つてみれば感情の過剩である。實際の刺戟以上に感情が踊る時、又は實體の伴はない感情の影だけが動く時、其處に感傷が生れる。從つて其處には常に幾分の不聰明と、或る實體のないものへの自己陶醉とが含まれてゐる。性格的に感傷主義と緣遠かつた西鶴は、同時にさうした不聰明や自己陶醉に陷つて行くにも餘りに鋭い感覺を有つてゐた。それは理知による判斷といふより寧ろ本能に近い。本能的な聰明さであり敏感さであつた。理知に迄飜譯された彼の思想や判斷は又實に貧弱なものであつたが、それは前にも一寸云つたから此處には繰返さない。彼は

その本能的な聰明さと鋭さと性格の强さとの故に、如何なる種類の感傷にも陷つて行かなかつた。或は逆に彼がその性格の强さに徹して、人生の觀照家としてあんなにも深い所迄入り得たのも、一つには彼に微塵も感傷主義が無かつたからだとも云へる。彼の眼は常に感傷の甘さと曇りと濁りとから解放されてゐた。積惡の報として大釜で煮殺されることゝなつた石川五右衛門をして、「とても遁れぬ今の間なるに、一子を我下に敷」かせた彼は、「見し人笑へば不便さに最後を急ぐ」といふ五右衛門の述懷を聞いても、尙ほ鼻の先でせゝら笑つた。近松ならば、此の五右衛門の述懷に接しては、直ちに「親の恩愛、父の慈悲」といふ位の感激を發するだらう。近松でない迄も、普通の日本人にとつては恐らく感激の淚を吝むことの出來ないシインであらうと思ふ。が西鶴ばかりは「己その辨あらば斯くはなるまじ」と冷然として云ひ放つてゐるのである。五右衛門の氣持の中に、此處まで來ても尙ほ噓欺のあるのを剔出して、物凄くもせゝら笑つてゐるのである。强さとその强さを生かした甘い感傷の淚に曇らされない眼の鋭さとが、寧ろ怖い程端的に感じられる。淨玻璃——何となくそ

んな言葉さへ考へられると思ふ。鋭い洞察でゐる。此處には必要のないことなが
ら、平凡な教訓以外には何等の理想もモラルもなささうな彼の浮世草子が時に人間
社會の虛僞と僞態とを指摘して、我々讀者に正直であれ素直であれと敎へてゐるや
うに見えるのも、無論此の鋭い洞察の故であつた。又時に彼の作が皮肉や穿ちを擅
にしてゐるやうに云はれるのも無論同じ點から來てゐるのであつた。

田山花袋氏は頻りに西鶴には詩がないといふことを云はれるけれども、それは或
はかうした感傷主義の全然ないことへの誤認ではないのであらうか。さして濃厚
ではない迄も、詩人的な性質は西鶴のうちにも確にある。只彼は以上のやうな性格
の必然として單に詩だけの世界に安住してゐることが出來なかつたのである。そ
の證據には彼の作品に於てもかなり色々の方面に詩人的な性情の片鱗が顏を覗か
せてゐる。その俳諧に於てさへ例へばそれが冗雜放埒の遊戲文字であつたとして
も、流石に時に微妙な詩美を詠つたものに接し得る。所詮彼にないのは詩ではなく
て、只感傷がないだけのことであつたのだと思ふ。尤も彼の傑作として數へられる

「一代女」や「五人女」にはかなり濃厚な感傷がある。があれは、材料――主題に對する作者の用意即ち作者としての技巧と手腕とが醸し出した作品の味ひで、それが作者の性格を直ちに反映してゐることにはなるまいと思ふ。

がそれよりも、以上のやうな聰明さを、西鶴自ら正しく意識してゐたか何うかは分らないけれども、自ら意識すると否とに係らず、彼はその聰明さの上に立つてゐたが故に、自ら自己を高く評價した。自ら卑しくすることを肯じないと共に、自ら恃むことも強かつた。さうして其處に上述の如き鋭さと強く激しい性格とが加はつたのであるから、彼は時に甚だしく高飛車な態度をとつた。「石車」に示された彼の態度の如き、さういふものゝ最もいゝ例だと思ふ。傲岸不遜――夫は何うかするとそんな風にさへ見られさうな氣がする。かういふ所から見た場合の彼は、何處迄も主角のある、勇猛果敢な人間であつたやうに思はれる。こんな所にも、時代の子としての彼の輪廓の一面がかなりくつきりと想像されると思ふ。

けれども西鶴は決してさういふ強く鋭いだけの性格の持主なのではなかつた。

寧ろ不思議な程複雑多面な性格をもつてゐた。
　前にも述べた通り人生乃至人間の嘘とか擬態とかいふものに對して徹底的に敏感であつた西鶴は、又自ら氣障なものが嫌ひであつた。氣障とは即ち人間の心の武裝或は矯飾より生ずる嘘である。西鶴はそれが嫌ひであつた。絶對に嫌ひであつた。「筆の林の墨繪櫻の元に、玉蟲色の繻子の廣袖を着て、厚鬢跡下りに剃なし、金鍔の一差氈しかせて、座して艶しき花は見ずして古文の上巻を開き、朱を以て頭書、己が宿にてもなるべき事を無用の出過者」（懐硯巻五「御代の盛は江戸櫻」）といふ言葉など、ペダンティックな男を罵る口調の激しさに、寧ろ憎さ氣な顔つきをした作者が想像されるではないか。「柳のおのれと枝垂れしは、更に心も移ろぞかし。又天性を受けぬ玉椿を室咲させしは、花もいたみて、長の短い女郎の、無理に爪先立てゝ歩まはるが如し。美しうてから嫌なところあり」（好色二代男巻五「戀路の内證能」と云つてゐるのなども、單純に徒然草摸倣とのみは云ひ切れまい。矢張り氣障さ不自然さを厭ふ作者の氣持を露骨に物語つてゐるものと云はなければなるまい。其他美しうてもお白粉を

塗る女、生れつくとより色々に細工して自然以外の美しさを求めたがる女、さては茶の湯其他の嗜み事や藝事に於ける煩雜不自然な規則や心遣ひなどを、彼が屢々口を極めて罵つてゐるのなども、煎じ詰めればそのわざとらしさと仔細らしさとが好もしくないといふ氣持に歸するのであらう。氣障！　彼は夫等の諸々に對して、常にさう感じて唾棄してゐたに相違ない。

尤も此の茶の湯其他の規約に關する點は、單に氣障さを厭ふ氣持からのみ來たのではなく、一面奔放さと自由さを尙んだ彼の氣持にも由來したのであらう。檀林派の闘將として、俳諧の天地を踏み破つて暴れ廻つた西鶴が、七面倒な形式や規矩に我慢が出來なかつたらうといふことは、誰しも考へ得ることでなければならない。が、誤解があつては不可い。成程西鶴は暴れた。が、それは必ずしも規矩を踏み破り準繩を蹴散らかさうが爲の活動なのでは無かつた。只彼の豐富な稟質を生かし切らうが爲の爆發に過ぎなかつた。從つて其處に徹底的の自由さはあつても、夫を必ずしも無拘束を以て呼ぶべきでは無かつた。晩年の彼が俳諧道の規矩を說く人であ

つたことは、既に云ひ古されてゐるけれども、然もそれを軽々しく看過することは許されない。何故なら、さういふ晩年の西鶴は、晩年に至つて卒然として生れ出でたものではなく、より若かつた時代の彼にも半ば無意識的に潜在してゐたものが、年と共に成長し来たものであつたに過ぎないのだから。彼は最初矢數俳諧として太く誇負してゐた「大句數」に於てさへ、必ずしも掟書を無視することの出来ない彼自身を示した。一日二萬三千五百句の放れ業にさへ、指合見其他の役人を竝べることを忘れはしなかつた。さういふ所に、出鱈目に似て出鱈目とは縁遠い、寧ろ折目格式を一通りは尊重し、且つそれに順應しようとした西鶴の性格の一面が判然と現れてゐる。從つて彼が規矩を規矩として無視し軽蔑した男ではなくて、只不自然な矯飾としての夫を厭ふた男であつたに過ぎなかつたことが思はれるのである。放埒抜群どころか、彼は却つて一種の尚古主義に似た保守的傾向をさへ有つてゐた男であつたことも思はれる。彼が師匠の宗因に對して、陰に陽に尊敬の念を捧げ、自ら道とする俳諧道の先達として立てゝゐる所などにも、さういふものと一脈の繋りをもつ彼の素直

さ、寧ろ恭順さが感じられると思ふ。

と同時に、時代の子として時代相のうちに生きた西鶴には、少くともその生涯の或る時期に於ては、元祿的な臭味の幾分もあつたらしい。諷うたひとなつた一代男世之介が、琴をなほして爪のなきを本意なく思うてゐる人に「かすかなるふところよりうすむらさきの服紗物より、瞿麥の紋所ありし爪出じて、若御指にあひ申すべきとたてまつりける」といふ邊りなどにも何うかすると感じられさうな一種の臭み、所謂粋人として、或は美的生活によつて鍛練された一種の趣味に生きる人として、さういふ趣味の世界に拘泥した氣持が、或る時代の西鶴に無かつたらうとは何うしても云ひ得ない。さういふ臭味は何うかすると「一代男」や「二代男」を特色づける一つの要素にさへなつてゐるかと思ふ。前節にひいた澤村小傳次血暈の場面に於ける西鶴などには、殊にさうした臭味が濃厚に感じられもする。眞面目で野暮で氣障で嫌味な西鶴の相が、其處ではかなり鮮明に浮び上つて來る。

けれども逸話などゝいふものは、それを語り傳へる人々の主觀的な評價の色彩が

非常に色濃く加はりたがるものであるから、多くの場合その主人公の妻には餘計な彩りが施される。此の血暈事件に於ける西鶴の相なども或はそれであつたかと思ふ。少くとも其處に感じられるやうな嫌味は西鶴の一生について廻つてゐたものではなかつた。「一代男」や「二代男」の時代――より端的に云へば、彼が上述の如く嫌味や氣障さを痛罵してゐた時代にこそ、尚ほ幾分の氣障と色氣――必ずしもアモラスな意味に限らない――とをもつてゐた西鶴であつたけれども、「今時の宗匠、一體仔細らしくせぬはなかりし。何とやら目立けれども、面々の身なれば無用の意見もなり難し」（名殘の友卷三「さりとては後悔坊」）といふやうに、同じくそれらを嫌ふ氣持をでも、穩かに表白し得る頃には、完全にさうした色氣と氣障さとをさへ卒業して了つて、ありの儘の生を樂しむ人間になりきつてゐる。さういふ點では「俳諧うしろひも」といふ書物に出てゐるといふ咄の方が、寧ろ西鶴を語るに相應しいものであるかも知れない。芭蕉と西鶴とが初めて相會した時に、前者が「難波津に只ひともとの紅葉かな」と挨拶の句を述べたのに對して、後者が「それは挨拶武藏野の月」と應へたといふ咄は、

或は藤井乙男氏が「江戸文學の研究」に疑つてゐられるやうに、全然虛構の傳說に過ぎないかも知れない。「名殘の友」の或る部分から、行摺りにふと顏を見合せたといふ位のことは想像されても、此の二人は遂に相會して談笑するといふやうな機會を有たなかつたかも知れない。が、啻は全然虛構に出づるとしても、其處に浮び上つて來る西鶴の相は、必ずしも彼から全然緣遠いものではなかつた。も少し其の氣持に重若しい裏打はあつたにしても、彼はさうした囚れのない自由無端邀な態度のうちに、前節に考察したやうな暢びやかな生活を樂しんでゐたのであらうと思ふ。平明な邪氣のない生活氣分――其處に彼が徒に狷介な、鋭いばかりの人間でなくて、普通の際には溫顏慈容、寧ろ親しみ易い側の人であつたらうことが想像される。かの北條團水が、よしんば師弟の誼みがあつたにもせよ、西鶴の歿後七年の長い間を洛陽を去つて舊師の草庵を守つたといふ氣持も、かういふ西鶴の爲人を思ふ時初めて素直に受入れることが出來る。云はゞ西鶴は秋霜の激しさと春日の穩かさとを並有してゐた男であつたのである。さうしてその何れにも囚れずに自由暢達の生を樂しんだ

が故に、彼の複雜な性格はその斷面の限りを盡して發揮されてゐる。そこには無學と罵られて弘法大師の御經迄引合に出して青筋を立てる負嫌ひな性質もあつた。勝氣に逸る向不見さもあつた。酒樽に餅を入れて來た進物に躍上つて喜ぶ子供らしい無邪氣さもあれば、歌仙だか百韻だかに戀の句が一句も無かつたからといつて、「此一卷に腎藥をのませ下され度候」と書いてやつて大笑ひするといふやうな、罪のない惡戲つ氣も多分にあつた。阿蘭陀西鶴と罵られては自ら夫を名乘りとする程の洒落氣もあれば、改號するに際して、不用意にも友人梅翁の前名を其儘頂戴して澄まし込んでゐるといふやうな、無頓着さもあつたらしい。此道好き者の我と云つてゐる彼がアモラスな空氣や媚かしい雰圍氣にも必ずしも不調和な人間でなかつたらうことや、年中鹽水にむせたやうな嚴しい顏ばかりしてゐる人間でなかつたことは、素より云ふを要しまい。露伴氏が云つてゐられるやうに、彼は正に面白い男であつたに相違ないと同時に、面白いだけを取柄とする輕薄才子でも無かつた。芭蕉といふ人が對座する者をして*自ら襟を正さしむるやうな人であつたのに對して、西鶴は

あぐらをかいて談笑してゐる間に、不知不識何かしら根柢の深いものにぶつからせられて、はつと我に歸らされるやうな、そんな人では無かつたかと思ふ。

第四節　死とその前後

西鶴は元祿六年八月十日に死んだ。通説によれば享年五十二歳であつたといふ。(以下年齡はすべて通説による。)辭世の句に云ふ。

　人間五十年の究り、それさへ我にはあまりたるに、ましてや

　　浮世の月見過しにけり末二年

複雜多面な彼の性格を強く統一してゐた激しさは、年を逐うて內に貯へられて、聰明さの底に深く包まれて行つた。激し易かつた性質が深く耐へる性質に變つた。反撥する代りに、ぐつと踏み耐へて嚙みしめる性質が成長して來たのである。彼はさういふ性質によつて人生の自然に徹した。所謂天の調和の世界に味到した。氣を負うて一世に雄飛した彼は、かくてその晚年に於ては自己を空しうした嫌虛さの

中に靜かに住する一得道者となりきつたのである。夫はより若かつた頃からの彼が、意識下に於てゞはあつたりけれども、兎に角指標として追求した境地であつた。

勝峯晋風氏の「俳諧師西鶴の研究」によれば、獨長庵石鱗序「無題笒」に收められた西鶴の獨吟の揚句の花に「唯花は見えた通りの捨坊主三十七の春もわらんべ」とあるといふ、勝峯氏は此句から推して、彼が法體となつたのは三十七歳頃のことであらうと云つてゐられたが、それは兎に角、彼の法體は此の一聯にも明示されてゐる通り、單なる俳諧師としての職業的マンネリズムに由來したのではなく、邪氣のない童心の素直さと天眞とを希望した心を表現したものであつた。此の意味で「今殘つてゐる彼の畫像の法體は、單に俳諧師又は幇間といふ風に私には見ることは出來なかつた」といふ田山花袋氏の「西鶴小論」に於ける意見は正しかつた。彼は前に述べた宗匠としての生活態度のうちに、單なる俳諧師以上のものを指標としてゐることを示したと共に、其の法體によつてさうした指標の世界に安住しようとする氣持を正直に示してゐるのである。さうして其の希望は達せられた。詳しくは後に考察することだが、彼

の辭世に現れた心境は、正にさういふ希望の世界に入り得たものゝ夫であつた。彼は其處で人生の自然と天の調和との裡に何等の私心をも挾まぬ穩かな微笑を漏らし得る人間となつてゐる。

人によつては西鶴の晩年に老年期の疲勞と消耗とを見出さうとする。夫も一面理由のない觀察ではなかつた。既に元祿三年の「俳諧團袋」に彼は老足の重たきを慨つた。翌四年の「石車」に於ては一時昔の若さと銳さとを取返したやうな元氣を見せはしたが、更に翌五年の「前句點難波土產」の句評に於ては、初めは丁寧且縱橫の才氣を見せながら、終りの方では平凡にしてやつてつけな態度を示して、觀方によつては此處にも氣力の衰へを示してゐるのみか、三四五年を通じて、ひそかに書きかけて置いた原稿は兎に角、自ら出版の自信を持ち得る迄に完成されたものとしては、僅かに「胸算用」一篇を見るのみであつたことなどにも、亦老年期の衰頽が觀じて觀じられぬことはない。

けれども彼が屢々老を云つたのは、一つには一種のエチケットめいたマンネリズ

ムであつた。貞享二年僅かに四十四歳にして彼は早くも、小竹集の序文に老の嬉しみを云つてゐる。又その晩年に於ける寡作の說明も、老衰と消耗とにのみ求められねばならぬこともない。寧ろ其處には彼の心境其物が深い關係をもつてゐる。俳諧師以上の世界に住む人となつた彼は、云はゞ藝術以上の世界に遁脫したことになるではないか。その世界には藝術も文學も名譽も汚辱も何もない、たゞ如是の感があるばかりであつたらう。沼波先生の云はれる踵を空に吹かせて高く飛翔した人の、土を離れて、只無限の碧空に眺め入るにも似た氣持があるばかりであつたらう。さういふ世界に入り得た人が時に再び地上に下り立つて人生と人間とに着する時、其處に僅かに藝術の生れ出づべき契機があるのである。無味無臭の世界から色と味ひとの世界に歸つて來るのである。從つて彼がさうした心境に徹すれば徹する程、寡作は當然の結果として生れ出づべきであつた。結局何れの點から見ても、西鶴の晩年に特に著しい老衰と消耗とを考へねばならぬ理由は見出せないと思ふ。絕筆として未完成の「置土產」を机邊に置いたらしいことなどを思へば、却つて彼が最後

まで相當な元氣を持してゐたのではないかとも思はれる。

兎まれ西鶴は死んだ。遺骸は昔の大阪八丁目寺町、今では東區上本町四丁目の誓願寺本堂の西の背壇南側三側目の中程に葬られたものであるといふが、今日では同寺本堂南の隅に移されてゐる。花崗石を荒削りにした元祿式の墓碑の表面には、簡單に仙皓西鶴の四大文字が刻まれて居り、左に元祿六年癸酉八月十日、右に下山鶴平北條團水建と彫込まれてあるといふ。その清々しい簡素さにも、門流等の眼にうつつた西鶴の風貌と人となりとが想見されさうに思ふ。彼等乃至諸知友の西鶴への追憶の氣持は「置土產」に添へられた追悼の句などによつて、その一班が覗はれる。

念佛聞く常さへ秋はあはれなり　幸方

世の露や筆の命の置所　信德

殘いたか見はつる月を筆の隈　言水

泣や此櫟は折れず秋の風　才麿

力なや松をはなるゝ蔦かつら　團水

殊に團水の句の如き、句としての構成は概念的だけれども、力にしきつた師翁を失つた時の此人の氣持は、かなりよく理解される。　元祿七年其角が「句兄弟」に漏らした「折にふれては顔なつかし」といふ言葉などゝ共に、最も切な追憶の響きを傳へてゐるものであらう。　彼は前にも云つた通り師翁歿後の舊庵を七年も守つてゐたのみならず、自ら西鶴庵を以て名乘りもし、西鶴の遺稿出版にも常に何かと骨を折つてゐた。既に西鶴の生前にも、可玖が「俳諧物見車」によつて西鶴を罵つたのに對して「特牛」を出して之に應酬した彼は、元祿十五年室賀轍士が「花見車」四卷を出して、京江戸大阪及び諸國の俳人を遊女に見立てゝ品隲した中に、「射て見たが何の根もない大矢數」といふ一句を揭げて西鶴を嗤笑してゐるのに對しても、「評判花見車鳴絃之書」を出して「花見車」とその著者とを難詰してゐる。　大きく云へば徳川時代平民文藝の先驅者として、細かく云へば檀林派俳諧の闘將として、矢數俳諧の創始者として、浮世草子界の先達として、殊に所謂好色本の始祖として、西鶴が時代の色々な方面に甚大なセンセーションを惹起させた反動として、彼を罵る聲は隨所に湧上つた。「花見車」を始めとして、俳諧

けふの昔」「元祿太平記」、さては好色本の流行に憤慨した東山の偕白眼居士の「好色破邪顯正」などが踵を接して著された。　彼は師翁を思ふ他の門流知己などゝ共にさういふ反動的嘲罵を常に耐へ難い汚辱の感を以て眺めたであらう。　寶永二年彼が京より難波に赴いて營んだ西鶴十三回忌追善の句集「こゝろ葉」には、前にも云つた通り彼や其他の門流知人等の、かうした反動に反撥する氣持が濃厚に觀取される。

けれどもさうした門人知友等の濃密な好意を見るにつけて、想像させられる西鶴の一族は一體何うしてゐたのであらう。　前にも述べた通り西鶴には妻があつた。東鶴が果して自ら云ふ通り西鶴の孫であつたとしたら、當然子供もあつたであらう。舊離切られの子として一族から見捨られた西鶴であつたとしても、彼等だけは何處かに影を見せさうに思はれる。　見せてゐながら或は夫が吾々に分らないのかも知れないけれども、彼の歿後の一切が門人や知友によつて取仕切られてゐるらしく見える所に、却つて東鶴の西鶴孫自稱も幾分疑ひを以て眺められて來る。　或は西鶴の盛名を利用せんとする欺稱でゞもあつたのであらうか。　とすればそれは只歿後幾

十年、反動の後をうけて又西鶴の名が新しき光榮に輝き出したことを意味する以外に何等の意味もないことになる。又それがさういふことゝは全然關係のない、正しく西鶴の血統の存續を示すものであつたとしても、反動の後の西鶴禮讃は既に八文字屋本の西鶴摸倣にその頂點を示してゐた。百年の後江戸談林七世の一陽井素外が、寛政四年の八月十日に、日暮里西福寺に於て西鶴百回忌の法要を營み、境内に宗因西鶴才麿等の發句を刻んだ碑を立てゝ、有名な「鯛は花は見ぬ里もありけふの月」の一吟を發句とした脇起し歌仙を收めた「俳諧百回鶴の跡」を出版して彼を慕ふ誠心を致してゐるのなども、無論さうした西鶴禮讃の別な方面に於ける現れであつたと思ふ。さうして明治以後危く湮滅しさうになつた彼の名前が、淡島寒月氏によつて救ひ出され、紅葉露伴其他の人々によつて復活された彼の盛名は、色々な暗側面を孕みながらも、兎に角今日迄續いてゐるのである。彼も亦一人の偉大な男であつたと思ふ。

第二章　藝術家としての生涯の輪廓

西鶴の藝術家としての生涯の振出しは云ふ迄もなく俳諧師としての夫であつた。が、彼が果して何歳頃から俳諧に志したのであるかは未だ判然と分つてゐない。たゞ延寶九年に刊行された「大矢數」に彼自身「予正風初道に入て二十五年」と云つてゐるのから逆算して――その言葉が延寶八年のものであるか、或は九年初めのものであるか判然しない憾はあるが、兎に角彼が正式に俳諧道に入つたのはその十五六歳即ち明暦二三年頃のことであつたことが推定されるに過ぎない。從つて彼の處女作句乃至學習時代の句として、今日に傳へられてゐるものゝ數も極めて少い。以下年表の形によつて、知られたる彼の藝術家としての生涯の輪廓を辿つて見よう。

寛文六年(廿五歳)　西村長愛選「遠近集」にまづ彼の句が見られる。今日傳へられて

ゐるものゝ中最も古いものであるといふ。鶴永と署名。

寛文十一年（卅歳）　此年の序文ある高瀧似船編「落花集」に「長持へ春ぞくれ行くころもがへ」の句を載せる。似船は談林派の錚々であるから、彼が少くとも此頃から談林派に關係のあつたことが知られる。但し宗因入門の年次は不明。

延寶元年（卅二歳）「大阪俳歌仙」に他の三十五俳人と共に選まれて三十六歌仙に擬せられた。俗體の畫像と倂せて、前項「落花集」中の句を「長持に」と改めて載せてゐる。此年椎本才麿入門。恐らく名のある俳弟子の入門した最初であらう。

延寶三年（卅四歳）　伊勢村重安選「糸屑」に「衣裳たんす桐の立木の模樣かな」以下五句、西山梅翁判「大阪獨吟集」二卷刊行。宗因批判の十百韻である。その下卷に西鶴の百韻。なは鶴永を名乘る。

延寶四年（卅五歳）　一浮齋盛水選「梅の牛」に「西山梅翁庵にて」

此度や師の笠を着て梅の花　　大阪　西鶴

といふ句があるといふ。「勝峯氏俳諧師西鶴の研究」勝峯氏は或は寛文年間宗因

入門の際の句かといふ。私は却つて改名と同時に點者を許された披露の句ではないかと思ふ。此年和氣遠舟宅の「藤萬句」に宗因と共に列席。
「俳諧師手鑑」及び「柾木葛」刊行。處女編者である。が後者は傳本がまだ發見されぬらしい。前者は宗鑑守武以下名ある俳人の短冊二百四十六枚を摸刻したもの。其他大野酒竹の「俳諧年表」には「俳諧當世男」「季吟俳諧集」「半入獨吟集」「言葉繊」等の書が此年彼によつて編まれたらしく記されてあるが何處迄信頼すべきであるか分らない。

延寶五年(卅六歳)　五月二十八日生玉本覺寺に於て獨吟千六百句興行。矢數俳諧の第一聲である。後之を「俳諧大句數」二卷として刊行。此年發行の岡西惟中著「俳諧三部抄」には「是沙汰ぞ風の吹やうに今朝の秋」といふ句が見える。

延寶六年(卅七歳)　「三鐵輪」「虎溪の橋」「新付合物種集」「胴骨」「博多百合」「五德」等出版。一は宗因西鶴西夕夫々の百韻を收め、二は江戸より來れる田代松意を京の那波葎宿の宿に迎へての三吟三百韻。三には五年間に涉つて西鶴自ら集めた諸家の

附句五百組を收錄し、四には西鶴由平西國の三吟三百韻(留はすべて西吟)及び四人の追加八句を載せてゐる。之は近頃和田萬吉氏によつて發見されたもの。五と六とも何處かに傳本はあるかも知れないが、まだ發見されないらしい。

なほ勝峯氏によれば此年刊行の獨長庵石斎序「無題笨」に西鶴の獨吟、青木友雪選「大阪檀林櫻千句」には彼の附句の多くが收められてゐるといふ。前者に法體となつての句らしきものがある由は前に云つた。

延寶七年(卅八歲)「西鶴五百韻」「句箱」「兩吟一日千句」「友雪選」「俳諧四吟六日飛脚」等出版。一は門弟等との五百韻、二は友雪重行等十人と卷いた歌仙六卷、三は友雪との兩吟千句及び西吟を加へた追加三つ物、四は友雪遠舟正察等と井筒公木が東への旅に餞した連句集である。其他唯中の「近來風體抄」、旨恕の「わたし船」、千與の「俳諧新付合」、「飛梅千句」等にも收錄された句多く(勝峯氏による)「繪入河內名所鑑」といふものにも五六句收められてゐるといふ(石川巖氏手記)。

此年三月五日六日に仙臺の梅睡庵にて三千句矢數俳諧を敢行した大淀三千

風の「仙臺大矢數」を壯として跋を贈つてゐる。貞門の中島隨流が「俳諧破邪顯正」を著して宗因高政と並べて彼を罵つたのも此年である。

延寶八年(卅九歳)　五月七日生玉本覺寺に於て四千句大矢數興行。二度目の矢數俳諧である。餘程得意であつたらしく、爾後自ら四千翁を以て名乘る。他に澤井梅朝選「江戸大阪通し馬」に梅朝との兩吟歌仙を、遠舟選「太夫櫻」に發句を載せる。

天和元年(四十歳)　四千句大矢數上梓。兀々子鬼翁序。西鶴の跋と併せて大矢數の景況をよく傳へてゐる。此年彼によつて出版された「難波色紙百人一句」は、當時の俳人の畫像にそれ〲秀逸の句を讃した自筆刻本であるといふ。

天和二年(四十一歳)　大淀三千風の「松島眺望集」に句を送る。中堀幾音の「家土産」にも一句。——此年三月二十八日宗因歿。次いで最初の浮世草子「好色一代男」八巻刊行。好評によつて爾後草子作者として立つべく決心したらしい。

天和三年(四十二歳)　自ら施主となつて大阪高津南見庵に宗因の一周忌法要を營む。宗因の「詠むとて花にもいたし首の骨」を發句とした脇起し百韻席上になる。

次いでそれに「俳諧本式目」を附錄とした「俳諧本式百韻精進膾」を上梓。

貞享元年（四十三歲）　六月六日住吉の神前に一日一夜二萬三千五百句獨吟を敢行。住々醒雪の計算によれば一日二十四時間を不眠不休に作句したと假定しても四秒一句の割合になるといふ。餘りなる早業のために古來しばしばその眞僞を疑はれたものであるけれども、「こゝろ葉」の記述、如貞の追悼句、さては其角の「二萬句の蠅」「俳諧物見車」の可玖の言葉などによつて、その事實であつたことが確にされる。たゞ團水は此の獨吟全部を上梓したやうに傳へてゐるのに、今日ではその端本も見出されないのが少々訝しい。僅かに其時の發句として「神誡を以て息の根とめよ大矢數」なる一吟が傳へられてゐるのみなのである。――此時以後二萬翁乃至二萬堂と自號。

「諸艶大鑑」（好色二代男）八卷刊行。

貞享二年（四十四歲）　「西鶴諸國咄」（大下馬）傳本四卷此年に出版といふ。但し少々疑はしい。　此年「小竹集」を編む、淨瑠璃集である。

貞享三年(四十五歳)「近代艶隱者」五卷「好色一代女」六卷「好色五人女」(當世女容氣)五卷「本朝二十不孝」(新因果物語)五卷刊行。別に落月庵西吟選「庵櫻」に句を贈る。此頃淨瑠璃の作者として、近松と覇を爭つたともいふ。

貞享四年(四十六歳)「男色大鑑」(本朝若風俗)八卷「懷硯」五卷「武道傳來記」(諸國敵討)八卷刊行。又此年刊行の浮世草子「好色旅日記」には彼の句として「何と世に櫻も咲ず下戸ならば」といふ一句が見える。正しく彼の句であつたとしても、その格調から考へて數年以前のものであらうと思ふ。

元祿元年(四十七歳)「武家義理物語」六卷「新可笑記」五卷、「日本永代藏」(新長者教)六卷、「色里三所世帶」(好色つは者揃へ)三卷、「好色盛衰記」(西鶴榮華咄)五卷出版。「新可笑記」の序文に西鵬の署名を見る。此頃の改號なのであらう。

元祿二年(四十八歳)「本朝櫻陰比事」五卷「一目玉鉾」四卷出版。

元祿三年(四十九歳)白駒堂燈外選「俳諧伊駒堂」に發句及附句を、團水編「俳諧團袋」に團水との半歌仙二を見る。可玖の「俳諧物見車」は此年に出た。

元祿四年（五十歲）　松魂軒著「石車」三卷發行。「俳諧物見車」の所說を駁したもの。確に西鶴の匿名作であるらしい。　其他律友選「四國猿」に律友との半歌仙、島順水の「俳諧渡し船」に才麿順水等との四十四及び發句が收錄されてゐるといふ（俳諧師西鶴の研究）

元祿五年（五十一歲）「世間胸算用」五卷及び「前句聞難波土產」刊行。　後者には西鶴の附句評及び句一つが載せられてゐる。　他に編者不明「檀林一字幽蘭集」にも一句、

かうして俳諧師として藝術家としての生涯の一歩を踏み出した西鶴は、一度は淨瑠璃にも筆を染め、宗因歿後には更に浮世草子作者として現前し、爾後俳諧と浮世草子との兩方面に奔放多端な活動を續けた後、彼の句として最も有名な辭世の一句を遺して死んだのであつたが、藝術家としての彼の活動の所產は必ずしも以上に盡きてはゐない。　歿後七年、舊庵を守つた門人團水は、なほ彼の筐底を掻きさぐつて幾つかの未定稿を發表した。　その遺稿と彼の歿後の文獻によつて傳へられてゐる彼の作句其他は大體次の如きものであつた。

元祿六年「置土產」五卷出版。卷頭に西鶴の畫像(法體)、辭世、及び諸家の追善發句が收められてゐることは前にも云つた。

元祿六年「西鶴織留」六卷出版。團水の序文。此年其角の著した「句兄弟」には「鯛は花は江戸に生れてけふの月」といふ有名な句、及び西鶴を惜しむ言葉が載せられてゐる。句はその調子から見て「團袋」以前のものであらう。此處には彼の辭世が「末二年浮世の月を見過たり」と傳へられてゐる。恐らく其角の不用意な誤寫であらう。が勝峯氏によれば翌九年の「俳諧反古集」(珍著堂遊林選)にも、「辭世五十二の秋」と前書して、「浮世の月見過しにけり後二年」とあるといふ。

元祿八年「俗つれ〴〵」五卷出版。團水序。

元祿十年「笠附高點俳諧塗笠」に西鶴點勝句として前句五句附句十句が擧げられてゐるといふ(俳諧師西鶴の研究)。

元祿十二年「西鶴名殘の友」五卷出版。例によつて團水の序文。同年刊行の雪松選「俳諧名所百物語」には「茶山花を旅人に見する伏見哉」といふ句が見られる。

西鶴の著書として今日に傳へられてゐるものでは此の元祿十二年の「名殘の友」が最後のものであつた。が、俳諧の方にはなほ後の三宅嘯山の「俳諧古選」に收められた「我戀の松島もさぞ初霞」前にも云つた東鶴の「舞臺扇妻箒ふみのつほ」の「雲室と鐘にしらるゝ夕かな」さては「松に藤蛸木に登る風情あり」「大晦日定めなき世の定めかな」など、彼の句として知られてゐるものが多少ある。「俳諧水滸傳」にある「濱荻や當風こもる女文字」の一句は「俳諧溫古集」なる書に出てゐるときいたが、何年頃のものであつたか知らない。無論蒐集がまだ極めて不十分なのであるから、今日以後にも新しく發見されるものが少くないであらうと思ふ。尤も有朋堂文庫の名家俳句集中には、西鶴作として珍らしき句の多くが收錄されてゐるが、夫は勝峯氏あたりさへ出所不明の由云つてゐられる程出典の不確なものであるから、今遽かにそのすべてを信ずることは出來ない。と同時に彼の浮世草子としても、以上の他になほ「好色三代男」「西鶴文反古」其他幾つかの作品が西鶴の名によつて傳へられてゐる。と反對に、以上の諸作のうちにも、その遺稿の多く乃至は「艶隱者」などの如く彼の作としての可能を疑はれてゐる

るものも少くない。が私は大體以上の諸作をまづ西鶴作と觀じ、他を否定しようとするのである。然し其點に就ては後で詳しく考察する。此處では只後に觸るべき適當な機會のなさうな、淨瑠璃其他の云はゞ餘技的方面への瞥見を試みて、彼西鶴の生涯の飽く迄も多藝多端であつたことに、一口云ひ及ぼしたいと思ふ。

西澤一風の「今昔操年代記」によれば、初め宇治加賀掾の脇として藝壇に乘出した淨瑠璃史上の大立物竹本義太夫は、貞享の初年頃加賀掾の一座から離れて、大阪道頓堀に獨立の興行を始めた。然るに貞享三年に至つて加賀掾も亦大阪に來て興行することゝなり、此處に端なくも兩者の競演となり、從つて從來加賀掾の爲に淨瑠璃をものしてゐた西鶴と、義太夫の分離後加賀掾を離れてその座附作者となつた近松との、作者同志としての競爭も同時に起つた結果、遂に西鶴はその競爭に敗れたといふ。少くとも彼が此の方面にも少なからぬ興味を寄せ、且つ自らその方面の書物の刊行にも手を出したらしいことは、藤井紫影氏紹介の「小竹集」の存在などによつても知られる。同書は西鶴の自序によれば「大竹集」の節章を改めて之を小型に移したのも、「凱

陣八島」「曆」以下四五の淨瑠璃拔萃を收めてあるといふ。其中上記の二作が即ち西鶴作であり、近松との競爭の際に作られたものであるといふのである。時代も近い西澤一風が根もないことを云ふ筈もないから、少くとも其の生涯の或る期間に於て淨瑠璃の製作に從事してゐたものであることは首肯しなければなるまい。とすれば、少いながらも幾つかの淨瑠璃を作つてゐる水田西吟は、彼の俳弟子であると共に此の方面に於ける衣鉢をも承け繼いだものであつかも知れないと思ふ。

それに就て思合されるのは「俳家奇人談」上の巻に於ける「近代戲作者の通なる近松門左衛門は此門にいづるといひ傳ふ」といふ西鶴傳の一節である。近松門左衛門は承應二年の生れである。即ち西鶴より十二歲の年少である。異常な早熟兒であつたらしい西鶴が、比較的若かつた時代に於て、近松が之に師事しなかつたとは必ずしも云へないと思ふ。とすれば前掲義太夫と嘉太夫との競演は、その當事者同志が師弟であつたのみならず、黑幕の作者同志も同じやうな關係にあつたことになる。がそれを今遽かに信ずべきか否か無論分らない。殊に西澤文庫傳奇作書には「近松門

左衞門も俳諧は此翁(西鶴)にならへり」と明確に斷つてゐるのであつてみれば「奇人談」の記述も或はさういふ關係の不完全な表現に過ぎなかつたのかも知れない。只何れにしても此の二人の間には幾分の繫りがあつたらしいことだけは肯ける。義太夫分離以前に、二人とも嘉太夫に關係があつたらしいことなどを思へば猶更である。芭蕉とは殆ど近しい關係の無かつた西鶴は、かうして近松とは兎に角幾分の接近をもつてゐたらしいことが知られるのである。

僅かに「操年代記」によつてその存在を確證された二作品さへ「凱陣八島」の今日一般に流布してゐるものは彼のものではないらしく「暦」一篇だけが正眞の彼の作として傳へられてゐるに過ぎない。然も同淨瑠璃はその紹介者藤井氏によれば「天和四亨年二月貞と改元。同十月廿九日從來用ひ來つた暦を改め、貞享暦を頒布した新事實に當込んで見物の注意をひかうためで、それを持統天皇の儀鳳暦採用に托して趣向を設けた」五段物「一段一段に多少の山はあるが、まとまりの惡い作である」といふ(西鶴の淨瑠璃暦

の發見」。全文を見ない私には確なことは云へないけれども、後の浮世草子作者としての彼から考へても、夫が纒りの不十分なものといふことは肯ける。のみならず零細な拔萃を通してゞも、後の浮世草子よりもづつと碎け方の甚だしい、遊戲的氣分の濃厚なものであつたらしいことが覗はれる。夫は無論一面には淨瑠璃其物の性質に由來してゐる。浮世草子よりもづつと餘計に聽衆を意識に入れなければならない淨瑠璃は、其の性質として只賑かに——と云ふのは陽氣にといふのではない——美しい、時には強ひてゞもアモラスなものであることなどを要求したであらう。近松の淨瑠璃が常に大向ふ受けを覘つた甘さに充ちてゐることなどからもそんなことは考へられる。と同時に夫は又一面製作の年代にも關係してゐた。貞享二年の序文ある「小竹集」に收錄されてゐる以上、それは無論貞享曆採用の後間もなく筆を執られたものであらう。とすれば彼が一日二萬三千五百句の多作連吟に誇つた浮調子な氣持が、當然其處にも反映されてゐなければならない筈だと思ふ。

然も「操年代記」の記す通り、彼が果して貞享三四年頃近松との競爭に、縱令出火とい

ふやうな外的原因も手傳つたにせよ、手痛く敗れたとすれば、持ち前の負け嫌ひと、幸運に惠まれなかつたに氣を腐らしたなどの理由に依つて、西鶴は恐らく二度淨瑠璃に執着しようとは考へなかつたであらうと思ふ。殊に其頃から浮世草子の製作に暇なき身となつた彼であつたことを思へば、一層そんなことが考へられる。從つて彼の淨瑠璃はまだ作者としての心境の沈潜を缺いた、比較的若かつた時代にのみ產出されたことになる。必然的に彼の淨瑠璃は恐らく其のすべてを通じて「曆」と同じ性質のものであつたらうと思ふ。夫は無論藝術家としての西鶴にとつて、さまで重大な一面では無かつたことが、かくて判然と斷言出來る。たゞ彼がさうした淨瑠璃製作の間に、俳諧師としては全然顧みる必要のなかつた一篇の筋立乃至趣向といふことに、多少の工夫を凝らすべきことを修行してゐたといふことだけは忘れてはならない。彼はその修行の所得を、屢々不手際に陷りながらも、兎に角常に浮世草子の製作に働かしてゐたのであるから。

と同時に、俳諧師としての彼が寧ろ餘技的に耽つた淨瑠璃の製作に於て、淨瑠璃史

上の隨一人者を以て目さるゝ近松と、まだその大成期以前ではあつたとはいふもの

の、兎に角太刀打ちすべき位置にゐたといふことは、返す返すも彼の藝能の多角的で

あつたことを思はせずには置かないと思ふ。さうして彼が多少は繪も描き歌も作

つたらしいと考へる時、その感は愈々深くなつて來る。

水谷不倒氏は「二代男」「二代男」「大下馬」「艶隱者」等の挿畫のすべて及び「新吉原常々草」

中の挿畫の幾枚かは悉く西鶴筆であるといふ。夫は少々西鶴を立派な畫家に仕立

上げ過ぎてゐるやうだが、少くとも「難波色紙百人一句」「石車」等の挿畫は、確實に西鶴の

筆であるらしい。それらは無論素人の稚拙さを脱し切らないものではあるけれど

も、それでも多少の才能と一種の味ひとは感じられる。彼の歌に至つては古來全然

閑却されてゐる。と云ふより寧ろ俳諧師であつた彼には歌は無かつたと考へられ

てゐる。「三代男」や「一目玉鉾」は歌がある故に彼の作ではないと迄斷言されてゐる。

が、それは不可い。「三代男」が西鶴作でないと考へられるのは其處に歌があるからで

はない。分量の相違こそあれ「男色大鑑」にも歌はある。第一諧俳師だから歌は作ら

なかつたとは、素より云はれぬことである。それも西鶴が歌などを全然顧みなかつた男であるなら知らず、實際はかなりの親しみをそれに示した彼であり、その方面の知識をも相當に有つてゐたのであるから、猶更餘技として時にその方面にも耽りたい衝動を感じなかつたらうとは云ひきれない。「一目玉鉾」の如きは却つてさうした餘技が結晶したものでは無かつたかと私は思ふ。本書は時に西鶴作でないと云はれるけれども、その各斷章が必ずしも西鶴に緣遠いことはないと思ふ。

〇固山

此の宿東路には人の情もふかし、旅人をとまれと小手まねきの女姿もさのみいやしからず、髮も兵庫まけに物かたく白粉は雪の曙をあざむき、口紅は夕日に移りて、さりとてはおかし、後ろ帶見よき所がらの風俗、是も一慰とてかり枕おもしろし。

文章取材觀察共に西鶴的でないことはないではないか。各宿驛に於ける留女の樣子や遊女の風俗を紹介する所、「油掛地藏」「戀死坂」「化地藏」藤田の宿の「明の藥師」などゝいふものに關する傳說的な云ひ傳へなどにかなり深い興味を感じてゐる所なども、

此書の出た元祿二年頃の浮世草子作者としての西鶴の氣持なり態度なりに共通したものを感じさせる。殊に長崎の出島より唐國への海上」として、數頁に渉つて變挺な地名や出鱈目な數字を並べてゐる邊りは、西鶴の好んで用ひた技巧であつた。俳諧師の旅行記として、歌があつてもいゝ、句が一つもないのが不思議だと云へぬこともないが、それも彼の思想と性格とから說明出來ぬことはない。前にも云つたやうに、西鶴には一種の尙古思想があつた。「道の記」といへばすぐに「歌など作り」と考へさうな傾向があつた。さういふ傾向にふと拘泥つた彼が、臆て逆に餘技である和歌に暫く耽つてみようとした氣持は、彼の徹底好きな性格から直ちに肯かれる。「歌だつて出來るぞ」そんな氣持にもなりかねない彼であり、彼の敎養であつたと思ふ。殊に「置土產」卷頭の追悼句中に、萬海の作として「秋の日の道の記作れ死出の旅」といふ句がある。此句は云ふ迄もなく其の生前に何等かの道の記をものした作者への追悼句としてのみ相應しいものであらう。然も西鶴の生涯に其句を受けるに相應しい著作は本書以外には見出されない。と云ふやうな點から考へて私は本書の西鶴作で

あることを信じようと思ふ。さうして西鶴に歌を問題にしようと思ふのである。

が然し誤解があつては不可い。私は本書に載せられた歌の、出典や作者の斷られてゐないものの全部が、西鶴作だといふのではない。有名な「陸奥の忍ぶもじずり誰ゆゑに」の歌などさへ、其處には出所も作者も斷らずに載せられてゐる。從つて全篇を通じて西鶴自身の歌は却つて甚だ少いかも知れないと思ふ。然も今の私にはさうした出典不註の古歌と西鶴の自作歌とを區別し盡すだけの準備もなし、古歌に對する知識にも乏しいが、只さうした古歌の間に介在して、幾分か素人臭を感じさせる以外には、瞭然と西鶴作と斷じ得る歌の殆ど無い所に、彼の歌の性質は却つて明瞭に示されてゐると思ふ。云はゞ彼は「道の記」と云へば直に「歌など作り」と考へるのと同轍に、「歌」と云へば直に古格に順應して愼しく雅かなものを作らうとする男では無かつたのであらうか。彼の浮世草子の隨所にもさうした考へは認められる所であつたが、兎に角談林派の俳諧師として、あれ程自由奔放な活動をした彼が、不思議にも有つてゐた保守的傳統尊重的な一面が、此處には殊に濃厚に現れてゐるのでは無からう

か。兎に角、本書に於ける彼の作歌らしいものには何うにも彼の豊富な天稟の自由な流露が感じられない。從つて私がかうして彼の歌を問題にするのは、それを尊重しようがためではなく、只彼の藝術家としての活動範圍が廣く複雜であつたことを云ひたい爲に過ぎないのである。

所で此處には必要のないことながら、一目玉鉾は一種の旅行記である。歌を入れたり、其他の記述も必ずしも無味乾燥な文字の羅列に終つてゐないことは、上來の考察でも明瞭であらうと思ふが、素より興味中心の浮世草子と同列に置かるべきものではない。此點で本書は遙かに遺稿の「名殘の友」と相通ずる。然も「名殘の友」に於て如何にも俳諧師の旅行らしい記述の多くを見せた作者は、本書に於てはより大がゝりな、と同時に如何にも浮世草子作者らしい觀察を擅にしながらの旅行記を書いてゐることを感じさせる。たゞその記述の全部が彼の直接の見聞ではなく、冒頭其他所々に單なる知識乃至空想から來た記述が含まれてゐる。此點では本書も無論純粹の旅行記とは云はれない。幾分浮世草子に近いものであると思ふ。

第三章　俳諧師としての西鶴

第一節　學習時代と其の頃の俳風

西鶴は云ふ迄もなく談林派の俳諧師であつた。が、普通に考へられてゐるやうに初めから宗因の弟子であつたか何うか、多少疑はしい。彼の俳諧入門が十五六歳頃のことであつたことが知られてゐるのだから、例の「梅の牛」に於ける「西山梅翁庵にての句が、」勝峯氏の云はれるやうに、果して彼の二十五歳頃宗因入門に際して詠まれたものであつたのなら、此疑ひは直ちに氷解する。が此句も今遽かに入門の句と斷定することは出來ない。「梅の牛」といふ書物を見てゐない私には、勝峯氏が何ういふ根據から以上の想像說を樹てられたのか分らぬけれども、若し夫が單なる想像的推定に過ぎないとすれば、同じやうな强さを以て、夫を點者業を許された際の句とも、單なる改名の披露句とも受取れる。私としては、後年の「石車」に「西鵬詞に、俳諧程の事なれ

ども、我三十年點を致せしに今に毎月の卷々覺束なき事のみとあるのから考へて、西鶴の點者として世に立つた始めが二十歳代であつたやうにも思はれる事實から、寛文五六年說をも少し前に繰上げて、此句と此の事實とを結びつけるか、或は寛文頃にはまだ鶴永と名乘るのを普通としてゐたらしい彼が、特に西鶴と署名してゐるらしいのから、夫を改名の句と考へて、寛文六年よりもづつと後、「梅の牛」刊行の延寶四年近くの作と判斷するかするのが、より妥當ではないかと思ふ。延寶三年伊勢村重安の「絲屑」には同じく大阪、西鶴の署名を見、同年の「大阪獨吟集」には昔ながらの鶴永といふ名に接し、翌四年の「俳諧師手鑑」には西鶴の署名と鶴永の落款とが併用されて居り、同年和氣遠舟宅の「藤萬句」にも西鶴を名乘つたらしく、以後は時に例外はあつても殆ど常に西鶴を以て現前する彼を思へば、彼の改名が恐らく延寶三年頃のことであらうと考へられ、翌四年の「梅の牛」にはまだ比較的耳新しい句として此句が收錄されたと見るのなどは、殊に妥當ではないかと思ふのであるが、さう考へると、其時改名と同時に點者業を許された——或は點者業を許されたが故に改名したとも思はれるので

ある。延寶七年「難波雀」に俳諧點者鎗屋町井原西鶴と明記された彼は、私は延寶三年に、始めて點者となつたのではないかと思ふ。

尤もそれを點者となつての改名と見ずに、宗因入門と同時に改名したものと空想されないこともない。「俳諧水滸傳」に西鶴の宗因入門を叙したついでに「宗因も大に栖鶴が才を愛で、我が西翁の西の字を讓り………是より西鶴の字に改めけり」とあるのなども、さういふことを考へさせるようすがとはなりさうだが、寛文十一年高瀧似船序の「落花集」に既に西鶴の句を見、次いで大阪三十六歌仙の一人として選まれてゐる等、も少し早くから談林派に關係のあつたらしい西鶴が、延寶三年の改名の時始めて宗因に入門したと考へるのは少々變になる。第一「大阪獨吟集」に鶴永と名乘つてゐるのが入門と同時に改名したといふ考へ方とは一致しない。かう考へて私は愈々彼が點者業を許されて改名したものと考へるの至當なことを思ふのである。が、さう考へれば無論その改名以前の幾年かを、西鶴は既に宗因に師事してゐたのでなければならなくなつて來る。とすれば入門は果して何年頃のことであつたらうか。

人によつては西鶴最初の俳諧學習を十五歳の時即ち明暦二年と考へて、其時直ちに宗因門下となつたものと考へる。明暦二年と云へば、彼宗因は恰も菅公七百五十年忌に當るの日をトして、大阪天滿の向榮庵に檀林の額を高く揭げて、所謂天滿一萬句興行を企て、談林の新風を天下に呼號した年であるといふ。此時貞門の句風に倦いてゐた天下の俳人等は、風を望んで宗因の幕下に參じたものであるといふから、或は西鶴もその氣勢に捲込まれて宗因門下となつたのであると、考へられないこともない。がそれなら西鶴は何故後の「大矢數」に「予俳諧正風初道に入つて二十五年」と書いたのか。「談林(若しくは當流)初道に入て」と書かなかつたのか。當時の俳人等の語彙は必ずしもさう正確なものでは無かつたとしても、兎に角「石車」其他に散見する所によれば、古風貞德流の俳諧を正風と云ひ、それに對して談林の新風を當流と呼ぶのが、軈て彼等の普通の語法であつたらしいのだから。從つて私は明暦二年が如何に談林派にとつて劃期的な年であつたとしても、其年西鶴が宗因に入門したものとは考へたくない。却て「正風初道に入」の言葉から、彼がその學習の當初に於て、古風俳諧

に親しんだのでは無かつたかと思ふのである。大野酒竹がその「俳諧年表にあげた季吟俳諧集」が果して西鶴の編著であつたとすれば、此の推定は愈々確實な裏打を與へられる。が、夫は素より輕々に信ずべきことではないらしいけれども、兎に角相當富裕な商家か何かに何不自由なく育つたか、又は俳人系とも云ふべき家柄に生れたかした西鶴が、消閑のすさびとしてか、或は平民的な教養の第一階段としてか、又は環境的自然に依つてか、當時都鄙境までの玩びとなつてゐたといふ古風俳諧に、まづ親しんだのであらうといふことは、無理でなく考へられると思ふ。檀林派の提唱後日なほ淺かつた時代に於て、最初の學習時代に入つた西鶴にとつて、夫は寧ろあり得さうなことであつたと思ふ。

それに就て思合されるのは例の「俳諧水滸傳」巻三の「栖鶴抛筆止萬句」の一章である。其處には住吉社頭に笠附俳諧の萬句興行を營みつゝあつた西鶴が、宗因等に乘込まれて即ち筆を抛つて其の門下となることが誌されてゐる。「水滸傳」は小說であり、從つて事實上の不穿鑿や虛構に陷つてゐる場合も多いけれども、作者の意圖としては、

必ずしも無稽な架空譚を物しようとしたのでもなかつたらしいのであるから、多少之に似通つた事件が無かつたとも斷言出來ない。且つ私の聞誤りでなかつたとすれば、沼波先生のお話の中に、西鶴二十何歳かの時「俳諧の息の根とめむ大矢數」なる發句による矢數俳諧興行があつたらしい節があつた。が色々の點から考へて此時の矢數俳諧は完成されなかつたらしく、傳説以上に殆ど何等の記述も遺つてゐないらしい。從つて夫が或は「水滸傳」の記述に暗示されて、ずつと後世に生れた傳説であるのかと思はれないこともないけれども、只後の「大矢數」第百六諸荷の發句として、荷平が「及もなし息の根とめる大矢數」と云つてゐる爲に、「息の根とめむ」の句は正しく西鶴の發句として早くから人口に膾炙してゐたのであらうとも思はれる。時代が少し違ふけれども、兎に角彼の二萬句興行を延寶二年のことゝ誤り傳へたものゝあつたことなども、何うかすると彼に「大句數」以前、既に矢數俳諧興行のあつたことを暗示するものではないかと思ふ。然も彼自身後の「大矢數」に「二度の大願」と云つてゐるのであつてみれば、「大句數」が彼として最初に完成された矢數俳諧であるに相違なく、從つ

て夫以前に之に類似した企てがあつたとしても、夫は何等かの理由で完成されなかつたものに相違ない。とすれば其處にも「水滸傳」の傳ふるやうな一幕が想像されぬこともない。所詮西鶴が或る程度までの俳諧修行を經た後に宗因との關係を生じたのであることは、動かせないことのやうに思はれる。夫は前に引いた「石車」の言葉から考へても、亦肯定し得ることなのである。前に考察した通り彼が延寶三年頃宗因門下としてはじめて點者として世に立つたとすれば、それと元祿四年の「石車」に「三十年點を致せし」と云つてゐる言葉との間には、約十年の開きがある。然も、「石車」といふ書物の成立を考へる時其處に多少の行過ぎはあつたらうと考へられないことはないけれども、例へば何んなに怒りに驅られたとしても、全然根もないことを口走る程感情に溺れきる西鶴でなかつたことを思へば「石車」の記述を全くの出鱈目とは云ひ切れない。從つて私はまづ少年として俳諧に親しんだ西鶴は、その最初の學習のうちに、豐かだつた彼の才分を發揮して、或は無名の同好者間にあつて自分免許の點者的位置にでも据ゑられてゐたのではなかつたかと思ふ。さういふ彼が宗因入門

以前既に一流の點者を以て居り、ひいては住吉社頭の萬句興行を――少くとも何かしら夫に類する晴がましい企てを敢てするといふやうな自信と誇りとに充されたのでは無かつたであらうか。後年の彼が「惣て此道さかんになり、東西南北に弘る事自由に基く俳諧の姿を我仕はじめし已來也、世上に隱れもなき事今更申も愚也」（大矢數）と誇稱してゐるのも、さう考へれば極めて端的に響いて來る。かういふ彼が宗因に接すると共に、其の自信と誇りとを捨てゝ聽て其の門下となつたと考へるのが、私には先づ最も妥當に思はれるのである。從つて彼の宗因入門は元祿四年から三十年を逆算しての二十歳頃から「落花集」などが出る迄の間といふことになる。此點では勝峯氏の二十五歳入門說などが、まづ近い所を云つてゐるのではないかと思ふ。

兎まれ西鶴は初めから宗因の弟子であつたのでは無かつた。彼はその俳諧生活の第一步をまづ古風との接觸によつて踏み出したのであつた。然も富膽な彼のすは、同じやうな敎養のうちに成長した芭蕉や宗因が、永く貞德老人の涎をねぶるに滿足してゐられなかつたのと同樣に、何時までも古風いぢりの埒内に止まることが出

來なくなつて、自ら一風を開くといふやうな廣く無拘束な世界の活動に入つて行つたのであつた。比較的初期の作句として今日僅に傳へられてゐる彼の句の幾つかを見ても、さういふ彼自身の歩みはかなり端的に反映されてゐると思ふ。

衣裳たんす桐の立木の模樣かな(絲屑)

銹繩や内外二重の御代の松(遠近集)

長持に春そくれ行く更衣(大阪俳諧選)

朝顏や髮結が見る花盛(絲屑)

牛の子や作る鳥羽田の池の菱(同前)

日高には能登の國までさし鯖賣(同前)

排列が必ずしも年代順にならないのは些か工合が惡いが、兎に角かうして並べて見ると、其處にかなり根深い古流俳諧の影響と、其處から脫脚して行つたものゝ歩みとが覗はれるではないか。初め二句の如き、夫が古臭い弄語と概念の遊戯とに終始してゐるあたり、殆ど古風との距離を感じさせないものではないか。僅かに

雪汁は軒のうて木の手水かな　令徳

螢火は川の脊中のやいとかな　立圃

等の句に最もよく代表されてゐる貞門の說明的語法に對して、寧ろ直觀的とも云ふべき率直な云ひ下しがあるだけである。さういふ所から第三・四句の客觀解釋主義的の觀念的傾向に轉じ、更に其處から愼重さと落着きとを失つて、第五・六句の自信に充ちた出鱈目と奔放さとに移つて行つた歩みは、大體一般談林派の歩みと似たものであつたし、又兩者が共に貞門の行詰りを打開すべく新しき一歩を踏出したものである以上、その一致もあり得べき事であつたと思ふが、兎に角西鶴はかうしてその最初の教養を漸次に脫脚して行きながら、然も結局其の生涯を通じてさうした教養のを幾分かは遺してゐた。

闘こすや六藏が引朝霞(俳諧四吟六日飛脚)

花に鐘くれて無常を觀心寺(西鶴句集)

等、彼の一生を通じて貞門風の言語の遊戲に墮した句も決して少くはなかつた。緣

語によつて觀念の轉向をはかる場合の多かつた連句には、殊に屢々さういふものが見出された。と同時に彼の晩年の俳諧も、何うかすると此の古風的教養に多少の繫りがあつたのではないかと思はれる。「石車」の何處かに彼が貞門の、然も選りに選つて平板單調な立圃に幾分の好意を寄せてゐるやうな口吻さへあつたと記憶してゐる。然も之だけ深く根を下ろしてゐた古風俳諧の影響より上述の如く一歩一歩と脫脚して行つた彼の步みの中に、その修行時代に於ける西鶴の精進が感じられるのでなければならない。富贍の才は惠まれた彼の天分であつたけれども、彼はその天分に依つてのみ後の日の盛名を致したのでは無かつた。何うかすると無拘束と强氣との一點張りであつたやうに思はれる彼にも、矢張り思ひをひそめた刻苦と精勵とはあつたのである。「長持へ春ぞくれ行く」の一吟が聽て「長持に」と改められてゐる所などにも、さういふ精進の氣持とまだ失はれない愼しやかさとが感じられる。守武宗鑑以下著名な俳人の短冊二百四十六枚を摸刻してゐる所、乃至は五ヶ年の日子を費して「新付合物種集」を編纂してゐる所などにも、比較的初心らしい俳道熱心さと

精勵の氣持とが語られてゐないとは云はれない。かういふ點では彼も亦一個の謙虛な俳諧研究者乃至は俳道の修行者に過ぎなかつたのであると思ふ。

が、「物種集」はその卷首及柱に「上」とあつて、「中」若しくは「下」の出版を豫想させながら、遂にその豫定は實現されなかつたらしい。恐らく俳道熱心だつた編者が、第一輯として之を上梓刊行した後にも、なほ幾年かを經るうちに同種のものを刊行する意圖を有つてゐたのに、當時より三四年後の彼には、遂にさうした種類のものを編著しようとするやうな比較的初心らしい氣持が無くなつて了つたのではないであらうか。かう考へると、その出版の年次は兎に角、「物種集」は俳諧修業時代の西鶴の氣持を反映する最後の編著であつたことが思はれる。同書の出る二三年前から、既に談林派の闘將として縱橫の活動を續けてゐた西鶴は、軈てかうした初心らしい態度をすてゝ、誇りと自信とに充ちた飛躍へと驀地に進んで行つたのであつた。

第二節　談林派に於ける西鶴の位置

日向で居眠りをしてゐるやうな貞門古風の平板と單調とを嫌つて、俳諧の世界に革命の大旋風を捲起さうとした談林派の人々は、所謂新形式と新言詞と新思想とを振翳して縱横無盡に暴れ廻つた。松山玖也が「師の俳諧は自由をもとゝして天地にかゝづらふことなし」（俳諧鹽打山）と云ひ、岡西惟中は「用附もテニヲハも指合も去嫌も總て顧るに足らず」（俳諧蒙求）と主張した彼等の俳諧は、よく云へば自由奔放、惡く云へば放埒出鱈目の限を盡したものであつた。がその談林の句風が西鶴に幸ひした。彼の豐富な才氣と富膽な稟質とはその自由無拘束の世界で伸びるだけ伸びた。修行時代に早くも最初の古風的教養を脱して、然もその脱脚の經路に於て談林派發展の經路と殆ど似たり寄つたりの道を辿つた彼は、さうした彼自身の內部的必然と時代的風潮との故に、談林派の運動に參劃することになつてから、恐らく忽にして先輩や同輩を壓して頭角を現し始めたらしい。「大阪俳歌仙」に他の三十五俳人と共に選み出されたのを恐らくは最初の飛躍として、彼は加速度的に宗因歿後の談林派の柄をとるべき人としての彼自身を築き上げて行つた。云はゞ古風の埒內に跼蹐させ

るには餘りに豐かであつた彼の天稟は、奔放不羈な談林の時潮の中に、打つてつけな活躍の舞臺を見出したのであつた。彼の飛躍は實際素晴らしかつた。それでなくても彼にとつて記念すべき年であつた延寶元年に入門して來た椎木才麿は、後には彼と拮抗するに足る程の盛名と實力とを示した逸材であつた。延寶四五六の數年間にはあぶらの乘り切つた彼の編著が後から後からと公にされた。延寶七年には門人等との五百韻を堂々と上梓し得る程の高められた位置を俳壇に領した。「上々吉、清水の流れ上戸も下戸もなべてすくべき酒ぶり、諸國の人にいや〳〵いやとはいはせじ、あまうなりともからうなりともお相手になるべし、時に華は盛山は彌生の六日七日八日にすらりと此五百韻、千秋業には座を立萬歳樂にはちようちん釣鐘、夜更て歸るは俳諧師ぞかし」といふ有名な同書の序文には、早くも出來上つた大家らしい風格が感じられる。同年刊行の「兩吟千句」の跋文にも一層大家らしく收まつた落着とゆとりとが感じられ、同書青木友雲の序文には微かながらも俳壇の立て者としての西鶴を尊敬する氣持さへ視はれる。談林派を仇敵視した貞門者流も、かくては當

然西鶴の名前に、異常な關心を示さずにはゐられなかつた。「俳諧破邪顯正」の如き、直接彼を對象として著はされたものでは無かつたにも係らず、彼は其處で師翁と共にひどく捲添へ的な攻撃を受けなければならなかつた。然もかうして彼を攻撃した隨流さへ、「當時宗因流をまなぶ弟子數多ある中に、殊更すぐれて相見へしは江戸は不知大阪に阿蘭陀西鶴」と、彼の技倆を認めなければならなかつた。自他共に談林派の重鎭を以て目した西鶴の相が髣髴される。初心らしい謙遜は既に失つて、渾熟した人格の謙處さにはまだ入り得なかつた西鶴は、恐らくかなり得意であつたらうと思ふ。

然もかうした得意さは、矢數俳諧創始者としての彼自身の矜持によつて、一層煽り立てられた。

初花の口拍子きけ大句數(大句數)

一世を驚倒させた彼の矢數俳諧興行は、底を洗へば只の口拍子、張り扇を振廻はして修羅場を語る講釋師の藝ほどの藝術味にさへ乏しいものであつたのであるから、

流石に宗因の如きはその早業に眩惑されては了はなかつた。却つて白く冷い眼で見てゐたらしいことは、「仙臺大矢數」の跋に於ける西鶴自身の文章を通しても感じられる。其處に宗因の附け燒刄でなかつた藝術觀の深さと確さとが感じられるが、無自覺だつた當時の俗衆乃至一般の俳人にとつては、夫は只々驚嘆をのみ値する神技であつたのである。

天下に二つ也富士は雪大句數　賀子

句每の花誰か讃さらん天下藝　自次

彼が四千句大矢數俳諧興行の折、諸國の俳人其他が三日も前から花筵や毛氈を抱へて生玉の寺内に集り、庫裏方丈客殿廊下に溢れて見物したといふやうな事實も、素より實際にあり得たことであつたらう。「口まねをする人もありそ海の濱の眞砂の數」と彼自身「大句數」の序文に云つてゐる通り、彼の後を追うて奔るエピゴーネンの數も少くはなかつたかも知れない。さういふ人々の中には、近年執行もなき作者世間の聞えばかりにて無用の達者だて、連座には親類初心の輩を集め、日を重ねて即座の作

にもてなし、又は句毎を後日に緩直して、大神の日をぬく事もつたいなし、人麿の白眼給ふもおそろし（二大矢數）といふ西鶴の罵倒に相當するやうなまやかしものも無いことは無かつたであらう。「仙臺大矢數」の跋に罵られた月松軒紀子の如き、或は實際にさうしたまやかしものゝ一人であつたのかも知れない。大淀三千風の三千句を壯として之に跋文を送つた西鶴を思ひ、更に理由もないのにヒステリカルな漫罵を敢てするやうな性格の彼でなかつたことを思へば、確に紀子の千八百句には何處か曖昧な點があつたのであらう。兎に角かういふ人などが現れたことによつて、西鶴の矢數俳諧興行が時代に與へたセンセーションが、如何に大きなものであつたか想像される。從つて彼がこれらの矢數俳諧興行に氣を負うて、或は四千翁を以て名とし、或は二萬翁乃至二萬堂と誇稱したといふのも、そこに滿々たる稚氣は感じられるにしても、一面當然な得意さなのであつたと思ふ。それでなくてさへ檀林派の俳諧師として眼につき易かつたに相違ない彼は、此の矢數俳諧の創始者兼隨一人者としてよりコンスピキユアスな、より闘將的な彼自身を、俳壇の眞つ只中に現前させたので

あつた。夫は無論談林派の勢力擴張に預つて力あつたに相違なかつた。後の俳人百家選の著者がかの二萬句興行を讃稱して賞翫して門下に入るもの多しと云つてゐるのは、軈てすべての矢數俳諧興行に當てはまるものであつたらう。此の意味で彼の矢數俳諧興行は、旣に屢々行はれてゐる通り、貞門古風者流の攻擊と挑戰とに對する應戰であつた。然も、彼等の敎養と論理的思索の不十分さとの故に、例へば岡西惟中などの貞門者流の理論的攻擊に對する同じく理論的な反駁の、却て蕪雜と支離滅裂とに墮して常に敵派に壓され勝ちであつた上に、徒に談林派の弱點を强調して馬脚を現すやうな結果に陷つたのに比して、彼のこの應戰はづつと効果的であつたその絢爛であり奔放であつたことが旣に俗衆を牽引する上に非常の强みであつたのみならず、其處には流石に古風俳諧には見られない才氣と機智とが躍つてゐた。魅力と蠱惑と新鮮さとが漲つてゐた。人々が爭つて之に惹きつけられたことは素より想像するに難くない。談林派の重鎭乃至闘將としての西鶴の名は、かくて非常に重いものになつて來る。自ら當代より後世にかけて、檀林派の重鎭が云はれる時

に、並稱される者は時に才磨であり高政であり惟中であり由平であるにしても、まづ擧げられる隨一人者は西鶴であつたのである。されぱこそ一陽井素外は、彼を呼ぶに檀林二祖の名を以てしたのであつた。

それは素より相應しい稱呼であつたに相違ない。が考へやうに依つてはそれさへ彼と談林派との關係を云ひ盡すことにはならなかつた。

人も知る談林の開祖西山宗因は、不思議にも自ら談林の始宗を以ては居らなかつた。と云つて無論その「十百韻」に「談林の木あり梅の花」の一吟を掲げた頃には、彼に新風提唱の意識が無かつたとは云はれない。が事實上彼の提唱した新風が意外の發展と徹底とを示して、末流者流の放埒となり出鱈目となるに及んで、彼は急に俳諧に面をそむけた。「俳諧綾巻」の誌す所によれば、彼は「人俳諧の事を問へば、連歌をこそ專一とすれ俳諧は知らず、唯當座の云捨なれば出るまゝに」と云つてゐたといふ。岡西惟中の「破邪顯正返答書」にも、「是程俳諧盛なれども、何集と名付けて一集の建立もなく、何の書とて一巻の物を開板せず、多くの俳諧の發句も、自ら書留めも置かせられず」と

傳へられてゐる。惟中の言葉は素より多少の云過ぎをも含んでゐると思はれるけれども、兎に角かうして俳諧に面をそむけた宗因は、貞門者流の攻撃に對しても、口を緘して何事も云はなかつた。自ら提示した新風に關しても殆ど何等の主張をも示さなかつた。夫によつて談林提唱者としての彼の位置が無論ぐらつくものでは無かつたけれども、然も此の如く自ら俳諧師を以て居らず、新風の提唱者たる名を避けようとする所には、自らその新風の提唱に對して、心中幾分の疑惑と逡巡とが抱かれてゐたものであることが示されてゐるのでなければなるまい。檀林派なるものが、所謂謎と文字理とを作句の主要動機とした古風涅寛の難を救はうとして生れたものである以上、夫は云はゞ一種の藝術革命でなければならなかつた。又夫は確に革命的なものではあつた。弄語其他の言語上觀念上の遊戲の代りに、ユウモラスな物の觀方を尙んだ。所謂謎と文字理との代りに、意味合ひの上の飄逸さを取入れた。生温く窮屈だつた俳諧の世界に、所謂新思想と新言詞と新形式とを取入れて奔放と潑剌の氣を漲らした。夫は確に革命的であつた。が惜しいことに最後の、從つて最

も重大な一點に於て、革命としての完成を缺いた。何故と云つて、貞門の俳諧は一口に云へば主知的だつた。觀念又は思惟を母胎とする頭の藝だつた。それに對する正しい革命として起つた文藝なら、談林派は當然心の藝術でなければならなかつた。古風の概念と思惟とは夫々新しき直覺と感情とに置換へられなければならなかつた。が既に長谷川零餘子氏も云つてゐられたやうに、談林派の俳人も遂に直覺と感情との世界に切込むことは出來なかつた。彼等の態度はその根本に於て貞門者流と同じく主知的乃至觀念的だつた。たゞ知識的にのみ貞門者流の知らなかつた新らしい材料を摸索し來つて、これを新しい形式に表現せんとのみ努めた。同一の材料をでも深く掘下げることによつて其處に新味と新趣とを見出さうとするのではなく、只管異つた世界と珍しい色彩とのみを追うて横に擴つて行かうとするやうな氣運も、自ら釀成された。芭蕉の所謂「人の案じぬ處を致さんとて心のかよひなき事」に迄も行過ぎた。「破邪顯正」が「隨分新しからんと、五文字より發句に作る時、かならず實事古風にきこゆる故、無理に五もしを七もし八もしにいひのべ……異形異類にして

新事前代未聞」と罵つたやうな强ひて作られた異形の何も生れた。かういふ態度が續けられる以上、新は直ちに舊となり、奇は聽て凡と化して、期年ならずして行詰るか、或は放埒無拘束收集すべからざるに至るかは、素より自然の數である。談林派も亦此の當然過る程當然な筋路を辿らねばならなかつた。夫は無論藝術革命の正道ではなかつた。寧ろ芭蕉によつて完成された革命の露拂ひとして、將に亡びんとする舊時代に對する不滿はありながら、新しく行くべき道を發見するだけの智慧と自覺とを有たなかつた群衆が、半ば暗中模索的に試みに妄動に過ぎなかつた。從つてさういふ妄動の先登に立つことに疑惑と逡巡とを感ずるのは、多少なりとも眼醒めた心にとつては寧ろ止むを得ないことであつた。寧ろさういふ疑惑と逡巡とを通して、丁度かの矢數俳諧興行の放れ業にも眩惑されなかつた彼に想察されたと同樣な、文藝に對する自覺といふに近い感情が、彼宗因のうちにあつたことが想像される。彼は確に或る程度迄藝術を藝術として意識してゐたのに相違ない。

がたゞ新風の提唱といふ方面から云へば、彼のさうした態度のうちには無論幾分

の不徹底さが含まれてゐた。その不徹底さを嫌つて、自ら新風の陣頭に立つ者として の自覺の下に、談林の旗幟を鮮明にしたものが、即ち西鶴と惣本寺高政とであつたのである。宗因には恐らく或る種の羞しさと迷惑さとを感じさせたものであつたに相違ない紅毛流とか俳諧の切仕丹とかいふ敵派の嘲笑をも、彼等は寧ろ誇りと滿足とを以て受取つた。高政は自ら守武流の惣本寺を以て居ると共に伴傳連社と號した。西鶴に至つてはかの「三鐵輪」に「阿蘭陀流といへる俳諧は、其姿すくれてけたかく、心ふかく詞新しく」と誇りかに云つてゐるのみか、「こと問はん阿蘭陀廣き都鳥」の一吟に却て貞門保守者流を笑殺しようとする意氣を示したのであつた。其處に彼の無反省な態度かあると共に、一面單に二祖を以て呼ばるべき以上の關係が、彼と談林派俳諧との間に存在したことが知られなければならない。彼は此の意氣込みを無論敵派の攻擊によつて一層煽られたものであつたに相違ない。强く激し易かつた彼が、高飛車な、然も相當條理の整つた古風者流の攻擊に煽られて、逆に敵派を壓倒すべく、その些か非常識的な主張に徹底して行つたといふことは、實際あり得べきこと

であつた。と思ふと彼が談林派にとつては或る意味では寧ろ宗因よりも深く記憶さるべき人であつたのではないかと思はれるのである。と同時に彼が西翁より放埓拔群に勝れた俳諧の作者であつたことも、さういふ態度の必然の結果として、素より當然であつたと思はれる。のみならずその放埓拔群であつた時代こそ、俳諧師としての彼が最も氣を負うてゐた、云はゞ最も得意の時代であつたことが云へるのだと思ふ。

第三節　得意時代に於ける彼の俳諧の特質

一　人事趣味と詩的情趣

西鶴の得意時代の俳諧を云ふ者は、誰でもまづ其處に漲る人事趣味を擧げる。人事趣味は云はゞ此の時代に於ける彼の俳諧の主調であつた。

一體俳諧に於ける人事趣味は既に遠く貞德門下に萠したものであつたが、それが宗因によつて一歩を進められ、古典趣味の束縛より完全に脫して、自由に坊間の社界

より材料を捉へ來つて、人情の秘奥を穿つに至つたのであつた。古傳統をのみ崇拜する古風屑々者流が只管嘲罵を事とするのをも知らぬ顏に、談林派の人々は彼等の新しく開拓した此の世界に邁二無二突貫した。島原の風俗も遊廓揚屋の情趣も芝居歌舞伎の情調も、其他世の中のありとあらゆる現象が、かくて彼等の製作の材料となり主題となつた。然も、さうした人事趣味横溢の俳壇にあつて、殊に濃厚强烈にさうした趣味と色彩とを盛り込んだものが即ち西鶴の俳諧であつたのである。これは無論彼の生活の故であつた。田山花袋氏も云つてゐられたやうに、彼は人間世相に浸りきつた男であつた。

　東風かぜの福原の家は格別ぢや
　　給分やすくと半季ゐて見よ（大矢數）

昔の都福原に於ける恐らくは綺羅を盡した邸宅をも、彼は一期半季の奉公人の心を以て眺めずにはゐられなかつたのである。

　まつすぐな道でひらふな落文

後家の噂は世の中の月
奉公人渡りくらぶる根性骨
　太刀造り江にはなさぬ具足〔大句數〕

彼の世相への沈潜の程度が覗はれると思ふ。無論、客觀に沈潜するによつて其處に人生の眞理と世相の眞實とを探らうといふやうな、そんな自覺は彼には無かつた。只彼は性格的に人生の觀照家であつた。踊る代りに眺める側の人であつた。さういふ素質とその素質を生かすに足る強い性格と鋭い目とを以て、彼は出來るだけ細かく深く世相に觸れて行つた。さうして摑み得た現實其物の相を端的にその作品に再現したのであつた。彼の俳諧が人事趣味によつて貫かれた所以である。と同時に、同じ理由の故に彼の人事趣味句には説明がなかつた。抽象的な思惟の影が無かつた。すべてが現實から掬ひ上げられて來たまゝの具體性を有つてゐた。相當限深く食込んだ古風俳諧の影響から遂に完全には脱けきれなかつた彼である以上、その得意時代の俳諧にも無論觀念的な句がないことはなかつた。

花は苦み嫁は子のない詠哉(大句數)

雲の峯や山見ぬ國の拾ひ物(兩吟一日千句)

けれども人事世相を詠む時に限つて、彼は不思議にさういふ觀念的な態度に陥つて行かなかつた。「雲の峯」の句に感じられるやうな實感の概念化にさへ墮しなかつた其處に彼の人事趣味句の强みがあつた。他の談林派諸俳人の人事趣味句が兎もすると陥りたがつた抽象と說明とに、彼の句は殆ど常に遠ざかつてゐたのである。自ら彼の句は鮮明であり印象的であつた。

盗人と思ひながらもそら寢入

親子の中へあしをさしこみ

胸の火やすこし心を置こたつ

揚屋ながらにはしめての春

なんと亭主替つた戀はござらぬか

きのふもたはけが死んだと申(大句數)

彼はかういふ印象的具體的な筆編を以て、人事世相に絡る悲喜哀歡のさま〴〵を自由自在に詠ひこなした。その自由な活動のうちに、彼に最も缺けてゐたと云はれる詩人的な稟質さへ、或る程度迄は發揮されたのであつた。

浮世かなひとり娘をもてあまし

思ひと苦とを作る繪草子(大句數)

といふ一聯などをとつてみても、想の人事的物語的であるうちに、かなり複雜な詩的情趣が湛へられてゐるではないか。

うつ砧かけてきくらんだて小袖

ふるさとさびし若女方(同前)

むます女の子を思ふ道に笳一つ

古鄉の文のたまる紙屑(物種集)

等にも、切々たる詩的哀音がないとは云はれない。況して、

やとかへやすめば都の町はづれ

こしはりにする公卿衆の文（大阪獨吟集）

といふやうな世界になると、現代の作家久保田萬太郎氏あたりにでも喜ばれさうな纖細味と、細々とした感情のゆらぎとが感じられる。近松秋江氏は後年の浮世草子に就て場末町などの淋しい空氣の描寫を激賞したが、夫は既にかうして彼の俳諧のうちにも正しく見出されるものであつたのである。彼も亦かういふ淋しい詩美と、ひいては

有合に膾一つの冬籠
　竹の切よにさくやこのはな（大句數）

といふやうな閑寂趣味にも、全然無關心ではゐられない男であつたのである。彼も亦決して詩人的素質を缺いた男ではなかつたと思ふ。

あたら日を松は暮れゆく櫻かな（西鶴句集）
春遲し山田につゞく莢はやし　（同）
五月雨や淀の小橋の水行燈　（同）

等の句が果して彼の句であつたとすれば、夫は愈々疑へないことになつて來る。只前にも云つた通り西鶴句集中の句は、今遽にその全部を西鶴作と確信することは出來ないけれども、少くとも

行秋や道せばからぬ一里塚(大句數)

とめ山の檜原の奥によきの音(同)

秋淋し寺と宇治とのその間(西鶴五百韻)

等、その句格さへ別にすれば、寧ろ蕉門の發句と云つても疑ふ者のなさゝうな句を、その連句中の隨所にものしてゐる西鶴であつてみれば、さういふ發句の可能も決して信ぜられぬものではない。晩年の、彼の句境が相當の溫藉味に入り得た頃には無論のこと、得意時代の最も蕪雜奔放を極めた作句のうちにさへ、彼のさうした稟質は、必ずしも壓し潰されてはゐなかつたのであつた。

けれども西鶴はさういふ彼自身の稟質に對する正しい理解と評價とを有たなかつた。「行秋や道せばからぬ一里塚」そんなすぐれた詩境を捉へながら、彼はその境地

を薮履の如くに振りすてゝ

三人ならびに先手の者とも

縮緬のうら吹かへす長羽織

氣遣しやるな脈がなほつた」

と續けて行かなければ氣が濟まなかつた。其處に彼の詩だけの世界には安往してゐられない傾向があつた。詩に觸れ得ても、更に夫を乘超えて、人間世相の複雜さに味到しようとする傾向があつた。自ら彼の詩人的禀質は正しい成長と發展とを遂げなかつた。彼の俳諧はたゞ雜然たる人事趣味によつてのみプリドミネートされるやうな形にもなつたのであつた。彼は其處で詩としての俳諧の世界を忘れて、たゞ人間世相の種々相を露骨端的に表現しようとのみ努めた。云はゞ彼は此時既に俳諧師ならぬ俳諧師であつたのだと思ふ。

がそれは兎に角、彼の人事趣味句には、流石に後年の好色本作者らしく、遊里生活と世相に絡る Amorous affair とを主題とするものが多かつた。

新枕知音のゆかり尋ねそめ
　尤今宵は鼻であしらふ」（大句數）
大臣か大の眼に角をいれ
　來る筈しつてどこへかしたぞ」（大矢數）
半櫃を明てくやしき是は扨
　かたられて呼ぶ緣の道也」（三鐵輪）
食ひ口をひとりへさうかひつし米
　いづれの秋にとりつき世帶」（大句數）
こまかにも見え渡るかな鰯菜
　鋸屑も手間賃の内」（大句數）

さういふものゝ中には、此處に例示するのを憚らなければならないやうな猥雜なものも決して少くはなかつた。と同時に、

等、後の町人物に示されたのと全然同じい人間生活の機微を穿つた句も極めて多い。

さうしたものゝ中には、かうした奇警微妙な觀察も隨所に閃いてゐる。自由な心と何等のポーズをも含まない態度とを以て、町人生活の種々相に眺め入つてゐた西鶴の相が、後の浮世草子作者時代をまつ迄もなく、旣に此處に正確に感じられる。之に反して武家生活に對しては、此處でも矢張り後の武家物に示されたやうな一種の理想化的觀察が行はれてゐた。

兵は胴骨すべてすえにけり

ちつともこぼさぬ天目の水（大矢數）

たゞ町人世相のうちに融込んでゐた浪人などの生活に就ては、矢張り鋭く面白い觀察が觀じられる。前に揭げた「太刀造り江にはなさぬ具足」の一句などを見てもそれは知られよう。彼が町人世相のうちに生きた男であつたことが、此處にも反映されてゐるのだと思ふ。

二　可笑し味

「虎溪の橋」の發句に江雲は「醉の色や是三人の笑ひ草」といふ一句を揭げた。同書の

由来を說いた「名殘の友」の卷五「一色足らぬ一卷」にも「往宿松意西鶴、是はとゞ三人笑ひ始めて一日のうちに終り、花なき櫻木にちりばめける」と書かれてゐる。彼等の俳諧を以て遊戲と觀ずる氣持は、談林派の諸俳人にとつて通有のものであつた。比較的正しい藝術觀をもつてゐた宗因さへ、さういふ傾向には決して風馬牛ではなかつた。無論彼の笑ひは單なる好笑として片附けて了ふことが出來る程單純なものではなかつたけれども、その單純でなかつた氣持のうちに、空と呆けて笑はうとする態度が含まれてゐなかつたとは云はれない。況して無自覺だつた他の談林派諸俳人の如き、時に全然さうした好笑の世界にのみ沒頭してゐるかの態をさへ示した。文藝は無論その一面に於て娛樂としての側面をもつてゐるものであり、殊に俳諧に於ける可笑し味は重大な要素の一つとなつてゐるものであるけれども、彼等は云はゞ少しばかり其の方面に耽り過ぎた。「遊戲を第一として………わるしやれにしやれたる輕石の如し」といふ「破邪顯正」の非難も、決して的を外れたものとは云へなかつた。

かふいふ談林派俳人の一人として、西鶴にも無論さういふ一面があつた。「其日數

百人の連衆耳をつぶして是をきゝ給へり。皆大笑ひの種なるべし………難波の長橋世を渡る慰ぞかし」（大句數）と云つてゐる彼の俳諧にも、素よりさういふ遊戲的態度から出發して惡ふざけに墮した句も少くなかつた。と云ふより却てさういふ所にも彼の俳諧の特徴の一つがあつた。何事にも徹しなければ氣の濟まなかつた彼は、こんな不必要な方面にも、矢張り儕輩を壓して一頭地を拔くといふ所まで深入りしなければゐられなかつたのである。有名な「松に藤蛸木に登る風情あり」を初めとして、

乾坤の箱をあけては何もなし

馬鹿つくされし親の跡取（大矢數）

長寢して朝日將軍奢也

浮世の費食がさむるに」（同）

等さういふ方面の作句例は極めて多い。が、かうした種類のものを無論結構とは云はれない。流石に一種の才氣と、思ひ切つた出鱈目さ――それを機智と云へば機智とも云へる――に伴ふ一種の快感とが感じられはするけれども、これでは餘りに溫

籍な味ひを缺いてゐる。「ないかないか都の春に道具市」三鐵輪などゝいふやうな、意外な事物と意外な觀念との結びつきに、込み上げるやうな笑ひを感じさせようとする滑稽なども、素より大した價値を感じさせることは出來ない。

けれども、一度さういふものゝ世界を去つて、

名木の枏にすみ縄打たれたり
　隱居せうならかゝる夕暮
淋しさも薄鍋一つたのしみて
　むかし遣ひし錢ようでゐる（大矢數）

といふやうな世界に入ると、一種穩かな微笑を感じさせずには置かない。一望閑寂の世界に「艶隱者」流の隱遁者を點出して、然も卒然としてその老人に昔遣つた錢を算へさせる。云はゞ人間性の底に横はる一種の矛盾を描き出して、其處に滲み出すやうに滑稽の感を湛へようとするのである。

給草紙も下りを請けて送狀

といふやうなものになれば、同じく滑稽といふうちにも、ペーソスといふに似た一脈の哀感が漂うてゐる。涙を含んだ笑ひ　一寸そんな感じである。夫は無論出鱈目の悪ふざけとは違ふ。其處には背景がある。大きな人生の裏打がある。放縱であり無自覺であつたにしても、兎に角鋭い眼をもつた人生の觀照家であつた彼は、其處に起伏する諸々の現象のうちに、泣きたいやうな笑ひや笑ひたいやうな涙の樣々を見出したであらう。さういふ人生の相をしつくりと嚙みしめた後の西鶴は、軈て後の浮世草子作者として現前した。その時代程の徹底は無かつたとしても、然も俳諧師としての彼も亦さういふ人生の味ひに無關心ではゐられなかつたのである。さうしてその關心が自ら彼の俳諧にも現れたのである。可笑し味が單なる滑稽の域を脫して、所謂ユウモアに迄昂揚されて來たのである。私は此處らに西鶴の可笑し味の最も上乘なるものを見出す。

が、然し西鶴の可笑し味のよさはさういふ點にのみ限られてゐたのではなかつた。

戀衣上にもめんの袖はえて
　我通ひ路やほこりたつらん」(大句數)

一子寒し親孝行の袖の月
　どこにあらうぞ雪の笋」(同)

等に示された可笑し味は、無論一脈前者と相通ずるものではあるけれども、然も人生の觀照家としての深さを示すより以上に、彼の性格の強さと鋭さとを語るものでなければならない。忍ぶ戀の情趣も親孝行の苦衷も、彼を夢見心地や感傷に誘ふことは出來なかつた。感傷や陶醉に蕩かされることのなかつた彼の強い性格と鋭い眼とは、如何に激情的な事件や情景にぶつかつても、決して狼狽や昂奮に陷ることがなかつた。常に穩かに澄んだ眼光を以て、さういふ事件や情景の隅から隅まで眺めさせた。昂奮や熱情的行動をも傍觀し得る人のみが見出し得る可笑し味が、これらの句に溢れてゐるではないか。

釋迦既に人にすぐれて肥えられて

嵯峨の駕籠かきましやとるらん（大句數）

子曰く三人よればなぐさみ事（西鶴五百韻）

等の句になると、彼のさうした强さは愈々目立つて來る。釋迦も孔子も、彼のやうな强い性格の持主に對しては、何等の權威をも以て臨むことは出來なかつたのである。尤も當時の人として、かういふ强さの現れは特に西鶴にのみ見られることでは無かつた。夫は一つには時代であつた。すべての人間が徹底的に强くなつた――少くとも强くなつたかのやうに、何ものゝ權威をも怖れずに狂奔した元祿といふ時代の相であつた。一切の古傳統と習慣とを踏破つた談林派俳諧が提唱されて、夫が日ならずして一世を風靡した所にも、さういふ時代相は明に反映されてゐる。從つて西鶴に限らず當時の談林派諸俳人の作には隨所にさういふ强さの現れが認められた。宗因の「浮き沈む平家は夢に等しくて跡白浪となりし幽靈」又は「よろ〳〵と立ちて小町が舞の袖袴の裾にけつまづきぬる」といふやうな句に現れた可笑し味なども、無論一面さうした强さに由來してゐた。が、宗因は云はず、他の談林派の人々の場合

にあつては、彼等の可笑し味は多く單なる諧謔であり茶化しである以上の感じを出すことが出來なかつたのに對して、西鶴のものは一種深刻な、然も冷索に堕せざる温みを含んで、如何にも穩かな微笑乃至は自然の笑ひとして感じられるのが特質である。云はゞ他の人々のは餘りに度強い。餘りに哄笑を強ひる。附け燒刄だからである。ありもしない强さを自ら有りと觀じての妄動だからである。西鶴にはその强がりが無かつた。自ら欺く不聰明な嘘が無かつた。だから讀過して自然の感じがあつたのである。あつと驚かされるのでなく、自然に惹入れられるやうな微笑を感じさせられるのである。驚くべき彼の性格の强さを思はせられると共に、彼の可笑し味に一種の嬉しさを感じさせられると思ふ。

三　人生觀の片鱗

古傳統を破壞し、在來の教權に反抗するのを目的としたかの如き談林派は、一面世の中の一切を茶化してゐるやうに思はれた。神も佛も法も道も、すべてが彼等の惡ふざけの對象であり、皮肉や穿ちの的であつた。其處に彼等が只徒らな可笑し味の

みを追求する集團であるかに思はれる危險があつた。が少くとも宗因其他或る程度迄の深みに味到し得た幾人かの可笑し味には、決して單なる好笑の氣持をのみ云ふべきではなかつた。彼等の可笑し味には朧ろ氣ながら一種の人生觀の裏打があつた。「世の中や蝶々とまれかくもあれ」といふ宗因の有句な句などにも端的に示されてゐる、一種何とも云へず果敢なくて、然もその果敢なさを笑つて暮さうとするやうな氣持が藏されてゐる。束の間の人の世は果敢ない、が其の果敢ない人生を笑つて暮すのも惡くはないな、といふやうな、一種投げやりな東洋的な明るさに、如何にも日本人らしく手弱い、が味ひの深い明るさを着せかけた想念が、其處に感じられる。それは過去の日本人、殊に俳人には、宗鑑以來非常に珍重された氣持であつた。宗因はその氣持に住した。自ら彼の感懷には一種の餘裕があつた。暗さの底の明るさといふやうな微妙な味ひがあつた。さうして彼の可笑し味はその味ひに絡んでゐた。從つて彼の笑ひは前にも一寸云つた通り決して單純ではなかつた。單なる好笑といふには少しばかり複雜な色調をもつてゐた。その色調が彼及び彼の主宰す

る談林派の俳諧に特異な調子を帶びさせた。と同時に夫がまた當時の時代思潮であつた。「人生は無常だ、だから遊ばう」旣に屢々繰返した通り、元祿時代の人々はさう考へた。「人生は果敢ない、だから面白可笑しく暮さう」といふのが彼等の處生の態度であつた。さう云ふ時代的雰圍氣の裡に住む談林派の人々は、宗因の心境の深さに共感するだけの心の鍛練を缺いたもの迄も、結果的には宗因の思想の現れと相似た笑ひの影を追及した。その揚句、底のない惡洒落が談林派末流の俳諧について廻つて遂に夫が談林調の基調を形造るに至つたのであつた。然しそれが談林派俳諧の全部では無論なかつた。惡洒落以上、道化以上に脱け出して、宗因と同じい思想の深みに住し得た人々もないことはなかつた。一般には一代の驕兒とのみ目され易い西鶴の如きも、亦さういふ人々のうちの一人であつたのである。

白玉も龜も思へば人たらし

何の萬年生きる世の中」(大矢數)

世界皆一度は消ゆる雪佛

有にもないにも風の行末（同）

彼も亦人生無常の想念に住した。然も彼にはさうした根本の想念を忘れて、此世の狂歌と亂舞とに醉ふことは出來なかつた。却つて彼の鋭い眼はさうした狂歡亂舞の裡にも果敢なさをのみ感じた。

鑓鉋劍の山を見るからに
此世は纔の二尺六寸
夢しや物まくら屛風に花咲いて
飛て胡蝶の曲乘かる業（同前）

彼には世の人々のすべての營みが、只夢に生き夢を追うて走るものの相としか見えなかつたのである。

飛胡蝶露の命を晝休み　江雲
夢といふ字を手習ふ子供　西鶴（虎溪の橋）

悲哀に充ちた想念である。が、さういふ觀察にも「五體五倫皆かり物の浮世町」（仙臺大

矢數跋「世のならひ死ぬが損とも思はれず」(大句數)等の句に現れた感慨にも、涙つぽい感傷の影は殆どない。同じやうな心境から生れた宗因の「御合點か世は松竹の一さかり」といふ句などに見られるやうな強調の感じもない。寧ろ一種の調和といふに近い氣持が感じられる。人生を果敢ないまゝに肯定して其處に安住する氣持、その氣持が更に一歩を進めた時、果敢なさと賴りなさとのうちに、一種の味ひと面白味とを感じようとする。

つる持鍋や冬籠る宿

潰しめと人にいはれて娛しめる」(大矢數)

といふ一聯などにも、さういふ彼の對現實の積極的な氣持が感じられる。如何に根深く人生虛無の思想が彼を動かしても、夫によつて人生百般の事象を厭離する氣持には彼はなれなかつた。芭蕉のやうな閑寂枯淡の生活に浸りきることも出來なかつた。彼も亦宗因と共に「夢の浮世ならそれを夢の浮世として暮すのも面白いではないか」と觀じたのである。然も宗因にはさうした人生觀が結局「御合點か」と斷らな

ければならないものであつた。徹することが淺かつた。從つて彼は何うかすると眞正面からその觀念に執着した。結果、彼の人生觀にはまだ幾分かの角があつた。彼の笑ひには醇化しきれた輕みが無かつた。「よろ／＼と立ちて小町が舞の袖、袴の裾にけつまづきぬる」。何處かに强ひて力むだ形がある。强ひて力むで笑はうとするのである。西鶴には夫が無かつた。彼は人生無常の想念其物にさへ執着しなかつた。その想念を乘越へて、その想念の彼岸に展開される現實世相其物を、靜かに味ひ娛しんでゐるのである。六十年の生涯を閱して、遂に愚な我と悟りながら、所詮はその愚さ以外に我無きを觀じて、我が愚さを慈しんだあの一茶の心持を、對現實の想念の裡に示したものが、卽ち西鶴であつたのである。所詮は果敢ない人生でも、その人生以外に住むべき所を有たない人間であることを知つた西鶴は、其の果敢なさの裡に起伏する色とり／＼の出來事を娛しまうとしたのである。

衆道歌道佛法僧の音に鳴いて
戀みな覺て捨たらば闇（同前）

といふ一聯には、さういふ西鶴の氣持が最も端的に表はれる。たは云はゞ色氣を卒業したものが、なほ色の世界を美しいと觀ずるのと等しい氣持である。其處に西鶴の眞當の傾向が感じられる。夫は當時の人々が懐いた反動的な傾向と一見相似たものゝやうでゐて、實は非常に違つてゐる。前者には執着が全部であり後者には脫脚がある。其處には沈湎するものと離れて眺めるものとの相違がある。自ら前者の對人生の態度には捨鉢があり焦燥があるのに、後者のそれには只寛大な抱擁と靜かな微笑とがあるのみである。此の抱擁と微笑とが、軈て西鶴の全生涯の作品に示された味ひの骨髓であつたと思ふ。

が然し俳諧師としての得意時代に於ける西鶴が、さういふ深い心境に徹してゐたとは云へなかつた。其處には只さういふ深い氣持の露頭だけが、僅かに閃き出してゐるのに過ぎなかつた。が、さういふ微な露頭にも、浮世草子作者としての時代を經て、軈てあの辭世の句に示されたやうな謙虚さに入つて行くべき彼であつたことの暗示は得られると思ふ。彼の晩年の心境は此の意味で決して晩年に至つて卒然

として生れ出たものではなかつたのである。

四　表現上の技巧と連想の妙味

豊かな感覺と鋭い觀照とによつて掬ひ上げた人間生活の諸斷面を、其儘彼の俳諧に再現した西鶴は、例へば自らそれと意識はしなかつたとしても、藝術家としての彼自身のもつ稟質に深く悖んだ。それだけ外部的な技巧や表現には苦勞しなかつた。一體檀林派は一見甚だ無頓着な蕪雜と亂調とに墮したやうでゐて、實はかなり表現上の苦勞をしてゐる。新しからんとして無理に五文字を七文字八文字に云ひ延べるのも、けうこつ氣なることのみ云ひ散らすのも、すべてが彼等の苦心であつた。謠曲の詞章や古來の詩文を其儘借りるのも、無論彼等の技巧であつた。一時芭蕉さへかなり好んだ拮屈として彈みのつけられた口調などの如き、彼等の苦心の結晶であつた。從つて彼等の俳諧が晦澁であり難解であればある程、或は亂調放埒であればある程、其處に慘憺たる彼等の苦心が示されてゐることになる。一刀三拜といふ、あれとは全然違つた意味の、焦燥と昂奮とに彩られた苦心が語られてゐることにな

るのである。彼等の歩いた道が正しき藝術革命への白道でなかつた故に、談林派の人々はさうした焦燥的苦心に疲れなければならなかつたのである。談林派の一人として、西鶴も亦當然さうした苦心に風馬牛ではゐられなかつた。彼も亦謠曲や狂言の詞章を借りて來た。古事や成語による知的な表現を喜びもした。

「おもんみれば山のあなたの泉涌寺

　爰に中比帝の御廟」（大句數）

どう忘れ春の嘶に罷出て

　此あたりに住無調法もの」（同）

けれども捉へ得た世相の眞實を傳へんが爲に、直接その世相に附屬した廓言葉や一般の俗語俗諺などを無雜作に使用したもの丶數に比すれば、夫等は量に於てずつと少い。宗因にあつては「里人の渡り候か橋の霜」と凝つて表現しなければ氣の濟まなかつたのと殆ど相似た狀景をも、よしんば發句と平句との差別はあるにしても、更に角「あしがたみやれ霜の肥」（大句數）といふ直截な表現で濟まして置くことが、彼には出

來たのである。その爲に、彼は知的な材料の羅列を好んだ談林派俳人の或る者などから、時に教養の不足を嗤はれさへした。がそれは彼の教養の不足に由來したよりも、寧ろ態度に原因をもつてゐたのではなかつたかと思ふ。作つてさうした知的な句が作れない程、教養のない西鶴ではなかつたのであるから。

兎まれ西鶴はその直截な態度の故に、實感を概念化することなく端的に表現することが出來た。何等の制約にも累はされなかつた彼の稟質は、その作品のうちにあらゆる斷面を盡して發揮された。其處に彼の俳諧の新鮮さと複雜さとスケールの大きさとが生れた。只其の大きさと複雜さとには締りが無かつた。得意時代の彼がまだ「沈潛と工夫とを意圖しなかつたが故に、溫籍の滋味が無かつた。滋味や底光など無論味へなかつた。と同時に、同じ理由の爲に彼の格調が亂雜にされた。表現に凝らないといふことは、何うかすると表現を選まぬといふ弊に墮する。西鶴は其の弊に陷つたのである。

三つかしら鶉鳴也くわ〱くわい〱（虎溪の橋）

惜しみなれて梢の月や二度びくり(兩吟一日千句)
咄の種花ぞ昔の會魯里が居は(大句數)

發句に於て既に之である。況してその連句——附句をや。其處には謠曲の詞章への關心もある。古風以外の格調への努力もないことはない。が要するに蕉雜亂調所謂放將拔群の非難もあり得た譯だと思ふ。

けれどもさういふ亂調であり出鱈目であるうちにも、自ら一種の整つた格調が感じられる。何處となくリズミカルな音調上の統整がある。津田左右吉氏は宗因の句風を論じて音樂的なリズムを云はれたが、それと、リズムの内容は異るにもせよ、多少類似した階音的な響が、西鶴の俳諧にも含まれてゐるのである。

たゞの時もよし野は夢の櫻哉(俳諧師手鑑)
百姓に下刈をさす千年山
涼しき風の通る牛馬
休ましやれ清水流るゝ此所

西行法師油單おろして
名山を墨繪にさつと書かれたり
瀟湘の夜烏の羽箒」(大句數)

「葛の葉の落つるがうらみ夜の霜」といひ、「おことこそ風狂亂の姥櫻」といふ宗因の句に比して、リズムとして多少重くもあり崩れてもゐるけれども、矢張りそれなりに渾然たる音調上の統整が含まれてゐるではないか。第一それを讀過してみて、些も苦澁と凝滯との感が起らない。表現に滓がないのである。だから亂雜ではあり放縱ではあつても、彼の句には友雪や祚宿の連句などに間々見かけられるやうな、つぎはぎの跡の著しいものは殆どない。と共に「散らすなやい無間の鐘で暮の花」といふ友雪の句の初五のやうな、無理に格調に彈みをつけようとして異形に陷つてゐるやうな句も、西鶴には少い。彼の表現はも少し卒直自然である。意識して異形の句を作らうとするやうな努力は彼には殆ど見られない。彼の句が蕪雜であり、又屢々異形に墮してはゐても、それは決して友雪等の場合の如く意識的な態度が齎らしたもので

はなく、何處までも感懷夫自身の相貌であつたのである。從つて「破邪顯正」の筆法で行けば、友雪等の如きは西鶴よりも荒れ廻ることが甚しかつたのである。然もその荒れ廻る舞臺が狹かつたのである。自ら其處には西鶴には無かつた無理やぎごちなさが目立つ。これは一面彼等のリズムの相違から來たものであらうけれども、他面西鶴の知識の豐富さと、從つて連想の奔放自在さと、その奔放自在な連想を生かすに足るべき語彙と詞藻との豐富さとを示すものでなければならない。實際惠まれた男であつたと思ふ。殊に端睨すべからざる連想の多端さに至つては驚くの他はない。後の浮世草子作者としての最大の缺點として現れた、富贍な連想を打つて渾然たる一丸となすべき統覺的思考力の不足が、まだ表面に出てゐなかつた俳諧師時代の彼に對しては、殊に此感が深い。のみならず、既にその奔放多端であつたゞけで彼の俳諧に特異な圓轉滑脫さと複雜さとを齎した彼の連想が、時に意表外な、然も意表外な故に何とも云へぬ面白味を感じさせる發展を示して、彼の作品に捨難い味ひを附與してゐるに至つては、益々彼の連想の價値を思はせられる。

のり鍋や衞士の燒火のもえぬらん
禁裡の庭に蠅の一むら（大阪獨吟集）

といふ一聯に示された連想の如き、殊に上乘なるものである。其處には所謂奇想天外といふ言葉に纎巧さを加味したやうな味ひが感じられる。上品な可笑し味としても、奇警な觀察としても、西鶴作中特に推奬して憚らぬものであらうと思ふ。

五　矢數俳諧の價値と彼の附句法

才人は由來才に躓く。西鶴はその餘りに豐富な天分を賴り過ぎた。自ら彼には沈潜と努力と工夫とが足りなかつた。豐な才が厚みと深さとによつて光輝を增すといふ時が、俳諧師としての彼には遂に來なかつた。此點で彼も亦過渡期の子であつた。談林派は絢爛と豐富さとを誇るだけで、底光のする不易の醍醐境への沈潜は遂に蕉門俳人の手に殘された、その過渡期的潮流の外に逸脫することは、彼にも出來なかつた。彼の俳諧は賑かであり多角的であるだけで、遂に淺かつた。さび、しほり、ほそみ、匂ひ——彼はそんな味ひのことをなど見向きもしないで、只奔放と暢達との

みを旨とした。他の談林派諸俳人の如く強ひて新しからんとする焦燥も無かつた代りに深く徹しようとする爲の苦吟も無かつた。「夫俳諧は其折を得て花の夕雪の朝に替りて景氣に心をよすることそほいなれ、涼み床に枕を傾け、さし鯖を賣こゑよりはや元日の發句をおもひよる人、是俳諧のわづらひ也」「大矢數」といふ彼の言葉は、詩人として一面正しい覺悟であつたと共に、他面彼の沈潜への輕蔑を正直に示してゐる。かういふ彼が「よき句は求て得るものにあらず、自然に得るもの也。しかれば口にまかせて言出す迄にて、稽古修業は無益なるべき也」と云つて蕉門の去來に輕蔑されたといふ「芭蕉談」後篇の記述も、實際あり得べきことであつた。彼はただ易々と吟詠し得る自分にのみ滿腔の得意を感じた。學習時代にかなり眞摯な研鑽的態度と推敲とを示した彼は、此處に至つて確に一個の驕兒といふに近い面貌を現したのである。彼がさういふ態度の直接の延長線上に立つて遂に輕口と早業とを誇るに至つたのも、誠に當然の發展であつたと思ふ。

彼は云ふ迄もなく矢數俳諧の創始者であり、又その道の達者であつた。それは無

論彼にとつての誇りであつた。がその誇り――早業と輕口とに於てこそ、彼は最も手痛く滑つた。「大句數」の序文を見るといい。いゝ心持に滑つてゐる彼の氣持と、安易な作句の態度とがよく覗はれるから。然も彼が此の千六百句を誇つた頃には、なほ「二千二百句迄もなる人はなるべし」と云つてゐたのに、其後紀子の千八百句、さては三千風の三千句などに刺戟されて、四千句興行を敢行し、更に二萬三千五百句を吟ずるといふに至つて、出た所勝負の彼の態度は一層募らされたに相違ない。「大矢數」は「大句數」よりも更に亂れた散文調のものであつた。夫から推して二萬三千五百句は、更に俳諧として、詩としての價値に乏しいものであつたに相違ないと思ふ。彼は恐らく決して褒むべきものでは無かつた彼の態度の最後の到達點を、其處に示してゐたに相違ない。

彼が矢數俳諧の創始者乃至達者として一世を驚倒せしめたことは、素より平凡者流の企てゝ遠く及ぶ所ではなかつた。一日一夜に二萬三千五百句の早業は、寧ろ超人間的な神技といふべきであつたかも知れない。が、文藝といふ立場から云へば、夫

は始ど何等の價値もないものであつた。寧ろ西鶴の俳諧の致命的な缺陷は、その只管に神速をのみ誇らうとする所に生れたと云つてもよかつた。されぱこそ幾分の正しい藝術意識をもつてゐたらしい宗因が、上述の如くそれを讃嘆しなかつたのみならず、あの亂雑放肆な俳諧の主張者岡西一時軒さへ「近年俳道の盛なるに任せて、千句萬句など名付け、早口の俳諧を好む事、誠に何の味もなき事也。句は沈思して一句にても心をとめて仕出すこそ面白けれ」(近來俳諧風躰抄)と之を罵倒してゐるのである。が然しそれにしても驚くべき彼の早業が何うして可能であつたのであらうか。

蕉門の夫の如く一句一句に沈潜と熟慮との限りを盡して組上げられた俳諧では無かつたにもせよ、談林派の連句も矢張り一句一句にひねつてひねつてひねり拔くのをその根本義とした。「破邪顯正」の作者が「かれらの當風とて異樣にいひなす心根をたづぬるに……何も「ふし有て前句へ心をめぐらし二重三重に意味をあまし聞所多し」と云つてゐるのでも夫は知られよう。西鶴自身も無論さういふ言葉に相當するやうな附句を尚んだ。「前句點難波土産」に於ける彼が「宵には泣いて笑ふあけほの」

といふ句に對する「あれが親聟女を殺して銀をとり」の附句を「掛乞に内儀斷りいひ仕舞ひ」其他の附句よりも高く評價して「親の因果子に報て亂氣になれる付寄に聞え候是當流の俳諧也」と激賞してゐる所などにも、さういふ附け方を尙んだ西鶴であることは確實に知り得られる。とすると彼自身はその矢數俳諧をも、さうした複雜な附け味をもつ連句として仕立て上げたのであらうか。さういふ態度で一日一夜に二萬三千五百句迄作り得たのであらうか。此點では彼は彼自身其の主張を裏切つてゐた。一句一句に深い沈潛と拘泥とをもたなかつた彼の俳諧は寧ろ彼自身の主張とは反對に、例へば前掲「掛乞に」の句が前句より直接に連想される、それに似た附け方に、より多く傾いてゐた。比較的初期の「大阪獨吟集」などはまだしも、「大句數」「大矢數」の時代に於ては、句より句への轉向に深い含蓄と複雜な飛躍とを含んでゐるものは寧ろ非常に少なかつた。云はゞ彼の俳諧は觀念の轉向より寧ろその發展を主調としてゐる場合の方がづつと多かつた。屈折よりも進展に重きを置かれてゐる場合が多かつた。されぱこそ彼には人間放れのした早業も可能だつたのである。或は彼

が餘りに神速を尙ぶが故に、巧緻であるべき餘裕を失つて、描速曝露に墮したものといふ方がいゝかも知れない。兎に角かういふ附け方の故に、彼の連句は、一句一句としては兎に角、大體の附け味に於ては理解し易いものが多いと思ふ。たゞ其處に現れた元祿世相の餘りに複雜多端な描叙が、時に讀者を面食はせる。彼の俳諧に難解の節があつても、夫は俳諧としての分り難さではなくて、元祿時代の風俗習慣言語世相などへの無理解が生む分り難さなのである。「大矢數」の跋に、拔脫こゝろ行の付かたとて其座に一人も聞えず、我計うなづきて一句〳〵に講釋、大笑ひより外なし」と、獨斷に墮した時人の俳諧を嘲つた西鶴自身の俳諧は、寧ろ一本調子の分りいゝものであつた。一本筋の連想が盡きる所を知らないやうに脈々と繋つて行く、といふ種類のものであつた。

かういふ特質に配するに前述の人事趣味と表現上の無頓着さとを以てしたのであるから、彼の俳諧は俳諧といふより寧ろ一種の物語り的な調子によつて貫かれた。

心中をたてりと思へば笑しい迄

夜前も門で聞てゐました
西へ行顔こそ知らね廓公
雲晴れねども即心成佛
やれ急げ一味の雨が降りさうな
近付あらば借うかさ寺（大矢數）
讀過して何となく世話淨瑠璃の道行をでも聞いてゐるやうな感じが起るではないか。淨瑠璃作者としての彼の修辭法なども想像される。
なりふりのあの御所染はいらぬもの
髪をきつてもどこやらはまだ
厄病の業は殘らせ給ひけり
頼りすくなき四十二の厄（同前）
といふやうなものになると、一層散文に近い。此處まで來ては西鶴が詩としての俳諧に對する正しい自覺を欠いてゐたことを思はせられずにはゐない。と同時に彼

のやうな傾向の持主が、その製作慾の飽滿を、屯に角詩としての制約をもつ俳諧に求めたのが間違つてゐたのであることが思はれる。所詮彼は詩だけの世界に生き得る男では無かつた。夫は俱に俳諧師としての彼が彼自身の詩人的稟質を寧ろ無視して顧みなかつた所に、雄辯に語られてゐたことであつた。夫を彼が早くから意識しなかつたのは、矢張り彼が深く反省し思念する側の人でなかつたことに原因してゐるのだと思ふけれども、然もかうして彼としては寧ろ間違つた路に入つて來ながら、其處に存する規矩と制約とに縛られずに、徹底的自由の活動を續けたが故に、彼の稟質は決して萎縮することなく、却て伸びるだけ伸びて行つた。結果は彼自身俳諧の世界に滿足しきれなくなつて、廣く新しい他の活動の舞臺へと逸脫して行つた。さうして其處に俳諧師としてよりももつと一義的な、もつと意義のある所産の數々を遺して行つたのであつてみれば、彼の俳諧師時代は決して單なる道草とのみは云はれなかつたし、彼の俳諧が放埒拔群であり蕪雜亂調であつたのも決して悔を以てのみ眺めらるべきではなかつたのであると思ふ。寧ろさうした非俳諧的俳諧に耽

りながら、俳壇の中央に呼號し得た彼の天分に、私は敬意を感じたいと思ふ。

第四節　浮世草子作者への過渡と晩年の俳諧

一切の傳統と古き型とを輕蔑して、己がじゝなる自由さと新しさとを誇らうとした談林派の傾向は西鶴に幸した。彼は上述の如く凝滯無碍に俳壇を濶歩した。が然し例の「大阪獨吟集」の時代にあつては、所謂西鶴調の奔放さも、まだ必ずしも愼しやかさを失つてはゐなかつた。一年後の「俳諧師手鑑」にまだ眞摯な俳道研究者としての俤を偲ばせた彼は、其處では流石に一句一句の連續なり、切離された一句としての形の上なりにも、まだ相當の注意を拂つてゐた。さういふ愼しやかさが失はれ始めたのは云ふ迄もなく「大句數」からであつた。「大句數」まで來た時の彼には些の狐疑も逡巡もなかつた。彼は只眞つ直に前にのみ進んだ。さうして「仙臺大矢數跋」「三鐵輪」等、等を經て、延寶八年の「大矢數」に達した。其處では前にも云つたやうに、附句に就ての吟味も、連句としての觀念の轉向をはかる爲の努力も、一句一句の彫琢も、殆ど認め

られなかつた。夫だけに氣を負うた彼の得意さが其處に反映されてゐると思ふ。或は一歩を進めてそれが俳諧師としての得意時代の頂點を示してゐるのではないかと思ふ。興行の席に連つた役人にしても、指合見の遠舟來山由平以下、大阪談林の精を盡してゐるのみか、彼の矢數俳諧には大して好意をよせてゐなかつた宗因さへ、その第一「荷秦平」の第三として「郭公八わりましの名を上て」といふ儀禮の一句を與へてゐる。彼が得意を滿喫して「大矢數」の跋に示されたやうな氣焔をあげたのも、無理のないことであつたと思ふ。その得意さの上に立つて、その當座を

江戸の樣子皆までおしやるな山は雪(江戸大阪通し馬)

不便や櫻とつて押へて版木摺(太夫櫻)

といふやうな、所謂いゝ心持さうな句作に耽つてゐた氣持も肯かれる。二萬句興行は無論興行夫自身としては此の四千句興行よりづつとコンスピキュアスなものであり、從つて一層西鶴の名を大ならしめたものであつたには相違ないけれども、然も其處には何うかすると興行者自身の心内に爆裂する製作衝動の凄じさと、從つて激し

い意氣込みとが感じられない。夫は云ふ迄もなく宗因歿後に生じた談林派の頽勢を支へんが爲に張られた軍陣の華々しさであつた。宗因の死は無論談林派にとつて大きな打擊であつた。まだ熄まなかつた貞門との攻爭其他の點で、夫は或は談林派にとつての重大な危機であつたかも知れない。宗因歿後の柄を執るべき西鶴はかくて當然彼自身の肩にふりかゝつた責任を感じずにはゐられなかつたであらうその責任が彼を驅つて一時閃發的な活動に誘致した。彼は一方に於て「俳諧本式精進膾」に、師翁を追懷すると共に談林派を統率して他派に備へようとする氣組を示した他方再び談林派の闘士らしい華々しさを以て、其の二萬句興行を敢行したのであつた。然も當時の西鶴の心境から推して、其處には幾分周圍の事情に强ひられた形が無かつたかと思はれる。從つて席に連つた役人は四千句興行の夫に劣らない顏觸であつたにしても、遠近の來り見るものは堵の如くであつたにしても、更に賞翫して門下となるものゝ數を知らなかつたとしても、然も西鶴をして有頂天な得意さを滿喫させはしなかつたのではないかと思ふのである。此の意味で私は前の四千句大

矢數を俳諧師としての西鶴が得意時代の頂點を劃するものと觀じ、それと相前後して世に問はれた「太夫櫻」や「通し馬」中の吟詠を、その頂點期に於ける彼の作句例と觀じたいのである。夫等は無論さうした觀察を可能にするだけの、極端な暢達さと奔放さとを示してゐた。寧ろ「太夫櫻」の一吟の如き、奔放さが一歩滑つて亂雜に墮しかゝつてゐる思ふ。得意を滿喫した所に生じた墮落への一轉歩、夫が其處に示されてゐると思ふ。

が、さういふ境地から更に轉落への道を辿ることは、流石に西鶴自身の裡の藝術家が許さなかつた。俳諧であり末流であつた談林派俳人の多くが、只管勢ひを追うて放縱と出鱈目とに墮して行つた中に、寧ろ不思議にも彼は立止つた。佇立して沈思する――そんな意識は無論彼にも無かつたらう。たゞ本能的に危險と陷穽とを豫知して身を飜へしたのかも知れない。或は一面彼のうちに培はれて來た大家らしい風格と落着きとが、闘將的な激しさと元氣任せの態度とに對して、或る矛盾を感じ始めたのかも知れない。兎に角彼はこの「太夫櫻」あたりを頂點として幾分かその方

向を轉換して來た。彼は夫迄の半生の誇でもあり特色でもあつた多作と亂吟とから、漸く遠ざかつて行つた。蒐集がまだ不十分なのであることは云ふ迄もないけれども、兎に角此頃以後彼の作句として今日に傳へられてゐるものは割に少い。然もその量に於て少い彼の作句が質に於ては幾分の精練が加へられてゐるのである。

水の江や吉野見に行く櫻海苔（家土產）

鯛は花は見ぬ里もありけふの月（句兄弟）

濱荻や當風こもる女文字（溫故集）

第一句は云ふ迄もなく此期の代表作である。第三句は「水滸傳」に「中頃園女が許に宿りて」とあるのから、まだ晩年といふには早い頃の句であることが想像され、然も得意時代の句としては穩かさがあるために、恐らく此期のものであらうと思はれる。第二句が晩年でも得意時代でもない句格であることは一目瞭然であらう。とすれば之等の句が有つ彫琢と、得意時代の之に類する句などよりも一層優れた音調上の調整とに、此の時代の作者の心境が「太夫櫻」時代と比較してかなり變つて來てゐること

が推定されて差支へなからうと思ふのである。

所でかうした態度の變化を齎らした理由の一つとして、得意時代に入るに隨つて、俳諧が西鶴にとつて單なる且那藝に過ぎなかつた狀態から一轉して、彼の全身と全生命とを捧げ盡すべきものとなつて來たことを云はなければならない。俳諧が全生命を托すべきものとなつた時、西鶴は其處に絕對の飽滿を味ひ得たであらうか。彼のやうな人間にとつて、夫は素より望むべくもないことであつた。彼の俳諧が如何に自由であり散文的であつたにしても、所詮俳諧は俳諧であつた。俳諧としての約束と形式とを無視しきれるものではなかつた。自ら彼の內面に蟠る表白衝動全部を飽滿させ得る筈がなかつた。彼がその得意時代に於て只管奔放暢達のみを目がけて驀進したのも、一つにはさうした所に生ずる不滿の感に煽られてのことであつたのかも知れない。しかも彼が飛躍に飛躍を重ねてあの「大矢數」まで到達しても、恐らくその不滿は消去つて行かなかつたであらうと思ふ。其處に彼の思案が起らなければならなかつた。或は彼の滿たされぬ表白衝動が俳諧以外の何等かの形式

を求めて迸出なければならなかつた。結果は俳諧に隙のなき身ながら、時を得ては獨り私に過去の日の思ひ出や現在の空想などを、表白衝動の動くに任せてそこはかとなく書き誌すといふことになつた。其處に彼の浮世草子作者として現前すべき契機があつた。彼は云ふ迄もなく其處に彼の天分にとつてより相應しい活動の舞臺を見出した。彼はもう窮屈な制約の裡に跼蹐する必要はなかつた。有つてゐるだけのものを擅にぶちまけることが出來た。二十幾年かを俳諧師としての激動と奔走との中に過した彼は、かくて當然辿り着くべき世界に到達した譯であつた。夫は一面には俳諧に於ける放埓の賜物であつた。放埓であつたが故に彼の稟質の全部がぐん／＼と伸びた。さうしてその成長が頂點に達した時、自ら俳諧の形式には滿足しきれなくなつて、他の表現の形式にと就いたのであつた。其處迄來た時、彼の製作力の殆ど全部は當然その新しく發見された表現形式に注がれて、俳諧は彼にとつて單なる餘技に過ぎないものになつて了つたのである。從つて彼はもうその俳諧に强ひて無理な內容を盛込まうとはしなつた。云はゞ彼は俳諧を、正しく俳諧と、

詩と観することが出來るやうになつたのである。彼の俳諧に冗雜放埒の態が少くなつたも當然であつたと思ふ。

兎まれ西鶴は「大矢數」乃至「通し馬」や「大夫櫻」を境として彼の生涯に於ける最も大持な過渡期に入つた。其の過渡期を辿りつゝある間に師翁を失つて、一時昔の闘將振りに歸つたかのやうな二萬句興行の早業に誇りはしたけれども、夫は前にも云つた通り、半は談林派に於ける彼の位置に餘儀なくされた策動であつた。半ばゝ脫脚しきれない過去の延長であつた。從つて此期に於ける彼の心境を語るべきものとしては、夫は僅に消極的な意義しかもたないのであつた。寧ろ殆ど同時に世に問はれた「精進膾」の產出の方が、より注意さるべきものであつたと思ふ。彼は其處に俳道の規矩を說いた。夫は無論昔ながらの果敢な戰鬪的氣魄を示すものではなかつた。退いて自己の句境を吟味しようとするものゝ態度を示すものであつた。夫は或は談林派の總頭目としての責任感から、彼等の俳諧に存すべき規矩を說いて談林の句風を統一すると共に、その旗幟を出來るだけ鮮明にしようとする意圖の現れであつ

たのかも知れないが、理由は何であつたにもせよ、彼はかうして放埒奔放の多作速吟から、沈思して道を說く人へと移つて來たのである。彼の既に閱しつゝあつた過渡は當然加速度的にその推移を早められなければならなかつた。彼はその成立に於て非常な昂奮と激情とを含んだ「石車」に於てさへ、俳道の規矩を輕んじ得ない氣持を示す男にまで變つて來た。況して「西鶴織留」の卷三「藝者は人をそしりの種」などを見ると、規矩と修行と沈潛との前に、彼が完全に頭を下げてゐることが判然する。かういふ氣持は、既に前にも云つた通り、晚年に至つて不意に現れたものではなかつた。「大句數」や「大矢數」の時代に於てさへ、さうしたものへの暗示は感じられた。が例へば「此度萬事を改め、番付の懷紙文臺目付木左右の置物掟書等、あと望の方へ是を讓るべし」（大句數）といひ、或は「此後大矢數のぞみの人あらば此掟を守るべし」（大矢數）といふ文章に現れた氣持から見れば、より若かつた時代の西鶴は、規矩を規矩として重んじながら、然も自ら之を定めようとしてゐる。云はゞ自己が主であつて規矩が從であつたのが、晚年近くの氣持では殆ど常に規矩が自己の上に君臨してゐるのである。所

謂格に何處迄も恭順であらうとする氣持になつて來てゐるのである。彼の心境は、かうして適當な屈折と沈潜とを經て、當然辿り着くべき境地に辿り着いたものといふことが出來ようと思ふ。「濁り江の足洗ひけり都鳥」(團袋)の一吟は、さうした心境の推移を自ら意識した際の彼の感懐では無かつたであらうか。兎に角此句の收められてゐる「俳諧團袋」は、かうして到り得た西鶴の晩年の心境と、其處に完全に落着いた西鶴の氣持とを覗ふべく、極めて相應しいものであるやうに思はれる。格に從つて無理に力むまいとする氣持、從つて其處に生れる自然の落着きに住しようとする氣持が端的に覗はれる。「風呂敷に心をつゝむもむつかし云々」といふ同書に添へられた文章だけを見ても、それは肯かれる。昔の鋭さが底深くかくされて、其處では表に和やかさが靜に漂うてゐる。

が然し西鶴はまださういふ穩かさに徹し切つてはゐなかつた。「團袋」の出た翌年、可玖の「俳諧物見車」に、才麿梅盛惟中來山以下二十四人の點者と共に、點者としての批判のあらを書立てられた上に、「其俳見る事も世の費也」と罵倒された彼は、まだそれを

隱かな微笑を以て受取る心の餘裕をもたなかつた。彼は眞向から憤激して「石車」を著した。「物見車」の上梓に憤慨した團水が「特牛」を著して彼の辯護をしようとしたのにさへ、「所存の義有之候間、貴邊御答ねがはくばなくてありなん。こなたよりゆるゆる可申入候」と應へた程、餘裕のない憤りに捉へられた。それは彼の性格から云へば無論當然の憤激であつた。が若し彼が「團袋」に示されたやうな境地に徹してゐたら、あんなに迄角のある憤激に驅られはしなかつたであらう。老年期に兎もすると人を捉へる一徹さを考へるにしても、此憤りは確に彼がまだ本當に徹してゐなかつたことを語るものであらうと思ふ。

尤も「石車」は西鶴の名前で發表されたものではない。松魂軒といふ變な名前で發行されたもので、内容の形式も所謂合評といふものに似て、それ〴〵の點者達が樣々な意見を寄せた形になつてゐるが、不倒氏の說によれば、版下も挿畫も何れも西鶴の自筆で、彼の匿名著に相違ないといふ。其の内容から見ても特に西鶴を辯護するに急な形がある上に、前記團水への挨拶があつて、夫に相當すべき他の著述がないので

あつてみれば、その西鶴作であることは殆ど疑ふべき餘地が無さゝうである。
　とすれば、此の「石車」編者は、前の二萬句興行と共に、深く徹しようとして大きく揺れる魂の、反動の頂點を示すものであつたと思ふ。その反動的激動に對する彼の意識下の意識が、流石に剛情な西鶴にも多少のひけ目を感じさせて、或は匿名出版といふやうなことを敢てさせたのではないかと思ふと、一寸面白い氣がする。兎に角彼はこの「石車」の發行を俳諧師としての生涯に於ける最後の波瀾として、夫から以後は只ひたすらに平坦と順調との道を進んで、元祿六年の臨終に及んでゐる。其間――といふよりも、此の過渡期のはじめから、最後の安住境に徹する迄の間に於ける彼の俳諧は、そこに例へば「藤は暮れぬ女首筋黒くとも」(譲林一字幽蘭集)といふやうな昔ながらの奇怪な句も時に傳へられてゐるとしても、多くは俳諧らしい統一さを、さうして晩年に近づく程一種の落着きを、備へて來てゐる。此期のものとしては比較的初期に屬し、殊に四方郎朱拙が口を極めて罵つた「筆ふく人富士とは蕪る蓮かな」(俳諧伊勢堂)なども、優れた句ではない迄も、その格調と表現のスタイルとをさへ是認するとす

れば、發句としてそんなに迄非難さるべき性質のものではなかつたと思ふ。

梢の夏それ迄もなし春霞（伊駒堂）

梅に鶯代々の朝也夕飯也（同）

等の句にしても、その格調こそ談林調强調のグロテスクなものであるけれども、發句として、詩としての埒外に飛び出したものとは決して云はれない。少くとも

どやきけりきいて里しる八重霞（兩吟一日千句）

花が化て醜い人もさかりかな　（同）

其他、得意時代の發句の亂暴なものに比すれば、餘程俳諧らしい内容と表現とを有つてゐる。寧ろ之等の句に於て、例の椎本才麿や其の勃興當時に於ける蕉門の俳人等が好んで用ひたそれにも似た、一種變體的な表現に耽つた俳諧師西鶴の、云はゞ過渡期な工夫――眞面目な配慮と精進とが感じられる。

然もさうした變體的過渡期的な表現の世界をさへ、彼は「團袋」に於て乘り越えて、俳諧としての正しい形式に到達した。

濁江の足洗ひけり都鳥　　西鵬
　一盃まゐれ氷煮てざう　　團水
讀佗僧書は夜嵐にたゝまれて　　同
　商人の子よ世の中の月　　鵬
こゝろなく行は花野の小荷駄馬　　團
　大裏屋敷の殘る秋霜　　鵬

想形ともに靜かな落着きと所謂俳諧らしさとのうちに完全に入り得てゐる。

なまぐさき小家がちなる須磨あかし　　西鵬
　月に見とれてゐる人は誰　　團水
佛はしれぬ跡のみな白し　　鵬
　くゞる垣根によわる舜　　團
老ぬればつるべの繩をたぐり捨　　鵬
　呼にやるまの遅き錢立　　團

花鳥をひとり喰ての暮寂し　鵬

障子あくればつばなたんぽゝ　團

俳諧の天地を踏破つて荒れ廻つた昔の西鶴の俤は全然認められない。放埒亂調の名殘りもない。彼の沈潜は此處迄來たのである。此處迄來ては、蕉風に向んだわび の氣持にも近い。殊に「俤はしれぬ踊のみな白し」など、對象を鮮明に捉へ得て然も靜かに澄んでゐる。同じ半歌仙の第三「春になる世間の今朝は閑にて」なども、昔の彼には殆ど見られなかつたゆつたりした落着きを感じさせる。此處迄來た彼は昔ながらの人事趣味を詠うても、例へば「戀より起る寺のやさかし」（團袋）、「たまくらの夕女に女客」（同）

等、整うた格調に於てすることゝ、一脈の詩味への關心とを忘れてはゐないのである。況して此時以後の發句の多くは、

千羽雀柳に風の夕かな（四國猿）

枯野哉つばなの時の女客（俳諧渡し船）

香の風や古人かしこく梅の花　難波土奎」

等、何れも名吟を以て呼び得る程のものではないとしても、兎に角詩的の香味と句やかさとを備へてゐる。殊に「千羽雀」がいゝ。「枯野哉」に感じられる艶しく美しい詩的感觸も、後の「笠附高點俳諧塗笠」に埋れた「茶山花を旅人に見する伏見哉」といふ句のしつとりと落着いた味ひなどゝ共に、晩年の西鶴にとつて特に注意さるべきものであつた。「伏見」の句はその製作年代は不明だが、無論「團袋」以後でなければ求められない發句であると思ふ。

が然しかうした世界まで來た時、俳諧は西鶴にとつて餘技的なものであつた。從つて此期に於ける才後の俳諧は、何うかすると所謂趣味の境を出でなかつた。自ら其處には作者の第一義的な生命の燃燒の感じられない句が多かつた。深められた後の心境其物を裏打とした句は殆ど無かつた。辭世の句以外には、或は絶對にと云つた方がいゝかも知れない。と同時に、規矩を尙ぶ氣持に深入りした餘りに、何うかすると逆にその規矩に纏繫られて、多少窮屈になり過ぎた傾きもないことはな

かつた。前掲「團袋」中の連句を見ても、さういふことが多少は思はれよう。これは無論從來の自分の作を疑つて、古くから存在した俳道の規約と形式との意外にも相當高く評價されて然るべきものであることを知つた時の氣持の直接の現れであつたに相違ないが、其爲彼の俳諧が兎もすると單調と平板とに墮したことも爭へない。所詮彼は、所謂格を覺ると共に、格を離れることの出來ない俳諧師であつたのである永い蕩搖の時代を經て、かなりの落着きに迄入り得た俳諧師としての生涯に、豐な才分や天稟を語るものはあつても、遂に千古の名吟を以て呼び得るものが生れ出なかつた所以である。彼はその晩年に於て西鶴の名を改めて西鵬と名乘つた。所傳によれば、德川綱吉將軍となるに及んで女鶴姫の爲に鶴の字を諱まねばならなくなつたのであるといふ。が、その西鵬といふ名前が、元祿元年の「新可笑記」以來「團袋」「石車」等に見られるだけで、同五年には既に西鶴に還つてゐたりすることから、その改號の理由は一寸疑つてみたくなる。例へば當時の法令が所謂三日法度に類するものであつたとしても、事將軍家に關する以上、鶴姫が死んだのでもないとすると、容易に再

び西鶴に還つたことが說明出來なくなつて來るし、第一可笑しいのはかうして新しく選まれた名が、友人澤井梅朝の前名であつたらしいことである。或は西鶴が何の氣もなく改稱してから、後それに氣づいて再び其名を捨てたのであらうか。が、そんなことは何方にした所で無論大した問題ではない。」只西鵬と改名した彼が、其はゞ其の新しい名前によつて代表さるべき時代に於て、西鵬時代とは全然違つた心構へ然も何うかすれば千古の名吟をも吐き得る心構へに住しながら、遂に其名を強く印象づけるやうな凹作をしなかつたために、俳諧師西鵬の名は兎角影の薄いものとなつて、彼はたゞ西鶴時代の奔放さと華さとを以てのみ傳へられることになつたことを彼の爲にそれを惜しみたいと思ふのである。

第四章　浮世草子作者としての西鶴

第一節　浮世草子の先蹤と西鶴物の特質

内心に渦巻く表白の衝動全部を俳諧師としての製作活動によつて飽滿させることの出來なかつた西鶴が、徒然な日の夜晝を獨り私に文机に對つて樂しんだ自己表現――彼等の所謂轉合書は、意外な喝采を喚び起した。その喝采に動かされて、西鶴は新しく浮世草子作者として現前した。彼は引續いて幾種類かの浮世草子を公にした。近松との競爭に敗れて、淨瑠璃製作の筆を投じなければならなくなつたことも、一層彼を此の方面への努力に專念ならしめたかも知れない。彼は此處でかなり野心的な、然もかなりむきになつた精進の跡を示してゐる。

西鶴に其點への明確な意識があつたか否かは別として、浮世草子を今日より見て一口に云へば、世相を描き人間生活の諸體容を錄して、そこに讀物としての興味への

力點を打つことゝ、多少の小說的結構を設けることとを忘れなかつた一種の文藝作品であつた。從つて夫は日常の事件を錄した今日の所謂小說と一脈の相通ずるものであり、他面一種の新聞記事に類したものであつた。されば こそ水谷不倒氏も浮世草子は今日の繪入新聞の艶種であると云ひ、田山花袋氏は尾崎紅葉がその樣式を摸して昔の讀賣と二六とに特殊の記事を寄せたと云つてゐる。既にさういふ性質のものであつたが故に、浮世草子には自ら當時の生活相の樣々が取込まれた。さうして其の生活相は、勃興の機運に乘じた民衆の旺盛な活力と解放された情意の奔騰とに彩られて、時代の底深く這ふ虛無的人生觀を無理にも壓潰さうとした強調的な歡喜の情調によつて塗りつぶされたものであつた。人生は無常だ、だから遊ばう──深淵の縁にゐながら、強ひてその深淵には面をそむけて喜戲するものゝ狂歡亂舞も、心なくして眺めれば唯花に醉ひ酒に踊る愉悅の世相としか映らなかつたらう。其處に當時の所謂浮世の觀念が生れた。「うきに浮いて慰み、手まへのすり切も苦にならず、沈み入らぬ心だての水に流るゝ瓢簞の如くなる、これを浮世と名づくる」浮世

物語)といふ浮世である。さういふ浮世の種々相を再現し報導したものであるが故に浮世草子といふ。面白い名稱だと思ふ。

がそれよりも浮世草子は、さうして當時の世相を主題とするうちに、自ら町人生活の諸體容への濃厚な關心を示した。寧ろそれを主として描いた。其點で浮世草子は國文學史上に於ける劃期的な產物であつた。浮世草子の第一作「好色一代男」は、此の意味で我が文學史上特に注意さるべき作品であつたと思ふ。

けれども一つのエポックは無論一つの作品によつて卒然と劃されるものではない。「一代男」は無論劃期的な作品であつたけれども、然も何等の先蹤をも承け繼がずに、忽然と生れ出たものではなかつた。

文學はその寫實主義に屬すると否とに係らず、常に何等かの意味で時代を反映する。武家階級が頽癈と轉落とへの路を辿り初めて、世を動かす實力は町人階級に移つた元祿時代に、町人を主要人物とする浮世草子が生れたのは云ふ迄もなく必然であつたが、町人階級は素より其時不意に出現したのではなかつた。上古創世紀以來

かなり厳しい階級制度の下に苦惱と悲哀の生活を送つてゐた下層階級も、足利時代の末から戰國時代にかけての社會的紊亂の間に漸次社會の表面に浮び上つて、社會の隨所に彼等の影を落し初めた。と共に、無視され勝ちだつた彼等の生活も、當然文學內容の一部として取扱はれるに至つたのであつた。此期に濫觴を有する歌舞伎劇にも、俳諧にも、さういふ現象は認められた。物語草子の方面に、さういふ現れが現れずには無論濟まなかつた。其處には既に早く「仁勢物語」があつた。此の草子があつた。「可笑記」があつた。「誰が身の上」があつた。夫等は何れも當時の新興階級たる町人の生活と、その主題に於て、或はその世界に於て、多少の交捗をもつてゐた。が、それが更に一歩を進めて、「竹齋物語」となり「東海道名所記」となり「浮世物語」となるに及んでは、作品の世界も、其處に現れる主要人物も、何れも町人若しくは夫に近いものとなつて、此處に完全に後の所謂平民文學の曙光——浮世草子の先蹤としての形が顯然したのである。

のみならず之等の作品は、その形式に於ても亦浮世草子のそれを啓くべきもので

あつた。夫等の作品には、既に山口剛氏も云はれたやうに、云はゞ古書の現代化であつた。人口に膾炙した古書の形式を借りて、新しき内容を盛らんとしたものであつた。「仁勢物語」は云ふ迄もなく「伊勢物語」をもぢて作られた。「尤の草子」は「枕の草子」より脱化して來た。如儡子の「可笑記」や山岡元隣の「誰が身の上」は、前二者の如く全然古典の形式摸倣になるものとは云へない迄も、少くとも兩者の何れもが兼好法師の「徒然草」に或る暗示を受けてゐるものであることは疑へない。京では身過ぎの出來ぬ籔醫者竹齋が田舍へ下らうとして旅に發つ「竹齋物語」が、業平の東下りに負ふものであるのは云ふ迄もなく、旁々本文中にも「伊勢物語」の文章を殆ど其儘借用してゐる例も少くない。さうして此點では「東海道名所記」や「浮世物語」も似たものであつた。後者の書出しが、すべて「今は昔」の一句であるのなども、無論「伊勢物語」の「昔男ありけり」を連想させる。之等の書物は何れも例の談林派が、古語と成句を轉用しながら、其處にあらぬ觀念を含ませることによつて、意外の大笑ひを誘發しようとしたのと、全然同じい効果を覘つてゐたのである。古典尊重の時代から、平民文化謳歌の時代への過渡期

的現象としても、又は僅かに新時代の文藝のみを有する新時代が、新しき文藝を創造しようとしての惱みとしても、それは當然現るべき現象であつたと思ふ。從つてさうした過渡期的現象のうちに、漸次に古典への窮屈な拘泥を脱して、現實に即する度合が濃厚になつて來てゐる。其處に用ひられた文章や用語が、近代に變化して來たことなども素より云ふを要しまい。西鶴の浮世草子はかうして漸層的に發展して來た平民文學の傳統の前に、進一步したものに過ぎなかつたとも云へるのである。彼の處女作「一代男」が、一篇の綜合書として、隨筆的漫筆的なものである以上に、「源氏物語」の飜案に、「伊勢物語」の句を添へた苦心の作であることは、今日ではもう疑ふ人はあるまい。かういふ古典との關係は無論「一代男」にのみ限られたことではなかつた。彼の他の作品の何れをとつてみても、其處に「伊勢」乃至「徒然草」との多少の關係を見出し得ないものは殆ど無かつた。「俗つれ〴〵」の如き、或は西鶴の選んだ題號ではなかつたかも知れないけれども、然も其の題號を可能にする所にも、徒然草より受けた暗示の度合が考へられる。「新可笑記」の如きも、近く「可笑記」の後をおふものであると共

に、一節毎に「古代德ある人の云へり」、「古代賢き人の云へるは」といふ種類の書出しを用ひてゐる所に、「浮世物語」と同じい勢語模倣に陷つてゐることが考へられる。

更に「東海道名所記」や「竹齋物語」は、其の半ば旅行記的遍歴譚的な性質をも浮世草子に傳へた。「一代男」にも旅があつた。「懷硯」や「近代艶隱者」は完全な旅行記的組織を有つてゐた。「大下馬」を「諸國咄」「武道傳來記」を「諸國敵討」といふ所などにも、遍歴譚的な性質の幾分は殘つてゐると思ふ。とすれば諸國の遊女の噂乃至は諸國の珍らしい話柄を書き集めるといふ性質から、常に離れなかつた西鶴の浮世草子は、何れも多かれ少なかれさうした遍歴譚的な匂ひをもつてゐることか考へられる。云はゞ浮世草子は一面旅行記を先蹤として諸國咄に發展脫化して來たものであつた。

と同時に、さうした諸國咄的性質の必然として、浮世草子には一面怪譚系統の超自然力說話が多く含まれてゐた。さういふ說話は無論以上の諸作とは無關係に、かの淺井了意の「御伽婢子」に端を發する怪譚小說の流れを汲むものであつた。支那の「剪燈新話」を和樣に飜案して出版された「お伽婢子」は、その時以後の讀書圏に隨分大きな

影響を及ぼして、怪談系の百物語の流行などを招致した。西鶴の浮世草子に於ける超自然説は、此の「御伽婢子」に端を發する怪譚小說の傳統の前に一歩を進めた――少くとも一つの足迹を印づけたものであつたと思ふ。

超自然說話に於ける「御伽婢子」の如く、所謂好色本にも亦特殊な先蹤的作品の幾つかを數へることが出來る。好色本とは云ふ迄もなく當時の生慾生活者とその舞臺とを描いたものであつた。享樂と遊蕩とが軈て其處に語らるべき主なる題目であつた。「浮世物語」に所謂浮世が、浮いた浮いたの安逸と放縱との世界であつたといふ所にも明示されてゐる通り、同書及び同書以前の作品にも濃密な遊樂の氣分は漲つてゐた。其處から僅の一轉歩によつて好色本の世界に到達することも、必ずしも不可能ではなかつた。從つて「浮世物語」其他を好色本の先蹤と考へて考へられないことはないけれども、然も其處にはもつとづつと近い關係にある幾つかの作品があるのである。それはまづ第一に所謂遊女評判記乃至は役者評判記の形式を逐うたものであつた。從つてさういふものとしての或る完成を示した萬治三年の「吉原鑑」ま

では、少くともその濫觴を求めて遡らねばならない。さうしてその遡行の途上には畠山箕山の「色道大鑑」があり、「たきつけ」「もえくひ」「けしずみ」の三部作があり、更に西水庵無底居士の作といふ「浪花鉦」(好色罌粟鹿子又は諸分店颪)があり、傍流的には「錦木」其他の作品を數へることが出來るのである。或は艶書の贈答に擬して色の種々を描き(錦木)、時めく遊女や尼僧の名を借りて口說や手管の諸分、さては遊客の心得などを語らせ(浪花鉦、けしずみ)、遊客自身の口より遊里を云はせ(たきつけ)、更にそれを批判しもえくひ)、或は廓の風俗作法を紹介する(色道大鑑)これらの書物は、多かれ少なかれ好色本を生み出すべき機運の促進に與つて力あつたものに相違ない。殊に「浪花鉦」の如きは一時好色本との距離を沒却されて西鶴作かと疑はれた程のもの、一種の遊里案內として嫖客等に珍重されたのみか、後の浮世草子にも或る程度迄は確實に粉本とされたものであつた。新町の遊女高橋が田舍侍との粹不粹の爭ひから揚屋中の騷動を惹起した「身の代たかし」の一條から「一代男」の卷七「其姿は初むかし」に於ける島原の俠妓高橋の咄が生れてゐることの如き、恐らく周知の事實であらう。その咄の

結末に於て、不粹と見えた田舍侍が高橋の心意氣に感じて、また出直して通うて來ようと云つたりする邊りは、後の好色本に含まれた粹の氣持に、一脈の相通じたものさへ感じられる。其點では「たきつけ」以下の三部作は更に一歩を進めて、より粹に近似した好色生活の理想が隨所に揭げられてゐる。文章こそ「浪花鉦」より擬古的だが、その內容の細かさと鋭さとに至つては、寧ろ一歩を浮世草子に近づけてゐる。本書のもつ斷章的隨筆的な記述が一人の中心人物によつて具體化される——云ひ換へれば本書に於ける抽象的な談理が具體的な現實描寫となれば、それは完全に浮世草子と同じ性質、同じ世界を語るものになると思ふ。之等のものに比すれば「錦木」などの好色本との關係は幾分遠いものになり、殊に西鶴には直接の影響は比較的少いけれども、それさへ戀の種々相を傳へるものとして、一部の好色本作者例へば西村市郞右衞門などにはかなりの暗示を與へてゐる。「色道大鑑」に至つてはその、寬文格「寬文式」の記述其他が直接に西鶴を判衝して「一代男」を書かせる大きなの一動機つとなつてゐる。山口剛氏の如きは「一代男の成立」を考察して「彼(西鶴)の計劃は京を第一として

諸國の遊里の案内をなす事、なほ畠山箕山が「色道大鑑」程に詳細な記述もして見たく、その「寛文格程に廓の風俗を紹介し、寛文式程に廓の作法を敎へて見たかつたらう」と迄云つてゐられる。

かう考へて來てみると、單に好色本のみと云はず、西鶴の浮世草子を構成する諸要素は、旣に殆ど出揃つてゐたかの觀がある。云はゞ西鶴の浮世草子は之等の諸要素を打つて一丸となしたものであつたことになる。「一代男」はかくて生るべき當然の傳統を負うて生れ出たものであつたとも云へるのである。

が、さうした傳統の前に一步を進めた西鶴の飛躍は大きかつた。「一代男」は兎にも角にも一編の長編小說としての形を備へてゐた。浮世草子以前の作品が「伊勢物語」と「徒然草」とを摸倣して、一篇としてのプロットの稀薄な、隨筆的斷章的な小話の連續に過ぎなかつたのに對して、「源氏」を摸した之は、同じく隨筆的斷章的な小話の連續である中に、流石に首尾一貫した長編としての結構をもつてゐた。一代男世之介を主人公として彼が生涯の經歷を叙するに、遺傳的早熟兒としての幼少年時代、好色修行、

勘當、放浪、勘當赦免、遺產相續、大盡遊び、なほ充されぬものを追うての女護の島渡りと、妥當な主題の發展と筋の運びとが意圖されてゐる。其處に「一代男」の從來の作品よりの飛躍があつた。「竹齋物語」にも「浮世物語」にも一篇としての主人公がないことはなかつた。一篇としての纏りを覗つた痕跡がないことはなかつた。が、その纏りには餘りに妥當な發展が無視されてゐた。或は主人公は常に單なる各說話間の繫ぎに過ぎなかつた。云はゞ作としてのほんとの統一がなかつた。あつても外から强ひて加へた統一であつた。西鶴がよしんば其處に芽生へてゐたものを體得して進一歩したゞけのものであつたとしても、其處から「一代男」の纏りへの飛躍は大きなものであつたと思ふ。「一代男」を第一作とする他の浮世草子も、云ふ迄もなく「一代男」の所有した此の性質を領有してゐた。長編は長編なりに、短篇は又短篇として、一篇としての結構と布置とに、兎に角妥當な注意を拂はれてゐた。云はゞ浮世草子はそれ以前の作品に斷片的部分的に語られてゐた諸要素を集大成した上に、隨筆的漫錄以上の、かなり複雜な意圖と構成とを孕んで作り上げられたものであつたのである。

書き流されたものと作られたものとの相違――それが即ち西鶴の浮世草子とそれ以前の作品との間に存する貴重な限界線であつた。纒りの悪いものであつたとは云ふものゝ、兎に角淨瑠璃作者として、相當脚色上の苦心にも慣れて來た西鶴は、此の限界線を劃するに、必ずしも相應しくない作家ではなかつたと思ふ。

と共に、西鶴はその作品の世界を單なる抽象であり談理である以上に、それを世相のうちに眺めて、人生に起伏する諸々の具體的現象として取扱つた。浮世草子以前の作品が兎もすると陷りたがつた思惟や觀念の遊戲に耽る世界から高く逸脫して、彼は人生の裏打をもつた具體的記錄の樣々をものしたのである。浮世草子の從來の作品以上に評價さるべき性質といふのみならず、西鶴物の最も著しい、且つ意義深い特質は、云ふ迄もなく此點にあつた。此故にこそ彼の作品は單なる抽象的談理乃至は淺薄な概念に墮せずして、深く元祿世相の眞實を捉へ、更に時所を絕した人生の眞實に迄味到することが出來たのであつた。此處まで來ては彼の浮世草子は決して單なる「浮世物語」の繼承ではなかつた。「色道大鑑」や「浪花鉦」の集大成ではなかつた。

寧ろそれらの作品に現れた諸要素を二義以下の組成分子として、全然別個の一義的な價値を創造したことになる。彼の浮世草子殊にその第一作「一代男」が劃期的な作品と云はれる所以である。吾々は其處から單に西鶴の思想や觀念を傳へられるのみでなく、彼の對人生の感懷と思念の全部を、明確に掬ひ上げて來ることが出來る。多少は外部的な毀譽に動かされた形もあつたとは云へ、彼が浮世草子の製作に表白慾の飽滿を得て、また俳諧に熱しなかつたのも、かうした浮世草子の性質を思ふ時、當然の結果であつたことが考へられる。天和二年に「一代男」が上梓されてから元祿六年の最後迄僅かに十二年間、彼の浮世草子作者としての生涯は寧ろ比較的短かゝつたけれども、流石に彼も其の十二年間に全力を出しきつた。短い間には寧ろ驚くべき程の複雜な歩みを歩んだ。隨分巾廣く色々な方面に筆をつけもした。が、その多樣な作品を主題によつて大別すれば、まづ「一代男」以下の色の世界を描いた好色本と、「武道傳來記」以下の武士氣質を描いた武家物と、「永代藏」以下の金を主題とした町人物と「懷硯」「大下馬」等の諸國の異事奇聞を集めた雜話集とも云ふべきものとの四種類と、

他に過渡期的な作品其他の二三を數へることが出來る。私は次節以下にそれらの作品の一々を檢討すると共に、其間に示された作者の歩み――心境の推移と發展とを逐次に閲して行つてみたいと思ふ。

第二節　好色本

一　好色本の生れ出た必然

「一代男」は人も知る一代の好色男世之介を主人公として、縦に好色生活の歸趨を述べると共に、横に好色生活のあらゆる斷面を描き盡さうとしたものであつた。月には闇しても餘所には漏らさぬ徒然の日の轉合書と落月庵西吟が云つてゐる本書に於て、作者がかなり複雜な作家意識を示してゐることは、前節の考察によつて明かなことゝ思ふが、然も流石に讀者を豫想した跡は其處にはなかつた。作者轉合書らしい無邪氣さを其處に漲らした。作品としての構へられた作爲も、自ら樂しむ程度のもので、讀者を豫想して勘定を合せるといふ程、かつちりしたものではなかつた。何

處かにルーズさがあつた。けれども一度世に現はれると共に、同書は非常な喝采の渦を捲上らせた。大阪思案橋の書林荒砥屋から初版が出てから間もなく秋田屋版・大野木版と重版を重ねて、それから少し後の貞享四年には、遠い江戸にさへ所謂大津屋版の發行を見るに至つた。それによつても「一代男」が時代に與へたセンセーションの大きさを察知し得るが、この歡迎は、一つには其の作品の世界が、當時一般の讀書子にとつて完全に彼等自身の世界であつた所に由來したのであらう。「愛に遠慮す」とか、「愛に名をいふ迄もなし」などゝ作者が到る所に繰返してゐることによつても知られる通り、作者が實在の人物から多くのモデルを捉へて來た、そのモデルに關する興味も亦興つて力あつたであらう。他面同書の內容に於ける色々な斷面が、部分的に讀者の興味をそゝりもしたであらう。遊里生活の紹介を喜んだものもあらう。世之介の放縱な生活振りに共鳴を感じたものもあらう。或はその古典脫腳の技巧に知的共感を覺えたものもあらう。夫等色々な點への喝采が一つになつて「一代男」其物を稱へる聲となつたのであるに相違ない。兎に角此の意外な賞讃と喝采とが、

西鶴のうちに於ける浮世草子作者を覺醒させると共に、利に慧い商人達も無論彼に迫つて同種類のものゝ刊行を懇請したであらう。其處に俳諧に於けるよりも十分な表白慾の飽滿を味ひ得た西鶴は、かくて進んで第二の述作に取りかゝつた。「二代男」はかうして生れたのである。

「二代男」に於ける西鶴は、既に著作の對う側に、完全に讀者を豫想する作者となつてゐる。轉合書らしい、作者自ら娯しむ氣持は、其處では著しく稀薄になた。云はば世間を眼中に置いた浮世草子作者としての西鶴の態度は本書に於て確立したのである。「一代男」を世に問うてから「二代男」を發表する迄に、比較的長い間を過した彼は、聽て「二代男」以後には矢繼ぎ早やに多くの作品を示す作者となつたのであつた。

所で浮世草子作者としての西鶴の最初の活動圏は云ふ迄もなく好色本の世界であつた。彼は「一代男」と「二代男」とについで、同じ好色の文字を冠らした「一代女」と「五人女」とを物した。「色里三所世帶」と「好色盛衰記」とも亦彼の手になる好色本であつたらしい。觀方によつては「置土產」や「男色大鑑」も無論此中に數へられるものであつたし、

他にも「好色四季咄」其他彼の作かと疑はれてゐるものも一二にして止まらない。量から云つても極めて多いものであつたし、まだ比較的修練を積まなかつた時代の作品には、作者も例へば後の町人物に示されたやうな餘裕ある態度を持しきれずに、全力を出しきつた樣子を正直に示して了つてゐる。旁々主題の注目され易いものであつたなどの理由もあつて、善惡何れの方面からも、好色本は西鶴を代表するものと見做され易かつた。彼が色道の行者乃至わけの聖を以て呼ばれたのも、無論これらの好色本があつたゝめであつた。赤木桁平氏の如きは「ポルノグラフィを以て全西鶴を談ずるのは不當ではない」と迄極論された。が、それは素より全西鶴に對する認識不足がさせた暴論であると思ふが、それと反對に、好色本の作者であるが故に西鶴を輕蔑し擯斥しようとする議論の多かつたのも、私には贊成出來かねる。自ら「此道好き者の我」と云つた西鶴は、流石に此の好色本のうちに他人の追隨を許さない業績を遺して行つたのであるから。第一彼を單に好色本の作者であるが故に非難しようとするのは、その好色本の生れ出た時代的必然と、西鶴の性格的必然とに對する無

識を、自ら曝露するものではないかと思ふ。

既に前にも述べた通り、安土桃山時代以來伸びに伸びて來た國民の意氣と力は、元祿期に入つて飛躍と奔騰との極點に達した。殊に當時の新興階級たる町人の意氣は軒昂たるものであつた。彼等は自ら天下の町人を以て任じた。燃えたぎる血潮と覇氣と生命力とが、彼等の間に磅礴してゐた。のにも係らず、世の中はまだ階級制度の世の中であつた。彼等の上には尚ほ權力を壟斷した武士階級が嚴然として蟠居してゐた。社會的に意義ある事業の殆どすべては、彼等武士の手によつてのみ處理された。自ら町人は彼等の奔騰する生の力をその好む所に隨つて自由に伸びさせることが出來なかつた。堰かれて激した國民の意氣が、變則な豪俠傳奇の風尙に奔つたことは前にも云つたが、それさへ當路の壓迫を受けるに至つては、彼等の過剩な生活力は、たゞ强烈な刺戟を追うて奔る享樂生活に、人生の意義と慰安とを求めずにはゐられなかつた。と同時に、打續く泰平の餘澤に慣れた心の頽廢と、その新しき勃興によつて豊かにされた彼等の經濟生活とが、かうした時代の風尙を加速度的に

煽り立てた。自然にそむいた都會生活に慣れはじめた當代人の、趣味の世界と人工的な刺戟を欲求する情念も其處に加はつた。戰國時代以來國民の精神に浸潤して來た人生無常の想念に對する絕望的反抗的な享樂思想も、既に度々云つた通り、其間に微妙に融け込んでゐた。然も情意にのみ解放されて、まだ知識に解放されなかつた當代民衆は、さうした彼等自身の相に對する反省など、素よりもたう筈がなかつた。彼等は時代的不公平に對する反抗も批判もなく、たゞ許された範圍內に於ける潛上にのみ滿足した。寧ろ其處に他を凌ぐことにのみ絕對の滿足と誇りとを見出した。彼等はたゞ一向きに肉感性の享樂にのみ走つた。その風潮が更に當時の一代分限者、奈良茂といひ紀文といひ茨木屋幸齋といふやうな人々の豪華な享樂生活に煽られた。人々は只憑かれたもののやうに遊里と酒樓と劇場との間を彷徨した。爲に遊里の如きは前代未聞の殷盛を來した。色に生き色に死することが、軈て彼等の大願であり本望であつた。一代の觀照家として世相の底まで徹見した西鶴が、まづ人間の生活を支配するものとして、性慾を觀じ、色に絡る享樂生活の種々相に關心をも

つたのは、素より當然の結果であつた。

と同時に、西鶴が只管色道の隱微に筆をつけた結果、閨房の描寫を迄敢てするに至つたことに對する非難も、亦其儘には載きかねる。其處にも亦時代的必然と彼の性格的必然とが絡んでゐるのだから。水谷不倒氏は「列傳體小説史」に云つてゐる。元祿時代には人間が肌をぬいで往來を歩くのが日常のことであつた。從つて當時としては閨房の描寫なども、餘程家常茶飯事的なことであつたらうと。明治の初年にさへ、横濱に於ける勞働者等が、平然と裸體を露呈して外國人等を辟易させたものであるといふ。元祿時代とすれば、水谷氏の云はれる處も、必ずしも失當な想像とは云はれまいと思ふし又之を西鶴の性格から考へれば、何事にも徹する迄は無反省に突進して了はなければ氣の濟まなかつた彼の性格が、肉を描いては閨房に迄及ぶの徹底を闕しなければ、何うにも表白慾の飽滿が得られなかつたのであらうと思はれる。又聞きだから確にとは云へないけれども、兎に角芥川龍之介氏が「戀愛や性慾を徹底的に描かうとするには、筆、閨房に及ばなければ到底十二分の効果はあげ得ない」とい

ふやうなことを云はれたさうだが、それは確に肯ける。只さういふことは考へても、普通の人間にはそれを押し切ることが容易でない。それを西鶴の強い、向う不見な性格は、苦もなくやつてのけたのである。さうして恐らくは其故もあつて、彼の好色本はあれ程肉の眞實を盡し、性慾の眞諦を描破することが出來たのである。從つて私には往々にして云はれる、西鶴作中に於ける閨房描寫を全然除去し去つても、その作品としての價値に増減はないといふやうな意見に賛成出來ない。夫は西鶴の態度と傾向と意圖とを無視する者の言葉である。妥協であり弱さである。西鶴の閨房描寫はそんなに輕蔑されてゐゝ程無意義なものではなかつた。其處には往々にして徹底的觀照家としての西鶴の強さと鋭さとを、最も端的に示してゐるやうな現れさへ認められる。私は決して西鶴がふざけ半分にのみさういふ場面を描いてゐたのではなかつたと思ふ。第一彼の閨房描寫は、その作品の主題から云つて、當然あるべき所にあるべき形を以て素直に取扱はれてゐる點で、寧ろ近松の淨瑠璃などの、不必要とさへ思はれる邊に、如何にも看衆の前受けを覘つて書かれた肉慾描寫など

よりづつと不純な動機が少いと思ふ。只彼の作品が俑をなして、ほんとに卑猥な作品の數多くが生れて來たのは事實だが、それは云つて見ればさういふ作品の作者達の嗅覺の下等さを語るだけのもので、直接西鶴の關與すべき問題ではあるまい。返すくも過當に非難さるべき西鶴の閨房描寫ではなかつたと思ふ。

二 彼の描いた好色生活

「男色大鑑」の巻六「京へ見せいで殘りおほいもの」に、鈴木平八の舞臺姿に見惚れてゐた若い娘が、餘りに氣を詰めてゐた結果卒倒して了ふと、「此道すきものゝ我」と名乘る作者自身が飛び出して、何くれとなく其娘を介抱する一節がある。其處に所謂「すきもの」とは、必ずしも性慾追求にのみ熱心なのではなくて、却て戀の情趣と所謂色氣とを樂しまうとする人間でもあることが理解される譯だが、所謂好色の文字が意味する所も、所詮はさういふ人間の氣持である。西鶴はその好色本に於てさういふ人間氣持を描いた。果敢な性慾追求と、その性慾追求によつて釀し出される微妙な雰圍氣とを、縱横無盡に描破した。然もそれを描破するために、閨房の隱微に迄渉るこ

とを辭さなかつた彼は、流石に性慾に對する深い理解と、人間の好色生活に對する正しい洞見とを其處に示した。

田山花袋氏は云ふ「私は始めは西鶴よりもモウパッサンなどの方が深く性慾を見てゐると思つたが、今では決してさうは思はない。一代女などは世界にもあまりに多くないやうな作品である。……モウパッサンの中では最後の作だけあつてノウトル・クウルが性慾の深いところに達してゐるが、それでも置土產の中の一篇、又は一代女に見るやうな生滅の氣分には達してゐない」(西鶴小論)。氏は又云ふ「要するに性慾は根本だ、生滅だ、不二だ、不可說だ」(同)と。氏の激賞して止まない西鶴も亦然く觀じた。彼はその好色本に於て、人間の思惟を絕した性慾の、厭離し難い不可思議な力を書いた。反省や思念にも頓着なしに、ぐん〳〵と人間を引張つて行く力を書いた。一代男世之介は激しい耽溺生活の揚句、舊離切られて零落のどん底に陷つても、矢張り煩惱の垢落し難くて只管色道の修行に沈湎して行く。「あり越しぬる昔の事一つ〳〵思ふに、我心ながら哀れに悲く、潸然しは實笑ふは僞なりしが、虛實の二つ共皆惡から

ぬ男の事のみ、最愛餘りて契の程なく、淫酒美色に身を捨させ、永き浮世を短く見せしも今思へばうたてし。子細ありて思ひ出す男も數折につきず、世には一生の間に男一人の外を知らず、緣なき別に後夫を求めず、無常の別に出家となり、かく身を固めて愛別離苦のことはりを知る女もあるに、我口惜きこゝろざし」（墨繪の浮き袖）といふやうな眞面目な反省に耽る一代女も、僅かに春畫を見るだけで、直ちに抑へきれぬ漫ろ心に陥つて行く。「好色盛衰記」の末、章「色に燒かれて煙大盡」の主人公に到つては、その最後の病蓐を新町の妓樓に移して、遊女を見ながら死んで行く。肉感性の享樂を以て人生の第一義であり無上の快樂であると觀じてゐた當時の人々の、本能追求の死に身な激しさを眺め暮した西鶴は、自ら性慾のかうした厭離し難い不思議な力に味到したのであらう。「色に燒かれて煙大盡」の一章の如き、かうして徹見された性慾の、盲目的な猛烈さと說く可らざる不思議さとを、象徵したものであつたに相違ない。

けれども西鶴はその性慾の描寫に於て不眞面に墮し、惡くふざけた誇張に陷つてゐるといふ點で、何時も非難される。性慾追求の猛烈な激しさを現はさうとして、彼

は確に誇張といふに似た表現を繰返した。「盛衰記」の「久七生れながら仰大盡」に見られるやうな、悪ふざけに墮しもした。が彼は決して性慾を不眞面にばかり取扱つたのではなかつた。それに對して何等の不安も戒心も示さなかつたのでは無かつた。第一彼は肉を書いた作家だと云はれるけれども、實際は性慾を肉一面に即してのみ觀じたのではなかつた。好色生活の種々相を描いた「一代男」に、見給へ純眞な戀を取扱つた「因果の關守」や「形見の水櫛」があるではないか。性慾と戀愛の一にして二ならざる不可分の關係を彼は、其處で確實に描破してゐるのである。此の意味で彼の描いた好色生活者は、決して單なる漁色の頽廢兒では無かつた。彼の書いた肉感性のうちには、自ら精神の光が輝いてゐた。原始的な純一さと眞實心とが籠つてゐた。云はゞ彼は肉と精神との分裂しない前の、渾一的な性慾を書いたのであつた。從つて彼の描いた好色生活には、一脈眞劍の氣が流れてゐた。かなりふざけた場面ながら、一代男」の「江戸屋敷方女中の事」といふ章に於ける世之介が、彼を引寄せるための手段として敵打の助勢を頼まれたのを眞にうけて、鎖帷子に身を固め勢ひ込んで女の

許に駈けつけるといふ邊りなどにも、さういふ好色生活者の純情と眞劍味とに生きる生一本さが躍動してゐるではないか。大阪屋の奴三笠が心意氣に感じて、死打扮にて駈け込んだ世之介にも、同じやうな氣組が感じられる。西鶴は所謂好色生活をかういふものと觀じたが故に、時に戀から戀へと轉々する好色生活のうちに、さうした生活に對する苦しい反省や精神的な自責のかげをも投じてゐる。「すぎし時、若狹わか松と住みける昔を思ひ出、檜笠をかたぶけ、旅の日數の今は後鬼前鬼の峯おそろしく、今までの織悔物語、心と心はづかしく、後世こそまことなれ」（一代男）といふやうな反省的思念——悔といふにも似た氣持をもまじへてゐる。さうしてさういふ眞面目さが凝つて結晶すれば、「夢の太刀風——女の起請化出る事」のやうな、自責の念に責め苛まれる氣持ともなることを語つてゐる。「一代女」其他の作品にも、さうした好色生活裏に於ける眞面目さの表現が隨所に閃いてゐることは云ふ迄もない。西鶴は決して性慾をも好色生活をも不眞面に取扱つたのではないのである。寧ろ惡ふざけとかうした眞面目さとを微妙に錯綜させて描いてゐる所に、彼の性慾に對する理

解が正鴻を得てゐたものであることが首肯されていゝのではないかと思ふ。

然もさうして性慾に對する理解の正鴻さを示した西鶴は、又其の理解の如何にも深く微妙であつたことを、男と女の性慾生活を鮮明に描き分けることによつて示した。彼の好色本は「一代男」以下の男性中心の作品と「二代女」「五人女」等の女性中心の作品とに二分される。然も作者はその何れの方面の作品にも前に述べたやうな性慾の眞面目さを書きながら、さうした眞面目さから出發した男性を、之を思ふに女に書かすまじきは惡請ぞかし「二代男」といふやうな一種の得脫に導いたのに對して、女の世界には決してさうした執著を絕した得脫を描かなかつた。却つてさうした眞面目さに度強く拘泥させて行つた。自ら彼女等の反省は男のそれよりもづつと息苦しく突き詰めてゐた。さうしてさうした反省の度重なつて行く結果は、時に母性愛の眼覺めを感じさせもすれば、後悔と厭離の念と自己慊惡とから遁世させもする。でなければ全然捨鉢の頹廢に導いて行く。色の世界を全然離れきることによつて心の平安を得しむるか、或は其儘色の世界に住まはせて、さうした眞面目な思念の重

さに耐へきれなくなつた墮落に導くかしてゐるのである。所詮西鶴は、女に拘りのない好色生活を求めることの出來ないことを、よく知つてゐたのである。「死なば諸共の木刀」(二代男)の半留が、長い馴染の若山に分れたその足で、直に明石に思ひつくといふやうな執着のない恬淡な心で、色の世界を樂しむといふことは、女には出來ないことであるのを知つてゐたのである。見給へ一代女にとつては、彼女の生涯の情事が、一つ一つ拘りの種であり、苦しく懷しい思ひ出であつた。彼女はその生涯の最後に近く、「皆思謂五百羅漢」の一章に於て過去の日に相觸れたすべての男性への追憶と思慕とに耽つてゐるではないか。更にまた五人女の夫々は、戀に生きたが故に戀に死なゝければならなかつたではないか。其處に西鶴が、男にはない激しい執着が女の性慾生活に深く絡みついてゐることを、正しく認めてゐたことが理解される。此の認識の故にこそ、彼は女には男になかつたやうな激しく粘り強い執念を書いた。齒ぎしりするやうな嫉妬や、綿々として長く盡きない怨みや、さては呪咀の怖ろしさから狹い心の突詰めた狂氣迄書き入れた。男のそれに見られたやうな明るく暢び

やかな潤達さの代りに、鋭さと陰險さとヒステリカルな昂奮とを書いた。同じく戀に隙のなき身でありながら、一代男は時に末社樂遊びを樂しんだ。戀が願ひの榮耀の搔餅を許して之を興がりもした。が、一代女や五人女は、すべての點に狭く一本氣にのみ突詰めてゐた。躰も命も投げ出した死に身の强さと眞劍さとに充たされてゐた。女祐筆となつた一代女は、我に幾度か戀の文を頼んで、然も不首尾に惱める男が、つい「かはいらしく」なつて口說きかゝるといふ浮き浮きした氣持のうちにさへ、男の利己的な心情を見せられては、「よき事させながら餘りなる言葉堅め、憎さも憎し…………一年立ぬ中に杖突せて腮細らせて浮世の隙を明ん」（諸禮女祐筆）と、寧ろ慘たらしい迄に意氣組んでゐるではないか。僅かに「五人女」のおさんが、茂右衞門をなぶつて遊ばうとして下女と寢床をかへる所に、女としては珍らしい遊戲的な態度が書かれてゐるけれども、それさへ遊戲が遊戲に終らずに、命がけの姦通を結果して了つてゐる。「一代」男其他に間々認められた毒にも藥りにもならない遊戲的な享樂の氣持などゝ何といふ相違であつたらう。第一義――生の根本動力として、すべてに退引させず

彼女等を引摺つて行く眞劍さを、かくて西鶴が女性の性慾のうちに認めて、男性のそれにはかなり異つた色合ひを觀じてゐたことが、確實に首肯されなくてはなるまい。
かうした觀照の故にこそ、西鶴の描いた女の好色生活には、至る所に苦惱と哀愁と嚴肅な緊張との影が射してゐた。「一代男」や「三所世帶」の性慾にはそれがなかつた。女ばらは嫌ぢや嫌ぢやと云ひ死に悶死したといふ、寧ろ兇暴な好色生活者等の身の破滅を描いた「三所世帶」さへ、決して陰慘な氣は起こさせなかつた。何處かに明るい調子があつた。作者が男性の性慾生活を、女性の場合とは異つた、抽象された生活の一面と觀じ、從つてそれが男性の全運命を支配するものではないことを知つてゐた氣持が、其處に反映されてゐるのではないかと思ふ。西鶴の好色本は、何れ色に即して眺められた人生の一面であつたけれども、此の意味で「一代男」や「三所世帶」は特に抽象的な性質を濃厚にもつてゐた。主題の稀らしさは兎に角、作品としての味ひに於て、それらが「一代女」や「五人女」に一籌を輸する所以であると思ふ。
と同時に西鶴の書いた性慾には、不思議に變態的な現れが少かつた。作者が意識

して同性愛を取扱はうとした「男色大鑑」の場合は別だが、其他には殆どさうした現れがなかつた。僅かに「一代女」に男の眞似をしたがる女隱居があり、「一代男」は吉野が書の脚布を好色丸の吹貫きに用ひてゐるといふ程度のもので、「一代女」に出て來る女の後ろを望む隱居は所謂膾に懲りて羹を吹くもの「三所世帶」の女に裸相撲をとらせて喜ぶ一幕「五人女」第一章の冒頭の同じやうな場面などは、強ひて變態と呼ぶ程のものではあるまい。「三所世帶」の如き、性慾の強さと激しさとを隨分誇張して書きながら、寧ろ常識的な性慾把握しか認められなかつた。少くとも變態と云ひアブノルマルと云ひ得るやうな點はなかつた。其處にあれ程性慾生活を書いた西鶴が、人としては却て性的健全さに生きてゐたことが反映されてゐると思ふ。(「男色大鑑」の著のあることが、さうした性的健全さを裏切るものでないことは後で述べる。) 其爲に彼の書いた性慾は、深くはあつても、其の微妙な性質と色合ひとを盡して底の底まで見極められてはゐても、不氣味さや醜怪な感觸は殆ど無かつた。病的に不氣味な慘虐性や陰慘な頽廢はなかつた。厭離しがたく人間を引摺るものではあつても、さういふ

點では明い性慾であつた。それは無論人間としての素質の反映で、止むを得ないことではあつたけれども、若し彼の書いた性慾乃至好色生活に幾分の物足りなさがあつたとすれば、此點にあつたのだと思ふ。

三　好色生活の理想境と好色一代男

厭離し難い不可思議な力を以て、ぐん〳〵と人間を引摺つて行く性の力に、我から進んで身も心も打ち委せた好色生活は、元來が自己中心的なものであつた。共存を根本とする社會に於て、素より容易にその圓滿を期し得べくもなかつた。强ひて圓滿を求めようとすれば、社會の秩序は破壞されなければならなかつた。或は逆に秩序や道義のために壓迫されて、好色生活者自身の身上に、慘ましい破綻が來なければならなかつた。人生を徹見してさうした悲劇の數多くを見た西鶴は、或は所謂好き心と共に德性と社會性とを具備した好色生活者等は、さうした悲劇を伴はない好色生活圓滿の理想境を、普通の人生以外の別天地に求めねばならなかつた。遊里が、無論其の別天地として彼等に讃仰された。

遊里は其の成立の根本に於て云ふ迄もなく性慾追求者の滿足を意圖して設けられたものであつた。其處には全然貞操を捨てゝ了つた特別の女性が住んでゐた。彼女等は甘んじて男性の玩弄物となり歡樂の機關となつて、媚と肉とを鬻いた。其處には元來思惟も道義も省察もなかつた。たゞ情熱の猛烈な渦卷きと陶醉的な肉慾の戲れとがあるだけであつた。人々はそこで一切を打忘れて有頂天な享樂を擅にすることが出來た。少くとも出來得べき筈のものであつた。元祿時代に遊里が前古未曾有の殷盛を致したのも、素より怪しむに足りないと思ふ。

が然し、既に多くの人々によつて云はれてゐる通り、元祿時代の遊廓は、必ずしも單にさうした性慾遂行のための場所としてのみ存在してゐたのではなかつた。その濫觴期より此の時代迄の間に、進化と洗練と複雜化との幾階段かを經て來た遊廓は、此の時代には既に一種の美的生活環境として、趣味と社交に生きるものには無くてはならぬ世界であつたのである。然もその美的生活環境の支配者であり歡醉の主宰者であるものは、所謂三味線の國の快樂の女神達であつた。彼女等の氣持一つで

美的生活に濁りも出來れば、快樂の雰圍氣に汚いしみも出來る。所謂趣味の層たる都會に住むこと既に幾十年、都會人としての洗練された神經を誇り始めた當代の好色生活者等は、その濁りや汚なさを極端に嫌つた。金で買はれるものとは云へ、遊女の心情を無視する粗野さにも耐へられなかつた。その美的生活者らしい纖細な感受性が、何時の間にか此の特殊な生活圏に一定の規矩を設けさした。よしんばそれは不文律的な、必ずしも絶對服從を强ひ得るものではなかつたとしても、又それだにその則を越えることは情操の不鍛練を曝露することになつた。結果は其處に嫖客等にとつての心理的な弱味が生れ始めた。今日の遊女などゝ違つて一通りの女藝にも通じて「女神」らしい資格を備へてゐた上に、時にその素性に於て多くの嫖客等より遙かに高い社會的地位の出であり、從つて高い氣位と權威とを具へてゐたものがあつた爲とはいふものゝ、兎に角當時の遊女は、單なる男性の玩弄物たる位置を脱して、却て彼女等を訪るゝ男性よりも、自儘に振舞ひ得る特權を與へられた。彼女等の中の上位のものは、客の席に出ても上座に据ゑられて、一座の人々から「樣」を以て呼

ばれた。客に對しても「振る」といふことが認められた。「張」の強いことが尊重された。その「客を振る」といふのも「張が強い」といふのも、所詮は彼女等の自我である。自我の主張である。さういふ自我を主張し得る權利ならぬ權利を、何時の間にか彼女等は與へられてゐたのである。彼女等に接する男性は無論其の權利を尊重しなければならなかつた。少くともそれを拒む事を許されなかつた。强ひて拒めば彼等にとつて最も苦痛な情操の不鍛練——野暮を以て罵しられなければならなかつた。必然的に其處には止むを得ぬ妥協が必要とされて來た。

然も對女性の關係に於て、男性は常に絕對の支配者でありたい慾望をもつ。彼等は自ら屈して女性の自我と妥協することの——しなければならないことの不快さと苦さとを嫌つた。自ら其處に高く逃避しようとするものゝ態度が生れた。逃避して然も上から君臨しようとするものゝ態度が生れたのである。女性の自我も我儘も一切を恕して之を抱擁しながら、然も自己の尊嚴を傷けまいとする態度、云ひ換へれば日輪が一切萬象を光被しながら、然も萬象をして己がじゝなる生成活動を營

ましむるにも似た態度を持しようとする傾向が生れたのである。それが即ち春廼舍氏の所謂酌情と寛恕と自敬との三要素を打つて一丸とした粹の境地であつた。彼等は其の境地に安住して、風の如く水の如く凝滯無碍に振舞つて、自ら樂しむと共に、他をも亦悅びの情念に浸らせようとした。好色生活が、かくて前にも云つた通り、單なる性慾追求生活であるのみでなく、同時に色氣と戀の情趣とを娯しむ一種の美的生活となつた所以である。從つてさういふ美的生活者として、自ら自由無端徼に振舞ひながら、然も則を越えず、他をして疾苦せしめない底の境地に達する爲には、生れながらにして粹の極意を體せるものゝ場合は知らず、一般の人間にあつては、其前に長い修養の期間が無ければならなかつた。戀の不如意と圓滿な自己實現の到達望み得ないことゝに惱まされた歷史が無ければならなかつた。その歷史の間に色の世界の種々相を眺め盡して、高く其上に逸出し得る心の鍛練を經ねばならなかつた。色の世界の種々相を描いた「好色一代男」は、その長編としての結構に即して云へば、一面さういふ歷史と修養と、その結果最後に到り得た粹の境地とを、主人公世之介

なる一個の人物を通して描き出したものに他ならないのである。

「一代男」八巻五十四說話を、長編としての構成に即して見れば、旣に前にも云つた通り遺傳的早熟兒世之介の思春期、好色修行の發端、惑溺、勘當、放浪(耽溺)、勘當赦免、大盡遊び、なほ充たされぬ性の飽滿を求めての女護の島渡りといふやうな發展が辿られる。「爰に但馬の國金掘る里のほとりに、浮世の事外にして色道一つにねてもさめても夢助とかへ名呼ばるゝ好色男とさる遊女との間に生れた世之介は、七歲の夏早くも戀を知る男となつてから、十二の歲には「聲も變りて大人はづかしい」色道の修行者となる共に、遊女、地女、後家、飛子、留女等との色の世界の交捗に沒頭する。さうした好色修行の結果として、彼は「今いふて今おもひもよらずいかなる旅人も日高に泊り曉を急がず、或は五日七日の逗留又は作病して此君まみえ給ふ事ぞ」と云はれる程に全盛の遊女二人を苦もなく靡ける手だれともなり、遂には淺間しき姿となつて江戶に下つても、尙ほ止むことなく惑溺振りを發揮した揚句、舊離きられて出家となる。然もなほ愛慾の情念を抑へかねて香具賣に馴染み初めてから、一脈頹癈の氣に彩られた放

浪時代に入つて行く。此期に於ける彼は一面誰憚らぬ自由の身として、遊女といふ遊女は北國奥羽の端まで、女といふ女は懸神子から奥女中に至る迄、各階級各種類を盡して知ると共に、他面人生の不如意を痛感する。然も彼は不如意ながらも捨てられぬ愛慾の惱みに沒頭して、油斷もなき所に素早く女郎に起請を書かす名譽の女蕩しともなれば、大原一夜の雜魚寢には、常々心を懸けた人々を出し拔いて此里隨一の美人を我物にして了ひもする。色道の裏を行くからくりの色々をも、彼は無論知り拔いて了つた。と同時に、彼は此期に於て純眞な戀心に身も世もあられず惱みもした。色の世界にこれ迄深入りして來ても、彼は遂に心の眞實をすり耗らして了はなかたのである。自ら彼には過去の日の好色生活が生んだ罪惡に對する苦い後悔があつた。捨てた女の起請を見ては、起つても居てもゐられない程の惱みを感じさせられもした。云はば此の時代は世之介にとつて、放浪時代であると共に、懷疑乃至は苦悶と動搖との時代でもあつたのである。彼は此の苦悶と動搖とを通して、例の假にも書かすまじきは起請ぞかし」といふ思念にも入つて行つた。一切の着意と執着

とを去つて凝滯無碍に流動し得る境地に進出しようと希つた。——西鶴は世之介にかうした修行を修行させた。さうして心の準備と好色生活の表裏に關する知識とを十分彼に獲得させた後に、卒然として勘當放免、遺產相續の天恵を天降らせたいである。世之介大々大盡の粹遊びが、かくて當然展開さるべき段取となつたのである。彼は遂に所謂わけ知りの世之介、色道の行者、粹人の鑑として現前した。彼は其處で美妓名妓の數々に圍繞せられた歡醉のうちに生きてゐる。然もその間に於ける彼の態度は完全に自由である。すべての點に昔ながらの强さと鋭さとを保ち乍ら、然も風の如くに振舞ひ得て則を越えないのである。何れを一つ惡しきと申すべき所もなく、なき跡まで名を殘した遊女吉野が、己に憧るゝ小刀鍛冶の弟子の心根不憫と首尾してとらせたのを聞いて、「それこそ女郎の本意なり」と、其夜俄に請出して妻とした世之介。然も其の身請を「一門中よりは道ならぬ事とて見かぎりしを、吉野が身にしては悲しく、御異見申御暇乞て、責ては御下屋敷に置せられ、折節の御通ひ女にと云ふのをも退けて、頑として自己を立て通した世之介。「ねがひの搔餅」「末社樂あそ

び」に禿や幇間を喜ばせる世之介。　よく香を聞き分ける女の、しほらしくも亦床しき「心入をおどろき、様子をきけば隠れもなき人の御息所」と知つて、直ちに請出し丹波に送つた世之介。　夜着の下より屁をつき出して、四邊響くほどの香ひ二つまで覺えあつて放つた遊女の屁を火皿で抑へた世之介。　さては紋日かゝさぬ大盡にばかり狀文つけるのみか、人知れず小判貸しの利を貪る惡女郎を、蕩して逆に眞向から辱しめた世之介。――自由恬淡に振舞ひながら、自己の强さと威嚴と道の正しさとを失はず、然もよく他を樂しましむることをも知つてゐた世之介の相が、これだけの斷片からでも綜合的に描き上げられるではないか。　彼はかうして自由無端徽に振舞ひながら、然も決して彼自身の眞情を汚損しはしなかつた。　昔ながらの純情を、後の通人等の生溫く技巧的なのとは違つて、彼は極めて卒直自然に流露させてゐる。　從つて彼は所謂粹といひ通といふ世界に尙む無着意とは所詮或る撞著を來さずにはゐない一向きな戀心にも、時に陷つて了つてゐる。　よい事づくめの夕霧が噂をきくとひとしく「其座にたまり兼て、作りわづらひして人より先に歸り、おもふ程を書くどきてよ

すがを求めつかはした後は、雨の夜風の夜雪の道をもわけて、此戀かなふ迄と通ひ詰める世之介には、所謂酸いも甘いも嚙み分けた粋人らしい面影は認められない。婦三笠の血書を見て、死打掛にて駆けつける世之介にも、同じやうなことが云へよう。けれどもさうした昔ながらの突き詰めた心を失はずに、然も上述の如く自由自在に振舞ひ得て大體則を越えない所に、大々大盡としての世之介の安住境が、謂はれた粋や通の世界ではなく、ほんとの好色修行の結果、自ら開けた悟入境であつたことが、確實に肯かれる。西鶴は、世之介をして粋の境地を體現させることに大體成功してゐると共に、彼をしてさうした境地に至らしむべき過程を描く上にも、正しい段取りを踏んでゐることが云はれていゝのだと思ふ。

この意味で「一代男」は作品としての構想に於ても、その構想乃至描叙が生んだ効果に於ても、決して失敗の作とは云へなかつた。少くとも作者の意圖としては、正しい排列と布置とが企劃されてゐたものと云はれてよかつた。殊に一代の好色男世之介の生涯を叙しようとして、彼の性的異常さを云ふために、彼を遺傳の兒としてゐる

所、乃至は大盡遊びの舞臺としての島原を鮮明に印象させる爲に、單にわけ知りの世之介の其里に於ける全盛振りを描くのみならず、放浪時代の終り、旣に色道修行の過程を略々卒業した世之介をさへ、人の伴として遊ばせて、たいこ女郎にさへ振られる慘めな男として取扱ふことによつて、後の描寫をより効果的にしようとした所などには、かなり複雜な伏線的意匠さへ認められる。描寫の的確さ、印象把握の端的さなどに至つては、素より云ふを要しない。世之介放浪時代の記述の如き、殊にすぐれた藝術的香味をふんだんに湛へてゐると思ふ。世之介が相觸れた遊女なども一人一人鮮明に描き生かされてゐた。

が然しさうした優れた作家的天分と、深い用意と意圖とを以て物せられたものでありながら、本書は必ずしも其の結構に於て渾然たる纒りをもつてゐるとは云はれなかつた。第一それは全體の釣合ひに於て、ひどく妥當さを缺いてゐた。世之介大盡遊びの一段が、他の部分に比較して餘に長過ぎた。好色生活の頂點として、世之介の譯知りと濶達振りとを云ふ爲には、此の三分の一よりもつと短かくてもよかつた

かも知れない。のみならず、既に前にも云つた通り、西鶴は本書に餘りに多くのものを書き込まうとした。世之介大盡遊びの一段があんなに迄長くなり過ぎたのも、餘りに多くの遊女を紹介しようとする作者の意圖の爲であつた。さうした性質の故に、本書は一見一種の隨筆乃至覺え書き的なものに墮して、折角意圖した作者の複雜な排列と筋立てとが、何うかすると塗り潰されて、只單に好色生活の種々相を傳へるための小話の連續に過ぎない。といふ形にもなつて了つてゐる。さういふ點で最も著しいのも、矢張り大盡遊びの一段であつた。末梢的記述の多端さの爲に、其處では何うかすると主人公世之助の影さへ極めて稀薄なものになつてゐる。複雜な記述を支配して行く形が、世之介に持しきれなくなつてゐるのである。それは一面粹の境地を描く爲には、止むを得ない結果であつたのかも知れないけれども、矢張り本書のもつてゐる最大の缺點として舉げなければならないものであつた。作家なれない西鶴が、本書に餘りに多くのものを描き込まうとして、最初に意圖したやうな渾成を、本書の形の上に有たせることに失敗したのであると思ふ。

本書が男性々慾を描いたものとして、微妙複雜の限りを盡したものであることは前にも云つたから繰返さないが、たゞさういふものとしても更に完璧を期するためには、世之介思春期の前に、世之介自身性慾とは知らぬ性的行動の一二齣を挿入して欲かつたと思ふ。自ら性慾とは意識しない性の現れ――さういふものが全然描かれてゐないのを性慾のあらゆる斷面を描き盡さうとした本書として、私は多少物足りなく思ふ。或は「まだほんの事は定まらぬ」世之介の思春期が、その初めから性慾を性慾として明瞭に意識してゐるのを、物足りなく思ふのである。

がそれよりも、もつと此處で云はなければならない重大なことは、本書の結末「女護の島渡り」の一段に過せられた象徴的意義である。それは無論形の上から云へば、源氏の君の雲隱れに暗示せられて出來上つた一節であつたらう。が意義の上から云へば、或る意味で遊戯的であり粘り氣のなかつた男性々慾が、「浮世の遊君白拍子妓女」殘らず見盡した後更に新しき刺戟と新しき好色生活の趣きとを求めて、未知の世界へと冒險的な飛躍を試み、それを象徴したものであつたらう。其處に西鶴が、所謂好

色生活は、何處まで行つても絶對の飽滿を味ひ得るものでないことを、云ひ換へれば男の性慾は、何處迄行つても常に新しき刺戟を追ひ求めやうとする傾向を有つものであることを、暗示してゐるものと見られる。と同時に、それはさうした性の根本的性質とは別に、一見粹の境地に安住してゐるかと見えた世之介大々大盡の好色生活裏に、實はなほ一脈不滿の影があつたことを、象徴してゐるものとは云へないであらうか。粹とは前にも云つた通り云はゞ高踏的とも云ふべき逃避によつて生れた妥協的境地である。性慾生活の自主的傾向と、その對他關係に於ける他主々義との妥協的調和である。自らその根本に於て徹底的に自主的な性慾の、乃至は好色生活者自身の感情の圓滿を期することは出來なかつた。西鶴は其點への明確な意識に出發して、世之介好色修行の究竟、大盡遊びの頂點にも、なほ一脈の不飽滿感があつて存することを、云はうとしたのではあるまいか。その不飽滿感の故にこそ、好色生活の徹底的追求を意圖する世之介はじめ七人の好色男は、妥協の粹の世界を去つて、夢想された男性々慾の圓滿境女護の島に押渡つて、摑どりの女を享樂しようとするので

はないか。世之介大々大盡の好色生活裏に、なほさうした不飽滿感のあることを云はうとしたとすれば、彼が世之介を大體粹の世界の住人らしく描きながら、時に粹人らしからぬ性質を覗かせた意圖も肯かれるし、更に又此點から彼の懷いてゐた遊女觀が、極めて妥當な根據の上に立つてゐたものであることが、考へられて來ると思ふ。

單に「一代男」のみと云はず、西鶴はその好色本の多くに遊女を描いた。描いて遊女氣質の複雜さを盡した。殊に時代的風尙の必然として、張りと意氣地に生きた女は多く書いた。「其姿は初昔」の高橋（一代男）「食さして袖の橘」の奴三笠（同）、「情のかけろく」の小紫（同）、「誓紙は異見の種」の小太夫（二代男）、などは其の尤なるものであらう。「いかにさもしき我なればとて、定まるしかけあるに、かしらから自由遊ばすはむごし。一たんは風呂屋勤め分に方樣のまゝになりました。その上はわたくしの身なれば分たてさすこと思ひもよらず」と我を立てゝ、對手の大盡に「一代せぬ事兩の手を合せて拜」ませた「皆吹きあぐる風呂屋大盡」（盛衰記）の女なども、無論これに類するものである。「夜の契は何じややら」（二代男）の金山も、さうした强さと勝氣に機智の加はつたもので

あつた。西鶴は素よりかうした遊女等を讃仰した。けれども彼が以て遊女の鑑としたものは彼女等ではなかつた。「可はかづけ物」(一代男)の吉田が利發な取り捌き、戀の世の中に是は又(同)のヒロインの純情、それも西鶴の敬意なり床しさなりを感ずるものであつた。が彼女等も矢張り遊女の鑑としては取扱はれなかつた。彼の理想の遊女は「身は火にくばるとも」(同上)の夕霧であつた。「後には樣つけて呼ぶ」(同)の吉野であつた。名妓を揃へた太夫品定めの最後に、これと止めをさゝれたのは前者であつた。西鶴は一代の好色男世之介をして、彼女の噂を聞くとひとしく、猛烈な戀心を起こさせて、深草の少將もどきに通ひ詰めさせた。彼の描いた遊女の數は多いけれども、之程傾倒的な心を以て眺められたものは殆ど無かつた。僅かに吉野一人が彼女と略ぼ同等な待遇を受けてゐた。彼女は數多くの遊女の中から、特に選まれて一代男の妻とされてゐる。とすれば、此の二人に西鶴が理想の遊女を見出すのは決して亂暴であるまいと思ふ。二人は果して何んな女であつたらうか。

焦れて通うた世之介と忍び逢うた夕霧は、折惡しく其日のお敵權七樣御出の聲を

きいても、ちつともせかずに世之介を炬燵の下に隱して、己は別のこともなき文を持ちながら臺所に迯げて、權七の之を追ふ隙に世之介を裏へ迯す。危險を美事に脫すると共に、權七との間に一種の遊戯的な戀の場面を展開させて、彼に一種の歡醉を與へようとするのである。利發な取捌きである。が、其處には如何にも遊女らしい狡猾さと、早速の手管とが感じられる。宜なる哉彼女は「命を捨る程になれば道理を詰て遠ざかり、名の立かゝれば了簡してやめさせ、つのれば義理をつめて見はなし、身おもふ人には世の事を異見し、女房のある男にはうらむべき程を合點させ、魚屋の長兵衞にも手をにぎらせ、八百屋五郎八までも言葉をよろこばす」といふ完全な遊女氣質に生きる女であつた。嫌な客なら、拔刀を振翳して追ひ迫つて來ても、望みに應ぜぬ高橋などゝ、それは何といふ違ひ方であらう。然も西鶴は此の態度を推賞した。之に似た推賞を蒙つてゐるものに「全盛歌書羽織」「一代男」の野秋がある。世之介と屋州の傳七との二人に馴染んだ彼女は「此上に身がな二つほしき」とディレンマに悶えながらも、二人との關係を巧みに調和させて行くのである。「樣つけて呼ぶ」の吉野は、前

にも云つた小刀鍛治の弟子の心入不憫と首尾して取らせる女であつた。それは一面純眞な感激とも見られるけれども、それさへ一面には遊女らしい主角のなさと、自我を捨てたものゝ氣持とを思はせる。が、それはまだいゝ。夕霧や野秋に、何うして西鶴はあんなに敬愛を感じたのであらうか。時代的必然から云つても、彼の性格から云つても、寧ろ高橋等にこそ最も心を惹かれさうな西鶴であつたと思ふのに。

云ふ迄もなく其處に西鶴の遊里生活觀があつた。前にも云つた通り、彼は悲劇と破綻の作はない好色生活環境としての遊里を尙んだ。のにも係らず、實際の遊里生活には、矢張り悲劇も破綻もあつた。多くの好色生活者等の慾望も感情も、必ずしも其處で絕對の飽滿を味ひ得はしなかつた。彼等は止むを得ず粹の世界に進脫した。然も其處にも不滿の影はつき纏つてゐた。其の不滿を正しく觀取した西鶴は、やてその不滿の拂拭を、遊女の自我の抛棄によつて求めようとした。遊女が遊女らしさに終始しさへすれば、遊里は初めて圓融無碍の世界となる、好色生活のほんとの理想鄕となると觀じたのではなかつたのであらうか。其處には無論男性としての利己

主義があつた。が、兎に角さうした思念の結果、彼は恐らく彼の性格的の好みとは異つた、遊女は只遊女らしかれといふ氣持に落着いて行つたのではないかと思ふ。さういふ氣持に落着いて行つたが故に、彼は遊女が遊女としての埒を飛び越えて、己が人じゝなる感情の奔騰に身を委ねることを、嫌ふに至つたのでは無かつたか。彼が人も知る遊女の心中を極端に排斥する男であつたことなどからも、そんなことが考へられる。所詮彼は遊女は遊女として嫖客を寓すべきもの、嫖客は粋の境地に遊女を抱擁すべきもの、その兩者の妥協によつて――よく云へば渾融によつて、圓滿無碍な好色生活の理想郷は展開される、と云はうとしてゐるのではないか。思想としてはそれは無論平凡に墮してゐるけれども、兎に角彼はとつて必ずしも必然性のない遊里生活觀でも無かつたと思ふ。

四　好色二代男と色里三所世帯

「二代男」はその別名を「諸艶大鑑」といふ。本書にも亦一篇を長編とすべき繫ぎとして點出された主人公らしいものはある。一代男世之介が十五歳の時さる後家を孕

まして捨てた子供、二代男世傳がそれである。「一代男」同樣色の世界の種々相を描いた本書に、彼は親一代男から色道極意の虎の卷を傳へられてゐる。けれども、一代男が兎にも角にも各說話に何等かの影を投じて、常に作品の中心的位置からだけは遠ざからなかつた――少くとも各說話各事件に幾分の積極的行動をとつてゐたのに對して、此は殆ど何等の動きをも各說話に及ぼしてゐない。たゞ遣手の國が諸國の遊里噺しに耳を傾けた揚句、彼女の記錄に諸國の色人と共に加筆したといふだけの働きしかしてゐない。從つて本書は二代男を中心とする長篇小說とは云へない。寧ろ其の別名によつて揣摩し得られるやうな、純然たる短篇說話の集合と見る方がいゝ。然も作者は其處で只諸國の遊里を舞臺とした色慾世界をのみ取扱つてゐる。云はゞ本書は「一代男」の世之介大盡遊びの一段を其儘推し擴げて、更にそれを細かく分析して見せたもの、といふことが出來る。

只、さうした似通つた記述のうちに、「二代男」にあつては一種のロマンティックな氣持が感じられた。材料相互の排列や取扱ひ方の上に、著しく主觀的な配合が感じら

れた。觀念的空想的な組立が多かつた。同じく當代の風俗を描くにしても、それを現實ありのまゝの形に於ては描かなかつた。何處かに作者の主觀的な取捨を加へた觀念的な組立が感じられた。それが、さうした作者の想像的觀念的な態度が「一代男」にはかなり稀薄になつてゐる。づつと現實其儘の形に即してゐる。自ら後者には前者に無かつた現實的な色合ひと調子が混つてゐる。女護の島なる父世之介から、色道の虎の卷を讓られた世傳が、「なんぞや危き海上を越へ無景の女島に渡給へり。目前の喜見城とは吉原島原新町、此の三ヶの津にます女色のあるべきや」「親の顔は見ぬ初夢」と云つてゐる所などにも、さうした「一代男」とは全然違つた現實的な調子が、明瞭に觀取されると思ふ。恐らく前者が色一面に即して抽象された空想の漫ろ書きであつたのに對して、後者は意識しての遊里描寫であり、遊里解剖であつたのであらうと思ふ。自ら後者の人物はそれ〳〵或る程度迄の現實生活の背景の上に動いてゐる。だから「一代男」に於ては只管美しく樂しきものとのみ描かれた遊里生活が、此處では其の美しさと樂しさとの裏に、悲哀と暗さをもつてゐることを書かれてゐる。

美しき快樂の女神であつた遊女達に「丈夫様入帳遣帳」秩にあまる心覺の苦しい遣り繰りが書かれてゐる。「戀の世の中にこれは又」のヒロインが、此處では、生れついて末ふことが嫌ひといふ女郎に「一包投出せば莞爾と異な事にて笑ひぬ」「夏は島田の車髷」といふやうに變つてゐる。其處に性慾追求の世界以外の現實生活が判然と顔を出してゐるではないか。世之介を導いて色の世界の悟道に入らしめた誓紙が、此處では女郎の不眞實を敎へる「異見の種」となつてゐるのなど、殊にさういふことを思はせる。「とかく身過が大事、明日から精を出しやれ」「四十より内に留る事を覺らすば、借錢の淵に沈むこと眼前也。手前にある程明上げて、既に回向の金のない段に俄に止めるも見苦し」といふやうな敎戒も、素より「一代男」に描かれたやうな、抽象された好色生活裡のものではあるまい。作者は此處で確實に空想の好色生活を去つて、現實世相のうちに於けるそれを描かうとする態度に移つて來てゐるのである。自ら本書には「大盡北國落」などのやうな、好色生活の種々相以外に、所謂人生の味ひを孕んだ、或る程度迄渾成された短篇説話の幾つかゞ發見される。遊里に沈湎する人々の相が、其

處では彼自身の世運の變轉につれて、淋しくも華かにも變つて行く。それは無論「一代男」には見られない味ひであつた。

と同時に、遊里生活の表裏を盡して描かうとした西鶴は、遊女の生活に絡る不如意其他を描くために、屢々超自然力の顯現を借りた。太夫としての品位のために、目の前に並んだ食物にも箸をつけることが出來ない心は、凝つて鼠となつてその、慾望を充さうとする。それ程迄に苦しい假面の下の生活を「心魂が出て」鼠となることに、作者は象徴し强調しようとしてゐるのである。逢ひたい人に逢はれぬ心の悲しさは同樣にしてくづれ橋にろくろ首となつて現れた。「揚屋の算用殘りは」ときかれて逃げ出す遊客の裏切られた女を怨む妄念も、薄氣味悪く天井を騷がした。「反古尋ねて思ひの中宿」一篇の如きは、殊に濃厚に女の嫉妬や執念の凝つて發した不可思力に充されてゐた。さうしたものゝ現れは「一代男」にも、例へば「夢の太刀風」の如く、「心中箱」の藤波の執念の如く、多少は描かれてゐたものであつたけれども、本書に於ける程屢々繰返されてはゐなかつた。戀愛生活の惱みや悶えのない圓融境を圓融境をと目指

して書かれた「一代男」として、それは素より當然であつた。好色生活の裏にひそむ苦惱なり悲哀なりをも、忌憚なく描き出さうとした「二代男」には、無論「一代男」に於けるよりも、さうした象徴的手法を必要とする場合が多かつたらう。此の意味で、私は時に「二代男」の缺點として擧げられるさうした超自然力の點出を、本書としては必ずしも相應しからぬ構成要素として、非難して了ふことは出來ないと思ふ。

けれども、さうした超自然力の點出は、一面西鶴が行き詰つてゐたことをも物語つてゐる。所謂遊里物語は、彼は既に「一代男」に於て十分書き盡した。「二代男」はいはゞ其の殘滓である。二番煎じである。だから其處に作者はせめてもの新機軸を出さうとして、ショッキングな超自然力の顯現などに縋りつかうとしたものとも云へるのである。從つてさうしたものゝ餘りに屢々繰返されてゐる所には、自ら本書の内容が「二代男」のそれの如く、盡きぬ興味と活潑々地の生彩とに豐富でないことが、語られてゐるのでなければならない。作家意識をもつて最初の作であり、旁々作者の意氣込みもかなり眞劍なものであつた本書には「二代男」には見られない作者の緊張が

あつた。效果の善惡は云はず、文章などにも「一代男」のそれとは違つた氣取りと力瘤との感じがあつた。云はゞ本書は西鶴にとつてかなりの力作であつたのであるけれども、かうした意味で「一代男」とは比肩することの出來ない作品であつたのである。況して折角力瘤を入れた文章が、まだ幾分消化れきれてゐないために、十分な味ひを出すことが出來なかつたに於てをや。本書が「一代男」程には世の喝采を受けなかつたらしく種彥の「好色本目錄」時代既に傳本の乏しきを云はれたのも蓋し當然であつたと思ふ。只其の文章が、作家意識をもつて最初のものであつゞけに、軈て彼の「後年の文章の基となつたことゝ、作者が「一代男」といふよりも、寧ろ本書に於て示された態度より出發して、後の「好色盛衰記」乃至は「置土產」の世界にと徹して行つたのであることゝは、注意されねばならぬことであつた。

所で、好色生活の圓融境を圓融境をと目指して書かれた「一代男」の結末が、結句その圓融境の望み難いことを暗示した「女護の島渡り」であつたのに對して、色慾世界に纏る不如意と暗側面とをも描き盡さうとした「二代男」の結末が「大往生は女色の臺」であ

ることは一寸面白い對照だと思ふ。前者の只一色に觀念的であるのに對して、後者の或る程度迄現實的であるのは、軈て夫々が「一代男」と「二代男」の性質を代表してゐる譯だと思ふが、それよりも、前者に性慾の性質其物に卽して、其處に絕對の飽滿の到底期し難いことを云つた西鶴が、後者には現實の世の性慾の、條件さへ具備するなら、容易に飽滿されるものであることを云つてゐる點に注意しなければならない。彼はかうした轉歩を辿つて來たゝめに、軈て好色生活の圓滿を期すべき僞の條件を、云ひ換へれば好色生活者の心掛けを、讀者に對つて說き聞かす粹法師としての態度を、示し始めたのである。「二代男」に好色生活者等への敎訓が多かつたのは無論其爲であつたと思ふ。次に云ふべき「色里三所世帶」は、かうした轉歩の前に、更に一歩を進めたものであつた。

「色里三所世帶」は元祿元年に發行された。別名を「好色つは物揃」といふ。浮世の外右衛門なる好色男が、酒と色とに身を持ち崩して、京江戸大阪三所に於ける色の樣々を味ひ盡した揚句、浮世の世帶破りの末社十一人と共に、武藏小塚原の草庵に悶死す

るといふ三卷十五章。「一代男」同樣短篇說話を積み重ねて、兎にも角にも長編としての結構をつけたもの、其の世界から云つても「二代男」の世相はなく、色一面の世界である。其の作品としての價値から云へば、作者に藝術家としての沈潛と緊張とを缺いた、云はゞその製作動機の極めて放埒淺薄な、只誇張と惡ふざけとを事とした、價値の低いものであつた。「一代女」や「五人女」にかなり徹した思念を見せた西鶴が、かうした一見惡ふざけばかりの作品を物したといふことは、かなり不可解な事であり、旁々本書は今日なほ西鶴作と確信せられてはゐないのである。が、その中心主題の好色生活觀が、「一代男」と「二代男」を連ねる線の直接の延長の前に、進步か墮落か、兎に角進一步したものである點で、必ずしも西鶴作としての可能性を有たないものではなかつた。その文章の强く簡潔なリズムや、印象的な冴えた筆致なども、何うやら西鶴のものらしいし、第一其の誇張其物が、無邪氣に馬鹿氣てゐるだけで、强ひて裝はれた不自然さや變な嫌味のない所が、西鶴でなければ一寸無い味ひのやうにも思はれる。好色本の成功に氣をよくした西鶴が、只單純に色の世界を書きさへしたら、といふやうな安

易な氣持を抱いたら、かういふ作も生れたらう。寧ろ生れなければならなかつたかも知れない。といふ程度で、西鶴作としての可能を信じ得るものである。無論大した作品ではない。

が只本書に示された作者の好色生活者等の取扱ひ方には「一代男」と「二代男」からの、かなり面白い、と同時に、西鶴にとつてはかなり重大な推移が感じられる。見給へ「二代男」に女色の臺の大往生を描いた作者は、此處では浮世の外右衛門をして、十一人の末社と共に「女ばらはいやぢや／＼と云ひ死に」悶死させてゐる。彼は其處に性慾の絶對的圓滿を期することの無謀を說いたのである。「一代男」に象徵されたやうな絶對の圓滿を希求するのが性慾の性質であつても、其の性質の儘に「二代男」の女色の臺の大歡喜を目指して引摺られるとすれば、却て慘ましい破滅の來ることを書いてゐるのである。とすれば、「つは物揃」といふ別名を可能にするやうな人物の幾人かを點出して、彼等に出鱈目な亂暴を敢てさせたことにも、ふざけた誇張といふ以上に、一種の意味が感じられる。作者はそれらの強藏の悶死によつて人間性慾の頂點と限界

とを明瞭に象徴しようとしたことになる。無論それによつて示された彼の結論は、極めて平凡な意見であつたには相違ないけれども、然も平凡であるだけ、世相裡に於ける好色生活者への鑑戒としては肯ける。現實の世の好色生活者等の生活を徹見した西鶴は、其處に見出された彼等の運命と性慾の不可思議な性質との撞著に眉を顰めた後、その撞著を描き出して、好色生活等への鑑戒としようとしたのではなかつたか。この推定が誤りでないとすれば、本書が「一代男」と「二代男」とを直接に繼承すると共に、「一代女」や「五人女」が出た後に、西鶴の手によつて書かれたといふことも、亦必ずしも不思議とは云へなくなつて來ると思ふ。

五　好色一代女と西鶴の女性觀

「一代男」に男の性慾を書いた西鶴は、「一代女」に女の好色生活の諸面容を見盡した。「一代男」の素晴らしい好評に乘り氣になつた彼は、既に本書を書く前に「二代男」と「艶隱者」とを書いてゐた。がそれらの作品には、まだ作家なれない作者の、何處か暗中摸索的な、危な氣な足取りが感じられた。作者としてかなりこちこちに固くなつてゐた。

が、本書に於ては、彼は「一代男」に於けると同樣自由に饜足を伸してゐる。恐らく作者自身にとつても快心の作であつたのであらう。水谷不倒氏によれば、本書は數多い西鶴作中最も美しく裝はれて市に出たものであるといふ。とすれば、其處にも西鶴が本書を以て快心の作とした氣持が、反映されてゐる。

六卷二十四章に渉る一長編としての本書の趣向は、まづ「一代男」の形式に倣つて、京近い梅津川の畔北山陰に、好色庵と記した洒板の額を揭げて行ひ澄ましゐる老女の口から、その生涯の經歷を語らせるといふ形をとつてゐるが、それは却て無くもがなの技巧である。主題に即した眼目は云ふ迄もなく一代女其人が「十一歲の夏始めよりわけもなく取亂して」、十二の歲には早くも一人の青侍と戀に陷り、後顯れて日陰の身となつてから、只管性の衝動にのみ身を委ねて、舞姬となり國主の艶妾となり遊女となり、更に轉々して遂に所謂闇に咲く花――倫落の女の群に投じて行つた揚句、我と我が生活の醜さと罪深さとを厭ひ怖れて遁世するに至るまでの記述である。長編としての構成は、「一代男」其他と同樣短篇說話の連續重疊といふ形になつて居り、そ

の各短篇說話に女性好色生活の諸斷面を網羅しようとし、且つその諸斷面に連關した知的隨筆的な記述をも可及的捨てまいとする作者の態度も「一代男」の場合と同樣だが、只それらが、兎もすれば中心主題と筋立てとを見失はせて了はうとした「一代男」の場合などゝは違つて、却て一代女其人の環境を明瞭にし、從つて彼女の生活に絡る色樣々な陰翳を色濃くするのに役立つてゐる。作者が常に一代女を、彼女自身の運命を切り開くべき力をもたず、只環境の支配によつてのみ動いて行く女性として取扱つてゐるからである。一代男の行動は殆ど常に積極的だつた。環境に働きかけようとする力が彼にはあつた。從つてその環境が餘りに複雜多面に過ぎれば、一代男の力がそれを抱擁しきれなくなる。彼自身の影の全然投ぜられない部分が生じて來る。自ら多岐亡羊の非難も起らなければならなかつた。が、常に環境に對して受身の位置に立つてゐる一代女にあつては、環境の描叙が密であればある程、其處に沈淪してゐる主人公の相が精細に印象されることになつて來る。云はゞ「一代男」では主人公と環境とが對立的な存在であつたのに對して「一代女」では環境即主人公と

いふ關係になつてゐるのである。有意識か無意識か知らぬ、西鶴は終始さういふ描法を持し續けた。彼は常に環境を描いた。さうして其の環境の中に、環境のもつ色合其物を自己の相とする一代女を點出した。其處に本書の描法上の成功があつた。一篇の排列から云つても、公卿の血をひく美しい主人公が、その生涯の好色生活の間に、數々の通はせ文を、物言はぬ衛士に頼みて燒すてさせるといふ愼しやかさから、漸次に墮落して遂に海山千年の莫連女に變つて行く經路も、大體は妥當だし、その生涯の經路が、全體として轉落へ轉落へとの方向をとりながら、其間に急轉直下の時代とやゝ弛緩した橫への擴がりの時代とを、適度になひまぜられてあるのも面白い。殊にさうした變轉の間に、國主が嚴しい註文にも二言と云はず當てはまつた程の美貌から、遂には皮薄にして小柄なのを取柄とし、更に闇に紛れて額の皺を白粉にかくすといふ慘めさに墮する迄の容色の漸層的な衰へを、端的に表現し得てゐる點などには、作者の正しい材料支配と作家としての手腕とを思はせずには置かない。主人公を特に公卿出にして其の並々ならぬ美しさを思はせようとし、又其の生れから必然

的に派生した驕慢の爲に、遊女としての得意時代からも忽ちにして滑り落ちさせるといふやうな、伏線的な技巧も隨所に觀じられる。所詮本書は長編としての結構から云へば「一代男」よりもづつと立優つた、破綻のないものといふことが出來よう。これなら、短篇的部分を積み重ねて、其間に漸層的に增大して行く壓力によつて、結末の重さと力强さを感じさせるといふ、長編小說としての一種の型に照し合せて見ても、決して妥當を缺いたものとは云はれない。西鶴は、その比較的長かつた模索時代を經て、自らかうした小說構成上の手腕をも自得したのであらう。兎に角彼は此作に於て、彼自身浮世草子作者としての意識に眼醒めた後の、最初の成功をかち得たのであつた。彼の豐富な天分は無論其處で粲たる光芒を放つて發揮された。彼は其處ではその文章の調子をさへ「二代男」のそれとは餘程變へてゐる。絢爛のうちに一脈女性的な、甲高く鋭角的な響を含ませてゐる。その絢爛さは、或は「二代男」に示された一種の氣取りを含んだ文章が、より洗練された結果、自らにして成つたものであるかも知れない。がその鋭角的な調子は、彼が女性を描くといふ點に苦心した、その注意

深さを反映し、且つ其の注意深さを生かし得た才腕を物語るものでなければならない。二代男では世之介の思春期を描いた部分以外には見られなかつた感傷が、此處では作品全體に色濃くつき纏つてゐることなどに就ても同じやうなことが考へられる。

が然しそれらの點よりも――或は夫等の點をも含んで、本書に於て最も重大なものは、西鶴の女性觀照の確さである。文章を鋭く甲高くしたのも、色濃い感傷を塗沫したのも、無論さうした確さの現れであつた。と同時に、常に環境をまづ描いて主人公を規定したといふ手法其物にも、亦作者の女性觀察の正しさが覗はれるのでなければならない。その對環境の關係に於て、女性が積極的な能動性を殆ど有たず、常に受動的であることは云ふ迄もあるまい。殊に元祿時代の――元祿時代に限らない我國古來の女性は、常に他主的な生活に慣れてゐた。依存的受動的に生きるべく餘儀なくされてゐた。三從とひも三界に家なしといふ、所詮は環境に適應し隨順すべきことを強要するので、自己の力に賴つて積極的に進む自由は、彼女等には殆ど絕對

に與へられてゐなかつた。結果は所謂習ひ性となるで、彼女等には自己が無かつた。只環境の色合にのみ塗り潰された無性格があつた。環境如何に隨つて、何うにでもなる變り易さがあつた。よく云はれることだが、朝には大廈高樓に多くの婢僕にかしづかれてゐた女も、夕には前垂の下に味噌漉下げて豆腐を買ひに行くことも出來るものだといふ。彼女等が男と違つて無雜作に放れきつたやうな氣持になれるのも、心にもあらぬ意地を張り通すのも、現れこそ異なれ、何れもさうした自己のない環境への適應性から來るのである。西鶴は女性のかうした性質を正しく把握した。把握してそれを「一代女」の描法夫自身のうちにさへ正しく示した。況して一代女の生涯の記述に於てをや。太夫から天神、天神から鹿戀と落されて行くに從つて、遊女になつた一代女が、その時々の氣になつて行く邊り、生活がしがなくなるに從つて、漸次淪落と頽廢とへの經路を、落ちるが儘に落ちて行く邊り、殊に「世間寺の大黑」の章などには、特に女のさうした適應性が、濃厚に表現されてゐた。「馴るれば人燒く匂ひも白菊といへる伽羅にかはらず、人燒く煙も鼻に入らず………白小袖の坊主臭きも、身に

添ふ移香の親しくなりぬ」――これが女の必然と觀ずるが故に、西鶴は「これを思ふに女程淺間しく變るものはなし」といふやうな嘆聲も揚げずにはゐられなかつたのである。さうして又これ程に變り易いものとして取扱はれてゐた爲に、二十四章に涉る變化多き場面のすべてに、常に一人の一代女が主人公として描かれてゐても、必ずしも矛盾やつぎはぎが感じられなかつたのである。「二代女」が長篇としての纏りに於て「一代男」に優つてゐたのは、一つには此點にも歸因してゐると思ふ。

けれども嚴密な意味で云へば、本書は無論一人の特に選まれた女を描いたものではない。普遍的な女といふものゝ諸體容を、一人の女の生涯らしい排列に於て描いたものである。西鶴は既に「一代男」や「二代男」に多くの女を書いた。遊女氣質のあらゆる斷面を見盡した。「一代女」はいはゞさうした遊女氣質のあらゆる斷面を「女」といふ一つの概念の中に、綜合的に描き上げようとしたものとも云へる。とすれば、既に高橋の剛膽鐵火から野秋の優柔不斷まで、「慾の世の中にこれは又のヒロインの清純無垢から「人の知らぬわたくし銀」の遊女の貪婪卑陋まで、あらゆる女を描き盡した西

鶴の作として「一代女」は當然女性々格の複雜極まりなき記述を含んでゐることが肯かれなくてはならない。のみならず、其處には「一代男」や「二代男」の遊女には殆ど見られなかつた驕慢があつた。狹く突き詰めた心があつた。嫉妬に狂ふ激しい執着があつた。充されぬ戀の悶えがあつた。過去の不行跡に身も世もあらせず思ひ惱む後悔があつた。云はゞ前者に、遊女なるが故に捨象されてゐた女の心が、此處には表裏を盡して忌憚なく描き出されてゐるのである。記述は愈々複雜微妙にならざるを得ない。「一代女」が「女」を描いて餘蘊なきものと云はれる所以である。

然もかうして複雜微妙の限りを盡して描かれた女性々格の各斷面に、常に絡みついて離れないものは性慾であつた。彼女等の惱みも喜びも悲哀も、すべてが色故の惱みであり喜びであり悲哀でであつた。自ら本書には女性好色生活の、云ひ換へれば女性々慾の、あらゆる隅々の陰翳までが、微妙に描き出されてゐる譯だが、其點に就ては、前に「一代男」の性慾描寫と比較して述べたから、此處には繰り返さない。たゞ此處に描かれた女性の好色生活が、「一代男」のそれの如く抽象された生活の一面でなくて、女

性生活の全面容として取扱れてゐる所に、本書には、一代男などには無かつた複雑な味ひがあることを云ひたい。「一代男」は神職となり肴賣りとなつて生きた。さうして色慾の世界に遊んでゐる。が、一代女にとつては好色生活が即ち彼女の全生活であつた。云はゞ彼女は性慾に衣食してゐるのである。從つて、一面内からのつぴきさせず彼女を引摺る性慾は、他面「食はねば空腹い」境遇のために、外から煽り立てられてゐる。それが彼女の好色生活に、「一代男」には無かつた慘ましい暗さを與へてゐる。太夫から天神鹿戀と落され、寺小姓となり大黑となるに及んで、漸次に色濃くなりまさつて行くその暗さは、茶屋女から蓮葉女、暗物女、ふたせ女と轉々して、遂に六十五歳の顏の皺を紅白粉に塗りかくして、道行く人の袖をひく夜發となるといふに至つて、寧ろ一脈凄凉の感じに變つて來る。「一代女」が「一代男」よりも、讀者の深い感慨をそゝるのは、一つにはかうした點にも原因してはゐないかと思ふ。兎に角かうした暗さに落ち込んでも、なほ脱けきれぬ好色生活の苦しさに責め拔かれた時、卒然として飛躍的な一代女の得脱と遁世とが生れるのは、返す〳〵も妥當な必然であつたと思ふ。

ところで、一代女の生涯のあらゆる斷面に性慾が絡みついてゐるために、毛もすると西鶴は女をたゞ只管に性慾的なもののとのみ觀じたと云はれる。さうして最も徹底した女性の哲學者と云はれるワイニンゲルと比較される。「西鶴の描いた女性を哲學的に說明したものがワイニンゲルであり、ワイニンゲルの述べた思想を實際的に飜譯したものが西鶴である」(西鶴の描いた女性)と赤木桁平氏も云つてゐる。私などもはじめはさういふ考へ方をした。が、よく考へて見ると、夫は少々怪しくなつて來た。成程西鶴に描かれた一代女は、其の生涯を通して終始一貫色の世界に踊り狂うてゐる。がそれは、色一面に即して描かれた「一代女」として寧ろ當然な現れであつた。人間生活の諸體容から、特に色慾生活の一面を抽象した好色本の女性が、性慾の傀儡であることは、後の町人物に、金一面に即して眺められた人間が、すべて金に憑かれたものであつたのと同じ事である。從つて一代女が何んなに性慾に生き性慾に死んだからと云つて、直ちに西鶴がワイニンゲルと共に「女性は常に性慾的である」と云つてゐることにはならない。寧ろ西鶴はその好色本に於てさへ、必ずしも性慾的なら

ざる女性の一面を書いてゐる。」次に述ぶべき「五人女」のおせんを見よ、樽屋と契つた後の彼女は「年月つもりてよき中にふたりまで」生れたのを喜んでゐるではないか。「愚かや子まで八人墮せし」と空嘯く一代女さへ、「夜發附聲」の眞面目な反省と後悔とのうちには、墮胎した子供への判然した母性愛を示してゐるではないか。西鶴は女にさうした一面のあることを確實に知つてゐたのである。

が、子供に對する母性愛は、或は性慾の一變形であるかも知れない。性交の歡喜が或る角度に廻轉しながらの延長であるかも知れない。とすれば、彼の描いた所謂女房氣質なるものを舉げよう。「昔は律義千萬なるを人の女房氣質と申し侍りき」彼は其處に無論必ずしも性慾的ならざる女を問題にしてゐる。性慾を離れた女は描かなかつた好色本に、さうした氣質の具體例がないのは止むを得ないが、それさへ一代男の額を割つた小間物屋源介の女房になると、或はさうした氣質の女であつたのではないかと思はれる。西鶴自身も「世にはかゝる女もあるぞかし」と、其の道徳堅固さを稱へてゐる。「一生の間一人の夫より知らぬ女もあるに、我口惜しきこゝろざし」

と一代女が嘆息してゐる所にも、さうした女性の存在への作者の認識が暗示されてゐるではないか。況して彼が描いた後年の武家物中の女性には、全然性慾の影のさゝないもの〻幾人かゞ數へられた。それを思へば、西鶴は決して女性を性慾的にばかり見てゐたとは云はれないと思ふ。好色本の女性をのみ見て、彼が女性を性慾的とのみ觀じたと云ひ得るとすれば、同時に男性をも性慾にのみ生きるものと云はうとしたとも云へる譯だと思ふ。肉感性追求の猛烈だつた元祿時代、肉の享業にのみ生の意義を感じた元祿時代と思へば、寧ろさうして人間全部が只性の力にのみ引摺られてゐると觀じた西鶴と云つた方が、或はより妥當であつたかも知れない。返す〲も彼は特に女性を性慾的とのみ見てゐたのではなかつたと思ふ。

六　好色五人女と好色盛衰記

西鶴は「一代女」に女を書いた。「一代男」が男の好色生活を抽象的に描いたのとは稍々違つて、色に生きた女の生活を、表裏を盡して渾然と描き上げた。が、其處にはまだ世相は無かつた。色に即して抽象された女といふものを觀念的に取扱つてゐるだ

けて、一般世相裡に於ける女の好色生活を描いたのではなかつた。夫が描かれたのは次で現れた「好色五人女」であつた。此の意味で「一代男」から「二代男」へと辿つた過程を、彼はもう一度「一代女」から「五人女」への推移に繰返したものと云はれる。云はゞ作者は「五人女」に於て「一代女」を五人の女に飜譯して、世相のうちに投げ出して見せたのである。本書は時に標題に於ける「好色」の文字の相應しからぬことを云はれるけれども、かう考へればそれが必ずしも不必要な文字とは云はれなくなる。作者は此處でなほ女をその生慾生活の一面からのみ見てゐるのであるから。

本書はその別名を「當世女容氣」といふ。五巻五章。恐らく誰でも知つてゐる通り、三人の未婚女と二人の既婚女とを中心にして起つた戀愛の記錄である。自ら其處には「一代女」には殆ど見られなかつた戀愛の情緒が、濃厚に纒綿してゐる。と云つて、一部の人々のするやうに、兩者を全然別物扱ひにする必要は決してない。既に前にも云つた通り、西鶴にとつて戀と肉とは不可分だつた。寧ろ未分以前の一塊物であつた。從つて此の二作品の味ひの上に感じられる距離は、女の好色生活を抽象的觀

念的に取扱ふといふ所から、現實世相裡に於ける好色女の生活を描くといふ所に移つて來た、作者の態度の變遷が齎らしたものであつたに過ぎなかつたのである。

本書に取扱はれた五人の女は、何れも果敢な性格を有つてゐる。が夫は無論男性的な强さとは違ふ。所謂ヒロイズムの埒内に入れらるべきものでもない。只恐ろしく燃え易い情熱に、その情熱を直ちに實行に移し得る無反省が添つてゐるのである。從つて夫は一面非常に弱いことにもなる。動かされ易い點で、或は自己をしつかりと把握してゐきれない點で、弱いとも云へるのである。西鶴はさういふ女性の弱さを、旣に「一代女」に書いた。彼女はさうした弱さの故に、目まぐるしく變轉する境遇にひかされて、其時々の氣持になつてゐる。「我定まる男もなければ、いたづらは佛神も許し給へ」――あれ程淫蕩な彼女さへ、定まる男あらばいたづらはすまじと思ひ込んでゐるのである。彼女が淫蕩であるのは、決して素質ではなかつた。只境遇であつた。彼女はたゞ境遇にのみ引摺られて行く程弱いのである、と作者は云はうとしてゐるのであるやうに思はれた。「五人女」に於て、彼はもう一度さうした感懐を示し

てゐる。其處に取殘はれた既婚女の二人、おさんもおせんも、彼女等の境遇が順ならば、夫の家にありたきはかやうの女と云はれる程の、勤勉と儉約と貞潔との女房氣質に生きてゐた。生れた二人の子供を慈しむ母性愛に生きてゐた。然も彼女等の境遇が急變すると、二人ながら其儘直ちに淫蕩な女に變つた。おせんの如き長左衞門としのび逢うた後には、二人の子供を思ふ心からさへ、完全に離れた。彼女等がよき妻であるのもないのも、よき母であるのもないのも、所詮は彼女等を取り圍む環境的條件の如何によるのであつて、決して彼女等自身の素質によるのではなかつた。云はゞ西鶴は女性に彼女等自身の素質に生きゝるだけの強さを認めなかつたのである。それは前にも云つた通り、一面彼の女性觀照の確かさであると共に、其處に彼が人間本來の素質よりも、それを動かす外部的條件——境遇なり環境なりに、より強大な力を認めてゐたことも思はれる。

がそれは兎に角として、五人女に描かれた女性は、何れも根本的にはさうした弱さに立脚してゐながら、一度何かに激しては、梃でも動かぬ剛情さに激變する。執拗な

意氣地と向ふ不見の意地つ張りとに墮する。其處にも西鶴の女性觀照の一面が現はれる譯だが、更に角さうした意地つ張りとして、最も代表的なものは「樽屋物語」のおせんであつた。大人しやかな娘時代にも「かりそめにたはぶれて袖つまひくにも、遠慮なく聲高にして」其男に不首尾を悲しませるといふ激しさ、伊勢參宮の道中では露骨に久七を邪魔にする強さ、さうして結局は「あんな女に鼻あかせん」の姦通——女性的な激しさとしては、或は此處らが絶頂ではないかと思ふ。五人女のそれ〴〵は、程度に濃淡の差こそあれ、何れもさうして反動的な強さと激しさに生きてゐた。戀に驅られては、彼女等は只管に果敢であつた。剛情に無反省であつた。激しい情熱に任せて只一向きに突貫した。彼女等の生活には云はゞ理性が無かつた。冷靜な思考がなかつた。彼女等の論理はたゞ只管に感情の論理であつた。おせんの姦通の動機ばかりではない、おさんの墮落の動機にしても、お七が放火の動機にしても、其處には只焔のやうに渦巻く情熱と、その情熱によつて怪しくも生み出された出鱈目の論理とがあるばかりではないか。其處に無論果敢な元祿の時代精神が反映されて

ゐる。と同時に弱いが故に引摺られ易く、引摺られては一本氣の故に徹して行く女の相がまざ〳〵と描き出されてゐる。西鶴はかうした女の憑かれたやうな行動を、世相のうちにしみ〴〵と眺めた。さうして彼は彼女等に對して「何處へ行く」と問ひかけたいやうな疑惑と關心とを示した。自ら彼は其處に彼女等の生活に、本能に着し煩惱に執するが故に感じなければならない畏怖と不安と哀傷とを見出した。お夏は室の津の明神に、おさんは切戸の文珠堂の靈夢の中に、夫々その非をさとされて、苦惱と悲哀の苦い杯を甞めなければならなかつた。おせんは自ら慘ましい死を選まねばならなかつた。其處に彼女等の道義があつた。例へば何んなに墮落した人間にでも、其心の底にはなほ一脈の正義への愛好がかくされてゐるものであるやうに、彼女等が何んなに盲目無自覺な本能生活者であつても、なほその昏迷した心の奥には、人間的な道義と制約とへの關心があつた。その關心と煩惱に狂ふ心との相剋に、云はゞ彼女等の悲劇はあつたのであつた。西鶴は、彼女等をしてさうした悲劇より覺せしめんが爲には、後日に彼女等を苦しめる道義と良心の制約とに、早くより從

順なるべき以外に術のない事を考へた。「あしき事はのがれず、あなおそろしの世や」といひ、「世に神ありむくいあり隱しても知るべし、人おそるべき此道なり」といふやうな詠嘆に耽つた西鶴は、かくて「かりにも人は悪事をせまじきものなり」といふやうな教戒を口にする作者となつたのである。

けれどもかうした道念と意慾との相剋に身も世もあられず悶え苦しむのは、寧ろ近松の女性であつた。道義と愛慾との悲劇の底に一脈歸一の望みを見せて人間を救ひ上げてゐるのは、近松の世界であつた。西鶴の世界は其處からもう一歩だけ深められてゐた。彼は例へば百の道念と千の制約とが彼女等を圍繞してゐるとしても、然も結局燃え熾る愛慾の焔を如何ともなし得るものでないことを知つてゐた。彼女等の本能に、道念以上の强さと根本性とを認めてゐた。自ら彼の心には悲哀があつた。自ら破滅に進んで行く者の悲劇を認めながら、結局それを何うすることも出來ないことを知つてゐるものゝ遣る瀨ない寂寥があつた。だから彼はかなり氣込んで教戒的な口吻を漏らしながら、然も不知識淋しく吐息するものゝ相を、此處に

示して了つてゐる。
さうした作者の哀感は、同じく西鶴の抱懐してゐた無常觀によつて、一層複雜な色調を與へられてゐる。既にその俳諧を論じた際にも觸れて來たやうに、西鶴は人生無常の想念にはかなり深く入り込んでゐた。自ら彼は人生の生滅を考へた。人の世に起伏する諸々の現象は滅亡と死とを背景とした果敢ない生の營であることを考へた。浮世草子中、さういふ彼の氣持が最も露骨端的に示されてゐるのは本書であつた。本書に描かれた五つの戀は、その最後の一つ「源五兵衛物語」だけを別にして、他は何れもさうした果敢なさに彩られた戀として、悲哀な調子で物語られてゐる。死の冷嚴さと戀の美しさが、其處では微妙に絡み合つて何とも云へない美しさと哀傷とを感じさせる。嘘だと思ふ人は「戀草からげし八百屋物語」の冒頭などを讀んでみるといゝ。燒け出されて寺に遁れたお七が、四邊を眺めて無常を感じ、しほ〳〵と沈み果てゝゐる所に吉三郎が現れて、間もなく艷いた光景が展開される邊に、さうした哀しい美しさと作者の感慨とが、鮮明に浮び上つてゐるから。

が、此の生滅の思想にしても、本能追求に纏る悲哀と寂寥とへの諦視にしても「五人女」ではまだ十分に徹しきれてゐない。さういふ思想や觀察の觀念的表白が多いことからもそれは直ちに肯かれる筈だが、それだけ其處には强調があり、作者が力瘤を入れて掘り下げようとした形がある。其爲に鋭角的な生々しさと鮮明な悲哀感とが溢れてゐる代りに、しつとりと落着いた味ひはない。と云つて惡ければ、强調から生れた感傷があつて渾熟した丸味と澁味とがない。哀艷と悽凉とがあつて、沈潜とふくよかさとがないのである。好色本として其味ひが出て來たのは、次に述ぶべき「好色盛衰記」であつた。「五人女」時代の作者は、徹したとは云つても、恐らくまださうした生滅の思想と人間觀照の徹底境とに安住し得てゐたのでは無かつたのであらう。僅かに味到し得て之を出來るだけ深刻に表現しようとしたのであらう。だから「五人女」には作者の觀照といふよりも、寧ろ思索の影が濃い。觀念的にも强調的にもなつて行つた所以であらうと思ふ。其代り、その同じ點に作者の意氣込みが感じられる。「一代女」に快心の笑みを感じた作者が、更に全力を出しきつて、胸裡に磅礴する磊

塊を吐き盡さうとした氣持が感じられる。自ら彼の創作態度は極めて眞摯熱心であつた。その眞摯さとあぶらの乘りきつた勢ひと一代男製作以來の修練とが相合して、本書中の作品を渾然と纏つた中篇小說として了せた。形の上から、或は技巧の上から云へば、本書はかくて西鶴作中最も傑出したものとなつたのであつた。殊に鈴木敏也氏をして泰西近代劇五齣物のそれに比較させた本書各章の布置と結構の如きは、往々にして云はれる無技巧の寫實家といふ西鶴觀を、根底から覆へすに足りるものであつた。技巧家としての彼の態度が、云はゞ其處に頂點を示してゐるのだと思ふ。各短章としては「暦屋物語」が云ふ迄もなく壓卷であらう。內容に於て最も深刻凄慘であり、技巧や筋立ても夫に應じてかなり巧みに排列されてゐる。おさんの氣持も他の四篇の主人公とは比較にならぬ程複雜である。「八百屋物語」はその結末に行つて幾分氣の拔けた形はあるが、然し面白く纏つてゐる。作品の世界から云へば、これが最も可憐なものと云ふことが出來よう。お七の戀が猛烈であり果敢でありながら、矢張りまだ稚い十六歳の少女の戀であるのは、流石に作者の手腕と觀照の

確さとを思はせる。「清十郎物語」はお夏の戀の動機が面白い。それだけ十六歳の少女の戀の動機とは受取り難いけれども、兎に角かうした動機を描く爲には、本章の筋とは直接の關係のない冒頭の「戀は闇夜を晝の國」の記述も必要なものになつて來る。「樽屋物語」はその結構の不緊密さの故に屢々非難されてゐる。少くとも全體のプロポーションに於ては確實に妥當をさへ缺いてゐる。が、おせんを強く激しい女として描いた點では些の破綻も示されてゐない。其點では作者としての注意が全篇に行渉つてゐる。「源五兵衛物語」は他の四篇が何れも悲劇であるのと違つて、一種の喜劇であるのを面白いと思ふが、作品としては出來損つてゐる。冒頭に少人の死が重なつてゐるのは、後に男裝のおまんを點出した際の狀景を生かすべき伏線として「戀は闇夜を晝の國」同樣の用意と感じられるが、それにしても手際がよかつたとは云はれない。全體の構成にも空想的な、不確な糊塗が感じられる。一體「五人女」の五篇はいづれも當時の巷說に材料をとつたものであつたうち、その四篇に就ては、いづれも原事件の穿鑿か多少可能であるのに、最後の一篇だけは、近松の「薩摩歌」によつて、寛文年

間の事件と想像されるだけで、實際の事實が判然しないといふ。恐らく西鶴の時、既に原事件の輪廓が、他の說話のそれよりもはつきりしない、從つてより多く空想によつて補綴しなければならないものであつたのであらう。とすれば其の作品の失敗は、總て作者西鶴の小說構成能力のうち、空想力に幾分缺ける所のあつたことを語るものでなければなるまいと思ふ。

所で「五人女」に於て世相のうちに投げ出された女性好色生活者の群を描いた西鶴は、「好色盛衰記」に於ては、再度轉じて世相裡に於ける男性好色生活者の群を眺めてゐる。云はゞ「五人女」を直接に承けると共に、「一代男」「二代男」「三所世帶」と發展して來た男性中心の好色本の流れを、作者は「盛衰記」に繼承させたのであつた。本書は「三所世帶」同樣西鶴作と確定してゐないものであるが、美濃判大判、繪は吉田半兵衛風といふ體裁も、西鶴作としての可能を裏切るものではなし、簡潔な、コンマの多い、名詞の重疊した形の多い文章も、調子色合ひ共に西鶴調に近い。「久七生れながら俄大盡に描かれた性の悶えなど、幾らかふざけ過ぎてゐるかと思はれるけれども、然し西鶴に全然緣遠

い現れとは思はない。旁々私は石川巌氏がしてゐられるやうに、大體西鶴作として の可能を信じて行かうと思ふのである。

本書は元祿十四年に「西鶴榮花咄」と改題して再版されてゐるといふ。好色生活者の榮枯盛衰を描いたもので、五卷二十五章の純然たる短篇集である。が、既に榮枯といひ盛衰といふ所にも明瞭に示されてゐる通り、それは單なる色の種々相を描いたものではない。好色本の一種として、無論色に即して眺めた世相ながら、兎にも角にも世相のうちに榮え衰へる人間の運命を描いたものであることに注意しなければならない。本書に描かれた人間も、無論色に生き色に死する人々の群れであつた。冒頭の「松にかゝるは二葉大臣」に、生れたばかりの嬰兒に遊女を買はせた作者が、結末「色に燒かれて煙大臣」には一人の老人の最後の病褥を色里に運ばせてゐる所に、作者がさうした人間を描かうとした意圖は明瞭に觀取される。殊に「色里三所世帶」に放肆な性の追求が悶死に終ることを書いた作者は、此の「煙大臣」には、例へば悶死に終ることを知つてゐても、然も最後の瞬間迄性に引摺られて行くのが人間であることを

象徴してゐるものと見られる。さう思へば、本書に描かれた人間の氣持は、何れも五人女のおさんが切戶の文珠堂の靈夢にさとされながら、「末々は何にならうとかまはしやるな、こちやこれが好きにての勝心」と云つてゐるのと、全然同じものである。自ら作者が五人女のそれぞれに示した疑懼と不安と哀傷とは、其儘本書に描かれた人物の上にも見出されるのでなければならない。

が然し「盛衰記」に於ける西鶴は、「五人女」に於ける如く絕望と悲傷とにのみ住してはゐない。彼の强い性格は「五人女」の絕望と悲傷とにも崩折れはしなかつた。却つてさういふ絕望と悲傷とを通り脫けた。「五人女」が出てから旣に二年、彼は性慾が何んなに苦しく慘ましいものであつても、結局それを離れて生きられる人間でないことを知つた。其處に彼の哀しい悟りがあつた。虛無的な、然も同時に一切抱擁的な、果敢なくも亦穩かな心境が、かくて彼に開けて來た。彼は哀しい微笑を以てさうした愛慾に狂奔する人々の相を眺めやる人間となつて來た。彼は、生れたばかりの子供に遊女買ひをさせて喜ぶ父親や、死床に遊女を娛しむ老爺に輕い微笑を投げかける

と同時に、お化けのやうな女に可愛がられ過ぎて、性慾の怖ろしさに戰慄してゐる男(見ぬ人顏に入聟大臣)にも、「さても此里かしこくなり給ふと云へば、大方中づもりにして來だ一年足らずに二十二三貫目の學問」と、浪費した金に執しながらも性慾に引摺られて行く男(久七生れながら俄大臣)にも、さては迚も久しからぬ浮世にいつまで慾に身を凝らしけるぞ。今は金銀も有餘る身代なれば、思ひ切つたる色遊びして世を心の儘に噪ぐべし」といふ盲動的な男(無分別の三大臣)などにも、同じやうな哀しい微笑を示してゐるではないか。かうした心境に入り得たが故に、西鶴はもう「三所世帶」に示したやうな激しい不安を見せなかつた。「五人女」に示したやうな、聲を勵まして肉感性追求者を戒しめるやうな態度も示さなくなつた。たゞ「何を嘆くぞ川柳、跡の事は水になしてさらりと」「萬事の埓をあけよといふやうな、投げやつたやうな口吻と、「是を思ふに女郎狂ひは四十より内、公事は五十迄、それ過ぎては後生願ふがよし」といふやうな、世俗的な平凡な教戒を繰返すことが多くなつてゐるのである。一面無着意得脱を尙ぶと共に、他面何うしても逃れぬ人間生活であるが故に、そのうちにせめ

てもの調和を求めようとして、世俗的な教戒や道義にかなりの好意と執着とを感じて來た彼の心が理解される。絶望を通り越して、却て世俗を肯定する西鶴の微妙な世界は即ちかうして開けはじめたのである。それだけ本書の味は輕い。浮ついてゐるのとは反對に、しつとりと落着いてゐながら然も輕い。俳諧に謂ふ輕みに似た、ユウモアとペーソスの融け合つた微妙な味ひである。同じ心の傾向を示す作品でありながら、「五人女」の強く重たく生々しかつた感觸に比すると、これは隨分深められた渾熟的な味ひである。此の味ひの故に「盛衰記」の各短章は、夫々深い感銘を以て讀むことが出來る。殊に短章として比較的纒つたものゝ多いのは、流石に「五人女」にあゝした技巧の頂點を示した後、更に「二十不孝」や「武道傳來記」に作者としての客觀的な態度を確立した後の作であることを思はせる。

兎まれ「五人女」に於て苦しく人生を突詰めてみた作者は、「盛衰記」に於て、其處に築き上げられた人生觀を正しく脚下に踏まへながら、逆に人生の流動を眺めて靜かに微笑しながら、之を描叙し去つてゐる。彼が人生の觀照に徹して悲哀のさきの哀しい

調和に味到しようとする形が、其處に觀じられる。彼は其處から更に進一歩して、さうした調和に安住しきつたもの丶氣持を、最初の遺稿「置土置」に示した。此の意味で、本書は直ちに「置土產」に連なるものであつたと共に、金に執しながら色に引摺られて行く久七其他の點出によつても明かに知られる通り、本書には一面後の町人物の世界も包攝されてゐた。彼の創作過程に於ても、亦注意さるべき作品の一つであつたと思ふ。

盛衰記につぐ作品として、「置土產」を好色本のうちに數へる可能性は無論十分ある。が、私はそれに就て多少異つた見方の可能をも思ふものであるし、旁々論評の便宜もあつて、同書に就ては此處では云はないことにする。「男色大鑑」も無論好色本の一種であつたけれども、それも便宜上後に評說する。其他「好色四季咄」「椀久二世の物語」等、好色本乃至好色本系統のもので、或は西鶴作かと云はれてゐるものも二三あるけれども、前者の如きは書名が傳へられてゐるだけで、果して何んな內容のものであつた

かも分らない。一時元祿六年の「浮世榮花一代男」の原版と目されたけれども其の然らざる旨は藤井乙男氏の研究によつて明瞭にされた。「榮花一代男」の原版なら、寧ろ西鶴作としての可能は甚だ怪しくなつて來ると思ふが、さうでない以上、或は西鶴の作であつたかも分らない。が、今日それに就て、何とか云ふことは無論出來ない。「椀久二世」に至つては、其の文調其他、殆ど西鶴とは思はれないものであるけれども、私の觀照力が不足なのであらうか、屢々西鶴作としての可能を主張されてゐる。が若し一歩を讓つて、果して西鶴作であつたとしても、本書は確實に未定稿――といふより只作品としての落想を斷片的に記錄したゞけのものであるのみならず、其の語らうとする世界も、必ずしも西鶴に相應しい世界ではなかつた。從つて特に拾ひ出して云ふべき程の作品とは思へないが故に、同書に對する悉しい考察をも省いて、私は好色本の世界を一まづ立去らうと思ふ。まだ論ずべき題目の餘りに多くをもちながら、私は既に好色本の世界に、あまりに長く停滯し過ぎたと思ふから。

第三節　近代艶隱者の可能と西鶴の虛無思想

「五人女」に現れた西鶴の人生觀と無常觀とを思ふ時、直ちに連想されるものは「近代艶隱者」の主題である。作者は其處に虛無優遊の老莊思想と人生無常の想念との不思議に混淆した心境を問題にした。五卷二十五の短章よりなる本書の前二卷十章は、作者が東の濱の靈山の窟中に草庵を結んでゐる時に窟の前を去來した人々の言行を、後の三卷十五章は同じ作者が旅に立つたその道すがら耳目に觸れた隱者等の生活を、物語ることに擬されてあるが、窟中にて見た人とは死去つた人、行脚に寄せて書いたのは世にある人、何れも實在の隱遁者等をモデルとしたものであるといふ。作者の意圖としては、彼等が脫俗の生活を、すべて老莊的な得脫に結びつけようとしたものであつたらしい。

老莊に尙ぶ所の生活信條は、云ふ迄もなく知識や技巧澤山の僞りの世から脫して淳朴な太古の狀態に還り、それによつて有限の現象界を脫して無限の本體に合しよ

うとするにあつた。あらゆる罪悪の根元である經驗的知識を擯棄して幼兒の狀態に歸り、醜く惱ましい爭鬪を誘發する煩惱我を斷滅して無着恬淡に住しようとするにあつた。既に三十七歳の時、唯花は見えた通りの捨坊主三十七の春もおらんぺと詠んで法體となつた西鶴は、素よりさうした生活信條への或る憬れをもつてゐたであらう。のみならず、徹底的の人生觀照によつて現實世相に起伏する悲劇のあらゆる斷面を見盡した西鶴は、その悲劇の由來するところが煩惱我の追求にあることを知つた。自ら彼は人生に於る悲劇を斷滅せんが爲には、あらゆる煩惱我を否定しなければならない、否定して虛無と自然の去來に任せて優遊しなければならないと觀じたであらう。其處に老莊を尙しとする「覺隱者」の生れ出づべき契機があつた。少くとも「覺隱者」の虛無主義には、其の題名と共に、作者のさういふ思想の推移を思はせる節が一再ならず認められる。「岡崎の市隱」を見給へ、彼は確實に愛戀の惱みを脫御せんが爲に虛無主義に奔つてゐるではないか。「嵯峨の風流男」に至つては、時にふれては舞奴にたはむれ舞童とあそぶ。しかれどもかれに愛を請ふの心なく、富貴に

奢る心もなし。かれと共に遊びかれと共に慰む」と云つてゐるではないか。其處には寧ろ愛慾に着する心の惱みから、所謂粋の境地に得脱して來た形が思はれる。西鶴の云ひさうな言葉だと思ふ。

然も「艶隱者」に說かれた虛無思想は、作者の最初の意圖を裏切つて、純粋に老莊的にのみ纏められてはゐなかつた。其處には寧ろ濃厚に佛敎的な人生無常の想念が絡みついてゐた。「無上迅速に心を付け、己未覺の心主を淸むる」「輛の兄弟」や「目前の愁喜再開別離に觀を發して、はかなくも生死をかなしむ事よと、五障のまよひ愚なるをなげき行く」「隱家の老人」の得脫には、無論老莊の影が射してゐると共に、人生無常の想念が深く深く食込んでゐるではないか。これは一面本書が、寬文年間刊行の繪入本「扶桑隱逸傳」よりの直接の暗示になつたものであるからかも知れない。本書が「隱逸傳」よりの影響をうけてゐるものであることは「近代艶隱者」といふ標題の上に、更に「扶桑」の二文字が冠せられてゐるのでも明瞭だが、その「隱逸傳」には佛敎上の遁世者の話が集められてゐる。自らさうした性質が「艶隱者」にも影さしたのであるかも知れない。

と同時にそれは一面日本の虛無主義の特徴でもあつた。老莊と佛教とをともに海外から受け入れた日本人は此の二つの思想を微妙に融和させた。佛の所謂ニヘヴアナに達するための四諦——煩惱我を原因として憂苦が存在するが故に、憂苦を斷滅せんとして煩惱我を否定しそれによつてダルマを獲得してニルヴアナに達するといふ思想は、玄の又玄なる道を無にして又始めなる本體と觀じて復歸と逍遙とを說き、その手段として我慾と着意とを否定した老莊思想と、根本的に相通する點が無かつたのではないけれども、然も所謂無常觀には老莊虛無の優遊自適の觀念は含まれてゐなかつた。それが我が國人の頭の中では微妙に融け合つたのである。無常だだから着するな、着せずして優遊自適せよ、人々はさういふ思索の開展に從つた。元祿時代にはかうした考へ方が人々を支配した。殊に俳人はさういふ考へ方を喜んだ。彼等は其處から出發して、前にも述べた通りの絕望的な明るさに至り得た。其處には老莊の「道」の觀念は無かつた。たゞ世の果敢なさ其の物を笑つて眺めようとする離れた氣持があるだけだつた。然も彼等は其點への明確な把握を缺いて、彼

等の思念の全部を老莊的と觀じた。さうして只管老莊を倘んだ。西鶴も無論さういふ俳諧師の一人であつた。自ら彼は彼自身の虛無的觀念を整理しようとすれば、その全部を老莊に托して說かうとするより他に仕方がなかつたらう。「艶隱者」はかうしてなつたのである。然もそれが結果に老莊を食み出したのも、かうした成立の故に又必然であつた。殊に五人女にあゝした無常觀を漏らす直ぐ前の西鶴としては、その虛無的想念に無常觀の影が濃かつたのが、一層當然であつた。

が然し本書はその體裁から云へば、西鶴作として發表されたものではない。却て西鶴自著の序文には「西鷺軒橋泉」なる著者の名前があげられてゐる。のみならず本書の文章が、變に力んで迫々しい點や、こちたい談理に墮してゐる點で、西鶴作らしからず思はれる節も少くないのである。石川巖氏の如きは「名殘の友」に出て來る俳人西鷺を西鷺軒と同一人であらうとし、從つて本書を斷然西鶴作に非ずと云はうとしてゐられる。が、かうした作者を構へたことも、辯護してみようとすれば、一種西鶴が慣用的な技巧の凝つたものと云はれぬことはない。キエルケゴオルが彼の著作に

常に假想的な署名をしてゐるやうに、西鶴も亦此處にさうしたトリックを用ひたのであるかも知れない。」彼の他の著書、例へば二代男の細きも、遣手の國が諸分の物語りに、世傳をはじめ「近年の色人殘らず加筆せし物語といふことになつてゐた。」懷硯に諸國の奇事異聞を書き集めるのは、西鶴ではなく伴山といふ一人の假想人物であつた。さういふ技巧が一歩を進めた時、序文のうちに或る作者を假定するトリックも考へられないことはないと思ふ。窟中にて見たといふのは死んだ人、旅で逢つたは今の世の人とする程の技巧家に、その程度のトリックが考へられないことは無論ない。「一代男」と「二代男」に色の世界の轉合書を世に示した作者が卒然として改まつた主題に即した彼自身に、一種の心理的ぎごちなさを感じたとすれば、殊によくそのトリックが理解される。そのトリックが生み出したらしい西鷺軒が、西鷺と同一人ではないかとの說も稍々信じかねる。「名殘の友の卷五無筆の禮帳」に見える、備後の西鷺が、果して西鷺軒橋泉であつたのなら、豐後の西國、筑後の西與、美濃の木因」とあげて來た西鶴は、何故、備後の橋泉」とは書かなかつたか。他の俳人等の軒號は全然顧る

事なく書き下して來たものが、最後の一人に至つて卒然として彼をのみ軒號を以て呼ぶといふのは何うであらう。此點で私は西鷺と西鷺軒とは決して同一人ではなかつたらうと思ふ。布告によつて其の稱號を改めなければならなくなつた時、友人である梅朝の前名を何氣なく頂戴して了つた西鶴である。西鷺の名前から思ひついて、無雜作に西鷺軒橋泉なる人物を設定したと考へる方が、寧ろより妥當ではないであらうか。又その文章にしても、成程當の西鶴の文章に比すれば、不愉快な溷濁と不透明さをもつてゐる。生硬で文字文脈ともに十分こなれてゐない。がその調子は、必ずしも西鶴調と絕對に緣遠いものでは無かつた。山口剛氏の如きは、本書の文章と「二代男」のそれとを比較して、殆ど「同一歩分にあり」と迄云つてゐられる。それ程ではない迄も、後の「新可笑記」や「櫻陰比事」にも、「艶隱者」の文章と一脈相通ずるものが無いことは無かつた。のみならず、本書の紛本であつた「隱逸傳」の文章は、漢文直譯臭味の多い生硬なものであつた。本書の文章には多少其處から來た影響が無かつたとも云へないし、第一主題に即して文致を變へようとし、又變へることの出來る西鶴で

あつてみれば、艶隠者の世界に相應しいものとして、自らあゝした文章を選んだらうともはれる。其處に溷濁と不透明さの目につくのは、前にも云つた自己の思念と老莊とへの把握の不確さを乗り越えて、强ひて夫を老莊一面に片つけようとした所に必然的に生れた缺點であつたと思ふ。

かう考へて來てみると、其處に多少の疑はしさはありながら、兎に角本書の西鶴作としての可能は、決して信じられないものではない。とすれば、例の「こゝろ葉」に、萬海の西鶴追善句として「物語あまたかゝれたる中に風流なる名を取りて――蘭の香や名は埋もれぬ艶隠者」とあるのは、本書が西鶴作であることの決定的な裏打となり得るものではないか。萬海は俳人である。西鷺軒が、西鷺でない迄も、實在の人物であつたとしたら――彼が自ら稿を起して西鶴の推薦によつて出版したものであつたとしたら、其間の消息を多少知らないことはあり得まい。從つて此句の存在は寧てちに「艶隠者」の西鶴作であることを確證するものとも見られる譯だが、大方の人々が此句の存在を輕く見てゐるのは、前にも云つた通り「こゝろ葉」には多少敵本主義的な、

不純な意圖を孕んだ文字が多く含まれてゐる爲に、それを遽に信ず可らずとなすのであらうけれども、其の疑ひは本書が絶對に西鶴作としての可能を信じ得ない場合に、始めて起り得べきもの、かうして可能を信じ得る時には、例へば其處に不純な意圖が藏されてゐたとしても、それは好色本作者としてあらぬ誹謗に埋もれてゐる西鶴に、實際は此の如き作品もあるぞと、特にそれを取出して強調し推奬しようとしたといふ程度のものと解釋さるべきもの、從つて其の推奬に値する程の作品では無かつたにしても、兎に角さうした作のあることだけは確證されることになるのだと思ふ。

と同時に、此句は一面さうした不純な意圖をも孕んでゐたに相違ないと共に、他面萬海にとつて本心からの聲でないこともなかつたに違ひない。其處には彼等俳人が傳統的一般的に向んだ氣持が、力一杯力說されてゐるのだから。とすれば其の同じ理由から、本書が西鶴にとつてもかなり得意な力作であつたらうとも思はれる。堂堂と署名するのに一種のトークワードネスを感じたかも知れないといふ考察とは矛盾するけれども二代男の失敗に焦慮したか、乃至は早くも起つたに相違ない好色

本作者としての彼に對する非難に激せられて、萬海が特に推奬したのと同じ氣持から、俳諧師として最も高く評價した思想傾向を、媚び込んで纏め上げようとしたものであつたかも知れない、といふやうなことも考へられる。

けれど繰返して云ふ、「艶隱者」は西鶴の意圖した通り老莊に徹し得たものではなかつた。其處には老莊の倫理的價値判斷は無かつた。玄の又玄なる本體の觀念もなかつた。さうした本體に執すべき選擇がなかつた。作者は只其處に一切平等・善惡不二の觀念を示した。まづ「西竹の隱者に就て見よう。彼は家業に疎からず、財を求むるにも勸勉だつた友が、却てこれに仇せられたのを見た。色に耽つた友達が亦色の爲に身を失ふのを見た。「然れば何れの所に身を置んと思ふから、世に述懷もなく世を背けるにもあらねど、しばらく工夫用」ひて虛無に逃れたのであつた。更に「網すきの翁」を見よう。そこには君寵を得たが故に妬まれて切腹を餘儀なくされた長子と、同じく君寵を得ながら他の議を怖れ、且つ寵衰ふる日の愁を思ふが故に出家した後間もなく、積年の氣勞れと氣のゆるみのために病死した次子とを悲しむ心から、執

する所あるものゝ悲劇を知つて虛無を思ふ老人が描かれてゐる。それといひこれといひ、何れも人生の悲哀と不如意と暗さとを痛感したが故の脫俗であり優遊自適であつたけれども、然も其處に描かれた人生の暗さや不如意は、必ずしも人間の惡からのみ派生してはゐなかつた。何んなに道德的に動いても、何んなに善を逐うて行つても、結局纒つて來る暗さであり不如意であつた。善意が善意の儘で終らず、好意が好意として終始し得ない悲劇であつた。其處では素より善因善果、惡因惡果は信ずべくもない。善と惡とを問はず所詮は一切を擧げて悲哀の胚子であり苦痛の契機に過ぎなかつた。人間の力では何うにもならない人生の暗さ――其處に人生のほんとの暗さがあつた。絕望があつた。西鶴は人生を觀照して其の暗さと絕望に觸れた。が、旣に愛慾の悲劇を觀じて粹の世界に逸出した所にその傾向の必然を示した彼は、さうした暗さと絕望とに觸れても、決して人生を否定しはしなかつた。只一切の上に高く逸脫した。其處に彼の對人生の態度が確立された譯だ。其の態度は無着意優遊といふ點で確に老莊の逍遙遊と相通ずる。けれども老莊には上述の

如く否定があつた。玄の又玄なる道に優遊せんが爲に、他の一切を否定した。云はゞ否定して道を求めて其道に優遊自適するのである。西鶴のは違ふ。彼のは只一切を光被して自由無端微に流動しようとするのである。「財を求むれば遊興に費し一日もたくはふる事なし。財つくれば遊をやめ、財來ればまたかくの如し。人間の一生は夢現よりも他成事を思惟して、一時のたのしみに遊びの眼をさまさず、あたへあれば駕に乘て心のおもむくにまかせ、あたへ絶ればやむ」(狩中の三重切男)。彼はこんなことを云つてゐる。老莊の根本が道であつたのに對して、これは絶對に道を求めて痩せるのではなかつた。只一切を肯定して無著意の不安を嫌しまうとするのであつた。人寰を離れるのも衣食に粗なのも道の爲ではなかつた。只和平の歡びを享樂せんが爲に一切を肯定して、然も一切に累はされざるべく之を超脱しようとするのである。これを絶對に老莊にこじつけて説かうとしたのは、素より穿鑿不十分の誤譯である。「世渡にかしこきも樂んで渡らば是則ち是ならん。色にふけるも樂しんでは是ならん。何を非と何れか是ならん。是と非は皆内にありて外の見る

にはよらじ。世渡るにも財の集るを樂み財の散るを悲しまば樂みはあらじ。色にふくるとも又同じ。有も樂みなきも樂まば畢竟是也。進むにもたのしみ退くにも樂まば爰に是非なし。外にからまる時は皆善惡あり。外をすつれば二つなし」（四竹の隱者）。西鶴の本音は此處にあつた。善惡不二、一切一如、唯無著意。それを老莊より淺いとも不眞面だとも云はない。かういふ氣持からこそあの晩年のあなた任せの態度も派生する。老莊とは別物でも、兎に角微妙な味ひを含んだ深い氣持であつた。

　が然し本書に於ては西鶴はまださうした深い氣持に生きてゐる作者ではなかつた。僅にさうした方向への彼の關心を示すに過ぎなかつた。從つて作品としての「艶隱者」には、さうした氣持の深さは繰返し語られても、さうした氣持に當然附隨すべき味ひの深さはまだ無かつた。「五人女」が思索的觀念的であつた以上に、これは寧ろ談理的概念的であつた。自ら本書中の各短章には、骨組だけがあつて、適當な肉づけが缺けてゐた。味はふべき味ひが無かつた。僅かに「酒樂の鍬男」「目籠の翁」以下、材料

的に相當の興味を感じさせるもの丶幾つかを數へることが出來るに過ぎない。作品集としては、要するに價値の乏しいものであつたと思ふ。

第四節　最初の轉向期に於ける二作

一　轉向の必然

特殊な作例であつた「艶隱者」は措く。「一代男」に抽象された男性々慾生活の一面を描きはじめてから、後の好色本の幾つかに於て、男女兩性愛慾の殆どすべての斷面を見盡した西鶴は、漸次に彼の眼光を愛慾以外の一般世相に向けて來た。色の世界に沒頭してゐた彼が、一度舊殼を蹴つて他の世界に潜入して行くべき歩みは、かくて漸層的必然的に進められて來たことになる。「本朝二十不孝」と「男色大鑑」とは、此の必然の歩みの前に更に大きな一歩を踏み出したものであつた。前者には後の町人物の世界が取入れられ、後者には後の武家物の世界が重大な構成要素となつてゐる。

尤も、大久保葩雪氏編「浮世草子目錄」の貞享三年の項には、「本年遂に好色本差止めの

命は當路の有司より下りぬ」といふ文字がある。これが果して事實であつたとすれば、「二十不孝」や「大鑑」に西鶴がその作品の世界を變へたとは、素より心境の推移に作ふ必然の歩みでも何でもない、只外部よりの壓迫に餘儀なくされた轉換に過ぎなくなつて來るけれども、元祿といふ時代を思ふ時、其處に好色本差止めといふ一幕を想像することは、寧ろ甚だそぐはないことであるのみならず、宮武外骨氏の「筆禍史」などには全然それを誤りであると斷じてゐる。恐らく何かの誤傳であらうと思ふ。往々にして其の事實を信じようとする人が、單に西鶴作と限らず、好色本の多くが替外題をもつてゐることを以て、その法令を潛らうとする作者乃至書肆の猾手段であつたらうとしてゐるのなども、例へば「二代男」や「諸艶大鑑」「五人女」の「女容氣」等が、その出版當初からのもので、必ずしも法を潛らんが爲のものではなかつたといふから、一向信用の置けない意見になつて來る。「男色大鑑」に好色本としては類例のない落欵を捺した西鶴の自序があることなども、色々な揣摩説を生んでゐるけれども、それも後の武家物には作者が常に署名を添へた序文をさへ書いてゐる所から、作者自身本書を

も武家物に準ずるものとして、武家物製作に感じたと同様の誇りを感じてと見れば、何でもなく説明が出来る。第一「男色大鑑」は云ふ迄もなく男色を書いたものだが、既に女色を描いて其の種々相を究め盡した作者が、軈て男色の世界に移つたといふことは、材料の推移から云つても極めて自然の推移であり、旁々それ以前にも女若二道といふことを口にした西鶴、三千七百四十二人の女と相觸れた世之介をして、同時に七百二十五人の少人に戯れさせながら、念者狂ひ、飛子宿等多少は其の方面に觸れたもの丶、多くを後日に殘した西鶴と思へば、その推移が愈々自然に感じられる。二作の文章が今迄の作品のそれに比して著しく強く緊張してゐることなども、「大鑑」の序文や署名と共に、何かに激した結果と見られる可能性をもつてゐるけれども、それも「二代女」や「五人女」に作家としての十分な手應へを得て、窮屈な心の武裝を捨てた作者が、性格的な強さに突貫した結果、乃至は主題に即して文致を變へる作者の何時もの技巧とも見られる。何れにしても其處から好色本差止めの命令の影を見出さねばならぬことはないと思ふ。殊に貞享三年以後にも「三所世帶」や「盛衰記」を上梓してゐる

る西鶴であつてみれば、彼が其の生前に於て好色本禁止の命に遭逢したらうとは思はれない。從つて「大鑑」や「二十不孝」の產出も、更に其處に暗示された武家物や町人物への轉向も、決して外部的の事情に强ひられたものではなく、作者としての內部的要求の、必然の發展であり屈折であつたのであると思ふ。「一代男」以來「置土產」に至る迄の長い創作過程に於て、一作每に何かしら心境の推移を示した西鶴は、凝固と固定とを知らない作者であつたと共に、その彼の心境の屈折には、かうして常に內部的必然が絡つてゐたのであることが、斷言されて差支へないのではないかと思ふ。

二　「男色大鑑」に描かれた同性愛

「男色大鑑」は別名を「本朝若風俗」といふ。八卷四十章。之を截然と二分して、前半には武士の念友關係を書き、後半には若衆野郎に絡る情事を書いてゐる。純然たる短篇集である。

一體男色といふものは、本質的に「美女のない國の事缺」より起つたものであるのか、始めから變態的な習性であつたものか、容易に判定し難いものであらうが、其の起原

は無論歴史以前からであるらしく、何處の國の古文學にもさうした戀愛を取扱ふたものゝ一つや二つはあるといふ」我國にも古事談に現れた賴通と長季との關係などをその最も古いものゝ一つとして、ぼつ／＼文獻の上に現れてゐる。さうしてさういふ習俗が、室町時代といふ頽廢期以後、緇流の間に流行の限りを極めると共に、若衆歌舞伎の發生などが、一般世相裡に於けるさうした習俗を、廣く速かに傳播させた。然も其の前後から世をあげて戰亂の巷となり、武士の生活が不自由勝ちとなる及んで、既に早くからその芽生へをもつてゐた戰陣の間にも、非常な勢ひでそれが流行して行つた。自ら德川時代の初めより元祿時代にかけては、男色の跳梁する世界に、三通りの區別があつた譯で、それらを等しく男色とは云つても、その屬する世界の異るに從つて、夫々特殊な色調と態樣とをもつてゐた。が、そのうち、西鶴は緇流の生活を彩る男色關係は殆ど問題にしなかつた。彼の知識から云つて、それは止むを得ない結果であつたけれども、同性々愛の種々相を見盡さうとした本書として、それを幾分物足りなく思ふ。殊に坊さんといふものゝ特殊な性格的偏癖を思ふ時、彼等の愛

慾生活が如實に描き出されたら「大鑑」は錦上更に花を添へたであらうと思ふのに。

作者は本書に於て絕對の男色謳歌を敢てした。從來の好色本に於て女道の極意に達した粹人としての面影を見せてゐた作者「三所世帶」に常規は逸しても健康さは失はなかつた作者は、此處に卒然として變態的な素質を示したかとさへ思はれる。が、實際はさうではなかつた。それは只作者の意識的な意圖であつた。强ひられたポーズであつた。だから彼はそのポーズの底に、時々隱しきれぬ彼自身の本體を搖曳させて了つた。「色噪ぎは遊び寺の迷惑」に於ける「覺えなき美女」の「身捨る心中」に感じ入つた彼は、何時の間にか女若二道を同視する男になつてゐる。「京へ見せいで殘りおほいもの」では、餘りに役者を慕うて卒倒した女をひどく可憐がつてゐる。更に「情に沈む鸚鵡盃」では「女はふつゝゝと飽きて、其後は小姓を置かれける。これでも埒の明く事にぞ」と、不用意な言葉を漏らして了つてゐる。所詮彼は衆道謳歌の變態性慾者流ではなかつたのである。自ら彼の「大鑑」は、變態性慾を書いたものでありながら、息詰るやうな頹廢が無かつた。「鬪殺する袖の雪」の慘虐はあつても、陰慘な心の廢

頽と病的な暗さとはなかつた。「大鑑」に對する第二の物足りなさであるが、兎に角さういふ彼が極端な男色謳歌を敢てしたのは、軈て作者としての彼の傾向を露骨に物語るものでなければならなかつた。云ふならば彼は、一度摑んだ主題に對しては、彼自身多少空虚を感ずるやうなことがあつても、そんなことには頓着なく、只徹底のどん底まで主張し盡して了はなければ、氣が濟まなかつたのである。彼が「艶隱者」の主張に無理に獅嚙みついて行つたのも、一面其の性質の故であつた。「三所世帶」の誇張に墮したのも、「二代女」に一生色の踊りを踊らせたのも、無論其の傾向の爲であつた。

が然し何と云つても世之介の好色修行に七百二十五人の少人を必要とした西鶴であつた。若衆野郎の日常の起居にも親しく接してゐた彼であつた。彼が「大鑑」に書いた同性愛の種々相も、流石に複雜を極めてゐた。義理、嫉妬、執心、執着、激情、怨恨、放心等、諸々の情緒に彩られた同性々慾の姿態が、本書四十の說話を通して複雜に味解される。「その身出家にもならず河原の勤めをもやめけるはいかなる思入ぞと、昔よしみある役者尋ねけるに、わが黑髮の何故に惜しかるべし。世におもひ人まし〳〵

てもしも此の姿を見たくも思召さば、見せましてからの上に髪をも剃捨てんと思ふ甲斐なく、今迄は待ちぬれども、人に問はれて口惜しやと其座にして髪を拂ひ、惜しや十九出家の望」涙の種は紙見世」といふ藤村初太夫の心意氣の如き、同性に愛せられるが故に完全に女性化した男の、然も複雑な心の動きを、的確に表現し得てゐるではないか。西鶴の同性愛への理解の妥當さも把握の確さも、端的に覗はれる。

かうした多面正確な内容の故に、本書は世界に珍らしい文獻として珍重されてゐるといふ。「大鑑は日本古文學の内で最も世界的評判を有するもので、英のカアペンタアが激賞したのは周知の事實だが、同性々愛の世界的研究者たる獨のカルシユ・ハークなども、世界の珍寶だと云つてゐます。ヴアジルのエクロカなどゝ共に、若道文學古今の双絶でせう」「シングの戯曲と西鶴の大鑑」と菊池寛氏も云つてゐられる。本書後半に於ける若衆風俗の記述が二代男以下の遊里生活の記述などゝ共に、風俗資料として貴い文獻であることも、素より云ふを要しまい。

が、さうした複雑多面な本書の内容を通じて、最も強く印象されるものは、幾十の戀

愛を貫いて流れる意氣と意氣地の强さであつた。「衆持つてもゐるゝ事の小倫が念者あるが故に主君の御威勢にも從はぬ强さ、念者を聞はれて小倫に命をくれしもの、たとへば身を推かるればとて是を申すべきや」と力む激しさ、遂に主君に成敗される邊り、殊に左の手を斬り落されてから「今の思ひは」と尋ねられて「右の手をさしのべ、是にて念者をさすりければ御惜しみ深かるべし」といふ邊りの强く張り切つた心意氣が、總て「大鑑」の中心的な主題であり生命であつた。女若二道を比較して若衆を雪に咲く雄花の潔さに譬へた西鶴は、又總て同性愛の生命をさうした强さと潔さとに見出したのであらう。彼は賣色の河原者にも例へば前掲藤村初太夫の心意氣にもそれが覗はれるやうに、さうした强さと緊張とを書いた。

と云つて彼は素より武士の念友關係と若衆野郎の戀愛とを全然同じに描いたのではなかつた。同じ元祿といふ時代の子として、或は同じ男と契る男として、相似た强さと激しさとを有ちながら、武士には殊更圭角があつた。彼等の戀には豪快と殺伐の氣とが絡んでゐた。動ともすれば爭鬪を見、殺戮を結果する淒愴な雰圍氣の中に、

義理に生き節義に死する稜々たる武士の氣骨があつた。颯爽たる戀である。それに比すれば若衆野郎の色戀には、矢張り優艶さが絡んでゐた。心情の女性化に艶きわたる雰圍氣が醸し出されてゐた。鋭いながらに溫柔艶冶な戀である。此點で本書後半の四卷は直ちに從前の好色本の世界を繼承し前半四卷は武士の節義を謳歌した後の武家物に連つてゐる。其處に作者の必然の心理過程が辿られるが、それよりも、さうした內容的の相異を强調する爲に、作者は本書の前半と後半とに、その文章をさへ變へてゐる。「大鑑の出た貞享四年の卯年は、西鶴の筆が高調に達した時で、筆觸の雄渾なる、心理描寫の鮮なる、遙に他の諸作を凌駕してゐる」と菊地寛氏も云つてゐられるやうに、「大鑑」の文章は全體として非常に勁い。活氣が旺逸してゐる。「一代男」の簡素恬淡、「一代女」の哀艶悲愴と比較すると、確に雄渾傀麗である。が同じ「大鑑」一つの中でも、殊に其の文調の雄渾なのは前半であつて、後半には餘程其の鋒芒が柔げられてゐる。づつと柔く平明になつてゐる。それは無論作者としての正しい配慮の反映であらうし、又其の配慮が作者の才腕によつて生かされてゐる譯だが、たゞ此

の雄渾傀麗は、作者にとつての持ち味ではなかつた。自ら時には努力の跡のみ見えすく拮屈聱牙に陥りもした。何うかすると「艶隠者」のそれに感じられたやうな客錬な文字の響も耳についた。不確な漢章の引用も目立つた。其處に本書、殊に前半への非難があり得ぬことはなかつた。云はゞ本書への第三の非難である。さうして此の強ひて文章を強からしめようとした作者の氣持に一脈の繋りのありさうな、作中人物の上に加へられた理想化――それが渾成されてゐる場合は無論問題ではない――上の破綻は、本書のもつ第四の缺點として數へられる。「編笠は重ねての恨み」に於ける髪結の清七が、末段に及んで突然劍道の達人となる――達人とならなければおさまりがつかないやうな不自然な作品の構成は、その缺點の代表的に曝露されたものであらう。

けれども此の第三第四の缺點は多く前半四卷にのみ見出されるもので、作者に強ひて裝はれた力みのない後半四卷は流石にいたについてゐた。其處には強ひて誇張された嘘がなかつた。素直な感觸が味はゝれた。同じやうな内容を取扱つた「色

に見籠むは山吹の盛」と「面影は乗掛の繪馬」とを比較してみると、其間の相違はよく分ると思ふ。その代り、後半四卷には各短章にさして複雜な脚色は無かつた。寧ろ何うかすると「一代男」や「二代男」が遊女の評判記的な性質に墮してゐたのと同樣に、單に野郎や若衆の評判記に過ぎないかとも思はれるやうな、脚色上の苦心には乏しいものであつた。が、前半四卷には夫々かなり複雜な、時には巧緻を極めた脚色が認められた。さういふうちにも「形見は二尺三寸」や「中脇差は思ひの燒殘り」などに示された構成上の技巧は、西鶴の得意とするものであつたらしく、後の作品にも屢々踏襲されてゐた。前者では、母親の遺言狀を見る冒頭から、主人公勝彌が仇討に發つ道中のことは何となく書過して、さて敵討つてから念者の源介をして其の道中に氣をつけた段々を話させる。少し說明的ではあるが巧みな段取りであると思ふ。後者の「骨桶二つ風呂敷包みに取添へ、今やなど無常は辨へ難き男の涙ぐみて高野道を尋ねける」といふ突兀たる冒頭より起つて、逆にそれ迄の經緯を手繰り出しつゝ、其間に說話を幾分づゝ前に進めて行く形は、前者を一層渾熟させたもの、面白い說話進行法

であると思ふ。「一代男」以來作品の布置や脚色にも相當の苦心を費して來た西鶴は、自らかうした巧妙な排列法をも感得したのであらうが、さうした點では「大鑑」の後半は前半に及ばない。所詮夫々に長短のある前、後半であつたけれども、只菊池寛氏が激賞した心理描寫の鮮かさに至つては、前半も後半もない、本書の何れの部分にも認められる長所の一つであつた。尤も西鶴の心理表現の鮮かさは、特に本書にのみ見出されるものではなく、「一代男」其他の作品にも十分認められたものであつたけれども、それが本書に於ては殊に微妙な陰翳を帶びてゐるのである。それは無論題材の關係であつた。意氣と節義の強く直線的な心情に纏綿する戀の情緒の優艶さ、その匂やかな優艶さと直線的な強さとの錯綜が、作中人物の心情を殊に色濃やかな陰翳のうちに置いたのであつた。と同時に前半に於ける短編としては比較的複雜な構成が、自ら人物の心の動きにも複雜さを要求した。「形見は二尺三寸」の主人公が敵討に旅立つ前の心の動きの複雜さは後者であつた。藤村初太夫が剃髮の前、小倫が念者に傘さしかける邊りは、前者に由來する心理表現の濃やかな味ひをもつてゐた。

「玉章は鱸に通はす」の甚之介より森脇權九郎への書置などにも、若衆の念者に對する戀情に嫉妬不滿怨恨等の融け合つた形が、優れて微妙に描き出されてゐた。殊にそれらの心理表現が、普通に所謂心理描寫の抽象的解剖に墮せず、心理を孕んだ形の動きとして描き出されてゐるために、一層陰翳の多い、ふつくりした味ひのものとなつてゐる。徹底的客觀派としての西鶴の態度が、かうした所によき効果を齊らしたのであつたと思ふ。

三　本朝二十不孝と西鶴の教訓

「本朝二十不孝」五卷二十章は別名を「新因果物語」といふ。亦純粹の短編集である。その題名から推して、不孝者に關する色々な咄を集めようとする意圖によつて成つたものであることが思はれる。好色生活を描くに慣れた作者は、恐らく、好色生活――極道――親不孝、といふやうな平凡な思考の屈折を經て、かうした主題に即したのであらう。本書冒頭の三章が更に角色を根本とする不孝者の咄である點で、殊にそんなことが考へられる。彼はかうした主題に即すると共に、その主題によつて支那

の傳說二十四孝の裏を行く、といふやうなことに、淺薄な知的興味を感じようとしてゐる。が、既に孝といひ不孝といふやうな道德的の問題に觸れて來た結果、さうした輕い遊戲的な氣持とは相容れない眞面目な敎戒にも、作者は强く惹きつけられなければならなかつた。其爲に本書は特に敎訓物とも云はれて居り、作者も亦一面それを意圖したらしく、到る所に敎戒を挿んでゐるのみならず、隨所に所謂天の配劑の觀念を取入れた。善因善果惡因惡果の因果觀念を屢々說話の基調とした。其處に新因果物語」といふ本書の別名が生れ出た。が、恐らくは作者の、常に出鱈目な飛躍を敢てする連想の方向と、貧弱極る思考力との故に、本書は作者の最初の意圖を裏切つて、單なる不孝者の咄といふ以上に、人間の惡を描かうとするものになつて了つた。と同時に敎訓といふ意味にも合致しない單なる因果譚や、神怪譚系統のものや、さては敵討說話などさへ雜然と收められて了つた。此の意味から云へば、本書は後の「懷硯」などゝ共に、諸國の奇譚を收錄した一種の雜話集とも呼ぶことが出來ると思ふ。

が、そんなことよりも、その製作の動機に於て好色本作者としての直接の延長線上

に立つてゐた本書の作者は、その製作の態度に於ても亦「一代女」や「五人女」の作者としての直接の延長線上に立つてゐた。云はゞ本書は、それらの作の成功と手應へとに氣を負うた作者が、すべての狐疑と逡巡とをかなぐり捨てゝ、驀地に彼自身の本質に徹して行つた作であつた。果敢な、一向きな強いリズム――作者の性格が、今迄其の自由な跳躍を抑へてゐた警戒と戒心との繫縛を斷ちきつて、勇敢に、大膽に、力一杯押し進んで行くといふ形が、かくて本書にはついて廻つてゐた。之を本書冒頭の一章に就て見る。室町三條の邊に隱もなき歷々の子篠六は、七年以來女若二つに金銀を湯水の如く蕩盡した揚句、金に窮して父の命を賭けた死一倍の金を借りようとする。對手の男の疑ふのを徹頭徹尾噓で丸めて漸く借りた金は、また忽にして浪費される。然も親爺の無事なのを見て神に死を祈る。七日を限つて調伏する。効あらはれて親爺眩暈の心地といへば、喜び勇んでかねて用意の毒薬を氣付と稱して與へようとした結果、自ら毒を嚙んで果敢なくなつて了ふといふのがその大體の筋であるが、人の自然の死を待つ葬儀社の存在さへ快くは眺められぬ世の中に、之はまた何といふ

徹底した人間であらう。作者が彼を描くに當つて示した態度は、たゞ人間の惡の底の底迄見究めようとする態度であつた。浮薄な誇張や空疎な惡ふざけとは違ふ、只ぐん／＼と底を究めるのであつた。これでもか、これでもか、といふ態度であつた。此の態度の故に、彼は極道者の文太左衞門をして妹を投げ殺さした。次の妹が身を賣つて家の悲運を救はうとした二十兩の金を盗んで、撞目町に正月買と浮かれ出させた（大節季にない袖の雨）。大釜で煮られる石川五右衞門には一子を我が下に敷かせた。それを哂へば不便さに最後を急ぐ」と尤もらしい嘘を吐かせた（我と身を焦す釜が淵）。西鶴の強い性格はかうした徹底的の人間觀照を可能にしたのである。寧ろ病的とも云ふべき彼の強い性格は、かうした怖ろしい人間性の深潭をも、まぢろぎもせずに直視したのである。直視して更に強調と醜化とを敢てしたのである。その強調と醜化とを敢てした所に、彼の徹底した人間觀照と、其處に生れた人間への絶望とが感じられるのでなければならない。

而然も彼の驚くべき性格の強さは、さうした觀照の著しさにも崩折れなかつた。人

間の徹底惡と徹底醜とを見盡した彼は絶望にのみ住してはゐなかつた。更に徹して惡と醜との彼岸を見た。其處には無論早く既に艶隱者に露頭を示された唯一不二の世界があつた。その世界では惡が必ずしも惡ではなく善が必ずしも善ではなかつた。着すればこそ善といひ惡と區別するものゝ所詮は天の思召しの儘に流るゝ理法の一面に過ぎなかつた。一切を孕んで流れ去り流れ來るものは善でもない惡でもない、たゞ一面の天の理法であつた。人間は何う足搔いてもその理法の支配から逃れなかつた。何う踏み外してもその理法の大道から外れることはなかつた。其處にはすべてが孕まれてゐた。すべてが流れてゐた。すべてが同じものであつた。だから人生の悲哀は必ずしも悲哀として終始するのではなく、幸福は不變の幸福として永久に續くのではなかつた。たゞすべてが變轉であつた。變轉だけが唯一不變のものであつた。人間の意志も分別も才覺も智慧も、其處では何等の働きをなし得るものではなかつた。人間はたゞ不可抗の變轉の前に謙虚に合掌するより他はなかつた。西鶴はそれを觀たのである。「二十不孝」に惡を觀じた西鶴は、かうし

て悪を突き貫けた彼岸の世界に、絶對不可侵の天の支配を感ずる男になつたのである。自ら彼は天の支配に從つて靜かに生きようとする氣持を示した。見給へ彼は本書の序文に、「雪中の笋八百屋にあり、鯉魚は魚屋の生船にあり、世に天性の外祈らずとも、先々の家業をなし、祿を以て萬物を調へ、教を盡せる人常なり」と、一見極めてのんきらしい、が味ひの深いことを云つてゐる。

けれども「艶隱者」に於て既にさうした思念を捉へながら、それを正しく把握することの出來なかつた西鶴は、本書に於ても亦その觀念を正しく意識してゐるとは思はれなかつた。彼は却て其處から所謂因果の觀念を抽出した。天の支配を所謂天の配劑と飜譯しようとした。親不孝者の篠六は、「開立所を去らず燒えず毒の試みをして死んで了つた。極道者の文太左衛門は天忽ち之を罰し給ふて狼の餌食となつた。其他或は「親に繩掛し報目前の火宅」「なほ又の世は火の車、鬼の引香になるべし」「我と身を焦す釜が淵」といひ、或は「此藤助が身の難儀は皆親の言葉を背きし罰ならん」「人は知れぬ國の土佛」といふやうな因果應報の觀念が、かくて本書の隨所に塗沫された。「善

惡の二つ車」といふやうな、さうした觀念にのみ執した說話も物された。が、此の飜譯は無論正しくなかつた。天の支配の觀念は、無論さうした因果觀に飜譯さるべきものではなかつた。兩者の形には、それは多少の類似はある。少くとも天の支配を尙まうとする氣持から、天の配劑を信ずるといふ氣持に墮して行くことは、あり得さうだ。が、それは不可い。天の支配は因果の觀念のやうに功利的な意義を含んではゐない。それは時としては善にも惡の結果を招來させ、惡にも歡びの種を植ゑさせる。所詮は唯一不二の生滅流轉である。善因善果惡因惡果を絕對に信ずる因果の觀念とは、素より全然相容れない。因果觀とは畢竟終極迄の善と終局までの惡とを信ずる思想である。對人生觀照の淺く槪念的なものでなければ、さういふ思想には入り得ない。從つて西鶴は此處に彼自身の氣持を非常に淺く誤譯したことになる。「二十不孝」がさうした因果觀念の淺さからはみ出して、時に戰慄を値するやうな深い世界を暗示し得てゐるのは、無論彼の作家としての態度が槪念に着せずに、實感を出來るだけ具體的に表現しようとするものであつたゝめである。此の意味で、例へば「人

知れぬ國の土佛」や「善惡の二つ車」のやうな、因果の觀念にのみ終始しようとしたは作品は、「二十不孝」としては味ひの淺いものであつたといふことが出來る。
が、さうした因果の觀念をも含めて、本書に盛り込まれた教訓は、決して輕く無視されていゝものではない。西鶴は天の支配に安住しようとした。如是即人生と觀じて、あるが儘の人生をあるが儘に肯定した。惡も醜も所詮は止むを得ぬ人生の必然と觀じた。其處に前にも云つた通り彼の絶望があつた。が彼はその絶望に住して人生と人間とを抛擲して了はうとしたのではなかつた。惡と醜とを肯定して、人間を爭闘と衝突との渦卷きのうちに、自ら破滅に急がせようとしたのではなかつた。
既に好色本に於てさうした態度を示したやうに、所詮はそれが唯一絶對の人生であり、其處に悲喜し哀歡するのが人間の避け難い運命であると觀ずるが故に、其處にせめてもの和平と調和とを樂しませようとした。云はゞ感情で、心で、人間と人生とに絶望した彼は、理性と思惟とで之を救はうとしたのである。だから彼の作品には、人間に絶望して之を突放したものゝ冷嚴な味ひと、人間の肩に手を置いて優しく之に

說きさとしてゐるものゝ溫い言葉とが、不思議に混り合つてゐた。此の意味で彼の教訓は、必ずしも彼にとつて第一義ではなかつたと共に、又必ずしも單に裝はれた身振りではなかつた。其處には人間と人生とへの溫い關心が藏されてゐた。たゞさうした性質の故に、彼の教訓には心の裏打はなかつた。絕對の强要にまで突詰める情熱の激しさを孕んではゐなかつた。僅かに示された人生の指標に過ぎなかつた。が、それにしろ、彼の人生と人間とに對する寧ろ眞面目な、重苦しい思念は、其處に反映されてゐると思ふ。「二十不孝」はその突詰めた人生觀照の故に、西鶴の全創作中でも特に注意せらるべきものゝ一つであると共に、其の教訓物としての性質の故にも、かくて一應は注意されなければならないものであつたのである。たゞ其の教訓が所詮は善惡其物に執するのではなくて、せめてもの調和を樂しまうとするためのものであつたが故に、高い理想はなかつた。只管に世俗的であつた。のみならず、それは教訓といふよりも、寧ろ對人生の態度を指示する處世の方針といふ形に、屢々墮してゐた。其の教訓の性質上、それは止むを得ない結果であつたと思ふが、其爲に本書に

は寧ろ教訓物といふ觀念には相應しくない内容も、隨所に描き出されてゐた。それには、西鶴の世俗肯定主義が反映されてゐると思ふ。一度世俗を客觀した西鶴は、その絶望の底から跳ね返つて來ると共に、只管世俗の是とし非とする所に從つて、世俗の調和を紊すまいとする態度に墜ちて來たのであらうと思ふ。

五卷二十の短章の中ではまづ冒頭の二章が面白い。嘗て志賀直哉氏が推奬した通り、怖ろしい迄に徹底してゐる。「親子五人仍書置如件」もいゝ。暗い不氣味な人生に直面して、戰慄といふに似たものを感じてゐる作者の氣持がよく分る。これに似た感觸を感じさせるものに「跡の剝けたる娌入長持」がある。說話構成上の手腕を思はせるものは「旅行の暮の僧にて候」であらう。複雜な事件の經緯が巧みに排斥されてゐる。「善惡の二つ車」なども、さういふ點では優れた纒りをもつてゐたものであると思ふ。作者はこれらの作を通じて、完全に材料を支配しきつてゐた。好色本作者としての彼は時に材料に即き過ぎて、作者と作品との距離を紊し勝ちであつたのだが、此處では所謂即かず離れずの客觀的態度を完全に持し續けてゐるのである。作者

として の修行が積まれて來たことが肯かれると共に、彼が人生に徹して却て其處から離れ、靜かに人生其物を客觀し得る心境に入り得たのであることも、其處に暗示されてゐるのでなければならないと思ふ。

第五節　武家物

一　武家物と西鶴

「男色大鑑」に武士の念友關係を書いた西鶴は、自ら武士氣質に觸れた。優艶な戀の情緒を貫く武士の節義と意氣とを書いた。その直接の延長線上に立つた彼が、武家氣質其物を主題としたものが即ち武家物であつた。實質的には頽廢と轉落とへの道を辿りつゝあつたにしても、武士はなほ當時の支配階級であつた。好色本の作者として既に幾多の非難と嗤笑を與へられたに相違ない西鶴は、或は其處に作品の材料を見出したことに、一種反動的な誇りを感じたのかも知れない。「男色大鑑」にしたやうに、彼は「武道傳來記」の序文に鶴永・松壽の落欵を捺した。「武家義理物語」の序文に

は更に堂々と鶴永を署名した。「新可笑記」の序文にも亦難波俳林西鶴と書いた。尤もかうした署名は、一面浮世草子作者としての彼の名聲が高まると共に、その名によつて賣らんとする目的で書かれたものであつたのかも分らないけれども。

兎まれ西鶴は武家物に於て好色本とは全然關係のない主題に即した。其處に彼の第二の活動圏が開けた譯だが、然し此の活動圏への轉換は、彼にとつて寧ろ偶然に過ぎなかつた。色の世界を見盡して覺えず武士の生活に立入つたが故に、期せずして見出された活動圏に過ぎなかつた。だから其處には作者としての内部的表白衝動の必然の燃燒が感じられなかつた。熱意の作はない空疎さと概念の空洞な響とが、到る所に曝露された。浮世草子作者としての彼にとつて、それは極めて重要な第二の活動圏でありながら、其處には彼を重からしむべき作品が、かくて遂に生れなかつた。却て其處には西鶴の此の世界への理解の不足が反映されてゐた。鋭い觀照の眼をもつた作者ではあつても、西鶴は結局町人であつた。武士の世界を觀覦することの出來ない町人として、彼は只武家生活を遠く眺めた。自ら武家生活の形骸と

輪廓とを捉へ得ても、其處に磅礴する武士の心の眞實は摑み得なかつたのである。その代り、武家生活を描いて輪廓を摸する以上の理解をもち得なかつた彼は、好色本に於て屢々陷つたやうな、材料との距離を忘れて作品に即き過ぎる、云はゞ作家としての昂奮にも、武家物では陷つて行かなかつた。彼は其處では常に材料との適當な間隔を保つてゐた。結果は作者としての純客觀的な態度を、彼は此處で確立することが出來た。「二十不孝」に旣にさうした態度への步みを見せた西鶴は、武家物に指を染めずとも、何れはさうした態度を確立したであらうけれども、少くとも武家物がその步みを速め、完成させたことは疑へない。彼が武家物を書いた効果は、此處に求めらるべきだと思ふ。それ程作品としての武家物はつまらなかつた。かなり敏感な自己批判の直覺をもつてゐたらしい西鶴も、亦其點への明確な意識をもつたのであらう。彼は折角選んだ此の活動圈に長くは止まらなかつた。「傳來記」と「義理物語」とを純粹に此の圈內に屬すべき作品として物したゞけで、「新可笑記」には實は早くもその活動圈から一步を踏み出した形を、彼は見せて了つてゐる。彼結局は武家物の作

者ではなかつたのであると思ふ。

二　元祿の武士氣質と武道傳來記

元祿の世相を思ふ時、最もアイロニカルな存在は武家階級である。劍戟の間に馳驅し砲煙の巷に奔走してこそ彼等に存在の意義はあれ、時つ風枝も鳴らさぬ泰平の世には、空しく髀肉を嘆ずる以外に爲すべき仕事がない筈の彼等であつた。のにも係らず彼等は元祿の泰平に、世の支配階級として、新興の町人階級の上に巍然と蟠居してゐた。それだけでも變な微笑を感じさせるのに、彼等はもつと滑稽な――見方によつては悲慘な二重生活を生きてゐた。彼等は世の支配階級としての名譽と光榮との爲に、所謂武士道に生きなければならなかつた。その武士道なるものは、元來が武士の主從關係の間に於ける情誼が凝つて結晶したものを、何時の間にか一般生活の準據乃至規範に迄推し擴げられたものであつた。從つて其の成立から云へば、それは武士の感情生活を拘束するものでも何でもなかつたけれども、世に昌平が續き、武士の主從關係が死生の間に融合して一塊りとなる機會のない時代となつては、

それに純情の裏打が無くなつた。のみならず家康以來の文治主義による儒教思想の注入が、その純情的だつた規範を忠、孝、信、義と概念化するに至つて、武士道の情的必然は愈々稀薄にされて、ただ理知的な拘束となつたのである。眞吾の底より流れ出づる自然感情の結晶ではなく、只思想的形式的に彼等を繫縛する道德となつたのである。武士にとつて、それは素より苦しい負擔であつた。殊に元祿時代の武士は、早く既に感情の剛强さを失ひつゝあつた。無論一面には、原始的な士的感情の剛强さを失つた代りに、洗練された品性と士的道德とを備へたものもあつたけれども、他面彼等は時代的風潮に薰染されて、剛强さを失ふと共に遊蕩情弱に墮して行つた。それも一つには德川氏の政策であつた。自家の安泰を計らんが爲に、幕府は常に武士の素朴な剛强性を失はせて、一面文治主義による品性の陶治を計ると共に、他面惰弱浮薄に走るのを默許した。その結果、元祿時代の武士の多くは、金と色との間を動く世相に化せられて、武士としての表藝を捨てた。或は色の世界に沈湎して三味線小唄に親しんだ。さういふ彼等にとつて、武士道は當然重苦しい桎梏でなければなら

なかつた。然も更に後の時代の武士程に頽廢の色に染んでゐなかつた彼等は、屯に角武士としての名の爲にだけは、其の重苦しい桎梏に殉じ、武士道に適從したのであつた。其處に彼等の二重生活があつた。其處には常に心情の要求に背離した名に殉じなければならないものゝ慘ましいディレンマがあつた。

と同時にかうした元祿武士の優柔惰弱の半面に、昔ながらの意氣と節義を倘む氣持があつた。素朴と强剛とに誇らうとする人々があつた。然もさうした武士的氣稟に生きる人々さへ、泰平の元祿世相には相應しい存在ではなかつた。彼等は欝屈する强剛の氣を漏らすべき機會がなかつた。力は空しく中に蓄へられた。その力が常に捌け口を求めてゐた。自ら彼等の擧措は泰平の世に相應しからぬ粗暴に流れた。不自然な刺戟を求める變則な生活態度となつた。怖ろしく醜いものを食ひ競つたり、眞夏にどてらを身につけて凉しい顏をしたりする氣風さへ、彼等の間に養はれた。それ程力の過剩に苦しんでゐる彼等は、僅かな刺戟にも自ら進んで激動した。所謂睚眦の怨をも報じ、報じては酷薄無道に迄墮しなければ止まなかつた。自

然彼等の生活には殺伐の氣が絡んでゐた。慘虐性が溢れてゐた。寧ろ一脈の蠻味さへ漂うてゐた。

かうした二つの氣質が微妙に錯雜しあつた所に、元祿武士の相があり、彼等の生活と彼等の間に釀し出される事件とがあつた。西鶴の「武道傳來記」はさうした武士の相と、さうした事件とを描いた短篇集であつた。

「傳來記」八卷三十二說話はその別名を「諸國敵討」といふ。それによつても知られる通り諸國に起つた敵討を、恐らく新舊取りまぜて、傳へ聞くが儘に書き綴つたものであらう。噂咄しの聞書きといふ程度の、作者の感情移入の極めて乏しい、寧ろ骨組だけの物語り集である。が、其處に描かれた武士の剛强さは、或は激發し易い性質は、流石に西鶴のよく知つてゐた元祿時代精神の一面であつたゞけに、眞率な流露感を伴つてゐる。「傳來記」にとるべき所はさうした點の描叙だけであつたかとさへ思ふ。少くとも敵討を書いた本書が、敵討其物の經緯を書いたといふよりも、寧ろさうした武士の强剛さを描いたものといふやうな印象を與へるのは事實である。讀後數句、

敵討の經緯は忘れ盡して了つても、さうした剛强さの印象だけはかなり鮮明に腦裏に刻みつけられてゐる。

けれども西鶴はさうした剛强さに必ずしも多くの好意をよせてはゐなかつた。それも一面無理はなかつた。さうした剛强さは、本書各説話に於ては、常に敵討を結果すべき爭鬪に現れてゐた。さうして其の醞釀される原因が、常に如何にも些細なことであつた。新田原藤太は異名を以て呼びかけられたが故に激して朋輩を斬つて捨てた。「炬燵も歩く四足の庭」に描かれた武士達は己等が失敗の噂をするが故に朋輩に果し狀をつけた。「不斷心懸の早馬」の鞠島判右衞門と楢井民部とは、路上の摺れ違ひに挨拶をしたせぬの爭ひから、矢張り果し合ひに及ぼうとしてゐる。理否もなく事の輕重もない、只辱しめられ名を汚されゝば勃然としていきり立つのが武士の心でも、之は餘りにその激發が安つぽい。と同時にさうして激發された强剛さには、常に一脈の蠻味がついて廻つてゐた。さういふ點で著しいのは、我が命の早使の磯部賴母や、「女の作れる男文字」の隨夢の所行であらう。前者は臣下の妻に戀慕して

之に拒絶されたのを憤り、女を庭前の櫻に縛りつけて嬲殺す。後者は愛妾に密夫ありときいて之を二布一つの裸體とし、兩手の爪を剝いで證を立てさせ、更に指を切らせようとして肯じぬを手討ちにする。西鶴は後の「義理物語」に「むかしは勇を專らにして命を輕く、すこしの鞘とがめなど云ひ募り、無用の喧嘩を取結び、その場にて打果し、或は打手を切ふせ、首尾よく立のくを侍の本意のやうに沙汰せしが、是人の道ならず。仔細はその主人、自然の役に立てぬべきために其身相應の知行を與へ置かれしに、此恩は外になし、自分の事に身をすつるは天理にそむく大惡人、いか程の手柄すればとてこれを高名とはいひ難し」と云つた男である。多くの好色本に粹の境地を稱へた人である。かうした人々の行動が、如何に過剩な生活力の眞率當然の流露であると觀じても、之を是認する氣持にはなれなかつたらうと思ふ。

果然彼はさうした剛强さに生きる人々を、作品のうちの、同情さるべき位置には置かなかつた。すべてを敵討たれる側の人とした。さうして彼の同情を、さうした人を敵としてつけ覘ふ人々の上に注いで行つた。

敵討たれる人々の行動が、以上の如く野蠻不洗練ながら、兎角率直な眞情の流露であつたのに對して、敵討つ人々、乃至は彼等を圍繞する人々の側には、前に云つた生の欲求と名の爲め所謂武士道に執して行かねばならぬことゝのディレンマに惱む心が多かつた。無論其處には敵役同樣の張りつめた心に生きる者もあつた。が、さういふものゝ間にまじつて、形骸的な武士道に心にもあらず隨順して行く者がかなり多いのである。「愁の中へ樽肴」の主人公は、元より意趣なき事ながら、世間の手前にかく身を碎いて敵を討つてゐるではないか。討ちともない敵をうつのも所詮は名の爲め武士道のため、對世間の顧慮のため、討たねばならぬと強ひられるからである。「不斷心懸の早馬」の二人が「武士の義理程是非なきものはなし。」兩人が最後は何の意恨もなく、世間の思はくばかり恥ぢて自命捨つる夢路の友、けふをかぎりなればうき世の名殘酒心よく酌かはしてさて差違へて死するのなどには、殊に概念的武士道の亡靈が跳躍を逞しうしてゐる。それだけ彼等の武士道には、餘儀なくされたものゝ噓と弱さが絡んでゐる。と同時に其處には例へば「嘐嗜といふ俄正月」の十太郎が「最

後は知れて女郎買の事」といふやうな、止むに止まれぬ武士道の義理に、明日死ぬことを覺悟しながら却て募つた美的生活への執着に引摺られて行くといふやうな、武士道と生の要求との相を、さながらに描き出した節も所々に見かけられた。武士道を桎梏と感じながら、その桎梏に支配されて行く元祿武士の心、それは銳い目をもつた觀照家としての西鶴に、恐らく最も相應しい材料であつたらう。彼が此點から武士生活を眺めて、其處に織り出される微妙な心理の陰翳を剔出したら蓋し隨分面白いものが、出來上つたであらうと思ふ。

が「傳來記」はさうした方向への意圖を以て物されたものではなかつた。さうして作家としての西鶴は自ら意圖した方向にのみ、眞直に徹して行く人であつた。從つて彼は時にさうした面白いものゝ片鱗に觸れても、之を輕く見過して、却て單純に名と武士道とに執して行くものゝ行動を、讃嘆しようとした。云はゞ「傳來記」の世界は、名と武士道とによつて片附けられきつてゐた。其處にはディレンマがあつてディレンマが無かつた。惱みがあつて惱みを惱む人の悲痛な心の陰翳が無かつた。人

間の欲求する所を正しく知つてゐた西鶴、その欲求に從つて生きることを肯定した西鶴、盜の中の石川五右衛門の虛歎をさへ鋭く見拔いて之を嘲哂つた心理觀察家としての西鶴、さういふ彼が此處では全然影を消して、心にもあらず敵討たねばならぬ者の心の空疎さをさへ、彼は潔い武士道への奉仕として漫然と讃稱してゐる。武士生活の虛僞と苦惱と悲哀とには、全然正しい理解のもてなかつた西鶴であつたことが思はれる。其爲に、彼の描いたかうした場面には、何等の實感も生彩もなかつた只武士道の概念が踊つてゐるだけだつた。「傳來記」が、敵討たれる人の暴擧を描いたものとしてのみの印象を與へる所以である。

尤も「傳來記」が作中主要人物の心を十分表現し得なかつたのは、一つには其の作篇が餘りに擦過的であり過ぎた故でもあつた。作者は其處でかなり複雑なプロットを、餘りに簡單に表現しようとした。其爲に、各短章が一種の筋書きに墮して、人物の心理的陰翳までは筆が及ばなかつたのである。好色本の多くに於て、寧ろ餘りに委曲を盡し過ぎて、一篇としての結構に破綻を來した西鶴は、此處では逆に事件の輪廓

を追ふことにのみ急になつて、事件を裏づける心を表現し損つたのであつた。材料の大きさと複雑さとに對する作者としての一種の誤算であつたと思ふ。その結果「傳來記」は殆ど何等の味ひもない作品となつて了つたのであつた。只さうした複雑な筋立てを、簡單なうちに相當要領よく配列した手際には、流石に相當作家慣れて來た西鶴の圓熟が感じられてゐる。「毒藥は箱入の命」以下さういふ點では取るべき作品も少くはなかつた。が、それらの作をも引くるめて、「傳來記」中での壓卷は「播州の浦浪皆かへり討」の一篇ではないかと思ふ。仇討物の型を破つた皆返り討といふ主題も面白い。人物の心理も本書としては比較的書けてゐる。殊に挿話として書かれた杢彌の妹夫婦の條が面白い。此條からひいては皆返り討といふ主題が、一寸人生といふものを考へさせる。さうして其處から振返つて「傳來記」全體を通觀すると、其處に示された作者の感懐は、極めて朧ろ氣なものながら、矢張り例の善惡一如の想念ではなかつたかと思はれる。討つのも討たれるのも所詮は同じことだ、と作者は云はうとしてゐるのであるらしい。敵を討つと一緒に剃髪する男や、子供を殺して自

殺する女などが數多く書かれてゐることからも、そんなことが考へられる。敵討のカタストローフに歡天喜地の激情が伴はない場合の多いことなど、殊にそれを思はせると思ふ。

三　武家義理物語と新可笑記

「武道傳來記」に兎にも角にも元祿武士氣質の二面を抽出した西鶴は、「武家義理物語」に於て武士の理想的典型を描いた。當代武士との親しい接觸をもたなかつた彼は、さうした典型的武士を見出す爲に時代を遡上つた。青砥藤綱、明智光秀、石川丈山等、本書に出て來る人物は、多くは過去の時代の人間であつた。「身袋破る風の傘」「御堂の太鼓うつたり敵」の二章に描かれた敵討物語が、殆ど唯一の當代武士を描いたものであつたかと思ふ。

本書六卷二十七章は、作者の意圖としては、無論義理に生きた武士の硬骨頭を書かうとしたものであつたに相違ない。云はゞ「傳來記」に武士の剛強さを書いた彼は、その剛強さが道念の制約を受けて、節義を守る金鐵の心と化したものを、本書に於て書

かうとしたのであつた。

所で、義理とは結局武士の意氣地が道念を孕んで正義に執した現であらうと思ふ。だから義理の閃發には、慾望の圓滿な飽滿を沮止する不如意が必要だつた。武士の心がその不如意に崩折れて了へば、義理は空しく霧散する。不如意を耐へて強く雄々しく正義に殉じてこそ、初めて義理の光が放たれる。自ら義理にはヒロイズムが隣接する。「義理物語」は此の意味で武士のヒロイズムを書いたものとも云へる。其處には疱瘡のため美貌を損じた姉の代りに遣された妹を歸して、昔の約束通りに姉を迎へる明智光秀があつた（瘊子はむかしの面影）。托された朋輩の子を水に溺れさせたが故に、我が子をも水に投じて義理をたてる「死なば同じ浪枕とや」の主人公があつた。夫の身寄りの子を助けんが爲に、わが娘を犧牲にする女があつた（同じ子ながら捨てたり抱いたり）。父の敵に邂り合ひながら、彼が病に惱むを見て、却て藥を數へて介抱させる武士があつた（後にぞしるゝ戀の闇討）。優に優しい心情と犧牲的精神とに絡んだ悲壯なヒロイズムが、それらの說話の根柢を貫いてゐる。美しい話であ

る。「戀の闇討の主人公にいたはられた男をして感激の結果、御兄丈様をうつたる處にまかりて自害仕るなり、とゞめをさして給はれ」と申し出さしたやうに、人間の美しい感情を、當然觸發さすべき物語である。 西鶴がこれらの說話中の人物に理想の武士を見出したのも、亦當然であつた。

が然し「義理物語」六卷を通じて、かうした說話の數は寧ろ甚だ少なかつた。 却て「傳來記」其儘の踏襲とも思はれる色情のもつれや斬つたり撲つたりの敵討、辱しめられたが故の憤り等の話が比較的多かつた。 が只それらの說話が、「傳來記」のそれの如く單に武士の剛强さを書き、武邊的處置を記錄しようとするのでなくて、常に何等かの教戒を盛るべき材料となつてゐる所に、作者の「傳來記」からの轉步がある。 「傳來記」に元祿武士氣質を見た作者は、恐らく其處に見られたものへの多少批判的な氣持から出發して(それは本書に、前にもあげた元祿武士氣質への批判があることなどからも肯かれる)嘘僞りなく義理に生きた典型的の武士を描かうとしたのであらうと思ふ。それは素より必然の歩みであつた。 が、作者はその必然のさきで横にそれた。 結果

は「義理物語」に、義理やヒロイズムとは何等の關係もない「傳來記」其儘の踏襲とも見られる說話の多くが取入れられることになつたのである。作者は恐らく何時もながらの連想のルーズさから、何時の間にか最初に意圖した義理を離れて、一般的に理想的と思はれる武士、乃至はその理想を强調すべき材料としての非理想的武士を、描き出しはじめて了つたのであらう。だから其處には靑砥左衞門の明敏が書かれた(我物ゆゑに裸川)。石川丈山の悟入が書かれた(約束は夢の朝食)。眞の剛勇をたゝふる「神のとがめの榎木屋敷」が書かれた。念友の眞實を書いた「衆道の友よぶ衞の香爐」が書かれた。「發明は瓢簞より出る」利發が說かれた。「人の言葉の末見たがよい」の分別が說かれた。

然もかうした成立の故に、本書の各短章には、武士にとつての理想的な性質の一斷面づゝが描かれてゐるだけで、短篇として主題の發展を含んだものは比較的少なかつた。主題の雜多さと此點とが相合して、本書に一面雜話集的な、小咄集的な性質を帶びさせた。さうして武士氣質の理想の斷面を古人の逸話や傳說に求めようとす

る作者の態度が、さういふ性質を一層濃厚にした。自ら本書には「傳來記」程の複雜な構成と脚色とをもつた作品は少かつた。作者の氣持も「傳來記」に於けるよりずつと安易だつた。從つて叙述にも強ひて工夫された雕文曲筆の跡はなかつた。寧ろ持ち味といふに近い眞率平明さに終始してゐた。其爲に人間の氣持なども、「傳來記」のものなどより、却て素直に描き出されてゐた。作品全體としても、「傳來記」には無かつた味ひ――作者の心のゆとりが齎らした味ひが、相當に味はゝれた。さういふ點で最も優れてゐるのは「約束は雪の朝食」であらう。後の上田秋成が「菊花の契」（雨月物語）に書いた材料と殆ど相似た材料を取扱つた本章は「菊花の契」が武士的節義に着し過ぎて傀儡的人物を踊らせるの淺技に墮したのに對して、節義を倚みながら、然も節義の上に優遊した隱者の相を、如何にも自然に、含蓄深く描き出してゐる。潤色の巧緻さや複雜さに至つては、素より西鶴は秋成の敵ではないけれども、此の一篇の作品としてもつ味ひの素直さや、其處に語られた世界の深さに至つては「雨月物語」の作者の到底摸することの出來ないものであつた。鈴木敏也氏が此の一篇を以て「義理物語」

中での傑作としてゐられたのも、當然な評價であつたと思ふ。——同章以外では「申合せし事も空しき刀」「我物ゆゑに裸川」「表むきは夫婦の中垣」などが面白い。殊に「申合せし事も空しき刀」には微妙な人間心理が摑まれてゐた。

「義理物語」に現れた小咄集的雜話集的性質は、「新可笑記」五卷二十六章に於て更に一層徹底させられた。本書は云ふ迄もなく如儡子の「可笑記」を摸して作られたもの從つて「可笑記」にかなり濃厚な教訓物としての性質があつたのをも、其儘受けついでゐる。「義理物語」に武士氣質の理想的典型を描いた作者が、その理想に即して逆に元祿の武家生活を眺めた時、かうした教訓物的な色調の濃厚な武家物を作らうといふ意圖に動かされたのではなかつたであらうか。作者が本書の各短章に、「武士は人を助くる一言の事」「武士は義理死世に惜しむ事」といふやうな小みだしをつけ、それによつて武士の積むべき身の修養を暗示してゐる所などにも、其間の消息は覗れると思ふ。が、さうして本書に托せられた教訓は、必ずしも武士にとつてのみ須要な教訓なのではなかつた。寧ろその殆ど全部が人間すべてに適用されて差支へないものばか

りであつた。其處にも無論「義理物語」からの作者の歩は辿りつづけられた。何故と云つて、作者は既に「義理物語」に於て武士生活の義理一面に執しようとしながら、何時の間にか義理以外の諸斷面に觸れて來た。云はゞ其時既に概念的全體的に武士は此の如き者と觀じてゐた氣持がほぐれて、幾分個々に即して觀察を分化させて行かうとする態度が生れてゐたのである。云はゞさうした作者の氣持の推移を、「新可笑記」は更に進めて、一層個々に即して行つたのであつた。死んだ友人に約束の馬を贈る武士の徹底した義理固さ「死出の旅行約束の馬」、知らずして絡つた自己の虛欺を恥ぢて自殺する武士の潔白さ「一つの卷物兩家にあり」、女敵討つ程愚でなかつた武士の勘辨と機略「女がたきに身替り狐」、對手を責め殺す盜も盜人ときわめ自分も死ぬる覺悟をした宮内の信念、宮内の明察とその覺悟とを惜んで盜みを白狀する武士の自己犧牲的な感激「理非の命勝負」などゝいふものが……其處には書かれてゐる。之を「義理物語」に書かれた武家心理と比較すれば、づつと微妙に分化して來て、寧ろ個性といふに近いものさへ見え出したことが理解されよう。無論總括して之を武家氣質と

は云つても分割すれば武士の個性である。觀察點が個々に即して分化して來れば、結局氣質は無くなつて、剔抉された個性が露呈される。概念としての武士が無くなつて、個としての人間が殘される。「新可笑記」はその境まで近づいて來たのである。自ら本書二十六の說話は、その各々の世界として必ずしも武士の生活を必要としなかつた。語られてゐる世界を構成する材料こそ武士若しくは武士に近いものであれ語られてゐるものは必ずしもその材料とのみ密接な關係をもつものではなかつたのである。西鶴が武士をよく知つてゐたら、此處迄來てもその主題と、其の主題を含んだ材料との繋りに、武士の生活にでなければ認められぬ陰翳と微妙な色調とを織り込むことが出來たかも知れない。が、武士の心に無緣の彼は、素よりその微妙な陰翳の交錯を捉へることは出來なかつた。結果は其處によせられた教訓が、決して武士にのみ必須なものでなく、又それが特殊な武士の世界を語るものでもないといふやうなことになつて了つたのである。此故に「新可笑記」といふ作品は、武家物にして武家物に非る一種變則な作品集である、といふやうなことさへ、一再ならず云はれ

てゐる。

のみならず、本書は既に冒頭に述べた通り、義理物語の小噺集的雜話集的性質を繼承して、更にそれを發展させたものであつた。其處には例へば「胸をすゑし連判の座」「兵法の奥は宮城野」「歌の姿の美女二人」等の如き、説話夫自身の中心的興味が、武家物としての世界にあるのでもなく、教訓にあるのでもなく、只珍談奇聞的な點にのみかゝつて存するものが非常に多かつた。作者自身も本書に於けるさうした性質を濃厚にするために、中に「ぶらりと俄年寄」以下、説話夫自身として支那種らしいものを二三取り入れたり、離魂其他漢臭を帶びた現象などをも、かなり屢々書き込んだりしてゐる。それは一面武家生活に知識の乏しい作者が、從來の作にその知識の大部分を盡して了つた結果、新しき作品に當然生ずべき單調と物足りなさとを補ふ爲に、進んで選んだ手段であつたのであらうけれども、其爲に本書は更に武家物としての性質を稀薄にして、尋ろ次に述ぶべき「懷硯」以下の雜話集と同じ種類のものになつて了つたのであつた。其處に作者の苦心も反映されてゐれば、本書の一篇としての印象の雜

駁さも生れた譯であつた。

材料蒐集の上に示された作者の苦心は、又本書の文章の上などにも現れて、其處には嘗て彼の作に見なかつた程の漢文などが引用されてゐる。然も作者のさうした苦心にも係らず、本書は別に新機軸を出したといふのでもなく、短章としても特に心惹かれるものがあるのでもなく、僅に「心の切たる小刀屛風」「腹からの女追剝」「理非の命勝負」等に幾分の興味を覺える程度のものであつたのは、結局作者が、乏しい材料を、强ひて不得手な武家の世界に見出して、書き綴らうとした爲ではなかつたかと思ふ。無論西鶴にとつて重要な作ではなかつた。が、たゞ序文其他に現れた彼の氣持が、比較的暢びやかな、然も或る程度迄の謙虚さに入り得てゐるのは、流石に好色本中の傑作「好色盛衰記」が出た年の作であることを思はせる。

四　武家物に描かれた女

好色本に多くの遊女と戀を追ふに急な女とを描いた西鶴は、武家に於て多くの家庭的な女性を書いた。元祿の時代精神とは沒交渉な――その代りに家康以來の固

定的な凝固政策の影を投じた方面から云へば最もよく時代相を反映した、ものであつたかも知れない――個性を減却されし自我を凝固させられた女性の多くを書いた。囚はれた武家道德の世界に、殊にいぢけて跼蹐してゐた女性の多くを書いたのである。

尤も、好色本に於て複雜な女性々格の諸相を微妙に描き分けた西鶴であつた。武家生活に對するほんとの味解が無かつたとは云つても、女性描寫が只單純に一色であらう筈はなかつた。そこには夫が敵と覘はれて遂に討たれたのに取り亂して、前後の思慮もなく對手の家に斬り込む激情の女もあつた。それを穩かに說きさとす理性の女もあつた。醜きが故に修養を積んで、夫が戰略武藝の修行を助ける男まさりの女もあつた。同じ子ながら義理あるをのみ救はうとした武士氣質の女もあつた。身分ある人の孫として、遊女となるとの口惜しく、自ら食を斷つて死んだ清純な乙女もあつた。嫉妬の爲に毒を盛る淫蕩の女性もあつた。艱苦のうちに子供を育てゝ敵討たせた意志の女もあつた。が、さうした諸々を包攝して武家物の女を大觀

すれば、流石に淫蕩や蓮葉は少なかつた。ふしだらに媚しい相は殆ど無かつた。却て大體は愼ましく嗜みが深つた。弱きも強きも、何れも古來の貞女型といふに近かつた。「惣じて女、(世にある時は)その夫が心に隨ひ、姑にも孝をつくし、永く緣ある事を祈り、萬の始末も心から大持にかけ、人にもよきといはれたき嗜み、下部に惡く當らず、世の業に油斷もさせず、朝疾く起きて髮結ふ形を見せず、夜の行水暗きを恐れ、夫の疑を休めぬ」といふやうな、彼が町人物や好色本に書いた所謂女房氣質と相通ずる或物が、確實に武家物の女性に表現されてゐたのである。尤も作者は其處にも「身代薄くなりては男に殿もつけず、世の稼ぎをやめて下女と爭ひ、長寢のために病を作り、五節句にも髮頭を亂し、揃へる皿を九枚になし、諸道具手荒く、大黑柱にはぐろ吹掛け、敷居におしあて灸はしを削り、腰はりまくつて絲屑を包み、接木の初花を用捨なく手折り、書院の軒端は洗濯物の竿もたせとなし、とても人の物となる賣家と住荒し、肴掛のする目も煎じ茶の菓子に引裂き、何もなければその通りに朔日二十八日も精進して、佛棚も書出しの置所もなし」といふやうな、崩れた女の氣持を罵る口吻を見せてはゐる

けれども、それは素より武家物に描かれた多くの女性に當てはまる非難ではなかつた。第一、それにしろ、その前の世にある時の女の美德を讃へる言葉にしろ、何れも町方の女房にこそ相應しけれ、武家の女に對する言葉ではなかつた。其處に武家を知らなかつた西鶴が、武士の女の生活に纒る特殊な美點や頽廢の相、乃至複雜な病弊を描くことの出來ない作家であつたことが、明瞭に示されてゐる譯だが、或はさうした認識不足から出發して、武家の女は義理難いもの、崩れた氣持を見せぬもの、といふやうな概念的判斷に着して行つた西鶴であつたのかも知れないけれども、兎に角彼の武家物に描いた女は、嗜み深く理義を辨へたものが多かつた。

が、さうした嗜み深さや心の鍛錬を、すべての武家の女にもたせようとした所にこそ、西鶴の概念はあり、理想化はあつたものゝ、さうした女性氣質の一面其物への把握は、流石に鮮かなものだつた。だからさうした氣質を與へられるに相應しい光秀の妻の妹などには、さうした概念的な氣質のうちに、相當細かく動いて行く心理的陰翳が、かなり鮮明に描き出されてゐた。とすれば、西鶴をしてさうした觀察を可能なら

しめた所に、元祿時代女性生活の一斷面が、雄辯に語られてゐるのでなければならない。また確にそれが元祿時代女性生活の一面であつたに相違なかつた。武士道を概念化させたと同じ儒敎思想の流入が、當時の窮屈千萬な婦德なるものを、また嚴密に規定した。只管從順の美德を强ひるだけで、一切の權威と自我とを剝奪する女への道德律が此の時代には確立されてゐた。姉の身がはりに、兩親の命ずる儘に、見も知らぬ男の許に、然もいそ〳〵と嫁して行きながら、その身替りであることを知られると共に、其儘親里にかへされる光秀の妻の妹の事件に見られるやうな、殆ど何等の尊重をも加へられない無權威、沒自我、沒個性の生活が、かくて當時の女性には要求された。これを兎も角も情意に解放された好色本中の女性などゝ比較すると、何といふ相違であつたらう。西鶴は流石にさうした無權威沒自我の女性生活を、必ずしも絕對に然あるべきものとのみ觀じてゐたのではなかつたらしい。「大下馬」の卷四「忍び扇の長歌」に於て、身分低きものと通じて、「不義遊ばし候へば御最後」と强ひられた或る姫をして、「各々世の不義といふ事を知らずや、夫ある女の外に男を思ひ、または死に

別れて後夫を求むるこそ不義とは申すべし、男なき女の一生に一人の男は不義とは申されまじと云はせてゐる所などにも、さうした生活を女性に強ひた當時の思潮への彼の反抗と批判とは感じられる。が、それも結局は中途反端な反抗であり生温い批判であつた。煩惱我に執し、自己を主張し過ぎるものゝ悲劇を知り盡したが故の反動から、社會の調和と安寧とを念として、平凡な道を說く作家となつた彼は、此の方面でも決して特異な主張を振翳さうとはしなかつた。嫁せざるうちの男一人を許す程度で――それさへ當時とすれば或は破格であつたのかも知れないけれども、兎に角夫の死後に後夫を求むることをさへ肯じなかつた彼は、矢張り大體は世間普通の道德的標準に從つて、沒個性的奴隷的な女性生活を讃稱し、さういふ生活に安住する女を、人の家にありたき女と觀じてゐたのであつた。此の意味で、あれ程女をよく見た彼にも、時代的道德觀の上に高く逸出することは出來なかつたのだと思ふ。

第六節　雜話集其他

一　武家物より雜話集への轉向

「武家義理物語」に於て武家生活に材をとつた雜話集への傾向を示した西鶴は、「新可笑記」に於てさうした傾向に徹底した。が、さうした傾向の作品集として「新可笑記」は決して最初のものではなかつた。同書と「義理物語」との間には既に同じ性質の「懷硯」があつた。同書こそ雜話集として最初のものであり、且つ其の方面の作品中での代表的なものであつた。

尤も此の雜話集といふ目は、西鶴作中必ずしも特に設けねばならないものではなかつた。佐藤春夫氏が云つてゐられるやうに、西鶴の作品はその殆どすべてに渉つて、見聞記的雜話集的な性質をもつてゐた。「二十不孝」の如きは殊にさうした性質の著しいものであつた。が只それら一般の作品集には、單なる雜話集といふ以上に、それ〳〵他の何等かの主題があつた。說話蒐集の方針に一定の中心と作者の立場とがあつた。實際の內容に於ては寧ろ完全に雜話集であつた「新可笑記」に於てさへ、なほ武家生活の規範を說くといふ中心主題に結びつけられてゐた。それが「懷硯」には

ないのである。「懐硯」は各説話の排列乃至相互間の連絡に何等の中心的統一のないばら〳〵の短篇説話集なのである。其處に本書を特に雜話集と呼ぶべき可能性がある。西鶴の全創作中本書と同じ範疇に屬すべきものとしては「大下馬」がある。「名殘の友」がある。「新可笑記」をも本項目中に數ふることが許されるなら同じ程度の必然さを以て「本朝櫻陰比事」をも加へることが出來る。が、それには無論異論があらう。其の點はあとで考察する。と共に、完全にさうした性質のものである「名殘の友」をも、遺稿として「置土產」と共に論ずることの便宜を思つて、本項目中からは特に省いて置くことにする。

　雜話集には無論一面に於て小噺集的な性質をもつてゐる。自ら作者の氣持は安易だつた。囚はれのない、暢びやかな氣持で書いてゐる。其處に長所もあれば缺點もあつた譯だが、それよりもさうした態度の作品集が、武家物の直後に生れた所に、多少の注意が必要とされる。「義理物語」に於て既に幾分緩和されはしたものゝ、兎に角其の武家物に於て西鶴は少々力み過ぎてゐた。春のびして知らぬ世界を覗き込むや

うな態度をとつてゐた。自然彼はさういふ自分の態度に一種の疲れとぎごちなさとを感じずにはゐられなかつたであらう。敏感な彼はさういふ態度のオークワードネスを自ら判然意識したであらう。さういふ彼が顧てもつと素直に自然な態度で筆を執らうとしたものが、即ち「懐硯」であつたのではないであらうか。さうして其處に味はゝれた力みのない自然な自己表現の快適さが、軈て武家物の世界に沒頭してゐた彼を驅つて、武家物といふよりも寧ろ雜話集である所の「新可笑記」を書かせたのではなからうか。

がさう考へると、「大下馬」といふ作品の生れた時期が問題になつて來る。本書は元來五卷本であつたらしいのに、今日なほ其の完本が發見されず、所傳のものには奧附のあるべき五卷が缺けてゐるために、製作年代の不明なものとされてゐるのだが、朝倉氏の小說年表には、何ういふ根據に依られたものか、貞享二年刊行の由が明記されてゐる。若しそれが正しい事實とすれば、本書は「二代男」に次いで世に出たものになり、雜話集として武家物以前のもの、從つて上述の武家物より雜話集への轉向につい

ての觀察など、全然成立たないことになつて來る。が、それは何うであらうか。本書に於ける西鶴は寧ろ非常に作家慣れてゐる。說話說話の書き振りが如何にも巧で手に入つてゐる。それは無論雜話集としての作者の安易な氣持の反映でもあらうけれども、それにしても餘りに樂に書かれてゐる。到底二代男を書いたばかりの作者にかういふ書き振りは期待されない。文章にしても非常に平明素直である。二代男にあゝした作家意識を見せ、あゝした文章を書いた作者が、直ちに此の安易さと平明さとに移つたと考へるのは不自然である。二代男を書いてから艶隱者を書く迄の西鶴は、もつと〳〵固くなつてゐた。本書の文章なり作者の態度なりは、かう考へれば何うしても武家物、それも義理物語以後、事によると、懷硯や新可笑記よりも後のものではないかと思はれるのである。本書に書かれた武家說話が、新可笑記中のものなどよりも、もつと平明である所にも、そんなことが思はれる。さうしてさう思ふが故に、私は武家物より雜話集への作者の心的推移に對する考察を、改める必要がないと思ふのである。

二　西鶴の超自然描寫

雜話集には、その性質の必然として、怪談、靈異談、神怪談、乃至それに類する超自然的事件を含んだ說話が多かつた。が、さうした說話は素より雜話集にのみ始めて現れたのではなかつた。「一代男」にも「夢の太刀風」の怪異はあつた。「心中箱」の藤波の執心があつた。「二代男」にさうしたものゝ殊に多いことは前にも云つた。「二十不孝」にも不思議な因果が書かれてゐた。「艶隱者」にも靈界神祕力の顯現が繰返された。武家物に至つては殊にさうした超自然力の顯現が少くなかつた。化物屋敷には妖怪が出た。幽靈もあつた。死者の靈魂が橫死を知らせる不思議もあつた。武家生活への理解不足が、敍述の間に生ずるギャップを埋める爲に、自然かうした不可思議力を屢々點出するといふ彌縫策に出でしゐたのでもあらうし、他面武士の勇武剛强さを强調する爲に、手段的に怪力亂神を借りる必要も多かつたのであらう。兎に角隨分屢々繰返された超自然力の顯現であつた。

かうした超自然力の描敍は、全體として現實的な西鶴の浮世草子に、相應しからぬ

構成要素として、時に非難されるものであるけれども、考へてみればそれが必ずしも元祿時代を反映してゐないことは無かつたと思ふ。血腥い戰亂の巷に阿鼻凄慘の羅場面を眺めて來た戰國時代以來の國民は、昌平の元祿時代に入つても、なほ怪力亂神を語るに慣れてゐたらう。武家全盛の世に彼等の剛强さを誇張する爲に編み出された怪異な傳説も、時代の無知と無批判との故に其儘信仰されてゐたらう。人生無常の想念から必然的に派生した宗教への關心のうちにも、超自然力の渇仰と恐怖とは含まれてゐた。謠曲に描き出された崇高な神靈――超自然力へも、亦民間に於ける超自然力への何等かの關心を喚び起さないことは無かつたらう。等々の素因が融合して、其處に當代民衆の超自然力への愚昧な信仰が、かなり著しい時代的特色の一つとなつてゐた。怪談系の百物語の流行がそれを證明する。さうして又その百物語の流行が、逆に超自然力の畏怖と信仰とを煽つたことも想像される。西鶴の作品に超自然力の描叙が比較的多いのは、無論さうした時代相の一面を反映するものであつた。從つてそれは必ずしも相應しからぬ構成要素として彼の浮世草子か

ら排斥し去らるべきものではなかつたと思ふ。

が、それは兎に角、かうして寧ろ屢々描かれた西鶴の超自然力を大體の標準に從つて類別すれば、その第一は云ふ迄もなく人間の執念が凝つて發する不可思議力であつた。第二は所謂因果の形に示された不思議な天の支配であつた。さうして第三は所謂靈界神秘力の顯現、第四は所謂妖怪變化の怪力亂神であつたのである。けれども――西鶴は人生の徹底的觀照家であつた。然も人生の觀照家としての彼は「懷硯」の「憂目を見する竹の世之中」にこんなことを云つてゐる。「見慣れぬ物には必ず驚く習ひ、鳥の空を飛び蛇は足なくてよく行き、一つの玉より水火の出るも、今まで人の見ざる事ならば、幾度か疑ふべし」と。鳥の空を飛び蛇の足なくして歩くのを疑はうとする心は、云ひ換へれば現實世相其物のうちに存在する不可思議力に驚異せんとする心である。その驚異から彼の徹底した現實諦視と現實解剖とが生れた。その諦視と解剖との結果、人間の智慧では理解もされない豫想もされない不思議な力として觀ぜられたものが、即ち天の支配であつた。自ら其處には動かし難い實感の裏

打があつた。重い眞實が絡んでゐた。彼がそれを淺薄な因果に飜譯しても、その飜譯の外に食み出した彼の實感を正しく味解することが出來る程に、眞實感が漲つてゐた。と同時に、人生を徹見して其處に蠢く人間の有する心の激しさと粘り強さとに一種の畏怖と戰慄とを感じた西鶴は、その畏怖と戰慄とから發して、人間の心魂が凝つて發する不可思議力を信仰した。その不可思議力は、吾々から見れば、前にも云つた通り、象徵的な意義を有する不可思議力であつた。徹底的の人間觀照家としての西鶴が、さうした象徵につくのは寧ろ必然であつた。從つてさうした超自然力の描叙にも、裏打のない空疎さはなかつた。溶け込んだ實感のない嚏乃至荒唐無稽なそら事といふ感じはなかつた。たゞ彼はさうした超自然力を象徵として描いてはゐなかつた。時代的無知によつて、さうした超自然力の顯現を、彼も亦其儘世相のうちに信じようとしたのであつたらしい。自ら作品に於けるさうした超自然力の點出には、作者としての深い用意がなかつた。だからさうした超自然力が時に相應しからぬ場所に、その顯現を必至とする程の背景をもたずに、點出されて了つてゐるや

うな場合もないことはなかつた。さういふ時それは勿論象徴としての効果をあげることは出來なかつた。とつてつけたやうな不自然さを感じさせた。が、それは作者としての不用意が生んだ失敗の場合であつた。さうした場合の他は、例へば「一代女」の「夜發附聲」に幾百の嬰兒の靈が現れる不可思議の如く、讀者の心に深い觸發を與へずには置かない效果を舉げ得てゐたのである。けれども、かうして第一第二の超自然力の描出に大體成功した西鶴は、第三第四の超自然力描寫には決して成功したとは云はれなかつた。それは、以上の二點に成功させた彼の對人生の態度の、止むを得ない結果であつた。人生を觀照して其のうちに動く不可思議力に味到した彼の態度は、一面科學者的の解剖的、研究的な態度であつた。彼は靈界神秘力の顯現に際會しても、それを靈界とし神秘として眺めようとはしなかつた。却て現實の世の知識を以て解釋しようとした。「五月雨の降續き、吉野川も渡り絶えて、常さへ山家はものゝ淋しやと、昔西行の住み給ひし苔清水の跡を掬び殊勝なる道心者のましますが所の人此處に集りて煎じ茶に日を暮らしぬるに、雨頻に俄に山も見えぬ折節、板緣の

片隅に古き茶碓のありしが、その心木の穴より長七寸ばかりの細蛇の一筋出て、間もなく花柚の枝に飛び移りて上ると見えしが、雲に隠れて行方知らず。麓の里より人大勢馳付て、只今此庭から十丈餘の龍が天上したと申す」（大下馬巻三八疊敷の蓮の葉）といふやうな不可思議に接しても、まづ驚駭の眼を瞠る前に「さても／＼大きなる事やと人々の騒ぐを、法師打笑つて各々廣き世界を見ぬ故なり」といふやうな解釋と說明との態度に進んで行くのが、即ち西鶴の傾向であつたのである。自ら彼の描いた靈界神秘には、平俗な現實世界の影がさしてゐる。靈界や神秘が、靈異や神秘夫自身としての純粹な形相を保つてはゐなかつた。ふつくりした神秘の匂ひが所々剝け落ちて、汚い地肌を見せてゐた。かういふ彼にとつて、普通に所謂妖怪變化や怪力亂神が、深い感じを以て眺められる筈のないことも、素より云ふを要しない。狸が化けたり狐がふざけたりするといふに類した不可思議を深い感じを以て眺めるには、彼は餘りに理知的であり現實に沒頭してゐた。當時の一般民衆と共に、さうした怪力亂神を漫然と信じてゐた彼であつたらうし、從つてさうした方面の描叙も相當の量

に達するけれども、然もさうした材料が彼によつて取扱はれる時、其處に當然漂はさるべき淒味とか不氣味さとかいふものは、殆ど描き出されてゐなかつた。氣の拔けたビールのやうな、ごくと旨味のない輪廓的擦過的な記述があるだけであつた。此の意味で、彼は遂に第三第四の超自然界を描くべき作家ではなかつたのである。その方面の超自然描寫に渾熟を以て呼び得るものが無かつたのは云ふ迄もない。

けれども西鶴は豐かな感覺と微妙な感受性とを有つてゐた。洗練された表現と印象的な筆致とをもつてゐた。彼には寧ろ相應しくない超現實界の表現にさへ、或る程度迄効果的な、美しい響をもつたものを、數多く遺してゐる。

「あらけなき熊笹を分行に、霜も諸袖を浸し、朝日願へど影遲かりし。忽然と岩に下ぬ。池崎に響きて微妙の皷の音のみ。爰には不思議と聞耳たつるに、程近く、此なる岩窟に正しく人やありける。紅の細ものなる、綸絹の袖ほのあき、焚しめたる薫の風を逆ひ、現心になりて村杉の葉隱より差覗きけるに、年の程假初に見し時は、里の揚卷振分髮の程過ぎ、十三許りの美童の、人家離れて此所に住む事も由なし。

我を見ながら物いはす笑はす稍にかける俤かと疑はる、懐硯巻二鼓の色に迷ふ人に之を靈界神秘力の顯現といふのは或は當らぬかも知れない。が、少くともそれに似た神秘的な場面であることは云へる。尋ろ不可思議界を描いて現代作家中第一人者の稱ある泉鏡花氏などの、好んで描きさうな場面である。かうした世界への傾向をもたなかつた西鶴が、かうして人か神か素より知るべくもない美童を、山中汀の洞窟内に點出して、然も神秘縹渺の雰圍氣を微妙に漂はせた手腕は、決して凡手を以て呼ばるべきではなかつたと思ふ。印象的な筆致と、透き通るやうな空氣の匂ひと色合も、快く味はゝれると思ふ。若し其處に一種の溷濁を與へてゐる現實世界に足を留めてゐる作者の氣持を除き去つたら、云ひ換へれば爰には不思議と聞耳たてたり、「人家離れて此處に住む事も由なし」と考へたりする作者の氣持を、もつとそつくり神秘の空氣に融け込ましたら、それは更に渾熱の域に達するであらう。其處迄行つたら、或は西鶴は泉氏と比肩し得る超現實界の語り手であつたかも知れないとさへ思はれる。そこ迄行かなかつた所に無論西鶴の特徴があつたのであるけれども、かう

思へば彼も亦神秘を描いて必ずしも描けない人では無かつたのだと思ふ。

三　懐硯と大下馬

「懐硯」五巻二十五説話は、旅せぬ人の爲に、旅に見聞した奇談雜話を輯錄するといふ形になつてゐる上に、伴山といふ一人の男の旅行記としての形を目指されて作り上げられてゐる。浮世草子作者としての西鶴が好んで用ひた技巧であるが、例によつて其の技巧が完全に全篇を包みきつてはゐない。說話說話に、伴山の影が全然さしてゐないものと、行文のうち所々に旅行記としての記述が挿入されてゐるものとが、並存してゐる。大體としては、純然たる短篇集として取扱つた方が相應しい。

雜話集の一つとして、本書には前にも云つた通り、百物語系統の怪談其他超自然界を描いた說話が多い。其處に西鶴の超自然描寫の色々な斷面が覗はれる。「誰かは住みし荒屋敷」や「文字すわる松江の鱸」には、「二十不孝」のそれと相通ずる因果觀が見られた。「氣色の森の倒石塔」には人間心理の反映なる象徴的超自然力が觀じられる。「皷の色に迷ふ人」「龍燈は夢の光」には所謂靈界神秘力の顯現乃至それに類したものが

描かれてゐた。が、それらの短章に描かれた超自然界が、本書の雜話集としての傾向の故に、環境的條件なり心理の反映なりを無視されて、單なる怪異談として拾ひ上げられてゐる爲に、比較的深い感銘を讀者に與へることが出來ない。「鼓の色に迷ふ人」「龍燈は夢の光」等には、例のかなり優れた超自然描寫がありながら、それが説話全體としてはさしたる感興をそゝらないのは、結局作者の傾向にない作品であつたからであらうけれども、彼としてかなりな程度に書ける筈の「氣色の森の倒石塔」などが、不氣味な味ひをたゝへることが出來なかつたのは、無論さうした取扱ひの結果であつた。只「文字すわる松江の鱸」一篇は、讀者を捉へて或る不可思議の支配する世界に引摺り込んで行く力をもつてゐる。不氣味な戰慄を感じさせる作品である。がこれは既に早く「一代女」の「夜發附聲」に、一代女の眞面目な後悔を象徴する爲の手段として取扱はれた材料である爲に、興味の幾分を減殺される。けれども兩者の味ひは無論異つてゐた。「一代女」の場合には、それは一代女其人の心理の反映として、彼女の突詰めた心の苦しさを語るものであつたものが、此處では何か眼に見えぬ大きな力の支配す

る世界の不思議な怖ろしさを語るものになつてゐる。不氣味な戰慄を感じさせる點では或はこの方が優つてゐるかも知れないけれども、恐らく早くから此話を知つてゐたのであらう西鶴が、それを一代女の生涯の終りに利用して、別種の深みを與へた手際も思はずにはゐられない。

超現實界を取扱つた作品が、かうして僅かに一作を殘した他は、全部失敗に終つてゐるのに對して、それらと相並んで本書の他の一分野をなしてゐる現實生活の色々な斷面を捉へた作品には、流石に優れたものが多かつた。人生の不可思議を眺めてその不可思議の前に謙虛に跪かうとする作者の氣持も、漸く各作品の裏打として判然した形となりかゝつてゐる。取材の方面が廣く複雜であるのも、雜話集として當然のことながら、矢張り人生の深いと同時に廣い觀照家であつた西鶴を思はせる。其處には「長持には時ならぬ太鼓」以下、武家生活の幾斷面かを描いた作品もあつた。「明て悔しき養子が銀筥」以下、完全に後の町人物の世界を思はせる作品もあつた。「後家になり損ひ」以下、複雜な女性心理の解剖を示した作品もあつた。云はゞ西鶴の全

創作の世界が、此處に小さく凝縮されてゐるかの觀があつた。のみならず、其處には西鶴として極めて珍らしい人眞似は猿の行水の如き童話的短篇小說もあつた。「佛の似せ男」「案内知つて昔の寢所」「水浴は涙川」等何れの世界にも屬させることの出來ない作品もあつた。然もそれらが皆とりどりに面白かつた。殊に「佛の似せ男」がいゝ。夫の與太夫は何時迄も歸つて來ないで、與太夫と稱して歸宅した小平太を、女房が何處迄も與太夫と思ひ込んでゐる所など、決して猥りに墮してゐない。それだけ愛に微妙なものを感じさせる。有名な「案内知つて昔の寢所」は之に比べると餘程味が粗く強い。材料其物がテニソンのエノツクアーデンに類似するものであることは誰に周知の事實と思ふが、恐らくそのテニソンから暗示されたのであらう、モウパッサンに確か「歸鄕」といふ題の、同じやうな材料の短篇があり、更に佛蘭西の現代作家ルイ・フイリップに「歸宅」といふ作があるのと同樣に、之も菊池寛氏の「浦の苫屋」に殆ど其儘繰返されてゐることなども、一種の興味をそゝる。フイリップ程の纖細さや現代的な感觸は無論ないけれども、深く徹して行く形と、キビキビした強いリズムとは彼に

は到底望めないものであつた。かうした強いリズムで一貫された作品としては、西洋物とは異つた結末の刄傷沙汰も、必然のカタストローフと感じられる。「水浴は涙川」の結末に、馴染でから四十三年、今年六十一になる武右衛門の女房を離縁させるのなども、恐らく西鶴でなければ書き生かせない奇警な觀察點であつたと思ふ。

かうした數々の優れた作品をもつ故に、「懷硯」は、單に雜話集中での白眉といふのみならず、西鶴の全創作中でも比較的重視せられてゐるものであると共に、其處に示された作者の脚色上の技倆の渾熟から云つても、亦注意さるべき作品集であつた。武家物に於て完全に獲得した作者としての純客觀的な態度と材料布置の技倆とが渾然と融和して、本書中の作品に、結構布置何れの點から云つても非難のないものゝ幾つかを數へさせる。「案内知つて昔の寢所」などさういふ點でも優れてゐた。「長持には時ならぬ太鼓」なども、複雜な材料が巧みに配列されてゐた。かういふ渾成された脚色をもつてゐる點で、本書は同じく雜話集と云つても、「大下馬」や「新可笑記」などの如き小咄集とは、多少選を異にするものであつたと思ふ。

「大下馬」はその題名に、西鶴諸國咄」とあるのでも知られる通り、諸國の異事奇聞を輯録した純然たる小咄集である。百物語の系統をひくもので、其處には懐硯に見られたやうな複雑な脚色を含んでゐるものは見出されない。僅かに「因果の抜穴」「大晦日は合はぬ算用」等武士を材料とした短章に、多少の脚色と説話の發展とを意圖したものがある他は、すべてちよつとしたポイントを摑んで之を記述しただけのものに過ぎない。無論大した作品集ではなかつた。

百物語系統の小咄集として、本書にも亦かなり濃厚に怪談臭味が瀰漫してゐる。が、さうした怪談の殆どすべては例へば「姿の飛乗物」とか「紫女」とかいふ短章に見られるやうな、人間の現實生活とは何等の必然的關係をもたない、所謂怪力亂神や妖怪變化に類するものであつた。從つてさうしたものへの深い關心をもたなかつた西鶴の作として、素より生彩ある記述が含まれてゐるやう筈がなかつた。僅かに「面影の燒殘り」の、黒焦げの死體が蘇返るあたりの描寫に、慘らしい不氣味さが相當印象的に描き出されてゐたのなどが、特筆さるべきものであつた。が、それも決して怪談として

の物凄さではなかつた。何うかすると現實世相のうちに起り得る事柄の、最も不氣味陰慘なものであつたに過ぎない。

が然し、さうした怪異談を離れて、現實的なトーンをもつた說話を見ると「懷硯」に於けると同樣、流石に作者の觀察の奇警さや、才分の閃きの覗はれるものも少くない。虱の獅子踊や蚤の籠ぬけは困るけれども、蚤と虱を飼つてゐる老人などを點出した牢獄内の「蚤の籠ぬけ」に於ける牢獄内の描寫など殊に面白いものであつたと思ふ。空氣は、短い記述の中に隨分よく出てゐる。ロシアの作家などにかういふ所を好んで書きたがる人が多いやうに思ふが、無論それらとは違つた東洋的なほの明るさと穩かさとが漂つてゐるのも、吾々には親しみ易い。小咄の材料として集められた主題の中にも時に面白いものが見出される。「男地藏」などは其の最なるもであらう。所が、さうした材料を十分書き生かす爲には、小咄といふ形式が餘りに小さ過ぎた。所詮「大下馬」といふ作品には、西鶴の優れた禀質の閃きに接することを望む以上の期待はかけられない。と同時にさうした小話集の中にさへ、作家としての西鶴のもつて

ゐた缺點は見出される。「神鳴の病中」が僅々二頁に足らぬ程の短章でありながら、前半と後半とでは主題が異つて、全然一篇としての纏りをもつてゐないのなどは、さういふ方面で注意さるべきものゝ代表的なものであらうと思ふ。

四　雜話集的裁判物本朝櫻陰比事

雜話集としての「大下馬」を非常に安易な態度で書いた西鶴は、同じやうな態度で「本朝櫻陰比事」を書いてゐる。が、本書は無論單純な雜話集ではない。名法官板倉所司代の事蹟を語る「板倉政要」を粉本として、それに慶安四年刊行の「棠陰比事」の體案を加味したもので、五卷四十四章、すべてに裁判が語られてゐる。普通に云はれてゐる通り裁判物と呼ばれるのが適當である。がたゞ作者はそこに裁判を語り、それを通して法官の機智と明察とを語らんが爲に、裁かれる事件の非凡な複雜さと珍奇さとを必要とした。その珍奇さと複雜さとを一刀兩斷的に辨別させ判斷させることによつて、神人的な法官の俤を髣髴させようとするのである。自ら其處には複雜不可解な系圖が必要であつた。「娘ながら母なり」「兄ながら孫なり」といふやうな稀有な肉身

關係が必要であつた。其他屢々これに類する珍談奇聞的な材料が必要とされた。本書に雜話集の匂ひがあるといふ所以である。然も作者は本書に於て、寧ろさうした珍談奇聞を、珍談奇聞として强調しようとして、法官の機智明察は寧ろ二義的附加物的なものと觀じてゐるかの態度に墮してゐるのである。愈々雜話集的臭味の濃厚さを思はずにはゐられない。

元來裁判物に於ける事件其物の複雜不可解さは、云ふ迄もなく法官の機智明察と對立するものであつた。從つて事件が複雜珍奇であればある程、法官の機智と明察とも纎細鋭敏でなければならなくなつて來る。從つて奇談集的な性質に徹底すればする程、それは一面裁判物としての興味を複雜なものにして行くことになる。が、かうした場合に、讀者をして深い興味を起させるものは、對立する二つのものゝ微妙な融合である。云ひ換へれば裁判の進行である。此點で裁判物の興味は當然探偵物の興味と相通ずる。複雜珍奇な事件はまづ讀者をしてそのうちに疑惑と驚愕とを懷いて彷徨せしめる。事件の紛糾と錯雜とに連れて、讀者は愈々疑惑と昏迷との

底に引込まれる。然も其處に投ぜられた僅かな光を頼りに、正しい推理と判斷とによつて、その疑惑と昏迷との底から、一歩一歩逆に事件を辿ることによつて、その事件の原因動機に想到させる。その過程、云ひ換へれば事件と判決との間を繋ぐ推理の糸の一弛一張に、裁判物の興味の大半はつながれるのでなければならない。が「櫻陰比事」にはその興味が殆ど無かつたのである。其處に並べられた說話の多くには、たゞ事件と判決とがあるだけで、兩者の間の入り組んだ關係が殆ど書かれてゐないのである。此點で本書は必ずしも裁判を書いたものではなく、只事件の珍奇さを語り、附加物的に法官の機智明察を嘆稱する言葉をつけ加へた、雜話集的構成をもつものとなつて了つたのである。殊に法官の機智と博識とを云はうとしても、例へば太鼓の中に小坊主を入れて、後前かつぐ被疑者二人の私語を盜みきかせるといふやうな珍らしい才覺を書き、「人の名を呼ぶ妙藥」とか「見て氣遣は夢の契」とかいふ作品などに現れたやうな、一寸人智を絕したとも見える珍奇な現象が並べられる、といふに至つて愈々雜話集的傾向が濃厚にされてゐるのである。

尤もこれは單に「櫻陰比事」にのみ現れた性質ではなく、我國の所謂裁判物は大抵かうした性質に終始してゐた。それは殆ど常に裁判其物の進行を疎にして、只法官の素晴らしい明察と炯眼とを讃へるための、間髪をさへ入れない判決と、驚くべく豐富な知識とを點出する。其爲に法官を徒らに非人間的な、寧ろ智慧と機器の傀儡にして了つても、全然顧みない、寧ろ智慧と機器の傀儡に迄まつり上げて之を讃稱しようとするのであつた。裁判物の探偵物と異る點であり、雜話集としての興味は兎に角、裁判物として興味は得て索然たるものとなり易い所以である。「櫻陰比事」にのみ特にさうした性質を云々すべきではなかつたかも知れない。が、何れにしても「櫻陰比事」は、さうした性質の故に、裁判物としての興味を特にそゝり得べきものとはならなかつた。鋭い直覺はあつても、その直覺を理知的に跡づけたり、推理の糸を手繰つたりすることに不得手であつた西鶴は、探偵物的興味の橫逸した裁判物を作り得る作家ではなかつたのだと思ふ。

けれどもさういふ立場から見渡しても、五卷四十四章のすべてが駄作と云はるべ

き作品なのでは無かつた。「大事を聞出る琵琶の音などゝいふ作には、却て相當の價値が認められた。說話の進行に凝滯や低迷がなく、從つて結果から割り出して一本筋に動機に向つて辿つて行くといふに似た單純さに墮してゐるのは止むを得ないが、竜に角事件に對する正しい推理がある。探偵物としての要素を略ぼ具へてゐる。一本筋に始と終りとを繫がないで、探索の途上に於ける齟齬や疑惑をも少し色濃く加へたら、恐らくもつと面白いものになつたであらう。「十夜の半弓」も一寸面白い。最初にあげられた被疑者の疑ひがだん〳〵はれて行く所など、本書としては珍らしいものである。若し一歩裁判物としての見地を離れて、雜話集的性質に即して行けば、更に相當面白いものが見出される。「仕掛物は水になす桂川」などさういふ方面で代表的なものであらう。「鯛鮹鱸釣目安」など殊に短いもののなから、元祿世相の一斷面を面白く傳へてゐる。「太鼓の中は知らぬが因果」「惡事見え透く揃へ帷子」などは、罪人を見出すための手段が面白い。殊に後者はちよつとしたものながら人間の心理に觸れてゐる。が、さういふ點では「仕もせぬ事を隱しそこなひ」が一層優れてゐよう。

が此處まで來ると裁判物としての興味は全然なく、寧ろ西鶴得意の人間心理を書いた短篇小説といふに近いものになつてゐる。西鶴が、結局自分の知らぬ探偵乃至裁判の經緯などを書くべき作家でなく、親しく世相の裡に眺めたものを、確實に表現して行くべき作家であつたことが思はれる。

第七節　町人物

一　町人物の世界

抽象された色の世界を描き出すのに餘念なかつた「一代男」の作者は、第二第三と創作の筆を進めるに從つて、色の世界を卒業して全圓的な世相其物への關心を濃密にした。自ら色の世界と脊中合せの町人生活の他の一面が、彼の意識の表面に浮んで來た。一度其の意識に立脚して「本朝二十不孝」を物した彼は、武家物、雜話集、裁判物と、彼のもつてゐた材料の殆どすべてを書き盡した後に、再度その意識に歸つて來た。彼はその意識に着して町人の經濟生活をその製作の新しい對象として選んだ。「永

代藏」「胸算用」「織留」等の作品がかうして生れた。所謂町人物である。それは何れも純粹な短篇集であつたけれども、作者はその個々の短篇の凡てに於て、彼に最も適當した活動の世界を見出してゐる。彼は其處に自己の心臟に最もぴたりと感じられる人間の悲喜と哀歡とを見た。其處に奔走する人間の相は彼にとつて最も親しい同階級のものであつた。其處に起伏する悲喜劇は彼の最も端的に理解することの出來るものであつた。自ら彼の作家としての活動は自由、奔放、複雜であつた。と共に落着いて來た彼の晩年の心境が、さうした自由奔放の活動の底にも、一脈溫籍の味ひをたゝへさせた。長い間の修練から得て來た創作家としての純客觀的な態度、材料と作者との適度の距離を保たせる工夫なども、さうした穩かな感觸の作品に行渡るのを妨げなかつた。描かれた世界の絢爛さと、取扱はれた材料及び主題の蠱惑的な點に於ては、それは無論好色本に及ばなかつたけれども、その落着いた味ひの深さに至つては、素より好色本の多くには求められないものであつた。ともすれば輕視し去られ勝ちであつた町人物が、近頃好色本と並稱せられ――寧ろ時には好色本以

上に評價されるに至つたのも、亦當然のことであると思ふ。

尤も前にあげた三作のうち「織留」六卷二十三章は西鶴作としての確證があるものではなく、寧ろしば〳〵西鶴作としての眞僞を疑はれてゐる。本書は西鶴の歿後一年團水の手によつて編纂刊行されたもので「本朝町人鑑」と「世の人心」との二部を合本した形になつてゐる。同書に添へられた團水の序文によれば、西鶴は生前此の二部を「永代藏」と併せて商職人日常の心掛けを說くべき三部作として完成する意志であつたのに「永代藏」のみ完成して、他は未完成の儘に逝つて了つたのであるといふ。「永代藏」の後にも「胸算用」を成就してゐる西鶴として「町人鑑」と「世の人心」とを未完成のまゝに措いたといふのも多少は可怪しく、殊に「世の人心」はその文脈の亂れ著しく眼につき易いこと等の爲に、かなり色濃く西鶴作としての眞實を疑はれてゐるのである。が、その疑ひは何うであらうか、文脈の亂れや、西鶴としては思ひがけない段落の切方などがあつても、それは未定稿として許されないことはない。さうしたものを含みながら、大體西鶴として首肯出來ない文章でもない所に、却て未完成の遺稿として

信すべきよすがありさうに思ふ。のみならず團水は云はゞ一種の律義者であつた師弟の道を思つては、洛陽を去つて七年の間舊師の草庵を守りもした。「花見車鳴絃之書」には師翁を裏切つた室賀轍士を、道德的見地から口を極めて難詰してゐる。さういふ彼が師翁の名を僞つた書物に、堂々と署名した序文を掲げたらうとは考へられない。 此點は西鶴の遺稿として矢張り屢々疑はれ勝ちな「置土産」や「俗つれ〲」にもそのまゝ當てはまるものだが、兎に角私は此の團水署名の序文ある點から考へて、多少の疑はしさはあつても、本書を西鶴作と認定しようと思ふ。が、本書を西鶴作と認定しても、これを「織留」一篇として取扱ふことは何かにつけて不都合が多い。「世の人心」と「町人鑑」とでは、その作品の基調にしても、作られた時期にしても、かなり違つたものであるのだから。 主題から云つても作品としての味ひから云つても、「町人鑑」は「永代藏」に近く、「世の人心」は「胸算用」に近い。 寧ろ「胸算用」以後のものかとさへ思はれる。從つて以後の考察に於ては、私はこれを「織留」一部として對象とするのを避けて、兩部を夫々獨立した短篇集として論議したいと思ふ。

二　當代の町人生活と西鶴の見た金

既に屢々述べて來た通り、所謂新興階級の自負と氣鋭と力強さとを以て、天下に横行した當代町人の生活であつた。彼等の眼中には王候もなければ貴人もなかつた。然も彼等はなほ嚴然たる階級制度の桎梏の下に跼蹐せねばならぬ下層階級であつた。如何に實力を握つてゐても、形の上の上流階級たる武士の世界を覬覦することさへ許されなかつた。況して之を凌駕して社會に君臨することなど思ひもよらなかつた。只僅かに金力によつてのみ社會を動かすことも武士階級を壓倒することも出來た。と同時に彼等にとつて唯一の慰めであり誇りであり生き甲斐であつた豪奢な享樂生活も、無論金によつてのみ可能であつた。自ら當時の町人は人生に於ける一切の可能を金に見出した。「ひそかに思ふに世に有る程の願ひ何によらず銀徳にて叶はざる事天が下に五つあり。それより外はなかりき。これにましたる寶船のあるべきや」（永代藏巻一「初午は乘て來る仕合」）といふのは、當時の時代思潮としてまだしも穩かな分であつた。「人の家にありたきは梅櫻松楓、それより金銀米錢ぞ

かし（同前）「二代目に破る扇の風」といふやうな猛烈な黄金萬能主義が當時の人間には胸底深く刻み込まれてゐた。色濃い拜金主義の世相が展開されてゐた。西鶴はその町人物に於てかういふ世相と、世相のうちに動く人間の相とを描いた。其處には所謂爪に灯をともして一生歡樂の味ひを知らずに過す人間があつた。他人の富貴に我身のしがなさを比較して、世の無常を觀ずる男があつた。と同時に富貴に驕つた贅澤三昧の生活もあつた。さういふ元祿時代町人の生活相の様々が、微と細とを盡して描かれてゐるのが西鶴の町人物であつた。金を通して見た世相――此の意味で町人物に一貫した主題は云ふ迄もなく金であつた。此點でも町人物は好色本と相對する。彼が色に即して抽象された元祿世相の一面なら、此は金に即して抽象された元祿世相一面を語つてゐるのであつた。

「ひそかに思ふに世に有る程の願ひ何によらず銀徳にて叶はざること天が下に五つあり、それより外はなかりき」と云ひ「始末大明神の御託宣にまかせ金銀を溜むべしこれ二親の外に命の親なり」「初午は乘て來る仕合」と云つた西鶴は、流石によく金の性

質を知つてゐた。金が人間の心に食込んで、其處に特殊な陰翳の數々を織出すことを知つてゐた。「富貴は惡をかくし貧は恥をあらはす」(町人鑑巻一)「古帳よりは十八人口」と云ひ、「親分限なれば不孝者も隱れて知れず、親貧なればすこしの惡も包み難し」といふ、彼が金の性質に與へた概念化は、例によつて淺薄な常識と見られる危險をもつてゐるけれども、然も其處には金を單なる物質以上のものと見てゐる氣持が反映されてゐる。金即心――花袋氏が頻りに云つてゐられる其の氣持である。「金を單に金として、物質として見てゐる間はまだ理解が淺い。金は魔物である。生命であり力である。それが不德にもなれば遊蕩にもなる。不思議なものだ」。嘗てその「永日小品」に於て夏目漱石もそんな意味のことを云つてゐた。その氣持である。金が心に入つてゐる。心になつてゐる。金がしみ込んだ心の現れと人間の動き、西鶴は町人物に於てそれを正しく描破したのである。「祈るしるしの神の折敷」(永代藏)の主人公夫婦が、人の嫌へる貧乏神を祀るのは、金がない故の捨て鉢である。「心を疊み込む古筆屛風」(同)主人公が「わざくれ心になりて丸山の遊女町に行」くのも、之に似た心の頽

發である「才覺を笠に着る大黒」同の主人公が、夫の死骸を狼の黑燒と欺稱して、賣步くのは、金が生んだ罪惡である。「二代目に破る扇の風」同は拾はれた金の遊蕩である。「胸算用に於ける多くの人々が苦しい大晦日の遣り繰りに知慧のありたけを絞つてゐるのは、みんな金の悲劇である。亭主が入れ替るのも、腹をきる眞似をさせられるのも、みんな金の動きであり作用であり、金の性質の具體化である。「鼠の文づかひ」に出て來る老婆は、鼠にひかれた金を思ひがけず煤拂ひの日に見つけ出しながら、「かゝる盜心ある鼠を宿しられたる不祥に、滿丸一年此銀を遊ばして置きたる利銀を、屹度母屋から濟まし給へといひ懸り、一割半の算用にして十二月晦日の夜請取り、本の正月をするとて」獨寢をしたといふ。不思議な金の性質が、此處迄來るともう徹底のどん底といふ氣がする。黄金萬能主義の世相を徹見した西鶴は、自らかうした金の性質への深い觀照と理解とを完成して、さうした性質の不可思議さを十分味識することが出來たのであらう。田山花袋氏は云つてゐる。「私の考へでは日本の文壇で金を本當に取扱つた作者はかれを除いては他にないと思ふ。……日本ばかりではない。

外國にもこれ程金を描いた作者はないかも知れない。……(彼は)胸算用や永代藏で、モウパッサンやチエホフが書いたもの以上に本當の金を書いた。……ゾラに"Money"といふ作があるが、あれなども決して徹底してゐない。チエホフにもあるが、胸算用の中にある二三篇ほど思ひきつてゐない」(西鶴小論)と。西鶴の金への理解の非凡さを知ることが出來ると思ふ。

が然しかうして金への深い理解を示しながらも、西鶴は決して黃金萬能の世相に同感をもつてはゐなかつた。却て彼は時に金を否定するやうな口吻を漏らした。「金銀瓦石におとれり」といふやうな言葉を、彼は一再ならず繰返してゐる。彼に幾分黃金萬能の世相に反撥する氣持のあつたことがそれで知られる。が此の否定は、實は金其物への否定では無かつた。「五人女」を書き「艶隱者」を書いた彼としての人生觀から來た金の否定であつた。「人間長くみれば朝をしらず、短くおもへば夕におどろく。されば天地は萬物の逆旅、光陰は百代の過客、浮世は夢幻といふ、時の間の煙死すれば何ぞ、金銀瓦石にはおとれり、黃泉の用には立ちがたし」(初午は乘て來る仕合)。彼

はそんなことを云つてゐる。夫は無論金其物の否定ではなかつた。
けれども町人物の作者がかうした否定的な想念の上に立つてゐることを忘れては不可い。所詮は否定さるべき人生の一假象と觀じながら兎にも角にも之に執して、之に對する對策を講じてゐる西鶴の相は、既に度々述べて來た彼の對人生、對世俗の態度を端的に示してゐるものではないか。必然的にその對人生の態度から生れた教訓が町人物にも繰返された。金を中心にした處世の方針が說かれた。「永代藏」には特に夫が著しい。と同時に、さうした作者の態度の故に、町人物には、否定を踏へた肯定の、淋しく離れきつた作者の氣持が流れてゐた。人生を捨てないながらにあきらめたものの淋しい微笑と哀感とがたゝへられてゐた。其處に町人物の味ひの深さがあつた。一撫でや二撫でゞは分らない、その代りに噛みしめれば噛みしめる程微妙に味はゝれる味ひがあつた。さういふ點で感じの深いのは「世の人心」と「胸算用」とであつた。「町人鑑」と「永代藏」はそれらに比べて幾らか未だしの感がないことはなかつたけれども、それさへ從來の作には殆ど見られなかつた穩かな感觸をもつて

ゐた。作者の歩みは、町人物に於て確實に、從來の作に於けるよりも一歩を深められてゐるのだと思ふ。「枯れた」といふに近い心境が、此處に西鶴ひらけかゝつて來てゐることが、確に肯かれる。

三　日本永代藏と本朝町人鑑

兎にも角にも金を肯定した西鶴が、その肯定の上に立つて貧を防ぎ富を得べき心得を說いたものが「永代藏」と「町人鑑」との二篇であつた。「永代藏」は六卷三十說話、別名を「新長者敎」といふ。寛永四年刊行の「長者敎」を摸したもの。說話の種類から云へば質素節儉の消極的方法を說いたものと、智慧才覺力行等の積極的方法を例示したものとの二種類に分たれる。一種の商人立志傳として、又興味多き讀物として、相當後世に迄持噺されたものらしく、內容の順序を變更し、漢字交り文を假名書きに改めた僞板本さへ二種もあるといふ。團水の「日本新永代藏」以下、其趣向を摸した作品も相當多く世に出てゐる。「町人鑑」は二卷九說話「永代藏」が意識して金を逐ふ者の話を集めて、其處に致富の心得を說いたものであるのに對して、之は偶然の機會による致富

成功譚を集めてゐる。尤も本書下卷が全然偶然の契機による致富を描いて之を積善の餘慶と說く、一種の因果應報譚であるのに對して、上卷は同じく偶然の機會によ る致富とは云つても、一面その偶然の機會を見逭さない常住の緊張と商機を摑む慧敏さとを說いてゐるものである點で、兩者の間には各說話の基調にかなりの相違がある。云はゞ上の卷は「永代藏」の世界に近く、下の卷はぐつと離れてゐるのである。「永代藏」に於て致富の積極消極の兩面を見盡した西鶴が、「町人鑑」に於ては更に商機を摑む慧敏さと、常住の善行によつて餘慶を受くべきことゝを描くことによつて、致富の心得の殆どあらゆる斷面を盡さうとしたのではないかと思はれる。本書も亦「世の人心」との合本「織留」の形に於て、正德二年に再版されてゐるといふ(藤井紫影氏編西鶴文集解題參照)

所で此の二書に於て致富の要訣を說かうとした西鶴は、自らその要訣を抽象的に纏め上げた。「永代藏」中の一篇煎じやう常とはかはる問藥」に於ける長者丸の方組といふものを見給へ。

「△朝起五兩△家職二十兩△夜詰八兩△始末十兩△達者七兩、此五十兩を細にして、胸算用秤目の違ひなきやうに手合念を入れ、これを朝夕呑むからは長者にならざるといふ事なし。然れどもこれに大事の毒斷あり。○美食淫亂絹物を不斷着○内儀の乘物、奎盛娘に琴歌がるた○男子に萬の打嘲○鞠揚弓香會連俳○座敷普請茶の湯數奇○花見船遊び日風呂入○夜歩行博奕碁双六○町人の居合兵法○物參詣後生心○諸事の扱請列○新田の訴訟事金山の中間入○食酒莨心當なしの京上り○勸進相撲の銀本奉賀帳の肝入○家業の外の小細工金の放目貫○役者に見知られ揚屋に近付○八より高い借銀、先づ此通りを斑猫砒霜石より怖ろしく、口にていふも扨置き心に思ふ事もなかれ」

旣に藤村先生も云はれた通り、長者丸の方組とは即ち大體は致富の積極的方法であり、毒斷はすべて之消極的方法である。「永代藏」や「町人鑑」の各說話は何れもかうした致富の要訣に幾らかづゝは觸れてゐた。が、其處に羅列された心得は溫健であつた。手固く地道であつた。のに、致富の具體列として描かれた說話の多くは、必ずし

もさうした平凡常道をのみ行くものでは無かつた。寧ろさうした平凡常道以外の所謂危道によらうとするものが多かつた。作者自身もさうした危道を駕御し得る才腕を讃へて「辯舌手だれ知恵才覺」といふ言葉を屢々繰返してゐる。「遊園へ商ひにつかひぬる手代は、律義なる者はよろしからず。何事をもうちばに構へて、人の跡につきて利を得る事難し。又大氣にして主人に損かけぬる程の者は、よき商賣をもして取り過しの引負ひをも埋むる事はやし」（永代藏卷二、舟人馬かた鐙屋の庭）といふ言葉などにも、作者のさうした氣持は覗はれよう。其處に積極果敢な元祿の時代精神が感じられる。時代精神を深く體得した西鶴も、性格的に人間の積極性を讃仰したのであらうと思ふ。彼はさうして所謂知慧才覺を重視する傍ら、「人の分限になる事、仕合せといふは言葉、實は面々の知慧才覺を以て稼出し、其家榮ゆる事ぞかし、これ福の神の夷殿のまゝにもならぬなり」と迄、後の「胸算用」の中では云ひ切つてゐる。

然しそれは一面彼の眞實であると共に、他面彼としてありさうな云ひ過ぎであつた。「男色大鑑」に於て強ひて男色を女色以上に謳歌しようとしたあの態度と、全然同

じ現れであつた。彼のやうな如是即人生の感を懐いてゐたものが、それ程迄に人間の知慧や才覺を無上絶對のものと思はう筈がない。彼にはもつとづつと深い人間の運命の破綻と世相の調和の破懷とを怖れる心があつた。乘るか反るかの大勝負の後に兎もすれば殘され易い人間悲劇など、殊に彼が厭ふものであつた。自ら彼には運命に對する謙虚な心がひらけてゐた。「分限は才覺に仕合せ手傳はではなりがたし。隨分かしこき人の貧なるに愚なる人の富貴、この有無の二つは三面の大黑殿のまゝにもならず、鞍馬の多聞天のをしへに任せ、百足のごとく動きて、其上に身袋のならぬ是非もなし」（永代藏「高野山借錢塚の施主」）と云ひ「世は愁喜貧福のわかちありてさりとは思ふまゝならず、かしこき人は素紙子きて愚なる人はよき絹を身に累し。兎角仕合せは分別の外ぞかし」（同「怪我の冬神鳴」）といふ。何れも天の支配を感じて、其前に人間の無力微弱であることを痛感してゐるものゝ言葉でなければなるまい。西鶴の本音は確に此處にあつた。「町人鑑」の下の卷に於て、思ひもかけぬ運命の廻り合はせによつて仕合せを得る人間の幾人かを書いてゐる西鶴には、殊に濃厚にさう

した感慨が感じられる。かういふ彼であつたればこそ、勢ひに驅れ性格に驅られて知慧才覺の綱渡りを嘆賞する氣振りを見せながらも、然も兎もすれば自然の運行を紊り、天の覺召しを忖度するの不遜に墮し易い危道に着しようとする氣持を、凡個に心の底深くに藏してはゐなかつたのである。致富の要訣を抽象網羅した長者丸の方組なり毒斷ちなりが、只管手堅く地道にのみあつたことは、かくて矢張り西鶴胸底の眞實を正直に反映してゐることになり、從つて其處に晩年の西鶴の心の傾きが端的に表現されてゐる譯だと思ふ。

けれども誤解があつては不可い。天の支配を感じて夫に從順であらうとしたとは云つても、西鶴は決して「艶隱者」一流の優遊無爲を倚んだのではない。只管神や佛の御利益に縋れと云つたのでもない。前に掲げた言葉に、「兎角仕合せは分別の外ぞかし」と云つた彼は、すぐに「然れども」と續けてゐる。「然れども其身働かずして錢が一文天から降らず地から湧かず」といふのである。所詮は天の定めた運命の前に無力な人間である。「然れども」、唯無爲にのみ任して天の與ふる運命を待てと云ふのでは

ない、能ふ限りの努力と戒心とを盡せよといふのである。其處に彼の人生觀乃至人間觀の微妙な色合ひがあると共に、又所謂教訓の生れる可能もあつた。彼の教訓はだから決して空しい身振りではなかつた。本心からの聲であつた。が只それが、只管手堅さと地道さとを稱揚しようとするものであつたが故に、勢ひ多くは穩健平凡な教誨にならなければならなかつた。と同時に既に「二十不孝」の教訓について述べて來たと同樣、彼の町人物に示された教訓も、教訓として妥當なものばかりではなかつた。無論其處には「町人鑑」の下卷に多く語られたやうな、勸善懲惡的な因果を書いた教訓物として比較的相應しい形のものもあつた。「永代藏」にも「世はぬき取の觀音の目」「茶の十德も一度に皆」等、不正な金儲けの結果終りを完うしない人々の話を書いて、適當な教訓を暗示したものもあつた。其他勤勉を說き機器を說いて、教訓物として妥當なものも少くはなかつた。が、夫等のものゝ場合をも通じて、作者の意圖は善を勸め惡を懲らすといふ所にあるのでは無かつた。只致富防貧の心得を說かうとするにあつた。自ら其處には「正直にかまへた分にも埒は明ず」（怪我の冬神鳴）といふ

やうな不都合極まる教戒も掲げられた。「二人娘に黄唐茶の振袖に青笠を着せて、言葉少し訛りならひ、抜參りの者に御合力と御伊勢樣を賣りて此十二三年も同じ嘘にて世を過る女」(同)も、必ずしも非難の目を以て見られてはゐなかつた。「犬の黒焼を狩の妙藥と僞り賣る男の如き、却て才覺男の一人として賞讃的な取扱ひを受けてゐた。教訓物としてそれは素より相應しいものとは云へなかつた。「二十不孝」が教訓物としての價値に乏しいものであつたのと同樣に、「永代藏」や「町人鑑」も、作者の意圖した教訓物としての効果は、決して賞揚せらるべきものではなかつた。たゞ其の教訓を通して作者晩年の心境を覗ひ得ることゝ、金を得ようとして知慧才覺の限りを盡し、金を失ふまいとして營々刻苦する人々の相が、巨細鮮明に描き出されてゐる所に、或は作者の意圖しなかつたかも知れない兩書の價値が、生れ出てゐるのであると思ふ。

と同時に、さうした金に憑かれた人々の東奔西走を例へば才覺といひ致富の要訣といふやうな中心的な主題に結びつけてゐる爲と、さういふ人々の活動――成功や失敗への進行が、自らなる發展を含んでゐる爲などの故に、「永代藏」と「町人鑑」との各短

章には、比較的組織立つた纏りをもつてゐるものが多い。味ひの深さや澄明さに於ては「世の人心」や「胸算用」に一籌を輸する兩書ではあつたけれども、此の各短章の妥當な纏りといふ點では、後の二書よりづつと立優つてゐたことは、注意されなければならない。個々の短章としては「永代藏」ではまづ「二代目に破る扇の風」がいゝ。思ひがけず拾つた金が、鐵壁の拜金思想の僅かな隙間に食込んで、漸次に周圍を浸融し、遂に主人公をして家邸を傾ける蕩兒となりきらせる。面白い發展だと思ふ。「世界の借家大將」「祈るしるしの神の折敷」「心を疊込む古筆屏風」「貰置は世の心やすい時」なども、夫々に面白い。金に絡んだ心の微妙な動きや、金の性質に對する徹底した觀察などが、何れにも鮮かに描き出されてゐる。「町人鑑」九說話のうちでは、最初の「津の國のかくれ里」が優れてゐる。其處には「永代藏」の「古筆屏風」と一脈相似通つた世界が取扱はれてゐる。何れも遊里に於て致富の緒を見出すのであるが、後者に於て、商機に觸れながら敵娼への愛著にひかされてゐる男と、不首尾も思はずいきなり撥ね起る主人公とを對照的に描き出してゐる邊りには、前者の金一面に即した描き方には見られな

い微妙な味ひがあつた。近松秋江氏が夙に本章を推賞してゐられたのも、蓋し至當の評價であつたと思ふ。

四　世間胸算用に描かれた金の悲喜劇

「永代藏」と「町人鑑」とに於て金を支配すべき人間の心得を說いた西鶴は「胸算用」には轉じて金が人間を支配して行く形を描いた。だから前者に於て抽象的に金其物を云爲することの多かつた彼は、此處では貧富に支配された人間の生活態度を描くことにのみ專心になつてゐる。金に動かされる人間の生活は、無論「永代藏」や「町人鑑」にも書かれてゐた。夫等の作の價値は寧ろさうした人間の描叙にあつて、致富の要訣といふ主題にあるのでないことは前に述べた通りだが、然も作者の意圖が前者になく後者にあつたが故に、其處には比較的抽象的な議理乃至はそれに類するものが重要な位置を占めてゐた。それが――さういふものゝ影が「胸算用」には、無くなつてゐる。あつても前者に於けるが如き第一義的なものではなく、全然二義的附加物的なものになりきつてゐる。其處では吾々は只金の性質を、その性質の具體的表現なる

人々の生活相のうちに眺めればいゝのである。「胸算用」が「永代藏」や「町人鑑」に比してより鮮明に印象的であり、より興味の横逸するものがあるのは、無論其爲である。

「胸算用」五卷二十話は西鶴生前の浮世草子としては最後のものである。其のサブタイトルに「大晦日は一日千金」とあるのでも知られる通り、年の瀨を越す人々の悲喜哀歡の樣々を描いたものである。既に藤井乙男氏も西鶴文集の解題に於て、「定めなき世の定めとか此翁の吟じけん大晦日の遣繰算段の、苦しくも亦可笑しき魂膽を寫し出せる老熟圓滑の筆致、商人物中の傑作にして鶴が最後の作たるに恥ぢず」と云つてゐられる通り、彼の町人物中での壓卷である。其處に示めされた作者の氣持も深く落着いてゐる。描き出された金の悲喜劇を孕んで、じつとりとした感觸とユウモラスな味ひとが絡んでゐる。後の八文字舍本などで同じやうな題材を取扱ふとすれば、單なる道化となりコミツクとなるより他は無かつたやうな說話が、流石に確かな人生諦視を裏打として、時に溫籍なユウモアとなり、時に掬すべきペーソスとなつてゐるのである。第一大晦日といふ日を捉へたのがよかつた。泣くも笑ふも一

日限りの決算日を送る人々の心や生活に作用きかける金――これ程微妙に人間の生活を支配する金の力を描くのに都合のいゝ題目はないかも知れない。西鶴は此の好題目を捉へて之を縱横に料理したのである。「胸算用の中にある大晦日の苦痛あれは今でも我々の心に響いて來る、我々の生活を動かして來る」(西鶴小論)と田山花袋氏も云つてゐられる。

本書に描かれた世界を大別すれば、元日より胸算用油斷なく努めて大晦日を迎へた人々の悠々たる年越と、思ひもかけぬ仕合せや惡辣な策略によつてよき年を迎へる人々の大歡喜と、夫等とは反對に、切迫つまつたどたん場の苦しい遣り繰りに知慧と苦膽の有らん限りを盡す人々の笑止とも悲哀とも云ひやうのない惱みの世界とに分たれる。第一の世界に屬する人々の相は、その世界の性質として例へば卷一「長刀はむかしの鞘」のねたり者の浪人が隣りに住む女「伊勢海老は春の紅葉」の主人公などに見る如く、大體平凡なものながら、それさへ同じ「春の紅葉」の隱居になると、その徹底振りが面白い。第二の世界の人々に至つては、例へば「銀一匁の講中」の主人公の如

く、企んだ計劃の的中に、我も人も義理も人情も忘れ盡して只雀躍抃舞する。前にもあげた「鼠の文づかひ」の隱居の如きは、殊に徹底してゐる。「伊勢海老は春の紅葉」の老婆を更に徹底させたやうな、醜い老婆の澁面が彼女には不愉快な程鮮明に想像される。金に憑かれた者の飽くことを知らない卑陋さと貪婪さ、彼女が利銀を懷ろにして喜んで眠るその眠りや喜びにさへ、金のもつ陋さが絡みついてゐるさうに思はれる。

が、かうした種類の、綺麗にもせよ陋いにもせよ、年の瀨を安く歡びを以て越ゆる人々の世界は、「胸算用」には比較的多く取扱はれてゐない。「胸算用」の全體を最も色濃く塗りつぶしてゐるものは、第三の世界に住む人々の可笑しくも亦苦しい喘ぎである。千二百石とつた人の娘が、其處では場末の小質屋の店先で、薙刀の鞘一つを云ひ懸りのけちなゆすりを働いてゐる(長刀は昔の鞘)。大晦日の夜市に二疊釣の蚊帳一帳を賣りに出して、値が成らぬ爲賣らずにしまふ男がある(つまりての夜中)。大晦日迄質にも入れずに置いた蚊帳を、切迫詰つて夜市に出すものゝ暮しのしがなさ、それさへ値が纏らねば引込めるといふ所に、「胸算用」の世界としてはまだ〳〵餘裕のある分で

あることが思はれる。掛乞ひを欺く手だてとして、お茶屋に逃げ込んで酒と嘘とに紛らかしてゐるもの(嘘も只は聞ぬ里)にも、同じやうな餘裕と、その餘裕のある所に生ずる微妙な心の陰翳が觀じられるとすれば、腹切る眞似をした上に迷ひ込んだ鶏を斬り殺して掛乞共を怯えさすのや(門柱も皆かりの世)入替つた亭主が借錢を強請して成らずと見せて掛乞共をあきらめさせる(亭主の入替り)のには、更に一歩を進めた苦し紛れの足掻きが感じられる。

金が人間を支配して行く形、云ひ換へれば金に動かされる人間の生活を、かうして西鶴は「胸算用」のうちにあらゆる方面から眺め盡して、金が生んだ悲喜劇のあらゆる段階と陰翳とを描いた。「永代藏」や「町人鑑」に於けるよりも、それは更に微妙さと複雑さとに富んでゐた。金を徹見した作者、と云はれる所以である。がたゞ其處には「町人鑑」の「北の國のかくれ里」に見られたやうな、色の世界と隣接した、乃至はそれより更に一歩を進めて愛慾の惱み其物と融け合つた金の悲喜劇は殆ど描かれてゐなかつた。其處に本書がなほ全國的に人生其物を描いた作品とは云はれない點があつた。

金を描いたもので、人生を人生として描いたものではない、云はゞ作品としてなほ抽象的な主題に即したものといふ性質を「胸算用」も有つてゐたのである。 それは本書に寄せられた作者の教訓が、「世に金銀の餘慶ある程萬につけて日出度き事外になけれども、それは二十五の若盛りより油斷なく、三十五の男盛りに稼ぎ、五十の分別盛りに家を納め、惣領に萬事を渡し、六十の前年より樂隱居して寺道場へまゐり下向して世間向のよき時分」(銀一匁の講中)といふ種類のものである所にも覗はれる。「是を思ふに女郎狂ひは四十より內、公事は五十迄、それ過ぎては後生願ふが善し」といふやうな好色本に屢々繰返された教戒が、人生を色一面と觀じての教戒であつたのと同樣に、之は人生を金一面に即して抽象的に見た者の言葉である。 此の二つの教訓をなひまぜたところに、はじめて西鶴の處世觀の全部は渾一される譯である。 彼は要するに彼自身の處世觀を好色本と町人物とに夫々一面的に抽象したのであつた。 彼の人間乃至世相の全圓的描寫は、此の意味で未だ「胸算用」には現れなかつた。 それは次いで來るべき「世の人心」と「置土產」とに於て初めて渾成されたのであつた。

が既に「好色盛衰記」が色を通して見たものとして渾然たる人生の味ひに徹到してゐたのと同樣に、「胸算用」には金を通して觀じられた人生の味ひが、渾然と表現されてゐた。冒頭の一章から最後の一章まで、何れもさうした人生の味ひを裏打としてもつてゐないものはなかつたが、さういふ點で最も渾熟的であつたのは「平太郎殿」の一篇ではないかと思ふ。窮乏が醸し出した陰慘な世相が其處には淚ぐましく描き出されてゐる。暗い、救ひのない人生といふ氣がする。西鶴はかういふ人生の暗さにじつと見入つてゐた。見入りながら其の暗さに安住してゐた。だからかうした陰慘な世界の描寫のうちにも、微かに微笑するやうな氣持が流れてゐる。作者が其の最後の安住境に落着きはじめたのであることが知られるゐる。が、此の世界まで徹入した時、作者は聽て彼自身の心境の味ひ――所謂持ち味によつて文をやらうとする傾向に墮して、作品としての首尾結構に留意するといふ態度を一時失ひかけたのではなかつたであらうか。「胸算用」に於ける各短章は、其の多くを通じて、布置と整頓の如何にもルーズなものが多かつた。さういふ點で比較的救はれてゐたものは、前にも

あげた「銀一匁の講中」「平太郎殿」其他數へる程しか無かつたと思ふ。西鶴作中殊に傑れた作品の一つとして擧げることの出來る「胸算用」が、僅かにもつてゐる缺點と云へば、恐らく此の結構上の不緊密さではなかつたかと思ふ。

五　西鶴の世相描寫と「世の人心」に示された最後の轉向

金を描いた西鶴は、自ら元祿世相に於ける富と貧との諸相に觸れた。「夫婦子が一人、弟に二三郎とて脊僂病、ひとりは乳のませし姥が足たゝずして外に賴む島もなく爰にかゝり舟、日和を見てもどれを一人出て行けといふものもなし。さりとては十貫目の利銀にて八十日取り、五人口は過ぎかたし。此銀朔日に請取り、五匁の晝賃をのけて置き、白米のよきに味噌鹽薪をとゝのへ、常住香の物菜この外にはいかな〳〵三月の鯛を一枚松茸一斤二分する時も目に見るばかり、咽がかわけば白湯に焦殼、油火も眞中に一つともして、これを寢ざまに消して鼠のあるゝをかまはず、盆正月の着物もせず、年中始末に身をかため、慰みには觀世紙縷をして明暮不自由なる世や」（永代藏「怪我の冬神鳴」）といふのは西鶴の描いた貧として、まだ〳〵餘裕のあるものであつ

た。長塚節の「土」は貧しい農民生活の暗さを描いて夏目漱石を驚かせたものであつたが、其の暗さは、生々しさと作者の力瘤の感じとを別にすれば、大體此の程度のものではなかつたかと思ふ。西鶴はそれから見ると更に數歩を徹してゐる。「町人鑑」の「保津川の流山崎の長者」に描かれた、しがない世帯をさへ持ちかねた夫婦が家を疊む條などを見るといゝ。文章に淨瑠璃風の變な筆癖こそ目立つが、生活の苦しさとその苦しさに負けて愚痴になつた人間の心とが、飽く迄も鮮明に描き出されてゐるから。感傷の涙に溺れることのなかつた西鶴の強い性格は、かういふ極貧のどん底の慘ましさや哀しさを描くには、極めて相應しいものであつた。其日暮しの貧しい人々が僅かな品物をもつて金を借りに來る場末の小質屋などの狀景や、さては寒風に吹きさらされた渡舟の中、大晦日の糶市など、悲しく苦しい貧の世界は、かういふ彼によつて屢々繰返された。「心弱くては出來ぬ商賣」と彼自ら幾度も云つてゐる質屋の狀景は、殊に彼の好んで描き出したもの、其處にあらゆる貧の條件が微に入り細に渉つて描き盡されてゐた。

と同時に、飽食暖衣、榮耀榮華に醉生夢死する富貴な人々の生活相をも、西鶴は常に迫眞の筆力を以て描破してゐる。「おもしろの女﨟の都や、山も川も散らぬ花の歩行くを見て、悲しやいかなる因果にて田舍には生れけるぞと、我國元を忘れて毎日の遊興に氣を亂しけり。されども限ありて歸るさに色よき妾者十二人抱へて豐後に下り、居宅を京作りの普請美を盡して、軒の瓦に金紋の三字を付けならべ、四方に三階の寶藏、廣間につゞきて大書院、六十間の廊下、東西に築山、南に洲濱を掘らせ、岩組西湖を移し、玉の蘚石、唐木のかけ橋、亭に雪舟の卷龍、銀骨の瑠璃燈をひからせ、瑪瑙の釘隱し青貝の梁鼻、眞綿入の疊に天鵞絨の緣を付け、其外結構記し難し。雪の朝を詠め夏の夕涼み玄宗の花軍をやつし、扇軍とて數多の美女を左右に分けて、其身は眞中に座して汗しらぬ姿を兩方より扇ぎ立てられ、風強き方の女に靡き、負けたる方の扇は取りて池にうかめ、扇ながしを慰みの一景、昔の眞野の長者もこの奢には何として及ぶまじ」(永代藏「國に移して風呂釜の大臣」)。豐富な色彩、綺羅びやかな物の形象、放縱な官能の匂ひ、それらのものゝ裡に浮び上る富者の傍若無人な生活振りなどが、さ

なからに髣髴されるではないか。かうした富裕豪奢の生活をも、西鶴は嘗て好色本に於て屢々描いてゐたと同樣に、町人物に於ても到所に描いてゐるのであつた。

所でかうした富と貧との微妙に錯綜する所に、所謂元祿の世相が展開されて來る譯だが西鶴の町人物として上來述べて來た諸作に於ては、それがさながらの世相として描かれてゐるのではなかつた。好色本に於ける美的生活者の生活が、其儘當時の好色生活者等のそれではなく、作者によつて完全な條件の具備を與へられたものであつたのと同樣に、之は貧なら貧、富なら富として、夫々に必要な條件を層々と積み重ねられたといふ趣きをもつてゐた。自ら夫々の記述は貧一面、富一面に片づいてゐた許りでなく、何處かに抽象的觀念的な羅列といふ感じがあつた。其處に前にも云つた作者が世相を世相として描かうとする以外に、他の意圖をもつてゐたことが反映されてゐた。

が作者は既にさういふ態度から漸次に離れようとする傾向を見せてゐた。同く金を主題としながら、金其物に最も即してゐたものは「永代藏」であつた。「町人鑑」も似

たものでありながら、幾分作者の視野は擴大されてゐる。前者に致富の要訣を說いた作者は、後者特に下の卷では直接金を對象としない善行を書いてゐる。餘程金一面に卽しない生活が眺められてゐる。同樣にして「胸算用」に於ても、見樣によつては金とは別物の人間生活の諸斷面が記錄されてゐたとも云へる。といふやうに、漸次に屈折して來た作者の視野は、軈て金其物を問題とする世界を去つて、全圓的な世相其物を對象とする所に進んで來た。さうして生れたものが「世の人心」であつたのである。作者は其處で金を主題とし對象とする世界から、更に一轉して世相其物、乃至は人間の生活其物を主題とし對象とする世界に入つて來たのである。生涯を轉向と屈折とに經て來た西鶴の、これが最後の轉向であつたと思ふ。此の轉向の結果の當然の落着場所に作者が完全に到達し得たものが、卽ち最初の遺稿「置土產」であつたのである。「世の人心」にはまだ幾分過渡期的な性質が殘つてゐた。其處にはまだ幾分の金への關心――作者の力點が殘つてゐた。が、大體に於ては世相其物、人間の全圓的な生活其物を縱橫に描き出さうとする意圖が色濃くなつてゐる。從つて、例へ

ば質屋を描いても、其處にはもう殆ど抽象の形がなかつた。有名な「具足甲も質種に描かれたものゝ如き、其儘世相の断片であつた。「胸算用」の「長刀はむかしの鞘」に見られた同じやうな一節などの如き單純な羅列の感じは、其處には殆ど感じられなかつた。「世の人心」には、かうして貧でもなければ富でもない、只一切を孕んだ世相其物が到る所に描き出されることになつたのであつた。

西鶴の世相描寫は無論「世の人心」や「置土産」に初めて現れたものではない。西鶴の浮世草子と云へば、すぐにそれが連想される程、彼の作品には常に世相が生々と描き出されてゐた。只それが他の作品の場合にあつては、世相を描かうとする作者の意圖によつてものされてゐたのではなく、主題に即して隨伴的背景的に描かれてゐたのであつた。乃至は世相の一面づゝを語り傳へて、それを綜合するとき、はじめて元祿世相を全圓的に覗ひ得るといふ意味で、倘まるべきものであつた。のに對して、世の人心」と「置土産」とには、世相が夫自身對象として描かれてゐる形があるのである。それは無論今迄世相の部分部分に口を注いでゐた作者が、はじめて全體としての世

相其物を眺め渡すといふ態度を示すに至つた結果であつたに相違ない。

兎まれ西鶴は「世の人心」に世相を描いた。自ら其處には彼の作中でも特に優れた世相描寫の幾つかゝ見出された。殊に「都につゞく伏見の里、通り筋の外今の淋しさ、殊更秋は物あはれに、垣根に咲たる朝顏の茶の湯の沙汰も絕えて、手鈎瓶の繩をたぐり捨ててかけたり。萩は見る人もなき晝の錦、玉芙蓉の枝に泣く子の襁褓など干しける。昔の春は日暮しの御門と眺めし所も間引菜の畠となり、兩替町といひし所も今は錢が百ありさうなる家もなく、三文が油、一文づゝが鹽賣り、赤鰯さへ年越に見るばかり、京へ一里の道なれば女の足にても夕食過ぎより行きかへる所を、貧にからまれ大方の妻子は大佛の顏も見ぬ人ばかりなり。東に城趾の山ふかく松茸狩せし人も皆遊興にはあらず、二條の八百屋よりたづねさせける。よろづの蟲を取つて賣るなど身過は草の種ぞかし。此數千軒何をかして世を渡るとも見えざりしに、朝夕の煙立てけるは、せめて下も大川の舟つきにて、艫から舳へ身體のかぢをとつて、手ぐらまぐらと年波を渡りける」といふ「其足甲も質種」の一節の如きは、嘗て近松秋江氏が「異國

のモウパッサンやメリメエが鯱鉾立ちしても到底企て及ばない程の名文」と迄激賞した文章だが、單なる文致のみならず、世相の描寫としても、渾成の域に達してゐるものではないか。元和偃武以來六十餘年を經て後の伏見桃山あたりのさびれた樣子、新興の時代に取應されて昔の榮華の名殘のあとに淋しく暮してゐる人々の澱んだやうな生活態度などが、如何にも鮮かに浮び上つて來る。「山茶花を旅人に見する伏見哉」の句がもつてゐた哀愁も思はれる。後に云ふべき「名殘の友」に、其角が江戸から訪ねて來る前、恐らくは鍛屋町の寂住居であらうと思はれる彼の家の周圍の空氣を描いた文章の、特に味ひ深く味はれたことなどを考へ合はせると、西鶴は特にかうした寂しくさびれたやうな世相の一角を描くのに、優れた才腕を有つてゐたのかとも思はれる。

が、それは兎に角「世の人心」が全圓的な世相を對象とした作品であつた必然の果として、在來の町人物には兎もすると捨象され勝ちであつた色の世界も自ら其中に取込まれて來た。「宮女のうつり氣」の前半「色」は當座の無分別など完全に好色本の世界

と思はれるものも其處には少くなかつた。又「家主殿の鼻ばしら」などの如く色にも金にも即しない一種の性格悲劇とも云ふべき材料も取扱はれてゐた。さういふ點で同じく町人物とは云つても、本書は「永代藏」其他の作品とはかなり異つた性質のものであることが、愈々明瞭になつて來る。「置土産」は本書に現れた性質を受けついで、更に渾化の度を進めたものであつたが、それが軈て西鶴の生涯の總和であり、彼の作品としての頂點を語るものであり、更に彼の心境の最後の安住境を示すものであつたとすれば、「世の人心」は僅かに其の一歩手前にある作品であつたのである。其處に作者の深い感懷と、穩かに澄み渡つた味ひとが豐かに湛へられてゐることなど、素より云ふ迄もない。前にも掲げた「藝者は人をそしりの種」に語られた俳諧師としての西鶴の氣持が、如何にも穩かに悟りきつたものであつた所などにも、さういふことの暗示はあると思ふ。「一日暮しの中宿」といふ一篇に殊に濃厚に現れてゐる、色氣を卒業しきつた作者が靜かにその色氣を眺めてゐる氣持なども、捨て難い味ひであり感觸であつた。人生觀照家としての西鶴の氣持は、此處まで來たのである。徹したも

のだと思ふ。

第八節　遺稿と所謂西鶴本

一　西鶴作と信じ得る遺稿

西鶴の死後に遺された未定稿の一つとして、「織留」に就いては既に考察を廻らして來た。普通に彼の遺稿として信ぜられてゐるものゝうち、「俗つれ〴〵」と「西鶴置土産」と「西鶴名殘の友」とは、殆ど「織留」と相似た理由によつて、正しく彼の遺稿であつたらうと推定される。無論それらの作品には西鶴作としての可能性に多少の濃淡はある。少くともその可能を疑はせる理由に多少程度の相違がある。「俗つれ〴〵」には寧ろ變挺な書林署名の序文があつた。それは一面非西鶴作を糊塗せんとする書林の猾手段であつたかとも思はれる。「置土産」には西鶴自ら堂々と署名した序文があつた。一種の好色本である本書を思へば、さうした序文や署名のあることが、無論疑はしい異例として考へられる。殊に本書卷四「江戸の小主水と京の唐土と」の終りに「三の卷

より是まで西鶴正筆なりと、わざ〱團水が斷り書をしてゐる所にも知られる通り、本書は西鶴生前に完成されたものではなかつた。とすれば、稿成らぬうちに序文を書くといふことも、多少は疑はしく思はれる。「名殘の友」に至つては、歿後七年の長い間を世に現れなかつたといふことがまづ疑はれる。その內容とする所が、從來の浮世草子と甚だ色調を異にするものである點も、多少の疑惑の原因とはなる。が然しその色調は、他の浮世草子より廻つて、必ずしも西鶴に生れ出づべき可能性のないものではなかつた。第一本書のやうな小咄集的體裁は、西鶴が既に雜話集其他に於て示したもの、從つて本書のやうな性質のものが西鶴によつて書かれなかつたとは決して思はれない。もし又一歩を讓つて、浮世草子作者としての西鶴から出發しては、何うしても本書の世界が肯定されないとするならば、暫く浮世草子作者としての彼を離れて、俳諧師として彼の晩年を思はう。彼は其時平明と自由と謙虛との境地に安住し得てゐた。と思へば、自ら「名殘の友」の世界を彼に肯定しなくてはならなくなる。さうしてさう思へば、本書が七年の長い間を篋底に藏されてゐたといふことも、

自然に理解されて來る。云ふならば俳諧師としての心境より生れた本書は、必ずしも他の浮世草子とは同視することを許さない。俳諧一面に偏つたものであつた。團の狂言をしるせり」と團水の序文にあるのでも知られる通り、多少浮世草子的な取扱ひを受けた短章の幾つかも、無論其處に見出されるけれども、本書は大體としては俳諧師としての隨筆といふに近い特徴をもつてゐた。其の出版に際してこそ團水はこれを浮世草子並みに取扱つたものゝ、無論彼はさうした本書の性質を意識してゐたであらう。其處に彼が本書を特に俳諧師西鶴を追憶するに相應しい遺稿として、七年の舊庵守護の間、人にも知らせず獨り自ら娯むでゐたといふやうなことも考へられるのである。「置土産」に署名を添へた序文のあることは、彼として異例は確に異例であつたけれども、全然先例のないことではなかつた。同じやうな好色本の一種である「男色大鑑」にもさうした序文はあつたではないか。未定稿であるものに作者の序文のあることは、無論可怪しいに相違ないけれども、それも絶對にあり得ぬことゝは云ひきれない。殊に說話蒐集に一定の方針をたてゝするのを常とした西鶴の

場合などにはさうしたことの可能性も比較的多くなつて來る。「俗つれ〴〵」の書林著各の序文は、書林の猾手段であつたことを思はせると共に、一面眞の遺稿出版であることを確にするが爲のものであつたとも思はれる。何れにしても此の三作を、遺稿として絶對に疑ひきるべき理由はない。

のみならず、其處には何れも「織留」を西鶴作と信じさせた現れが共有されてゐた。文脈の紊れと補筆の跡とはありながら、矢張り西鶴らしい文脈文調が觀じられた。律義者團水の序文もあつた。それらの點から、私は結局之等の作の「織留」同様西鶴の眞實の遺稿に、團水等の補筆が幾分加はつたものであることを信じようと思ふ。たゞ「名殘の友」は俳諧師としての隨筆的記錄として、比較的早い頃からぼつ〳〵と書き溜められたものをその儘上梓したらしく、他人の加へた補綴のあとが殆ど無かつた。隨筆的記錄でありながら全體として渾成された趣をもつゐた。さういふ點では無論團水の斷り書のある「置土產」に、最も著しい補綴のあとが見出された。出版された時期から云つても、恐らく作者がその完成を急いでゐる間に、病んでまた筆を執る能

はざるに至つたものの即ち未完成の絶筆として、それは寧ろ當然の現れであつた。さう思へば「俗つれ〴〵」にはさうした補綴のあと乃至文脈の紊れが著しいとは云へなかつた。少くとも世の人心に見られた程の紊れはなかつた。それが同書の各短章と世の人心との筆を執られた時の遲速を語るものではないかと思ふ。其處に示された作者の心境から云つても、さういふことは考へられる。

二　俗つれ〴〵と酒

「俗つれ〴〵」五卷十八章には一面雜話集的な性質が見出された。「世には不思議の飴釜の如き寧ろ「天下馬中に置かるべき性質の作品や孝と不孝の中に立つ武士の如き寧ろ武家物とも見らるべき作品などが、其處には雜然と收錄されてゐる。無論純然たる短篇集である。が、編者――作者とは云はない――の意圖は、必ずしも單なる雜話集として、本書を纒め上げようとしたのではなかつた。團水の序文の一節に、「題號はかの月の下雪の朝いとおもしろく愛あるものなれとかける盃の心にや」とあるのでも知られる通り、本書はかの兼好の徒然草に酒色の論のあるのをうけて、酒と色

とに關する短篇說集話をめるといふ意圖によつて編まれたものであつた。それが一面雜話集的性質に墮したのは、不完全な遺稿として、足らぬ勝ちの原稿を無理に掻き集めようとした結果、時に酒と色との二つ以外を主題とした作品をも含ませて了ふことになつたのであらう。此の意味で、本書に雜話集的色彩を附與した作品は、本書としては必ずしも主要な作品ではなかつたと云へる。

兎まれ西鶴は本書に於て、その處女作以來の專賣物であつた色の世界と並べて、酒を書いた。それは彼として珍らしいことであり、從つて本書は彼を知るに必要な記錄であつたと思ふが、然もあれ程色を謳歌し享樂を讚美した彼として、不思議にもそこには酒に對して示された好意がなかつた。本書中酒を書いた短篇は、ひたすら酒を戒める酒呑みの失敗を描いてこれに敎訓を寓するものばかりであつた。「一滴の酒一生を誤る」「上戸丸裸みだれ髮」といひ、惡性あらはす螢の光」「地獄の釜へ逆おとし」等比々皆然らざるはない。

と同時に彼が本書に書いた酒には味ひが無かつた。單なる暴飮と亂醉とがある

だけで、醉ひの微妙な心持などゝいふものは其處にはてんで書かれてゐなかつた。生來の生下戸であつた西鶴には、恐らく酒其物・醉其物は本當には書けなかつたのであらう。其處に藝術家としての彼の天分の一面が覗はれる。自己の直接經驗し實感し得る範圍を描いては、徹底的にその眞實とその眞實のあらゆる隅々とを、描き出すことの出來た彼が、空しく傍觀するだけのものには、眞當の味解がもてなかつたことがこれで知られる。彼は作家としてのさういふ性質の故に、武士が十分書けなかつた。性慾を描いて病的頽廢に及ぶことが出來なかつた。靈異や變化が書けなかつた。「櫻陰比事」は裁判物としてより、心理小說として優れた作品をより多く含んで了つた。

かういふ西鶴であつたが故に、彼は本書に幾人かの上戸を點出しながら、彼等の心には全然觸れ得なかつたのである。彼はたゞ上戸を輪廓的にのみ外から眺めて、抽象された好色生活者外右衛門等の性慾追求に於ける激しさにも似た激しさと亂暴さとを書くだけで、さうした亂醉に彩られた特殊な心理は書かうとさへしなかつた

のである。その結果本書の酒の話が、實際は酒を書いたのではなく、只單純に酒を戒める話となつて了つてゐるのである。短章中幾分でも酒呑みの心に觸れ得てゐるものは、僅かに「醉ざめの酒うらみ」一篇位のものであらうと思ふ。醉うて女房の髪をきる男の氣持、その亂醉の醒めた後の淋しさ、さういつたものが兎に角其處には多少書けてゐた。が、それさへ極めて擦過的だつた。醒めての後の淋しさなど、寧ろ隨分粗かつたと思ふ。

たゞさうして外から眺められた酒呑み生活には常に不思議な因緣が絡みついてゐた。彼等は亂醉の後に、或は上戸であるが故に、常に慘ましい身の破滅に逢著してゐる。作者は無論それによつて酒を戒めようとしてゐるのであるけれども、その破滅が常に極めて必然的な遇然であつた。或は遇然的な必然であつた。從つてそれらは酒を戒めるといふよりも、寧ろ昔の「二十不孝」に示されたと同樣な、不氣味な天の配劑の前に、畏怖と戰慄とを感じてゐる作者の氣持を、濃厚に反映するものになつて了つてゐる。さうして作者のこの氣持は、酒を描いた短篇を離れて、色を中心として

想像する世相の色々を眺めた作品にも亦判然と認められた。

本書に於ける色の世界を對象とした作品も、流石に酒を書いたものには見られない味ひの細かさをもつてゐた。殊に酒を書いたもの〻多くが、單なる小噺としての域を脱してゐなかつたのに對して、これには相當複雜な仕組みのほどこされてゐるもの〻多いことも、作者が扱ひ慣れた世界に歸つて、十分驥足をのばしたことを思はせる。「只取るものは澤情使銀で取るものは傾城」「金の土用干伽羅の口ど」「四十七番目の分限又一番の貧者など、さういふもの〻うちでも優れたものであらう。殊に後の二つがい〻。それ〴〵の主人公を、不可測な天の支配に任せながら、作者はじつと彼等の運命に眺め入つてゐる。天の支配の不氣味さと、その支配に翻弄されて不可抗的に其の時々の氣持になつて行く人間の無力さとを痛感してゐる。自ら其處に描かれた人生には淋しい哀愁があつた。寂寥があつた。「伽羅の口ど」の主人公が、榮華の末に幇間となつて、僅か一匁の伽羅に我を忘れる相にも、二番目の貧者」の三人が、一人に千貫目づ〻入りました藝」を賣物にして、踏傍に傾城買の物眞似をしながら其日

其日を送つてゐる樣子にも、さうした人生の哀愁と寂寥とが味ははれる。天の支配のまゝに引摺られて行く人間の偶然とも必然とも思はれない運命が思はれる。「まことのあやは後に知るゝ」といふ章などになると、一層端的にさうした作者の感懷が要約されてゐる。美しく育つた娘が選みに選んだ聟を迎へる。然も二人が祝言の日に聟は死ぬる――人生だ、これが人生の不思議な偶然であり必然であるのだ作者は娘と一緒にかう考へて吐息を吐いてゐる。さうして不可測不氣味な天の支配の前に、激しい畏怖と戰慄とを感じてゐるのである。それは無論酒を描いた作品に示された作者の畏怖と戰慄とに全然同じいものであり、たゞ一層微妙な味ひと的確な裏打とを以て、それが語られてゐるだけの相違が認められるに過ぎなかつた。

然も西鶴は「俗つれ〴〵」を書いた時には、既にさうした畏怖と戰慄との前に、空しく瞠目し、空しく思ひ崩折れてはゐなかつた。天の支配の不思議な力に打たれた「まことのあやは後に知る」の娘は、兩親に對する心遣ひ其他の人生的な繫縛の爲に、矢張り人生を厭離することが出來ずに、氣に染まぬ二度の聟選みをする。或は人間の生活

だ、と作者は此處で二度さう觀じてゐる。が、もう彼は吐息をしてゐない。淋しい人生肯定の微笑が彼の顏に浮んでゐる。さうして此の人生肯定の淋しい微笑から、讀んで取るものは傾城の一篇などが生れてゐるのである。作者が、その生涯の最後の心境に落ち着き入らうとする氣持が、其處に端的に覗はれる。其處には既にある程度迄、不可測の人生の前に謙虚に跪かうとする氣持と、悲哀とをたゝへた人生肯定の思想とが滲み出してゐる。「二十不孝」に因果と誤譯された彼の思想が、此處で正しく屈折して、西鶴の生涯の最後の心境が、ひらけ初めてゐるのである。かう考へれば、比較的優れた短章の少い「俗つれ〴〵」も、晩年の西鶴の心境を或る程度迄反映した、大事な作品集であつたことが云へるのだと思ふ。

三　置土產と名殘の友とに示された晩年の心境

「置土產」の序文に、「去程に女郎買、さんごじゆの緒じめさげながら、此里やめたるは獨もなし。手が見えて是非なく身をかくせる人其かぎりなき中にも、凡萬人の知れる色道の上もり、なれる行末あつめて此外になし。是を大全とす」とあるのを見れば、本

書に所謂好色生活者等の果敢ない終りが書かれてゐるのであることが理解される。云ふ迄もなく西鶴最後の好色本である。町人物の世界を離れて、彼は再度かうして好色本の世界に歸つて來た。其處に所謂老年期の色氣なるものが思ひ合されていゝのではないかと思ふ。

が、普通に所謂老年期の色氣には、殆ど常に色濃いロマンティシズムが附き纏ふのに、西鶴のはさうではなかつた。彼のは寧ろ從來の作に於けるものより一層世相に即して來た。「一代男」に好色生活の理想境を描いてこの方、彼は一歩一歩と世相の底に足を入れて來た。其の歩みが行き盡した所で、只管好色生活を讃美してゐた彼は、好色生活者の世相裡に於ける破滅を書いてゐるのである。好色本作者としての彼は、かうして空想的觀念的な態度から、漸次に現實的寫實的な態度に徹して來たのであつた。從つて其處に語られてゐるものは、無論決して抽象された好色生活一面ではなかつた。既に前にも云つた通り、其處には町人物の影がさしてゐた。町人物に金を描いた西鶴は、漸次に金を離れて世相の全般への諦觀を深めた。全圓的な世相

其物がかくて彼の遺稿世の人心に於て作者の對象とされてゐた。色と金との二つの大きな力が絡み合つた所に生じた世相、それが其處に取扱はれてゐた。「置土産」は一面此の「世の人心」に示された態度を、更に徹底させた所に生れたものとも云はれるのである。從つてそれを單に好色本とのみ呼ぶことには多少の異議があり得る。少くとも好色生活の終りが書かれてゐる本書には、一面戀愛と人生乃至は金と戀愛との微妙な相互關係などが描き出されてゐた。云はゞ町人物の世界と好色本の主題とが、本書に於て渾然と融合されてゐるのであつた。

五巻十二說話に描かれてゐる人間は例へば家に燃すべき薪木がないやうな境遇に落込んでもなほ着替の着物と見せた大風呂敷包みを小者にもたせて、遊里に行かねば氣の濟まぬ男とか、親の四十九日があけるのを待ちかねて遊里に驅けつけ其處で新に我が物となつた金を撒き散らす男とか、放蕩生活の揚句、遂に息子から勘當される親爺とか、はじめて遊女に手をとられて、急に長年の姿狂ひから女郎狂ひに移つて行く男とかいふやうな丁度ロシアの作家アントン・チエホフの人物を思はせるや

うな人々ばかりである。チエホフは何かに憑かれたやうな、一寸した暗示にかゝつても直ぐ無我夢中で走り出す人間を書いた。「置土産」の人物が丁度それである。彼等にも矢張り憑物がしてゐる。彼等も矢張り一寸した刺戟に會つても直ぐに暗示を受けて滅茶苦茶に動き出すのである。チエホフはさういふ人間を病氣と見た。性格破産者と見た。が、西鶴はそれが即ち人間なのだ、性慾に憑かれた人間本來の相なのだと觀じてゐる。だからチエホフがさういふ性格破産者に對して、夫々適當な對症療法を考へてゐるのに、西鶴は全然何等の投藥法をも考へてゐない。寧ろさういふものとしてじつと眺め入つてゐる。突つ放すといふ、あの態度である。描かれた人物の或者が、「住める効なく思へど、其身になつて香もくひ切りがたし」（愛宕颪の袖さむし）といふやうな境遇に逐ひ込まれても、彼は默つて見てゐる。財産を蕩盡して素紙子一枚でふるへてゐても、矢張り默つて見てゐる。只時々「中々生きては何の効も無き事ながら、其身に成ては死なれぬものと見えたり」（傷もいひすごして）とか、「かゝる所にも住み馴れて其氣になれるは、惣じて人間のならひぞかし」（同上）とかいふやう

な哀しい吐息を漏らしてゐるに過ぎないのである。完全な傍観の態度である。

「進んで渦中に投じて共に泣き共に悶え、共に憤るといふやうな態度を取る事なしに、その泣くものを泣くまゝに悶えるものを悶えるまゝに、手を觸れで見て居り、變動極まりなき相をおもしろしと思ふだけです」（近代艶隠者の考察）。山口剛氏は作家としての西鶴の態度を評してかう云はれた。それは無論西鶴の生涯について廻つた態度であつたけれども、然も彼の心境の最後が安住境に徹しきらぬ間は其の態度も時に亂された。或時は彼も作中人物と共に、世の變轉の極まりなさの前に、慄然として危懼に襲はれてゐる相を見せた。或時は離れ切れぬ人間への關心から、熱心な教戒を繰返した。それが浮世草子作者として初めて現前してから、約十年の經過の間に、漸次にさうした方向への歩みを進めて遂に「置土産」に於て完全に彼本来の態度に徹したのである。「艶隠者」乃至は「一代男」の昔から、理想として騁してゐた望を遂して、彼は完全に人生を離れたのである。離れて逆に人生を眺め返してゐるのである。所謂踵を空に吹かせて高く飛翔したものが、飛翔しながら眺め渡してゐる人生が、か

くて「置土産」にはさながらに描かれてゐることになるので、あつた。「置土産」の透徹した深い味ひ、微白い迄淋しく澄んだ味ひが其處に生れた。然もその微白い味ひのうちには、さながらに描かれた元祿世相の美しさがあつた。戀にやつれて愛人の人形を作る男の、哀しくも亦ロマンティックな生活氣分もあつた。焦がれて身請けした女房との、零落し盡した生活を、昔の遊び仲間に見られるのを恥ぢながら、人目をしのんで引越しをする者の、遣る瀬ない哀愁の絡んだ戀の歡醉があつた。觀照の徹した所に生れた味ひの淋しさは、云はゞ絢爛華麗な元祿の世相を微妙に包んでゐたのである。淋しさと美しさの微妙な融合が、自ら其處に味はゝれた。田山花袋氏の「西鶴小論」によれば、尾崎紅葉山人が、「置土産」は實にいゝ。文章も心持もすつかり枯れ切つてゐる。枯淡のうちに絢爛を藏してゐる。とてもあの眞似は出來ない」と云つたといふ。それ程深く、それ程微妙な美しさであつたのである。

所で、かうした深い心境に徹し得た西鶴は、軈て其の心境から人生を眺め返して、廣く長い宇宙と人生との間に、奔走し動搖し漂蕩してゐる人間の相を「捧腹虫同然」と觀

じたのである。此の意味で「人には棒振虫同然に思はれ」の一章は「置土產」に示された西鶴の人間觀乃至人生觀の云はゞ象徵的表現であつたのである。人間が慾を追うて走るのも、金に着して喘ぐのも、所詮は天水桶の中に湧く棒振虫の、果敢なくも亦頼りない浮きつ沈みつに過ぎない。彼等が榮えるのも落魄れるのも、惟之天の命であつた。豫定がつけられない天の理法に動かされながら、人間はそれとも知らず果敢ない生の營みを營んでゐるに過ぎないと、西鶴は本書の中に觀じてゐるのである。自ら彼に、一切を放下して天の覺召しの前に、我から謙虚に跪かうとする氣持が、養はれてゐることが、本書のうちに觀取される。「人生五十年の究り云々」といふあの辭世に現れた謙虚な氣持は、かうして此處に「置土產」のうちにも、正しく表現されてゐたのであつた。西鶴の到り得た心境の頂點を示す作品と云はれる所以である。西鶴の晚年はかうした深い心境への安住に過されたのであつたのである。

然もかうした心境の深さを示す上に、辭世の句とは違つて、微妙な美しさを溶け込まし得た「置土產」の各短章には、更に形の上にも一通りの渾成が認められた。其處に

は例へば「江戸の小主水と京の唐土と」の如く、前半と後半とに主題の分裂があつて、何時もながらの西鶴らしい缺陷を示す作品もあつた。「子が親の勘當逆川を泳ぐ」以下、四、五の卷に於ける數章の如く、團水の補筆でもあるらしい文調の溷濁を含んだものもあつた。が、それらのものを除いた他の說話には、作者の技巧もかなり過不足なく行き渡つてゐた。「捧振虫同然に思はれ」の如き、さういふ點でも、優れてゐた。「大釜の抜き殘し」「四十九日の勘忍」なども亦夫々に面白かつた。所詮本書は何れの點から見ても、西鶴の生涯の最後を飾る作品集として、相應しいものであつたと思ふ。それかあらぬか、本書は翌元祿七年、早くも「西鶴彼岸櫻」と改題、江戸の俳諧師らの句八句を添へて、江戸の書林志村孫七より再版され、更に鈴木敏也氏によれば寶永五年には「風流門出加增藏」といふ五卷物として、其の內容の全部に他の一二章を加へて、上梓されてゐると云ふ。尤も「彼岸櫻」は必ずしも本書の改版本と確定してゐるのではないけれども、馬琴が「燕石襍志」に誌す所其他によつて、完全にその改版本であることが思はれるのである。

が、それよりも「置土產」に示された西鶴晩年の心境を思ふ時、直ちに連想されるものは、「名殘の友」の味ひであらう。本書は前にも云つた通り、必ずしも浮世草子としての書に當てはまるものではなく、俳人としての作者が、その交友知己に關する見聞、旅の記錄、さては自分の生活の斷片などを、そこはかとなく書き集めたもので、それらの記述のうちに、團水の所謂狂言——浮世草子的作り物語的なものもあり、それぞれに記述の中心となるポイントはあつたけれども、結局隨筆的な性質の極めて濃厚なものであつた。恐らく作者が、浮世草子作者としての創作活動の合間合間に、作爲のない平らな氣持で書き綴つて行つたものであらう。自ら其處には對世間的な顧慮や作者としての意識された身振りが少く、彼の心境の眞實が素直に傳へられてゐるのである。

「置土產」に於て世を離れきつた氣持を見せた西鶴は「名殘の友」では、離れたとは云つても、決して世を拗ねてゐるのでも厭うてゐるのでもない相を見せてゐる。それは無論「置產土」にも見られたものだが、それが一層正直に示されたものが「名殘の友」であ

つたのである。其處には如何にも味ひに富んだ素直な落着きが味はれる。暢びやかな氣持である。西鶴は人生を離れたが故に一切の拘りを捨てた。一切を放下して只去來する自己の情感に徹底的に從順になつた。一切を天の理法の前に果敢なく流れる人生の斷片と觀じたが故に、彼は何ものにも捉はれずに、常に同じやうな微笑を以て一切萬象を眺めてゐるのである。「艶隱者」に示された着なき優遊の境涯である。だから其處には脫俗の宗匠を氣取つたり隱者を衒つたりするやうな氣持は微塵もない。酒樽に餅を詰めて送つて來た友達の趣向が面白ければ、子供のやうに手を拍つて喜んでゐる。百韻に戀の句がなければ、此の一卷に腎藥お飮ませ下され度しと戲れてもゐる。昔あれ程嫌つた嫌味をさへ、此處では穩かに笑つて眺めてゐる。交野の雉子を食ひ知る人の振り廻し過ぎる通を、氣障と思ひながらも笑つて眺めるやうな氣持になつてゐる。昔ながらの鋭さと强さとが内に貯へられて、暢びやかな落着きに安住し得た彼の氣持が、其處に端的に偲ばれる。天の理法に味到した彼は、かうして一切を肯定しながら、淋しい微笑のうちに生きてゐたのである。本書

に書かれた、江戸の其角が訪ねて來て一夜を語り明す邊りの記述などを讀んで見るといゝ。何と暢びやかな捉はれのない、自由平明な世界に、安住してゐる西鶴の相が端的に語られてゐることか。此の穩かな落着きと、「置土產」に示された徹底した深さとは、無論相互に關連するものであつた。人生を徹見したものにして、初めて此の無著意優遊に安住する心の訓練を有ち得るのであつた。此の意味で、「名殘の友」も亦晩年の西鶴の心境を記念すべき、重要な作品の一つであつたのである。同書が俳人としての西鶴の正直な記錄として、彼の傳記や生活に關する斷片的記述——住居とか旅行とか、交友とか、連句の會などゝいふものゝ記述を含んでゐる點と、從つて當時の俳人等の生活に關する記述を多く含んでゐることなどは、それとは又別の、本書の文獻としてもつ價値であると思ふ。又、其處に西鶴を紀念すべき名描寫なども無論幾つか發見されるけれども、さういふ現れに就ては、既に他の作品で殆ど觸れ盡して來たと思ふから、此處にはわざと省いて置くことにする。

四　西鶴作に非るべき西鶴本

『置土產』と並稱して、時に西鶴遺稿中の傑作と目せらるゝものに、『萬の文反古』(世話文章)五卷十七章がある。各篇何れも其の別名の示す如く、書簡體に物されたもので、首尾結構もよく整ひ、內容から云つても極めて深みのあるもので、果して西鶴作とすれば、確に彼の傑作の一つとして舉げることの出來るものである。殊に其處に示された不思議な因緣と、その不思議な因緣の前に、一種の戰慄にも似た深い感動を示してゐる作者の相は、かの『二十不孝』に示された因果觀が、『俗つれづれ』に屈折して、更に此處迄發展して來たものと見れば、一人の作者の心理經過として當然跡づけ得べき經路の上にあるのみならず、西鶴の晚年に更に深い心の惱みがあつたことを思はせる。

が然し本書は果して西鶴の作であらうか。それも遺稿であり得たらうか。と思ふ時、『文反古』五卷十七章は餘りに完成し過ぎてゐる。何の一章にも破綻といふものが殆どない。『置土產』以下西鶴の遺稿が破綻と溷濁とをかなりな程度に迄含んでゐたのと、それは非常な相違である。趣向から云つても、珍らしいものであり、內容から云つても之程整備してゐるものを、西鶴は何故生前に發表しなかつたのであらうか。

遺稿とすれば、門人等は何故「置土産」や、まして、「俗つれ〲」以前に、世に出さなかつたのであらうか。この點で本書は先づ西鶴作としての可能を否定される。加之、本書の文章は、決して西鶴の書き得るものではなかつた。後の文章は張り切つた鋼鐵線のやうに眞直な、從つて屈曲の角度の鋭い強く冴えた調子をもつてゐた。のに、本書の文章は、比較的粘り氣の多い、柔かな、曲線的な文章だつた。「世の人はかしこきものにて又だまし易く候」といふやうな短い一節にでも、さうした西鶴調との相違は感じられる。西鶴には眞剣はあつても、かうして一句のうちに表裏を云ひ盡すといふやうな柔軟性のある書振りは殆どない。寧ろさうした柔軟性は、本書の西鶴摸倣の作であつたが故に生じた性質ではなかつたかとさへ思はれる。本書の卷四「南部の人が見たも眞言」の一章が、完全に「懐硯」の「案内知つて昔の寢所」の二番煎じであることは、一目して明かなことであるが、「跡の剝げたる嫁入長持」（二十不孝）を男の世界に書きかへたらしい作品もあり、其他「胸算用」や「傳來記」の一節を想ひ起させるものなども數へられた。恐らく本書が西鶴の舊作を粉本として、其邊から脱化して來たものであらう

ことが思はれる。文章の不統であり、委曲的であるのは、さうした本書の成立から來たものではないかと思はれるのである。時に材料を二重三重に使用する西鶴ではあつたけれども、此の「文反古」が彼自身舊作の材料を新しく醗酵させて作つたものではなく、全然別な或人が、舊作の部分々々を補綴脱化させて物したものであることが、此の文章から知られるのでなければなるまい。とすれば、西鶴の心境發展と直接のつながりのある氣持が、本書に現れてゐることも當然の結果として、説明される。第一他の遺稿を西鶴作と信ぜさせる理由となつた團水の序文も、本書には添へられてゐないことも、注意されなければならないと思ふ。何れの點から見ても、本書は確に西鶴の作ではなかつたらしい。

が、西鶴の名によつて賣らんとした書物は、決して「文反古」一篇のみではなかつた。寧ろ上來考察して來た彼の作品の數と、匹敵し得る程の數が數へられた。其中最も近く迄西鶴作と信じて疑はれなかつたものは「好色三代男」であつた。がそれが漸く近頃石川巖氏によつて、西村嘯松子の戯著であることが論斷された。その論斷の理

申には多少信憑しかねるものもあつたけれども、大體は首肯出來るものであつた。少くとも本書の序文を讀んだ者は、その全然西鶴作と信ずべからざるものであることを確認し得ると思ふ。」 六巻三十二説話の殆どすべても、内容文章共に、蕪駁蕪雜、到底西鶴の洗練と味ひとを見出し得るものではなかつた。 本書などに比すれば、元祿六年の「浮世榮花一代男」「好色勘忍記又は浮世花鳥風月とも云ふ」四巻などの方が、寧ろ西鶴作としての可能性を餘計に有つてゐたと思ふ。 が、本書は却て比較的早くから西鶴作として扱はれてゐなかつた。 變なものだと思ふ。 其處に漲る變態性慾の濃厚さ、從つて強いといふより、寧ろあくどい感じのする作品であることなどだけからでも、本書の西鶴作でないことは推定されるけれども。

然しそれさへ時には西鶴作かと云はれもした。 さうしてさういふ程度の作品を數へて見れば「二代男」より更に前、貞享二年の「椀久一世の物語」二巻以下、「椀久二世の物語」新小夜嵐物語」とも云ふ。 此作に就ては好色本の項で多少述べた「眞實伊勢物語」三巻、「好色旅日記」「好色六日飛脚」五巻、「新吉原常々草」等を舉げることが出來る。 のみな

らず、梅薗堂の「元祿太平記」には西鶴が「好色浮世躍」三冊を書きかけて死んだといふやうなことが書かれてゐるけれども、元來が誣妄の小說「元祿太平記」の云ふことであるから、これは大して拘泥る必要もあるまい。第一輕い惡ふざけにのみ墮してゐたやうで、實はさうでない、かなり重苦しい氣持を捨てきれなかつた西鶴は、好色浮世躍といふやうな、ふざけきつた名前をその作品につけ得る作者ではなかつたのである。それをかうした題名を此の作者に考へた所にも、梅薗堂の西鶴への理解の失當さが覗はれる。

更に西鶴の名によつて賣らうとして、標題に西鶴の名を冠せたりした所謂西鶴本には「西鶴冥土物語」五卷、「小夜嵐物語」十卷、「西鶴伝授車」五卷等を數へることが出來、石川巖氏によれば、「新撰古今枕大全」「義經風流鑑」等の愚劣な春本にも、西鶴作と署名されたものがあるさうだが、夫等は素より信ずるに足りないものであるといふ。これら低級なものをさへ、西鶴に假托して賣らうとする所に、西鶴の作品、殊に好色本がもつてゐた危險な墮落への可能性が思はれるが、それは必ずしも西鶴の罪ではなく、眞實

なるものへの正しき評價を缺いた時代人の、低級な心根を曝露したものであるに過ぎないことは前にも云つた。たゞかうして西鶴の名を借してゐる著書が多い所、西村市郎衛門程の著作をもつた作者が、よしんば形の上だけも彼を摸さうとした所などに、西鶴の時代に投じた大きな影が見出されると思ふ。と同時に、以上の作品のうちにも、無論西鶴摸倣の意圖を離れて作られたものもあつたであらう。のにそれらの作の作者等の名前が完全に忘れられて、たゞ西鶴の名前のみ大きな毀譽と褒貶との浪を起させてゐたところに、彼の時代に投じた影が、全然他の群小作家等を被ひ盡して了つてゐたことが思はれる。二番煎じとは云ふ、文反古程の作品を作り得る作者、乃至は「浮世榮華一代男」程の作品を示し得る作者など、かなり優れた才腕の持主もありながら、彼等が全然西鶴の名前に氣壓されて了つてゐることに、西鶴の図抜けた偉さが思はれると思ふ。

第五章　藝術家としての强み弱み

第一節　學殖

渡邊霞亭氏が大阪朝日に寄せられた「西鶴と山太郎」なる文章によれば、西鶴は同門の俳人等からさへ無學を以て罵られてゐるといふ。「風寒ぐ跡の白雪桐火桶」といふ山太郎の發句を「冬籠の御一句時ならず承りても凉しき樂しみに御座候」と褒めた西鶴が「この發句も西鶴得知らぬゆゑ紛らかして書付申候、この句は家康の桐火桶紅葉を燒きし跡の白雪と申す歌を取り候、西鶴判書大きに惡しく候」と罵られ、第三高照らす角屋の軒端月鈎て」を「月落ちて」と加筆して「珍重珍重御一句第三體に存候」と評しては「落るといたしては一句殊のほか惡く候、月落るとは月の更行に傾くことを申し候、月を鈎といふは李白が詩に獨上西樓月如鈎と作り申候それを取り申候、西鶴文盲ゆゑと存候」と嘲けれ、さては「しなか島の口傳、中々西鶴如きなどの知ることにあらず」「て

にをはの口傳習ひは曾て知らぬことゝ見え申候と笑止がられてゐるといふのである。月如鈎の解釋なとは山太郎自身も大分怪しいと思はれるけれども、兎に角古語成句の流用を生命とし、古典脫化にのみ腐心した檀林派俳諧の點者として、かうした非難に相當せねばならぬ西鶴であつたとすれば、夫は素より彼の弱味でなければならなかつた。宗匠として知識をひけらかすことが出來ないことは、檀林派俳人にとつては、時に致命的な弱點であつたかも知れないと思ふから。

けれども一度檀林派といふ狹い範圍を離れて、彼を一個の藝術家として見る時、さうした知識の有無は強みでも弱みでも何でもなかつた。學問と藝術とは素より必ずしも並行するものではなかつた。學殖が藝術の妨げとなることもあつた。無學が自由な眞情の流露をより率直効果的ならしむることもあつた。點者としての西鶴を、山太郎がたゞ無學を以てのみ罵つてゐるのは、廣い意味から云へば却て山太郎自身が藝術其物とは緣遠い心情の所有者であつたことを曝露してゐるに過ぎない、西鶴が無學であつたか否かといふことは、藝術家西鶴にとつて素より大した問題で

はなかつた。只彼が幾分の敎養をもつてゐたとして、その敎養をその藝術に於て果して何の程度に生かしてゐたか、といふ點に於て、漸く一顧さるべき性質を帶びて來るに過ぎない。云はゞ學其物が問題なのではなくて、それを生かし得べき藝術家としての天分が問題になるに過ぎないのである。

がそれは兎に角として、西鶴は果して然く文盲を云はるべき程無學無敎養な男であつたらうか。

「これおかた、昔も鼻の高い人に末摘というての后さまがあつた。そなたがいやしい人で源氏物語を見やらぬによつて、物の合點がゆかぬといふ」織留の卷四「家主殿の鼻ばしら」に彼はこんなことを書いてゐる。彼の處女作「一代男」が源氏物語の飜案であることは、今日ではもう疑ふ者はないらしい。山口剛氏の如きは「源氏の、少くとも桐壺の卷は心して讀み、心してその趣をこれ――世之介好色生活の發端を七歲にしたた所――に移したものと思ひます。『今よりなまあかしう恥かしげにおはすれば、いとをかしううち解けぬ。遊び種に誰も誰も思ひ聞え給へり』とあるのは、源氏七

歳の時であるから「好色一代男の成立」と云つてゐられる。更に「紀念の水櫛」「夢の太刀風」に「夕顔」を思はせ「大夫品定」に「雨夜の品定」を思はせる類、或は世之介の勘當赦免の前に「和泉の佐野」「迦葉寺の磯邊」を書いてあるのは、さながらの源氏の君の「須磨明石のさすらひ」、續く「都還り」、殊には「高浪雷光」の趣向などそつくりであり、「心中箱」島原藤波執心」は葵上の六條御息所と見るが無理か。夕顔の五條の假宿も藤の欄に移せば、相立てゝ清酒屋ありて細路地長屋作りの入口を並べる事になる」ともいつてゐられる。かういふ山口氏の案内について、源氏と「一代男」との間を往返すれば、兩者の深い關係は自ら明瞭になつて來なければならない。西鶴の源氏物語への理解が相當深く廣いものであつたことが之で肯かれる。「一代男」ばかりで無かつた。他の作に於ても彼は時々源氏を匂はせた。季吟の湖月抄などにも時あつて觸れてゐる。さういふ彼と考へなければ、末摘花を鼻の高いだけのお后樣に仕立て上げてゐる所などには、彼の源氏への味解の不十分さが曝露されたことにならぬでもない。けれども「一代男」に源氏への正しい味解を示した彼と思へば、其處にも彼の技巧が感じられる。家主

殿のお内儀と扇屋女房の口さがない喧嘩。物識り振つたお内儀が對手の知らぬにつけ込んでうろ覺えの出鱈目を云ふとも、或はもつと技巧的に、うろ覺えの人を自分に都合よく、且つ身分高く云ひたてる、云はゞ昂奮が吐かせる技巧的な嘘としても理解されないことはない。心づけの俳諧と古典脫化の習慣とに兎にも角にも慣れてゐた彼が、さうした技巧に腐心したであらうことも無理にでなく思はれる。とすれば彼が源氏を讀んでゐたことは――讀んで之を自由に利用し得る迄に消化してゐたことは、此處にも當然背かれなければならない。

が然し無學無學と云はれてゐた西鶴であつてみれば、多少の疑はしい點をでも輕々しく無視し去る譯には行かないかも知れないとすれば、末摘花の條の如き或は却て西鶴が源氏を味讀しなかつた證據として提示されぬこともない。從つて、或は彼は源氏を部分的に色讀味了してゐたに過ぎないといふやうな結論も導き出されるかも知れない。が、それにしろ、兎に角彼が源氏に觸れてゐたことだけは確實に云へる。難解大部な源氏を拾ひ讀みにでも讀んでゐたといふことは、それだけでも彼が

必ずしも無學を以て呼ばれねばならぬ程無教養な男でなかつたことを語つてゐると思ふ。況して彼が伊勢物語に對する深い理解の所有者であつたことは「二代男」に於ける同書の色彩からだけでも肯ける。「白玉か何ぞ」の芥川の段、鬼一口の一節などは、或は傳説的に流布してゐたものでもあらうけれども、殊に彼の好んだ部分であつたらしい。又「男色大鑑」の序文其他によつて彼が日本紀を讀んでゐたことが知られ、同書「女方もすなる土佐日記」には無論紀貫之の土佐日記の影がさしてゐる。「艶隱者」に於ては和漢朗詠集や萬葉をも知つてゐた彼であることが肯かれ「一目玉鉾」が果して彼の作であつたとすれば、彼の歌書への接觸も思はれる。古今、新古今、玉葉、詞花、千載、等々、其處に擧げられた歌書の名は中々に多い。若し又一歩を讓つて本書が西鶴作でなかつたとしても、彼の歌に對する知識は素より否定し去らるべきものでは無かつた。「男色大鑑」にも色々な歌書からの引用があつた。「和歌は和朝の風俗にしてうぐひす蛙までも其聲其姿なり。いはんや生ある人の此心なくして有るべからず」といふ「織留」中の一節は、云ふ迄もなく古今集の序文より脫化して來たものであつた。

「武通傳來記」其他にも歌書や和漢朗詠集から轉用され利用された章句は、數へ立てればかなりな量に達する程あつた。歌といひ朗詠といふ、何れも俳席や宴席に弄れる機會も多かつたであらうから、或はそれらのうちの幾部分は俳人であり幇間であつた彼の耳學問に過ぎなかつたかも知れない。記憶力の旺盛な彼が小耳にはさむ零細な斷片を、一々正しく記憶して、其の知識以上に有効に利用したのであつたかも知れない。「一目玉鉾」に收錄された古歌の或ものには出典を明記し、他には全然之を缺いてゐた所などにも、さういふことは考へられる。耳學問では歌其物朗詠其物は知つても、その出典迄は知り得ない場合が多かつたであらうから。只さうした知識のすべてを耳學問にのみ歸するのは、少々妥當でない。彼の知識の幾割かは無論自ら書物を涉ることによつて得られたものであつたに相違ないと思ふ。

既にかうして多少の古典に觸れてゐた西鶴が、より近い時代の書物にも相當讀み耽つてゐたのであらうことは、素より直ちに想像される。徒然草の如きは、さういふものゝ中でも殊に彼が傾倒してゐたものであつた。「艶隱者」に示された虛無の觀念

の如きは、云はゞ其處から派生して來たものであつた。老莊から脱化して日本人特有の色調を帶びるに至つた其の虚無觀念は、早く既に徒然草に凝成されて、それが「竹齋物語」や「東海道名所記」の主人公等の洒脱飄逸な態度に具體化され、更にそれが西鶴の作品によつて承け繼がれたものであつたが、さうした傳統の内にあるといふ以上に、其處にはもつと直接な徒然草との繋りが感じられた。寧ろ徒然草通と云つてもいゝ程、それを正しく細かく理解してゐた西鶴であつたと思ふ。他の檀林派諸俳人に比すれば、それを振廻す程度こそ少なかつたものゝ、兎に角謠曲や狂言にも多少の知識は有つてゐた彼であつた。

と同時に彼はその作品の到所に漢文の引用や支那古事の引例を示した。「男色大鑑」を見給へ。「新可笑記」を見給へ。殊に後者には支那種の傳説が日本流に飜案されてもゐた。「二代男」や「艶隱者」に老莊を高しとする氣持を示した彼は、之等の書物には論語を引き淮南子を擧げ列子を云ひ、更に近くは李白などにも及んでゐる。山太郎は彼が李白を知らぬのを嗤つたが、西鶴は素より李白に對して全然無知なのでは無

かつた。光陰は萬物の逆旅云々といふ「桃李園序」の一節の如き、殊に隨所に引用された彼が好みの句であつた。穿つて云へば「永代藏」や「町人鑑」は史記や漢書の貨殖傳と、その製作動機に於て、或は多少の繋りがありはしないかとさへ思はれる。たゞさうした漢文乃至漢籍への知識は素より豐富とか深奥とか云はるべきものではなかつた。彼の淨瑠璃には近松の夫などゝ違つて儒教の影響が少いといふ。五倫といひ五常といふ程度の常識は無論儒教に對してもつてゐたものゝ、彼の作品には儒學者的な口吻は殆ど無かつた。孔子は云つても、彼の思想への正しい味解は無論無かつた。老莊の流れに多少深く食入つた以外には、彼の漢籍への知識は素より取立てゝ云ふべき程のものでは無かつたのである。然しそれさへ、なほ後世から時代的無知を云はれる元祿町人として、決して輕蔑にのみ値すべき學力なのでは無かつたと思ふ。所詮西鶴は當時の町人として決して無學を以てのみ罵らるべき男ではなかつたのである。「此人國學に秀で」といふ「俳家奇人談」の讃賞は素より當らぬ過褒であつたけれども。

けれども西鶴は素より學者ではなかつた。最初の俳諧學習をさへ、恐らくは師匠をとつて正式の手ほどきを受けたのでは無からうと思はれる程、手に任せて自分流義で押し通した彼は、素より系統的な學問や組織的な研究に沒頭した期間をもたなかつたらしい。彼の教養は既に前にも云つた通り徒然の日の退屈しのぎ乃至は好きで耽ける漫然たる讀書涉獵の裡に、自ら積上げられて行つたものであらう。山太郎の罵つたてにをはの口傳などを眞面目に學んだ男では素より無かつたであらう。「物見車」の作者に訪ひといふ文字に就て、「をとなひの字を音内と改めらるゝ事いかにも心得ず、案内などゝ一つに思はるゝにや」と嗤笑された後は、その著「石車」に於て、

〇をとなひの文字の事

△連歌につかふをとなひ　〇音此外になし、

△定家の假名つかひには　〇音信イトノフ ヲトナヒ

△神代の卷の内に見る　〇喧響是ヲトナヒ

△東福寺虎關雪隱の額　〇音内是ヲトナヒ

○此外字彙三萬七千一百七十五文字をさがしても音ひは是也。釋迦此かたの經久、神代神武より今の諸書にも見えず。孔子の紙文庫、人丸の筆筥、弘法大師の剃刀包の反古までもさらへしに、見えわたらず。是程廣い世界にもないものはなし、と云つてゐる。あらゆる範圍を探し盡したといふ意味の誇張でもあり皮肉でもあらうけれども、夫にしても人丸の筆筥や剃刀包の反古に至つては、滑稽の行止りである。かうした非學者的の態度に住した西鶴であつたが故に、彼は嘘字を書いた。宛字を書いた。訪ひを音内と書いたばかりではない。燒火、身袋、眼色、(顏色)等の亂暴な誤字や宛字は、彼の文章の到る所に發見される。かういふ點から彼を見た時ペダンティックな馬琴や漢學書生上りの都の錦に、無學文盲を以て嘲けらるべき可能性は十分あつた。只さうした宛字や誤字のうちにさへ、彼が意識して工夫を凝らしたものには、彼の漢字の味ひや古典的言語などへの正しい味解が示されてゐる。彼は饗應と書いて「あるじもうけ」と讀ませた。寥亮の二文字に「さやけく」と假名を振つた。樂居と書いて「まどゐ」と訓じた。潸然と書いて「なみだぐむ」と讀んだ。それは一面上

田秋成や瀧澤馬琴の好んだ衒學の臭味に墮してはゐるけれども、然もさうした技巧的遊戲的な文字遣ひをすることが出來るだけの學力が彼にあつたことをも示してゐると云はなければならない。

然し彼の學殖の如きは素より取るにも足りない財產であつた。學殖の有無が、例へば一個の藝術家にとつて强みともなり弱みともなるものであつたとしても、夫は素より西鶴に大した力を與へ得るものでは無かつた。のにも係らず、西鶴はその財產を生かした。財產夫自身の量以上に活用させた。乏しい知識を彼は正しい理解と確な把握とによつて、完全に自分のものとした。消化しきつた。廣からぬ範圍ながらに知り得た古典や漢語や詩や歌を、彼は自家藥籠中のものとして自由自在に驅使した。乏しい財產を活用させる手腕の冴え、夫は素より漢學書生上りの梅園堂や概念的な學問に囚はれてゐた馬琴などには、望むべくもない藝術家としての生きた才能であつた。その才能に料理されて、彼の學殖は當然以上の輝きを發した。云ひ換へれば彼はその學殖をも、藝術家としての彼にとつて、當然以上の强みに迄高めたの

であつた。素晴らしい才能であつたと思ふ。

第二節　藝術家としての態度と藝術觀及び小說構成能力

「思想の文藝に吹き込まれるに凡そ三樣の方式があり得る。第一は殆ど無意識不用意の間に思想の作中に傳はるもの、第二は明かに意識して思想を作の中心に構へるもの、第三は更に一歩を進めて、意識して思想を構へながらわざと之を埋伏せしめんとするものである。………西鶴の『五人女』に潜在する思想を見れば、其の方式は明かに第一境にあつて無意識的潜在的である』（五人女に現れた思想）とは島村抱月の言葉である。生れながらにして人生の觀照家であつた西鶴は、その病的に迄强かつた性格の故に、人生に徹した。あらゆる感傷の曇りから救はれて、所謂人生の寂寥所に味到した。と同時にその鋭い觀察力の故に、世相のあらゆる隅々と人間心理の複雜な陰翳とを、心行く迄味ひ盡した。自ら彼の作品には思想といふよりもつと深く、哲學といふには餘りに具體的な、人生の味ひ其物が味はゝれた。其の味ひの深みに

比べれば、彼の教養の如き素より云ふにも足りないものであつた。理性の彼はその味ひの深さを規定するには餘りに貧弱な力をしか有たなかつた。必然的に、さうした深い味ひに迄味到した彼自身の氣持を、彼は自ら淺く評價した。「あしき事はのがれず、あな怖ろしの世や」といひ、「これを思ふに人はかりにも惡事をせまじきものなり、天これを容したまはぬなり」といふやうな、其の味ひの深みとは凡そ距離のある勸懲者流的の口吻が、かくて彼の作品の隨所に漏らされた。が、さうして意識の彼が振翳した教訓乃至觀念は、たゞ作者の人間に對する温い關心を示すだけで、作品の價値乃至深味とは素より何等の交渉もないものであつた。彼の作品に接して深い感激と觸發とを感じさせられるのは、云ふ迄もなくさうして彼が正面から世俗と人生とに對つて呼ひかけた言葉の底に、微かに隱約し搖曳する感懷の深さと思念の複雜さとのためであつた。抱月が彼の作品に無意識的潛在的な思想を云々して之を倚んだ所以である。「一代女」や「五人女」はさうした潛在的な想念の爲に一脈凄愴の氣を湛へてゐた。「二十不孝」には色濃い疑懼と戰慄とが感じられた。「胸算用」や「世の人心」には

悼ましい人生の悲痛が藏されてゐた」「置土產」には荒凉たる人生の寂寥と世相の生滅流轉とが感じられた。

「一生を夢裏に辿れる淺まし」と罵つた四方郎朱拙は、素より西鶴の眞實に觸れ得なかつた。「伊丹諸白をひつかけて」と嗤つた梅薗堂主人も、素より西鶴を知る者ではなかつた。意識の西鶴を對象としてさへ、彼等の放つた攻擊の矢は寧ろ空しい仇矢であつた。西鶴は寧ろ眞面目な顏をしてゐた。人生と人間とへの不安と疑懼とを正直に、且つ濃厚に示してゐた。然も彼がその眞面目さを露骨に語つた思想乃至觀念的な言葉は、極めて溫健平凡なものであつた。彼の作品がその溫健さと平凡さとによつてその全幅をおほはれずに、以上の如き悲痛と寂寥と凄愴との味ひを湛へることが出來たのは、即ち彼の藝術家としての態度の賜であつた。俳諧師として概念的思惟と抽象的觀念の羅列とを嫌つた彼は、浮世草子作者としても亦常に抽象的な思惟から遠ざかつた。上述の如き觀念的な言葉は常に作品にとつて中心を放れた附加物以上の働きをしてはゐなかつた。思想を主として材料を配列することは、「鄙隱

者を除いた後の他の作品に於ては、決して見られない所であつた。何時でも材料から思想が派生してゐた。だから思想が貧弱平凡なら、その貧弱さと平凡さとをはみ出した材料自身が、直接に深く大きな力を以て讀者に迫つて來るのである。云はゞ藝術家としての西鶴は、その俳諧師としての昔から浮世草子作者としての最後まで、殆ど常に形に即し具體に即したのである。形を描いて心を浮み上らせる——近松秋江氏が彼を評してそんなことを云つてゐた。見給へ、抽象的な恐怖の情を描くにさへ「遺手の光が欅より怖ろし」と云ひ、大門から揚屋迄の距離を云ふにさへ「何十何歩、此間に小煎餅何枚は食はれず」といふやうな書き方をした彼は、人間心理の葛藤を描くにさへ、所謂心理解剖の抽象に墮したことは殆どない。

「花も火ともす時分になつて太夫勝手へ立さまに、廊下を半過てとりはづされて、其音に疑ひなし。世之介も小兵衛も横手をうつて、おもしろの春邊やな、天晴くぜつのもとだて、車而出たらば座敷が嗅うて居られぬといはふ。いや兩人ともに鼻ふさぎて、おのほうからあらためる時に、げふよきもひをかぎにきたと申せ、足にき

はめて待てども出ず、よもや出らるゝ所でないと大笑してみるに、衣裝仕替て櫻一本持ながら立出るより、二人目を付てゐるに、さいぜん屁をこきたる敷板まで來て、そこにてこゝろをつけ、障子をあけて疊の上へ廻らるゝこそ、一代の大事爰なり。小兵衛も聊示申てはと屢し是をだまりぬ。世之介も二の足を踏て、かの板敷あゆめどもならざりし。されども出しおくれてゐるうちに、よし田方より申出して、此中の御仕方の惣じてよめぬ事のみ。はじめよりあかるゝまでとの御つたへ、成程けふ切にあきました。御げんも今より後はと申捨、おもての見せに出、犬にさんたさせて遊ばるゝこそすこしは憎し」（一代男卷六「匂はかづけ物」）

僅かに「小兵衛も聊示申しては」といふ程度の抽象的記述を除けば、他はすべて形の描寫である。その爲に、恐らく作者は此處に吉田が利發なとりなりを描かうとしたのであつたらう其の意圖以上に、三人の間に釀し出される空氣、三人の心の押しつ押されつする工合が、如何にも鮮明微妙に浮び上つて來る。殊に吉田の一擧一動には何といふ複雜な氣持が絡んでゐることであらう。これを抽象的說明的な語法で行つ

たら、迚も此の複雜な陰翳を匂やかに浮き上らせることは出來なかつたであらう。西鶴は常にかうした具體的表現に即したが故に、すべての對象を、描いて鮮明を期すると共に、複雜な陰翳を交錯させることに成功したのである。彼の鋭い觀照と豐富纖細な感覺と、深く端的な理解力と、對象把握の正確さとが、かうした態度の故に、意識の彼に狹く小さく規定されずに、靈妙に生かされたのであつた。だから彼の作品には、時としては彼の云はうとする以上に鮮明な印象と、直接的な具體感とが感じられる。殊に女性描寫は鮮だつた。彼の描いた遊女は殆ど例外なく複雜な心の陰翳をもつて描かれてゐた。「一代女」の各斷片にしても、五人女の夫々にしても、さては町人物に取扱はれた種々雜多な女性氣質にしても、何れも鮮明極りなき印象を與へられる。彼の句が他の檀林派諸俳人の句に比して、丸彫り的な具體感と鮮明な印象とを與へ得たのも、素よりかうした態度の齎らした必然の結果であつた。

が然しさうした結果を齎らした態度も、西鶴にとつては寧ろ無意識の性格的必然であつたらしい。主觀を減却して客觀に沈潜し、其處に物自體のもつ複雜な性質と

微妙な色合ひとを味識するといふやうな自覺は無論彼には無かつた。時代的必然として、正しい藝術意識に目醒めた作家では彼は素より無かつた。虚實皮膜を云つた近松程にも、彼は藝術家としての正しい自覺をもつてはゐなかつたかも知れない。況して芭蕉をや。此點では彼は確に戯作者であつた。落月庵西吟が「一代男」の跋に書いた「嫁謗、田より駈あがり、大笑ひ已ます、顋をかたげて手放つぞかし」といふ言葉は、總て其儘西鶴の意圖する所であつたかも知れない。既に自分の俳諧を「大笑ひの種」といひ「世を渡る慰」と觀じた彼は、又その浮世草子をも所詮は我がため人のための慰み草と思つてゐたであらう。彼は讀者を念頭に置いては、彼等の笑ひを問題にし、目安にした。自ら彼の作には擽りがあつた。所謂戯作者氣質に大阪人らしいあくどさゝへ加はつて、惡ふざけに墮したやうな點さへ無いことは無かつた。遊戯的な藝術觀！　さういふ點からのみ彼の作品を見る人は、あの辭世の一句からさへ、世を輕くふざけ廻つた西鶴の氣持をのみ味ひ出さうとする。又それも一面止むを得ない觀方であつたけれども、然しながら西鶴はたゞそれだけの作家ではなかつた。輕く

投げ出したやうな辭世の句に味へば深い味ひがあるやうに、一見如何にも戯作者らしい彼の態度の裡に、仔細に見ればかなり生眞面目な氣持がかくされてゐる。「笑ふにふたつあり、人は虚實の入物、明くれ世間の悲み草を集めて詠めし中に、むかし淀の川水を硯に移して人の見るために道理を書つゞけ、是を可笑記として殘されし。誰かわらふべき物にはあらず。此題號をかりて新に笑はるゝ合點、我ながら腹をかゝへて智惠袋のちひさき事、うまれつきて是非なし」といふ「新可笑記」の序文を見てさへ、夫は感じられる。「善悪二つの耳賢く聞傳へたる物語、今の世の慰草ともなりて、心の風に亂れたる萩も薄も、眞直に分れる道の道筋の廣き事、筆の林にもなか／＼書盡さすして殘しぬ」といふ「櫻陰比事」の序文などにしても同じことである。

人によつては、その眞面目さに對する西鶴の表現の、その眞面目さとは如何にも不似合な輕い調子を指摘して、それが結局作者としての單なる身振りに過ぎなかつたと云はうとするかも知れない。が、それは素より西鶴に對して正しい理解を有つ者の言葉ではない。人間の全運命を觀じ其處に破綻と不調和との無數に存在するこ

とを知つた西鶴は、その破綻と不調和との悲劇から人間を救はうとして、教訓と道義に着した。其處に彼の人生に對する眞面目な關心があつた、然も既に度々云つた通り、彼はその教訓や道義の結局は無力であることを知つてゐた。破綻と不調和とに向つて酒亂のやうな足取りをむけて行く人間を、何うでも引止めることが出來ないのを知つてゐた。其處に彼の淋しい絕望があつた。彼の人生肯定はその絕望の上に立つてゐた。仕方がない――さういふ肯定であり悟りであつた。それでいゝのだ――といふ積極的な肯定ではなかつた。彼の晚年の放れ切つた氣持は、云ふ迄もなく其處から來てゐた。然も彼の人生肯定が絕望の上に打樹てられてゐたが故に、さうして彼は絕望から自棄に墮するには餘りに强い性格をもつてゐたが故に、轉落と壞滅とを謳歌する氣持にはなれなかつた。矢張り悲劇のない調和を希求する心に動かされてゐた。さういふ彼が晚年の放れきつた氣持に徹する迄は、無力と知りつゝ在り來りの教義や道德に執して行つたのであつた。在來の道義や教訓以外に、新しき人生の理法を見出して之を振り翳すことが出來なかつたが故に、無力と知

つた舊來のものを捨てきることが出來なかつたのである。眞面目な心の哀しい低迷——西鶴の道義や教訓が無力であり、重さを缺いてゐたのは其爲であつた。彼は彼の作品の道義的文字が、讀者によつて尊重されないことを始めから知つてゐた。讀者が喝采するものは彼の作品の材料であつて、其處に寄せられた彼自身の心情や道義でないことを知つてゐた。着しながら夫を正面から堂々と云ひたてなかつた所以である。

所でかうして單なる戲作者以上の世界に住んでゐた西鶴は、又その藝術に對しても決して作家としての精進を怠つてゐたのではなかつた。「椀久二世の物語」が果して彼の未定稿であつたとすれば、あゝいふものから順次に築き上げられて一篇の作品となるのが、彼の創作過程であつたこと、從つて其間に幾度もの工夫と努力が費されたことが肯かれる。が、夫は暫く疑問としても、遺稿として殘された彼の作品に、生前のものには見られなかつた破綻が多いところにも、同じことが感じられなければならない。と同時に作品全體の構想の上にも、それと相似た精進の氣持が感じられる。

「一代男」にも構想上の苦心はあつた。「一代女」や「五人女」にそれが著しく現れてゐることは素より云ふを要しない。他のもつと晩年の繊細な短篇的記述にしても、夫々材料の配列と布置に就いての注意は拂はれてゐる。「大下馬」其他一二の作品に於てこそ、さうした努力が認められないもの丶、彼は決して單なる記錄家乃至隨筆家ではなかつたのである。菊池寛氏も云つてゐたやうに、彼は小說家としての努力と苦心とに於ても、相當の力を費してゐるのである。それはあながち彼のみに限つたことではなかつた。戯作者戯作者と一口に輕蔑されてはゐても、德川時代の作者等は、その作品を彫み上げる上には、皆相應の苦心と努力とを拂つてゐる。さういふ點では彼等の努力は兎に角相當に買はれて然るべきものであつたと思ふ。西鶴の苦心も素より輕蔑されていゝものではなかつた。

けれども西鶴はその作品構成の能力に於ては、必ずしも惠まれてゐなかつた。「一代女」と「五人女」と「男色大鑑」さては「懷硯」と「置土產」の或ものなどに於て、彼の努力と精進とに相應しい渾然たる纏りのある作品を示しはしたけれども、他の多くの作品に於

では、さうした能力の上の缺陷をかなり甚しく曝露してゐた。處女作「一代男」がさういふ方面の代表作として先づ考へられる。「世間胸算用」の如きは更に破綻に充ちたものであつた。それは一面彼の連想の奔放さと多端さとから來た缺陷であつた。藝術家としての彼にとつて、云ふ迄もなく非常な強みの一つであつた連想力は、その餘りなる奔放多端さの故に、時に最初の構想以外に、作品の筋を發展させることになつて了つたのであらう。と同時に夫は他面彼の徹底好きな性格にも一部の原因をもつてゐた。徹しなければ氣の濟まなかつた西鶴は、或る材料を描かうとすれば、常に微に入り細を盡した。それは無論彼の作品に微妙さと複雜さとを齎らしたものであつたけれども、然もそれが一篇の作品としてさまで重大でないところ乃至は省いても差支へないやうな所にまで採用されるに至つては、作品の結構に分裂を來し中心主題と部分的描寫との輕重を誤るに至るのは當然である。それも「一代女」に於けるが如く、部分的重點の數多くが、遠心的に中心主題に結びつきながら、相合し相錯綜して交流して行く場合には、一篇の味ひを寧ろ交響樂的に複雜にする極めて有

効な技巧として、作品の價値を增さしめたけれども、西鶴にさうした點への明瞭な留意のあらうな筈がかつた。結果は一篇としての主題の分裂の多い、纏りの惡い作品の數多くが、彼の作品のうちに數へられることゝなつたのである。さうした中心主題の分裂をまで齎らした複雜さが、一面彼の作品の價値であつたには相違ないけれども、矢つ張りそれは彼の藝術家として有つてゐた弱みの一つ――或は隨一に數へらるべきものであつたかと思ふ。云はゞ彼は自分の有つてゐた強み其物に躓いてゐるのである。

第三節　文章

西鶴のもつてゐた表現の力、それも無論彼の藝術家としての強味の一つであつた。彼はその力を呵することによつて、彼には寧ろ適しない超自然界をさへ、かなり鮮に印象的に表現することが出來た。

「一代女」の卷二「諸禮女祐筆」の一節に云ふ。「文程情知る便外にあらじ。其國里遙な

るにも思ふを筆に物いはせける。 いかに書續けし玉章も、僞り勝なるは自見覺のして捨りて惜まず、實なる筆の歩みには自然と肝にこたへ、其人にまざまざとあへる心地せり」。これは素より手紙に就て云つてゐるのであるけれども、聽て其處に西鶴の文章觀が觀取されるのでなければなるまい。 人生の眞を描いた西鶴は、かうしてまことが文章の生命であることを云つてゐるのである。 戯作者らしい身振りをしながら、實際は戯作者以上の努力と精進とに沒入するのを常とした彼が、自ら此の如き永劫不易の文章觀に到達し得たのは、素より怪しむに足りない。 それは覇氣と才氣に生きた俳諧師鬼貫が、「誠の他に俳諧なし」と覺つたのと同じ悟りであつた。 或は芭蕉の蕉風開眼の契機を握み得たのにも比すべきであつたかも知れない。 かうした文章觀を孕む彼の藝術觀が、單に藝術遊戯と觀する戯作者のそれであつたらうと思はれないことは、前節に考察して來た通りだが、彼の文章が描いてよく元祿世相の眞實を傳へ、人間心理の奧底を吐露し得たのは、素よりかうした文章觀への作者の眞摯な適從が齎らしたものであつたに相違ない。

が然し文は一面技術である。誠の他に俳諧はなくても、たゞ彫琢無技巧の誠の塊だけでは素より優れた俳諧とは成り得ないのと同樣に、只眞實を傳へる胸裏の聲だけでは、必ずしも優れた文品を構成しない。其處には矢張り思ひをひそめた技巧と苦心とが必要であつた。文に誠を尙んだ西鶴は又其の技巧と彫琢とをも疎かにはしなかつた、矢數俳諧の達者として、一日二萬三千五百句の放れ業に時人を驚嘆させた西鶴の文章は、何うかすると一氣呵成に物し上げられたものではなかつたかと思はせる。が、實際は反對であつた。前にも云つた未定稿に文章上の破綻や溷濁の多いことが、軈て彼がさうした破綻と溷濁とを整理して、生前幾十の作品に示されたやうな渾然たる文章に仕上げるための、彫琢と推敲とに熱心であつたことを雄辯に物語つてゐる。一代の奇驕兒上田秋成が才を恃むらしくて實際は文章推敲の精進に異常な努力を注いでゐたことは、今日既に廣く知られてゐることだが、西鶴も亦彼に類する努力の一面をもつてゐたのである。然もさうした努力と精進との間に、西鶴の異常な腕の冴えは遺憾なく發揮された。幸田露伴氏は云ふ。「西鶴が文は材を

普通にとつて筆を靈妙に運ばず、瑣物の望む所は材を奇異に尋ねて筆を靈妙に見られんとするなり。我嘗て人に聞けることあり、下手な料理人に限つて異な魚を食はせたがると。眞に然り。西鶴の如きは蘿蔔胡蘿蔔比目魚鯛を料理してもよく美ならしむるものか（井原西鶴）と。蓋し西鶴の文章の冴えは文をやる技倆の上乘なるものと云つても、敢て溢美ではあるまいと思ふ。

然も露作氏の云ふが如く材を普通平凡にとつて之を味ひ深く料理するとすれば、西鶴の文章は一見平板單調、底に無限の情趣を含蓄する底のものであつたやうに思はれるかも知れない。がさうでは無かつた。西鶴の場合に於てさうした溫藉の滋味を云はるべき文章は、名殘の友に於けるもの其他、僅かに二三を數へ得るに過ぎない。他は寧ろそれとは反對の簡勁さと拮屈さと華かさとをもつてゐた。西鶴の文章のさういふ性質に就いても、露作氏に面白い言葉がある。少し長いが左に全文を借用する。

「西鶴の文は自然一家をなす。輕快靈妙毫も冗漫重複の所なく、恰も片舟に乘て

急流を下るに、山飛び岩走り花も草も木も精しく見るに遑なきところを過て後汪洋たる大海に出で、初めて四顧するに白雲既に来路を埋めて前途は水烟茫々たるを望むが如し。是に於て心を收め眼を瞑し、如何なる所を過しか如何なる山を見しか、岩に逢ひしか如何なる花、草、樹に逢ひ見しかを念ふに、其の何の樹、何の草、何の花、黒岩か紫岩か、幾百尺の山なりしかは、都て知るあたはざるの中に、唯々仙境の如く美にして奇なりしだけを記得す。再び讀むに當りて若し夫れ流れに溯るが如く遲々として仔細に見來れば、山も岩も花も細草も老樹も皆是れ普通のものにして、我熟知せる所のものたるに過ぎず。三度讀むに當りて又流れを下る如くすれば、又愈々妙にして前日の未だ見ざりし奇景を得。故に西鶴の文は讀者を載て飛ぶ船のみ。舟中見る所の山水は相變らずの世界なり。唯此舟に乘つて世界を見るに此の世界仙境の如く面白し。是れ此の舟の走ること箭の如く、飛ぶこと星の如く、一刹那も遲滯徒らに時を過すことなきによる」(同前)

西鶴の文章の強く激しくテムポの速いことを巧に譬へ得た之も亦名文であると思

ふが、彼の文章のかうした性質は一面西鶴が生得のリズムであつた。圭角のある、直線的な、然も激しい性格が、此の文章の急調と鋭さと激しさとを齎らしたのであつた。と同時に又其の直線的な鋭さは、他面彼の對象の中心を一目で把握する能力にも由來してゐた。彼は如何なる場合にも對象の周圍を堂々廻りしなかつた。直接に中心を中心をと貫いて行つた。だから如何に複雜な事象を叙する場合にでも、彼の文章には迂餘がなかつた。物に絡んだ蛇のやうなもつて廻つた調子が無かつた。只中心と中心とを結びつける直線の、拮屈たる曲折があるだけであつた。其處に彼の文章の端的さと强さとが生れた。云はゞ此の直線的な鋭いリズムこそ、西鶴の文章の基調であつたのである。「文反古」が彼の作として疑はしく思はれるのは、前にも云つた通り、その文章にかうした直線的なリズムを欠いてゐたからであつた。「所存の義有之候間貴邊御答ねがはくばなくてありなん。こなたよりゆる〳〵可申入候、特生」。彼は私用の手紙に於てさへその直線的な拮屈さを示してゐる。かうした拮屈さが旣に文章にある彈みをもたせるものである上に、彼の文章は非常に息づきが忙

しかつた。一句一句の間の短い、從つて句點や讀點の無暗に多い文章であつた。自らそれを一氣に讀み下すとすれば、岩に激する急湍を下るが如きテムポの早さを感じさせられずにはゐなかつたのである。

對象の中心から中心へと連る西鶴の文章は、又自ら飛躍が多かつた。その飛躍に必然性がないことは素より無かつた。所謂感覺の論理といふに似た發展の經路が、其處には常に辿られた。只概念的な廻りくどい説明の一切が省かれてゐるのである。自ら彼の文章は簡潔であつた。含蓄が多かつた。此點で彼の文章は伊勢物語の文章と何處か似てゐた。「心餘りありて詞足らず」と業平の歌を評した紀貫之の言葉が、同時に勢語の文章にも適用されないことはないやうに、西鶴の文章にも時にさうした非難に相當するやうな破綻がないことはなかつた。が、伊勢物語の文章がさうした非難以上にその簡素さと含蓄とを謳はるべきものであるやうに、西鶴の文の簡潔さと味ひ深さとも、素より時に認められる破綻を償つて餘りある價値であつた。永い間の俳諧師としての修行が、彼にさうした含蓄のある簡潔な手法を獲得させた

のであることは云ふ迄もない。殊に檀林派の俳諧師として、奔放破格な表現を自由自在に驅使した西鶴として、思ひ切つた句法や大膽な省筆を敢てしたのは、又必至の勢ひであつたと思ふ。見給へ。「本朝遊女の始まりは江州の朝妻、播州の室津より事起りて今國々になりぬ。朝妻にはいつの頃にか絶えて、賤の家淋しく島布を織る」（好色一代男）といふ文章を。「今國々になりぬ」の奔放さ、「賤の家淋しく島布を織る」の破格さ、共に西鶴調の骨髓である。此の破格大膽な省筆から、より簡單な助詞省畧、説明語省畧をも引くるめての文法無視が、又西鶴の文章の著しい特質の一つであつた。それは無論所謂俳文の脈を踏むものであつたけれども、しかもさうした同種類のものよりづつと徹底したものであつたのである。彼の文章の強く張りきつた調子は、又一面此の省筆にも由來してゐた。彼の文章が冴えた印象的筆致を藏し得たのも、此の要所要所を力強く表現して、他の廻りくどい説明などを一切省いた點にも、少なからす原因してゐたと思ふ。

省筆と相並んで西鶴文の特質をなすものに、其處に描き込まれた内容の複雑さが

あつた。描いて複雜さと出來るだけの精密さとを期した西鶴は、大膽破格の省筆を敢てした場合とは反對に、作品の主題をさへ時に滅却して了ふ程に、色々なものをその文章のうちに書き込んだ。元祿時代を反映するあらゆるもののゝ斷面が、かくて彼の文章のうちに取込まれた。それが彼の文章の構成要素を複雜にした。田山花袋氏の「西鶴小論」に云ふ、「その時用ひられた言葉は勿論、衣裳流行風俗、さういふものをすべてその作中に取入れてゐる。源氏物語が藤原期の言葉や氣分のためにわからないといふが、西鶴はそれ以上である。地口童謠、さういふのものまでも巧に入れてある。であるから彼の文章は容易に完全にはわからない。江戸文學をかなりに深く研究した人にも、わからないことが澤山にある。從つてまたそれだけ多く元祿時代の歷史の參考になるやうな點が多い。近松などから比べるとそれがぐつと多い」と。自ら彼の文章は多角的にならねばならなかつた。彼の文章が屈曲の多い、句讀の目まぐるじいものになつたといふのも、前に述べた息つぎだけの問題ではなく、かうして彼があらゆるものを一掬ひにその文章中に網羅しようとしたゝめでもあつたので

ある。のみならず、彼の文章は元祿時代のあらゆる斷面を反映するばかりでなく、文同時に彼の全教養を融し込んでゐた。其處には古歌の引用があつた。成句の換骨脫胎があつた。それも古歌として、成句として、遊離的に取扱はれてゐるのではない。夫等のものが完全に彼の腦裏に淨化されて、彼の文章のうちに渾然と融け込んでゐるのである。心附けの俳諧と古典脫化の習慣とに慣れてゐた彼は、さうした技巧をその文章の到所に應用した。只さへ目まぐるしい彼の文章は、其爲一層の多端さを與へられてゐる。應接に遑なしといふやうな露伴氏の所謂輕舟に乘じて急湍を下るに、兩岸の草樹木石を大いに眺め盡した氣がしながら、然も一歩その境を脫して顧る時には、只白煙の茫々たるを見、五彩の陸離たるを感ずるのみで部分としての正確な印象を與へられてゐないといふやうな結果は、無論其處から來てゐた。それは必ずしも彼の文章の長所を以てのみは呼び難く、却つてさうした網羅主義の徹底した結果は、單なる名詞や、さては風俗資料とも云ふべきものゝ空しい羅列に終つたやうな、作品中の一節としては如何にも相應しからぬ部分を生みはしたけれども、夫だけ

著しい特質として、彼の文章に特殊な色調と複雑な味ひを齎らしもした。第一さうした複雑な要素を微妙に縫ひ合はせて、兎にも角にも渾然とした文章に纒め上げた手際と、部分を集めた全體に對する把握の正確さとは、かなり高く評價されて然るべきものであつたと思ふ。多少の暗側面は、例の徹底好きの性格が生んだ缺點として、左迄猛烈に追及せらるべきものではなかつたと思ふ。

其他なほ彼の文章の特徴として舉げられるべきものに具體主義と正確主義とがある。前にも云つた通り常に物と形に即して文をやつた西鶴は、抽象的におほめかして物を云ふのを背じなかつた。廻りくどい說明を嫌つた彼は、對象を具體的に感じさせようとしては、しば〳〵譬喩に走つた。其處にも彼の抽象を嫌つた氣持が感じられると共に、其の譬喩其物が又直ちに感覺を卑近に刺戟する世界に於てのみ選まれてゐたことも注意されねばならない。前にも舉げた怖れを描いて「遣手の光が聲より怖し」と云つたのなどは、さういふものゝ適例であらう。さうした具體的な譬喩が、一層彼の文章を潑溂たる生命感を以て彩つたのは爭れない。と同時にさうし

た具體主義と直接に連る性質として、彼の文章に數字の使用の多いことも注意されなければならない。世之介一代に戯れた女の數が三千七百四十二人、少人のもてあそび七百二十五人といふが如き其の一例である。抽象的文字の曖昧さを嫌つた彼は、かうしてその徹底した正確主義をその文章の上に示したことになる。又更にかうした技巧――卑近な譬喩や數字の使用などのうちにも、それが感じられる可笑味の濃厚さも、亦西鶴文の特質の一つと考へられる。意義の低い單なる滑稽から、素晴らしい才氣を思はせる機智、更に深い人生を裏打とした所に生ずる所謂ユゥモァと、可笑味のあらゆる段階を盡して、然もそれらが一つに絡み合つて、西鶴文にある特殊な情趣とゆとりを與へてゐる。西鶴の文章を云ふ場合には、それも素より輕く見過されていゝものではなかつた。殊にそれらの可笑味が、その俳諧に於ける場合と同樣に、單なる惡ふざけ乃至は強ひられた諧謔にほんの時々陷つた他は、常に自然の味ひを湛へてゐることも、注意されねばならないことであらう。

が然しさうした性質には、夫々以前に多少づゝは觸れて來てゐるから、此處にはあ

ことは、一層以上も複雑な諸要素を孕みながら、彼の文章が常に如何にも洗練された統一と整頓とを含んでゐることである。餘りに多くの事柄を同時に表現しようとして、時には名詞の羅列に墮するといふやうな場合にでも、彼の文章には不透明な溷濁は無かつた。洗練の足りないルーズさはなかつた。如何に格を踏みはづしても、文章としてだらしなく崩れてはゐなかつた。何時でも氣持のいゝ統一と整頓とを保つて、澄んだ響をもつてゐた。「三代男」の西村市郎右衛門其他西鶴摸倣の有象無象が、逆立ちしても及ばないのは此點であつた。西鶴の文章の長所はまづ第一に此點にあつたのだと云つても、敢て過言ではなかつたかと思ふ。それは無論彼の刻苦と推敲との賜であつたのであらうけれども、同時に文章家としての彼の天稟も非常にすぐれたものであつたことを示すものではないかと思ふ。何んなに複雑な材料をでも一目で洞見し得た西鶴は、また自ら其の材料を的確に描出すべき手腕をも與へられてゐたのである。たゞさうして渾成された彼の文章が、澄んだ響といひ直線的な

リズムと云ひ正確主義といふ特質のために何處か淋しい色合を有つてゐたのは爭はれない。研ぎ澄まれた鏡面に映つた五彩の美しさはあつても、水々しい豐麗さには缺けてゐた。彼の性格と人生觀との色合ひが其處に自ら反映されてゐるのである。此點で彼の文章は豐艷無双の近松の文章とは實際よき對照をなしてゐる。人夫々の好みはあらうけれども、兎に角すぐれた表現力をもつた二人であつたと思ふ。さうして美しさに於てこそ近松に一歩の長はあれ、噛みしめて出る滋味といふ點では寧ろ西鶴に一歩の長があるのではないかと私には思はれるのである。

巻尾

一代の戲作者西鶴は、實はその戲作者的な身振りの奥にかくされた人生への眞面目な關心によつて、上來考察したやうな生涯の屈折を經て、遂に教訓や道義をさへ絶した人生の最奥處に到達した。辭世や「置土産」に現れた彼の氣持は、例へばあの俳諧寺一茶が、住しようとして其の性格的必然の故に容易に住し得なかつた、所謂「あなたまかせ」の境地への安住である。富士川の邊りに、哀れに泣き叫ぶ捨兒を見た芭蕉が、人生の悲哀に正しく面をむけかねながら、「只是天にして汝が性のつたなきをなけ」と云つて、菓子を與へて早足に立去つたあの氣持に、更に徹したものが其處に覗はれる。それは往々にして誤解されるやうに冷淡なのではない。無關心なのでもない。人生を等閑に考へるものゝ淺さでは無論ない。たゞあるがまゝに觀じた人生の相に、素直に從はうといふのである。一切が偶然でも必然でもない、寧ろ偶然であると同時に必然である不可測な天の支配の儘に動くものであると觀じたが故に、一切を放

下してその天の支配に隨順しようとするのである。そこには無論無限の哀愁があつた。人間の絶對的無力を痛感して、その無力其物に安住しようとするもの丶哀愁があつた。と同時に、離れきつたもの、自己を天の運行に任せきつたもの丶、安易さにも似た暢びやかな氣持があつた。西鶴は徹底的人生觀照家としての生涯といふ道程を經て、終にかうした哀しい暢びやかさに安住し得たのである。

尤も、これは一面元祿といふ時代の時代的精神であつた。戰國時代以來殊に色濃くされた人生無常の想念を、元祿時代の人々は其儘承け繼いだ。さうしてその想念の果敢なさからのせめてもの脱脚として、既に度々云つた通り、無常其物に安住することに努めた。かくて一見甚だしく虛無的な一切肯定の此の思想が、一世を風靡した。「野晒し紀行」の時代から、さういふ境地への到達を念としてゐた芭蕉は、その晩年には無論かういふ世界に住し得る人であつた。一生を絢爛の美と陶醉の詩との創作に委ねた近松も、「殘れとは思ふもおろか埋火のけぬ間仇なる朽木書して」と辭世した瞬間に於て、亦此の世界に住するもの丶謙虛さに味到した。それは確に一種の時

代的思潮であつたと思ふ。

かういふ境地が、吾々にとつて果して正しい目的であるか何うか分らない。右に向いても左に向いても、生命の伸びやかな發展を望み得ないのが人生の眞相であるにした所で、只謙遜に天の思召しに從つて、人生のありの儘の展開相に隨順して行くのが正しい生き方であるのか、それとも人生に置かれた人間の意義が永遠の理想追求にあることを覺悟して、理想と情熱とによつてその追求を導くのが、云ひ換へればありの儘の人生を、人生夫自身の展開にのみ任せず、斯くあるべき人生へと導いて行くのが、より正しい生き方であるのか、分らない。人間を人生に從屬するものと考へるか、人生を人間が支配すべきものと考へるか――私は何うかすると芭蕉も西鶴も、人生と人間との關係を誤認してゐたのではないかと思ふ。或は天の支配を少し窮屈に考へ過ぎてゐたかと思ふ。天は、人間が人生的意義を追求する意志をも孕んで、猶ほ且つ其の調和と自然の運行とを亂されない程、餘裕のある大きなものである筈だから。人間が天の意志とは別な意志を與へられてゐるのも、矢張り天の支配の一

部分であるのだから。

が然しさうした根本的な認識の相違も所詮は人間の性格に依存する。芭蕉も西鶴も云つてみれば人生を生きる人ではなかつた。西鶴は生きる代りに眺める人だつた。芭蕉も踊るかはりに味ふ人だつた。態度に多少の相違はあれ、二人ながら人生の觀照家であることに於ては一致してゐた。さういふ二人が一切を貫いて流れる天の理法に味到して、其前に絶對謙虚であらうとしたのは寧ろ止むを得ない必然であつた。彼等の觀照のうちには、無論人生的意志を振り翳して進むもの丶生活にさへ現れた天の支配が映つてゐた。だから彼等は命がけでは着しなかつたけれども、兎に角人間が、人間的意志の孕まれた道義に從つて生きるべきことを云つてゐる。如是即人生と感じながら、決して人間の頽廢を是認しはしなかつた。

兎まれ彼等の入り得た心境は、人生に於ける一つの最後の徹底境でなければならなかつた。其處には人生のあらゆる悲劇に耐へ得る強さと、あらゆる矛盾と撞著とを如是即人生と觀じ得る廣い心持とがなければならなかつた。人生の寂寥所――

よく云はれることだが、此の寂寥所に住し得る心の鍛錬が必要であつた。芭蕉はその性格の弱さの故に、この寂寥所に住しようとして幾度か躓いた。西鶴はその驚くべき性格の強さの故に、道程に樣々の惱みこそあつたものゝ、割合容易に、漸を逐うてこの境地に到り得たのである。さうしてその境地に到り得たが故の深い味ひを、その作品にたゝへたのであつた。彼の作品が、歿後の幾百年を通じて、何時の時代にも閑却されなかつたのは、無論一面には彼の作品のもつ複雜な斷面が、後世人の心に色々な響を與へた爲であつたに相違ないと共に、一面作者が此の深さに味到してゐたる點に由來してゐるのだと思ふ。少くとも彼が過去の日の毀譽褒貶を離れて、今後なほ永久に傳へられ尊重されて行くであらうことは、まづ此點に原因をもつのでなければならないと思ふ。

井原西鶴終

東京帝國大學國文學研究室編輯

國文學研究叢書第五編

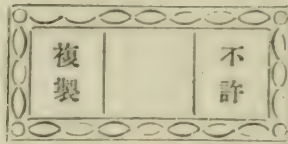
大正十五年三月十七日印刷
大正十五年三月二十日發行
大正十五年三月廿七日再版發行
大正十五年四月一日三版發行
大正十五年四月十五日四版發行
大正十五年四月二十日五版發行

井原西鶴

定價金參圓五拾錢

片岡良一

東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地
佐藤正叟

印刷者 東京市京橋區弓町二十五番地
高橋郁

發行所 東京市赤坂區傳馬町三丁目十番地
振替東京二九五〇七番
至文堂
電話青山一三五四六番 一四三四三番

（三協印刷株式會社印刷）

東京帝國大學國文學研究室編輯
國文學研究叢書第二篇
第六高等學校教授文學士 麻生磯次先生著

近世生活と國文學

忽五版

定價金參圓五拾錢
送料金拾四錢

從來の特權階級の文學は德川期に入つて全く一般民衆の手中に渡つた。伸ぶべくして久しく伸び得なかつた鬱勃たる民衆の氣概は、一度內鎖の手より脫するや俄然として自らの生活の樹立に赴いた。かくして止むに止まれぬ民衆の聲はやがて德川期の文學を生んだ。本書はこの生々とした實生活の表現さ、それの切實に表現せられた文學との交渉を深く內面本質に立入つて如實に見んとしたものである。

一全體として文學を生活の表現として考へ、同時に生活の諸相を通じて文學的現象の特質を見ようとした。

一浮世草紙、淨瑠璃本、滑稽本、等を展開の姿の下に考へこれが世相との交渉を見ようとした。

一武士及町人生活、遊里生活、俳諧生活、諧謔生活等の諸相を眺め、その特質を考へた。

一武士と素町人、遊女と地女、行脚僧と遊冶郎等の對立に時代の特殊な姿を認め、義理、人情、粹、通、わび、さび、機智、諷刺等の興味ある事柄に就いて述べた。

一階級的意識を考慮して時代精神の特性を解剖し生活展開の理法を見ようとした。

著者は新進篤學の士、その多年の研究によつて複雜多樣なる德川文學の中心基調をなす種々相を提へて前人未踏の境地を開拓し、よく民衆生活の全貌を描してゐる。德川時代の文學世相の動きを知らんとする人々には無二の伴侶であり、更に現代の生活、當來の文藝に興味を有する人々にも多大の暗示を含んでゐる。

國文學研究叢書第四篇

東京帝國大學國文學研究室編輯

文學士 手塚昇先生著

最新刊

源氏物語の新研究

定價金參圓參拾錢
送料金拾四錢

源氏物語出でゝ九百餘年、嘗に國文學上の一異彩であるばかりでなく全世界に於ける最古の小説の一として而もあの時代に人情展開の過程を寫した物語として、その組織に於てその敍述に於て、かくまで完備した者を見たのは正に世界文壇の一大驚異である。吾々は祖先の中にかゝる偉大な文學を有することを誇とし又心強く思ふものである。かくて源氏物語一度出でゝ國文學の主流は全くその跡を追つて展開したとも見られる。されば源氏物語の研究は古くより行はれ現に年々殆ど大同小異の註釋書が續々刊行されてゐるのであるが、何れも先人の舊説を繼承墨守したるものゝみにて、その評論考證に關する總論的方面の研究に至つては見るべきものが甚だ少ない、著者は新進篤學の士こゝに見る所あり多年研究の結果遂に本書をなすに至つた。實に本書は過去九百年の源氏物語に關する評論考證の研究史を背景とし、而も創作に志す著者が當然の歸結として作家的見地より深く原作者の創作心理に立入つて研究評論したもので、過去の成説に捉はれず幾多新説を出した源氏物語研究史の最前線に立つものである。